# 2023年8月31日(木)

本部企画シンポジウム

17:00 ~ 19:00 | 寒梅館ホール 寒梅館１Ｆ・地下１階ハーディーホール

## 本部企画シンポジウム２／これからのユース・スポーツを考える―運動部活動の地域移行をめぐって―

コーディネーター：水上 博司（日本大学）
指定討論者：清水 紀宏（筑波大学）

[本部企画-S2-1] 運動部活動の地域連携・地域移行と地域スポーツ環境の整備について

*中平 公士[1] (1. スポーツ庁スポーツ戦略官)

[本部企画-S2-2] 地域移行の失敗の歴史
1970年代の社会体育化と2000年前後の総合型クラブ連携を振り返る

*中澤 篤史[1] (1. 早稲田大学)

[本部企画-S2-3] 大学やスポーツ組織が果たす役割

*山口 香[1] (1. 筑波大学)

[本部企画-S2-4] 地域から見た課題と具体的な解決策

*松田 雅彦[1] (1. 大阪教育大学附属高等学校平野校舎)

テーマ別シンポジウム | 競技スポーツ研究部会：【課題B】競技スポーツにおけるコーチ養成をいかに効果的に行うか

10:10 ~ 12:10 | RYB1 良心館地下１階ＲＹＢ１番教室

## 競技スポーツ研究部会【課題B】テーマ別シンポジウム／ジュニア（育成年代）競技スポーツのコーチ養成

コーディネーター：小谷 究（流通経済大学）

[競技スポーツ-SB-1] 日本サッカー協会の指導者養成システム

*西川 誠太[1] (1. 公益財団法人 日本サッカー協会)

[競技スポーツ-SB-2] 小学生年代を指導するコーチのあり方

*中山 紗織[1] (1. 筑波大学)

[競技スポーツ-SB-3] ジュニア（育成年代）競技スポーツのコーチ養成
キャリアパスの視点から

*北村 麻衣[1] (1. 学習院大学)

テーマ別シンポジウム | 学校保健体育研究部会：【課題B】保健体育授業をいかに良質なものにするか

10:10 ~ 12:10 | RY203 良心館２階ＲＹ２０３番教室

## 学校保健体育研究部会【課題B】テーマ別シンポジウム／より良質な保健体育授業の具体像を考える　その３―子どもたちの「豊かなスポーツライフ」の実現に向けて、教師が身に付けるべき資質・能力とは―

コーディネーター：澤江 幸則（筑波大学）、原 祐一（岡山大学）

[学校保健体育-SB-1] 学校内外をつなげる取り組みの現状と教師に期待することがら

*中村 利之[1] (1. 京都市立下京中学校)

[学校保健体育-SB-2] スポーツを創る力を育てられる教師

*三田部 勇[1] (1. 筑波大学)

[学校保健体育-SB-3] 現代における魅力的な体育授業とは
オルタナティブな授業の提案

*宮口 和義[1] (1. 石川県立大学)

テーマ別シンポジウム | 健康福祉研究部会：【課題B】認知機能の維持・改善に運動・スポーツはいかに貢献するか

10:10 ~ 12:10 | RY301 良心館３階ＲＹ３０１番教室

## 健康福祉研究部会【課題B】テーマ別シンポジウム／認知と運動の支援―テクノロジーの活用―

コーディネーター：辻 大士（筑波大学）、木伏 紅緒（神戸大学）

[健康福祉-SB-1] AIを用いた認知症早期スクリーニング
日常生活動作解析から

*根本 みゆき[1] (1. 筑波大学)

---

[健康福祉-SB-2] 没入型バーチャルリアリティによる半側空間無視に対するリハビリテーション支援機器の開発

*安田 和弘[1,2] (1. 東京保健医療専門職大学、2. 早稲田大学)

---

[健康福祉-SB-3] バーチャルリアリティを用いた運動学習の支援

*樋口 貴広[1] (1. 東京都立大学)

テーマ別シンポジウム | スポーツ文化研究部会：【課題B】人々の生活に根ざした多様なスポーツ文化をいかに醸成していくか

10:10 ~ 12:10 | RY303 良心館３階ＲＹ３０３番教室

## スポーツ文化研究部会【課題B】テーマ別シンポジウム／「多様性」を実践するとは―その理想と難しさの狭間で―

コーディネーター：周東 和好（上越教育大学）、山口 理恵子（城西大学）

[スポーツ文化-SB-1] LGBTQ＋の活動から見る多様性の実践とは

*杉山 文野[1] (1. 株式会社ニューキャンバス)

---

[スポーツ文化-SB-2] 市民ランニングによる多様性の実践

*山西 哲郎[1] (1. 群馬大学名誉教授)

---

[スポーツ文化-SB-3] 体育授業において男女が共に学ぶこと

*近藤 智靖[1] (1. 日本体育大学)

テーマ別シンポジウム | 生涯スポーツ研究部会：【課題B】生涯スポーツは・人・地域社会・産業といかに関連するか

10:10 ~ 12:10 | RY305 良心館３階ＲＹ３０５番教室

## 生涯スポーツ研究部会【課題B】テーマ別シンポジウム／社会の成熟と生き方、そしてWell-Being―産業・健康・文化―

コーディネーター：林 洋輔（大阪教育大学）

[生涯スポーツ-SB-1] 「ポスト・スポーツ」のパースペクティヴから見る“ヒューマニティ（人間性）”とWell-Being

*山本 敦久[1] (1. 成城大学)

---

[生涯スポーツ-SB-2] 地域高齢者を対象とした小規模トレーニング施設「十坪ジム」事業の発想、展開、隆盛、衰退の経緯

*小林 寛道[1] (1. 静岡産業大学)

---

[生涯スポーツ-SB-3] バーチャルスポーツは体育・Taiikuになりうるか

*萩原 悟一[1] (1. 九州産業大学)

テーマ別シンポジウム | 競技スポーツ研究部会：【課題C】ハイパフォーマンススポーツ（トップレベルの競技スポーツ）におけるトレーニングをいかに効果的に行うか

14:40 ~ 16:40 | RYB1 良心館地下１階ＲＹＢ１番教室

## 競技スポーツ研究部会【課題C】テーマ別シンポジウム／ユース年代アスリートの育成システムとハイパフォーマンススポーツ

コーディネーター：越田 専太郎（了徳寺大学）、東浦 拓郎（亜細亜大学）

[競技スポーツ-SC-1] 原理原則にもとづくユース年代のフィジカル・トレーニング

*広瀬 統一[1] (1. 早稲田大学スポーツ科学学術院)

[競技スポーツ-SC-2] いわきFCアカデミーにおける育成システム

*小俣 よしのぶ[1,2] (1. ㈱いわきスポーツクラブ、2. 筑波大学スポーツ環境デザインR&Dプロジェクト室)

[競技スポーツ-SC-3] 日本の競技柔道におけるユース年代の育成フレームワーク

*石井 孝法[1] (1. 了徳寺大学)

テーマ別シンポジウム | 学校保健体育研究部会：【課題C】体育・スポーツ健康科学は学校保健体育の進展にいかに貢献できるか

14:40 ~ 16:40 | RY202 良心館２階ＲＹ２０２番教室

## 学校保健体育研究部会【課題C】テーマ別シンポジウム／科学的エビデンスからみた保健体育のカリキュラムと学習指導ーこれからの保健体育が目指す教育と研究のかたちー

コーディネーター：柏木 悠（専修大学）
指定討論者：末永 祐介（熊本大学）

[学校保健体育-SC-1] アクティブ チャイルド プログラム（ACP）を用いた体育実践とその効果
準備運動の見直しで楽しさと基礎運動能力の向上を目指す

*春日 晃章[1] (1. 岐阜大学)

[学校保健体育-SC-2] 長距離走授業に「楽しさ」を埋め込む可能性と限界

*木島 章文[1] (1. 山梨大学)

[学校保健体育-SC-3] 生成系の人工知能時代における「身体」の再価値化と保健体育の大改革

*松田 恵示[1,2] (1. 立教大学、2. 東京学芸大学)

テーマ別シンポジウム | 健康福祉研究部会：【課題C】運動不足（不活動）に伴う心身機能の低下をいかに予防するか

14:40 ~ 16:40 | RY301 良心館３階ＲＹ３０１番教室

## 健康福祉研究部会【課題C】テーマ別シンポジウム／基礎研究と実践（指導、支援）の橋渡しで心身機能の低下を予防する

コーディネーター：菅谷 美沙都（上武大学）、田中 愛（東京学芸大学）
指定討論者：大槻 毅（流通経済大学スポーツ健康科学部）

[健康福祉-SC-1] 実践から見る橋渡しの景色
障害のある人を対象にした実践からの気づき

*岩沼 聡一朗[1] (1. 帝京科学大学教育人間科学部)

[健康福祉-SC-2] 橋渡し研究に使えるチェックリスト“PAIREM”

*重松 良祐[1] (1. 中京大学スポーツ科学部)

[健康福祉-SC-3] 健康づくりエビデンスの社会実装にある崖と壁

*高岡 敦史[1] (1. 岡山大学学術研究院教育学域)

テーマ別シンポジウム | スポーツ文化研究部会：【課題C】多様なスポーツ文化の保存・流通・促進をいかに刷新していくか

14:40 ~ 16:40 | RY303 良心館３階ＲＹ３０３番教室

## スポーツ文化研究部会【課題C】テーマ別シンポジウム／スポーツ文化の浸透戦略（3）ー関わりの拡張に向けてー

コーディネーター：深澤 浩洋（筑波大学）、朝倉 雅史（筑波大学）

[スポーツ文化-SC-1] 子どもたちのスポーツ参加を阻む壁

子どもの運動・スポーツの現状と課題

*武長 理栄[1] (1. 笹川スポーツ財団)

---

[スポーツ文化-SC-2] 子どもの身体文化への参加をいかに促すか

朝飛道場の取り組み

*朝飛 大[1] (1. 朝飛道場)

---

[スポーツ文化-SC-3] 多様な個を包摂する組織化と制度化によるスポーツ文化の浸透に向けた理論的検討

*笠野 英弘[1] (1. 山梨学院大学)

テーマ別シンポジウム | 生涯スポーツ研究部会：【課題C】人生100年時代に向けていかに人々のスポーツ権を保障するか

14:40 ~ 16:40 | RY305 良心館３階ＲＹ３０５番教室

## 生涯スポーツ研究部会【課題C】テーマ別シンポジウム／国民のスポーツ権を保障するための施策立案に向けてー施策立案者との共進化のために研究者ができることー

コーディネーター：香村 恵介（名城大学）、上野 耕平（香川大学）

[生涯スポーツ-SC-1] 【スポーツ参加の促進要因の探索と支援政策の評価研究－国・自治体・個人レベルの重層的アプローチ】の構想

*辻 大士[1] (1. 筑波大学)

---

[生涯スポーツ-SC-2] スポーツ政策における「エビデンスに基づく政策立案」の実践と課題

英国の事例

*金子 史弥[1] (1. 立命館大学)

---

[生涯スポーツ-SC-3] 部活動改革における共進について

*本多 良樹[1] (1. 名古屋市教育委員会)

テーマ別研究発表 | 競技スポーツ研究部会：【課題B】競技スポーツにおけるコーチ養成をいかに効果的に行うか

9:00 ~ 9:59 | RYB1 良心館地下１階ＲＹＢ１番教室

## 競技スポーツ研究部会【課題B】口頭発表①

座長：高橋 義雄（筑波大学）

9:00 ~ 9:14

[競技スポーツ-B-01] スポーツ指導者がパーソナルコーチングを学ぶ意義および受ける意義（教,方）

*青柳 健隆[1] (1. 関東学院大学)

---

9:15 ~ 9:29

[競技スポーツ-B-02] 運動部活動への参加の在り方と学校生活スキルとの関連（方）

高校野球部員を対象として

*中嶋 清之[1]、尾縣 貢[2]、島本 好平[1] (1. 法政大学、2. 筑波大学)

---

9:30 ~ 9:44

[競技スポーツ-B-03] 小学校低学年のサッカーにおける団子状態の形成契機（方）

*寺田 進志[1] (1. 大阪国際大学)

---

9:45 ~ 9:59

[競技スポーツ-B-04] 中学生年代の中・長距離種目の競技者におけるテーパリング期間の走行距離の減少率の差異がパフォーマンスおよび生理学的・心理学的指標に及ぼす影響（生）

*小畠 翼[1]、林 容市[1,2] (1. 法政大学大学院スポーツ健康学研究科、2. 法政大学文学部心理学科)

テーマ別研究発表 | 競技スポーツ研究部会：【課題B】競技スポーツにおけるコーチ養成をいかに効果的に行うか

9:00 ~ 9:44 | RYB2 良心館地下１階ＲＹＢ２番教室

## 競技スポーツ研究部会【課題B】口頭発表②

座長：広瀬 統一（早稲田大学）

9:00 ~ 9:14

[競技スポーツ-B-05] 女性アスリートの三主徴（FAT）背景要因の実態調査（測,方）

*権野 めぐみ[1]、寅嶋 静香[2,1]、野村 照夫[1]、来田 宣幸[1] (1. 京都工芸繊維大学、2. 奈良教育大学)

---

9:15 ~ 9:29

[競技スポーツ-B-06] 新体操における表現力を高めるためのトレーニングの提案（方）

創作ダンスの指導法を活用して

*栫 ちか子[1] (1. 鹿屋体育大学)

---

9:30 ~ 9:44

[競技スポーツ-B-07] 日本の女子バスケットボール選手におけるワンハンドシュートの使用実態調査（生）

各カテゴリのスリーポイントシュートに着目して

*吉川 公明[1]、三島 隆章[2] (1. 大阪体育大学大学院、2. 大阪体育大学大学院スポーツ科学研究科)

テーマ別研究発表 | 競技スポーツ研究部会：【課題C】ハイパフォーマンススポーツ（トップレベルの競技スポーツ）におけるトレーニングをいかに効果的に行うか

9:00 ~ 9:59 | RY103 良心館１階ＲＹ１０３番教室

## 競技スポーツ研究部会【課題C】口頭発表⑤

座長：吉村 真美（豊田工業大学）

9:00 ~ 9:14

[競技スポーツ-C-17] 陸上競技女子跳躍競技者の準備期と試合期におけるSSC遂行能力の変化（測,方）

*中川 未加子[1]、吉田 孝久[1] (1. 日本女子体育大学)

---

9:15 ~ 9:29

[競技スポーツ-C-18] Velocity Loss Cut off(VLC)法を用いたレジスタンスエクササイズにおける負荷および休息時間の違いが各セットの挙上速度に及ぼす影響（生）

*内野 公平[1]、菊池 さやか[1]、齋藤 未花[1]、望月 佑季奈[1]、本間 洋樹[1]、菊池 直樹[1] (1. 日本体育大学)

---

9:30 ~ 9:44

[競技スポーツ-C-19] *ACTN3*遺伝R577X多型と伸張性運動後の血清クレアチンキナーゼ活性との関連性の検討（生）

*出口 実[1]、本間 洋樹[1]、齋藤 未花[1]、上妻 歩夢[1]、鴻崎 香里奈[1]、越智 英輔[2]、岡本 孝信[1]、中里 浩一[1]、菊池 直樹[1] (1. 日本体育大学、2. 法政大学)

---

9:45 ~ 9:59

[競技スポーツ-C-20] 等尺性筋力トレーニングが力発揮中の筋硬度へ与える影響（生,バ,スポーツ医学）

*井上 美佳[1]、窪田 敦之[1]、山下 由夏[1]、鈴木 良雄[2]、髙澤 祐治[1] (1. 順天堂大学スポーツ医学研究室、2. 順天堂大学スポーツ健康科学研究科)

テーマ別研究発表 | 競技スポーツ研究部会：【課題C】ハイパフォーマンススポーツ（トップレベルの競技スポーツ）におけるトレーニングをいかに効果的に行うか

9:00 ~ 9:59 | RY107 良心館１階ＲＹ１０７番教室

## 競技スポーツ研究部会【課題C】口頭発表⑥

座長：高松 靖（びわこ成蹊スポーツ大学）

9:00 ~ 9:14

[競技スポーツ-C-21] 平均台における技の体系化に関する発生運動学的研究（方）

*仲宗根 森敦[1] (1. 東京学芸大学)

---

9:15 ~ 9:29

[競技スポーツ-C-22] 体操競技における戦術的トレーニングの意味に関する発生運動学的分析（方）

*松山 尚道[1] (1. 天理大学)

---

9:30 ~ 9:44

[競技スポーツ-C-23] 体操競技における〈変形車輪〉に関する発生運動学的考察（方）

*廣田 修平[1] (1. 北翔大学)

---

9:45 ~ 9:59

[競技スポーツ-C-24] 体操競技におけるつり輪の〈水平支持〉に関する発生運動学的一考察（方）

*松本 裕也[1]、廣田 修平[2] (1. 株式会社アイシンク、2. 北翔大学)

テーマ別研究発表 | 生涯スポーツ研究部会：【課題C】人生100年時代に向けていかに人々のスポーツ権を保障するか

9:00 ~ 9:44 | RY201 良心館２階ＲＹ２０１番教室

## 生涯スポーツ研究部会【課題C】口頭発表①

座長：中野 貴博（中京大学）

9:00 ~ 9:14

[生涯スポーツ-C-01] 中学生サッカー選手におけるスポーツ専門化の実態について（測,発,生）

*永野 康治[1]、笹木 正悟[2] (1. 日本女子体育大学、2. 東海大学)

---

9:15 ~ 9:29

[生涯スポーツ-C-02] 大学生における入学時の体力レベル別にみた精神的健康度の縦断的変化（体力学）
4年間（5時点）の追跡調査

*中原 雄一[1]、角田 憲治[2]、藤本 敏彦[3] (1. 福岡県立大学　人間社会学部、2. 山口県立大学　社会福祉学部、3. 東北大学高度教養教育・学生支援機構)

---

9:30 ~ 9:44

[生涯スポーツ-C-03] 男子高校生における運動部活動の早期離脱と学校生活ウェルビーイング、ストレス対処力の縦断的関連（介,方,発,心）

*神藤 隆志[1,2]、北濃 成樹[2]、永田 康喜[3]、中原 雄一[4]、具志堅 武[5]、鈴川 一宏[6]、永松 俊哉[7] (1. 大阪教育大学、2. 明治安田厚生事業団体力医学研究所、3. 筑波大学体育系、4. 福岡県立大学人間社会学部、5. 神奈川大学人間科学部、6. 日本体育大学体育学部、7. 山野美容芸術短期大学)

テーマ別研究発表 | 学校保健体育研究部会：【課題C】体育・スポーツ健康科学は学校保健体育の進展にいかに貢献できるか

9:00 ~ 9:59 | RY202 良心館２階ＲＹ２０２番教室

## 学校保健体育研究部会【課題C】口頭発表③

座長：木島 章文（山梨大学）

9:00 ~ 9:14

[学校保健体育-C-09] 中学生が思う中学校体育に対する嫌悪感特性（測）

体育授業に対する好嫌度との関連

*竹内 花[1]、塚本 将太[1]、冨士本 有希[1]、春日 晃章[2] (1. 岐阜大学大学院、2. 岐阜大学)

---

9:15 ~ 9:29

[学校保健体育-C-10] 対話的な学びを引き出す協同学習の授業づくり（教）

器械運動における運動嗜好の高い生徒の分析をもとに

*小林 慶[1] (1. 千葉大学大学院)

---

9:30 ~ 9:44

[学校保健体育-C-11] 小学校体育科における運動有能感が低い児童の学習観察と運動支援（教,発）

受容感を育む関わりを通して

*金子 泰子[1]、橋爪 和夫[2]、阿尾 昌樹[3]、勝島 貴士[4] (1. 富山国際大学、2. アール医療専門職大学、3. 射水市立大門小学校、4. 富山市立浜黒崎小学校)

---

9:45 ~ 9:59

[学校保健体育-C-12] 小学生の社会情動的スキルと体力・運動能力との関係（教,発）

*山田 淳子[1]、松田 繁樹[1]、辻 延浩[1] (1. 滋賀大学)

テーマ別研究発表 | 学校保健体育研究部会：【課題B】保健体育授業をいかに良質なものにするか

9:00 ~ 9:59 | RY203 良心館２階ＲＹ２０３番教室

## 学校保健体育研究部会【課題B】口頭発表⑤

座長：細越 淳二（国士館大学）

9:00 ~ 9:14

[学校保健体育-B-17] 持久走単元におけるICT機器の利活用（教）

コミュニケーションの活性化をねらいとして

*村瀬 浩二[1]、梅澤 秋久[2] (1. 和歌山大学、2. 横浜国立大学)

---

9:15 ~ 9:29

[学校保健体育-B-18] Ｎ－感覚的アプローチとスポーツ教育モデルのハイブリッドモデルの実践提案（教）

マット運動の授業を通して

*成家 篤史[1]、青木 憲吾[2] (1. 帝京大学、2. 白岡市立篠津小学校)

---

9:30 ~ 9:44

[学校保健体育-B-19] これからの時代に求められる教師の指導性のあり方（教）

子どもの学習観に関わる質的分析を通して

*野田 勇紀[1] (1. 千葉大学大学院)

---

9:45 ~ 9:59

[学校保健体育-B-20] 高等学校体育教師が生徒のニーズに応じた指導実践に至るまでのプロセス ―質的分析をもとに―（教）

*小林 裕季[1]、齊藤 まゆみ[2] (1. 筑波大学大学院、2. 筑波大学)

テーマ別研究発表 | 学校保健体育研究部会：【課題B】保健体育授業をいかに良質なものにするか

9:00 ~ 9:59 | RY204 良心館２階ＲＹ２０４番教室

## 学校保健体育研究部会【課題B】口頭発表⑥

座長：伊佐野 龍司（日本大学）

9:00 ~ 9:14

[学校保健体育-B-21] 教育実習事前指導における球技指導の時間配分を上達させる要因（体育科教育法）
５分間のマイクロティーチングの省察の記述から

*横井 みやび[1]、小磯 透[2]、國土 将平[2] (1. 中京大学大学院スポーツ科学研究科、2. 中京大学スポーツ科学部)

9:15 ~ 9:29

[学校保健体育-B-22] 多様化する保健体育科教員志望学生に関する事例研究（教）
なぜ教師に「なる」「ならない」の選択をするのか

*濱本 想子[1]、中川 麻衣子[2]、前田 一篤[3]、川口 諒[4]、岩田 昌太郎[5] (1. 名桜大学、2. 川崎医療福祉大学、3. 広島文化学園大学、4. 長崎純心大学、5. 同志社大学)

9:30 ~ 9:44

[学校保健体育-B-23] 模擬授業後の協議会における学生の発言の変容に関する研究（教）
他者との対話による協働的なリフレクションに着目して

*川口 諒[1] (1. 長崎純心大学)

9:45 ~ 9:59

[学校保健体育-B-24] 高等学校スポーツ科第1学年におけるストレングストレーナーが行う授業の学習効果について（教）

*山口 裕士[1,2]、笠次 良爾[3] (1. 奈良教育大学教職大学院、2. 横浜市立横浜商業高校、3. 奈良教育大学)

テーマ別研究発表 | 学校保健体育研究部会：【課題C】体育・スポーツ健康科学は学校保健体育の進展にいかに貢献できるか

9:00 ~ 9:59 | RY206 良心館２階ＲＹ２０６番教室

## 学校保健体育研究部会【課題C】口頭発表④

座長：松田 恵示（立教大学）

9:15 ~ 9:29

[学校保健体育-C-14] 高等学校における体育実技授業の実態調査（教,方）
高等学校教員を対象としたアンケート調査から

*藤本 敏彦[1]、中原 雄一[2] (1. 東北大学高度教養教育・学生支援機構、2. 福岡県立大学)

9:30 ~ 9:44

[学校保健体育-C-15] 体育授業における認識学習が運動有能感に及ぼす影響（教）
小学校高学年の走り高跳びの実践

*小畑 治[1] (1. 天理大学)

9:45 ~ 9:59

[学校保健体育-C-16] 発達性協調運動障害特性のある子どもの運動主体感に関する研究（発）
身体活動における粗大運動測定ツールの開発

*鄭 賢雨[1]、澤江 幸則[1] (1. 筑波大学体育系)

テーマ別研究発表 | 健康福祉研究部会：【課題B】認知機能の維持・改善に運動・スポーツはいかに貢献するか

9:00 ~ 9:59 | RY301 良心館３階ＲＹ３０１番教室

## 健康福祉研究部会【課題B】口頭発表①

座長：樋口 貴広（東京都立大学）

9:00 ~ 9:14

[健康福祉-B-01] 近赤外分光法を用いたヒト運動抑制機能への軽運動の影響（生）

*赤塚 康介[1]、滿園 良一[2] (1. 久留米工業高等専門学校、2. 久留米大学)

9:15 ~ 9:29

[健康福祉-B-02] 障害物跨ぎ越し歩行においてハザードストライプの障害物は足部軌跡に影響を与えるか？（バ）

*三浦 有花[1] (1. 武庫川女子大学健康・スポーツ科学部)

9:30 ~ 9:44

[健康福祉-B-03] バーチャルリアリティを用いた身体協調性を向上させる方法の提案（介,心）

*須田 祐貴[1,2]、石井 利樹[1]、原薗 迪子[1]、福原 和伸[1]、樋口 貴広[1] (1. 東京都立大学人間健康科学研究科、2. 日本学術振興会特別研究員（DC2）)

9:45 ~ 9:59

[健康福祉-B-04] 非利き手による筆記作業が注意機能に及ぼす影響（介）

*多田 裕紀[1]、原 丈貴[2]、辻本 健彦[3] (1. 島根大学大学院人間社会科学研究科、2. 島根大学教育学部、3. 島根大学人間科学部)

テーマ別研究発表 | 健康福祉研究部会：【課題B】認知機能の維持・改善に運動・スポーツはいかに貢献するか

9:00 ~ 9:59 | RY302 良心館３階ＲＹ３０２番教室

## 健康福祉研究部会【課題B】口頭発表②

座長：根本 みゆき（筑波大学）

9:00 ~ 9:14

[健康福祉-B-05] 等尺性ハンドグリップトレーニングが認知機能に及ぼす影響（生）

運動習慣のない地域在住中高齢者を対象として

*山形 高司[1] (1. 川崎医療福祉大学)

9:15 ~ 9:29

[健康福祉-B-06] 高齢者における道路横断判断に対する知覚トレーニングの効果検証（測,心）

*佐藤 和之[1]、樋口 貴広[1] (1. 東京都立大学)

9:30 ~ 9:44

[健康福祉-B-07] 生体電気インピーダンス（BIA）法で測定した細胞内外水分抵抗比率は高齢者の身体機能評価指標として有用か？（介）

*浅野 優次郎[1]、辻 大士[2]、大藏 倫博[2,3] (1. 筑波大学 人間総合科学研究科　体育科学プログラム　博士後期課程、2. 筑波大学　体育系、3. テーラーメイドQOLプログラム開発センター)

9:45 ~ 9:59

[健康福祉-B-08] 足趾チョキ動作の定量的評価による足趾機能評価の可能性（測）

*安部 征哉[1,2]、権野 めぐみ[3]、野村 照夫[3]、来田 宣幸[3] (1. びわこリハビリテーション専門職大学、2. 京都工芸繊維大学大学院、3. 京都工芸繊維大学)

テーマ別研究発表 | スポーツ文化研究部会：【課題B】人々の生活に根ざした多様なスポーツ文化をいかに醸成していくか

9:00 ~ 9:59 | RY303 良心館３階ＲＹ３０３番教室

## スポーツ文化研究部会【課題B】口頭発表①

座長：髙尾 尚平（日本福祉大学）

9:00 ~ 9:14

[スポーツ文化-B-01] パーク or / and ストリート（哲,社）

相反するスケートボード文化の対立と共存

*市井 吉興[1] (1. 立命館大学)

---

9:15 ~ 9:29

[スポーツ文化-B-02] 生活に埋め込まれた「異質な身体」の集合が生み出す多様性（人）

スペイン・カタルーニャの「人間の塔」を事例に

*岩瀬 裕子[1] (1. 東京都立大学)

---

9:30 ~ 9:44

[スポーツ文化-B-03] バレーボール部の指導者による暴力に関する研究（哲）

競技特性に着目して

*福井 陽香[1] (1. 筑波大学大学院)

---

9:45 ~ 9:59

[スポーツ文化-B-04] 対人暴力被害と失感情症（心）

*豊田 隼[1] (1. 山梨大学大学院医工農学総合教育部)

テーマ別研究発表 | スポーツ文化研究部会：【課題B】人々の生活に根ざした多様なスポーツ文化をいかに醸成していくか

9:00 ~ 9:59 | RY304 良心館３階ＲＹ３０４番教室

## スポーツ文化研究部会【課題B】口頭発表②

座長：加藤 えみか（京都産業大学）

9:00 ~ 9:14

[スポーツ文化-B-05] 第1回神戸サッカーカーニバル（1967年3月19日）における福住女子サッカースポーツ少年団対神戸女学院中等部の試合に関する歴史的研究（史）

*秋元 忍[1]、寶學 淳郎[2]、榎本 雅之[3] (1. 神戸大学、2. 大阪成蹊大学、3. 滋賀大学)

---

9:15 ~ 9:29

[スポーツ文化-B-06] 現代農山村における地域スポーツの予備的考察（社）

*菅原 大志[1] (1. 新潟医療福祉大学)

---

9:30 ~ 9:44

[スポーツ文化-B-07] eスポーツのプレーは高齢者の実行機能に及ぼす運動効果を増強する（生）

*土橋 祥平[1]、髙橋 史穏[1]、松岡 弘樹[1]、船橋 大介[1]、吉武 誠司[1]、坂入 洋右[1]、岩井 優花[2]、鈴木 信広[2]、上村 祐一[2]、葉 章二[2]、山田 晋三[1]、高木 英樹[1]、松井 崇[1] (1. 筑波大学、2. 関彰商事株式会社)

---

9:45 ~ 9:59

[スポーツ文化-B-08] eスポーツプレー時のチームワークを生み出すオキシトシンと心拍同調（心）

*髙木 祐多[1]、髙橋 史穏[1]、松岡 弘樹[1]、土橋 祥平[1]、船橋 大介[1]、吉武 誠司[1]、坂入 洋右[1]、三嶋 達典[2]、山田 晋三[1]、高木 英樹[1]、松井 崇[1] (1. 筑波大学、2. 茨城県)

テーマ別研究発表 | 生涯スポーツ研究部会：【課題B】生涯スポーツは・人・地域社会・産業といかに関連するか

9:00 ~ 9:44 | RY305 良心館３階ＲＹ３０５番教室

## 生涯スポーツ研究部会【課題B】口頭発表①

座長：川邊 保孝（東海大学）

9:00 ~ 9:14

[生涯スポーツ-B-01] 乗馬を伴わない馬との触れ合い活動の有効性の検討（介）

人馬のウェルビーイングを効率的に推進するための手法の開発

*高見 京太[1]、佐野 竜平[1]、柏村 晋史[1]、深野 聡[2] (1. 法政大学、2. 日本障害者乗馬施設フューチャーバレー)

---

9:15 ~ 9:29

[生涯スポーツ-B-02] 幼稚園・認定こども園で展開されるインクルーシブな幼児体育指導の現状と課題（ア,発）

専門指導者の意識とスキルに着目して

*大橋 祐介[1]、金子 勝司[2]、松島 剛史[3]、萩原 大河[4]、金山 千広[3] (1. 立命館大学大学院、2. 大阪体育大学、3. 立命館大学、4. 姫路市立水上小学校)

---

9:30 ~ 9:44

[生涯スポーツ-B-03] ローカルのスキー・スノーボード大会が気分と脳波に及ぼす効果（教,経）

*角田 和代[1]、簗瀬 歩[1]、長瀬 和宏[2] (1. 朝日大学保健医療学部健康スポーツ科学科、2. 岐阜県スキー連盟)

テーマ別研究発表 | 生涯スポーツ研究部会：【課題B】生涯スポーツは・人・地域社会・産業といかに関連するか

9:00 ~ 9:29 | RY306 良心館３階ＲＹ３０６番教室

## 生涯スポーツ研究部会【課題B】口頭発表②

座長：成瀬 和弥（筑波大学）

9:00 ~ 9:14

[生涯スポーツ-B-04] 市民マラソン大会のペースランナーについての研究（教）

第40回佐倉マラソンのペースランナーの実態から

*髙田 由基[1]、丸尾 祐矢[2]、竹澤 健介[3] (1. 愛知学泉大学、2. 東京女子体育大学、3. 摂南大学)

---

9:15 ~ 9:29

[生涯スポーツ-B-05] Remedies of University Sports in India Perspective to Supply Maximum Players for International Competition（政）

*DR.SUDARSAN BISWAS

テーマ別研究発表 | 競技スポーツ研究部会：【課題C】ハイパフォーマンススポーツ（トップレベルの競技スポーツ）におけるトレーニングをいかに効果的に行うか

13:30 ~ 14:29 | RY103 良心館１階ＲＹ１０３番教室

## 競技スポーツ研究部会【課題C】口頭発表⑦

座長：小西 康仁（東海大学）

13:30 ~ 13:44

[競技スポーツ-C-25] 代行形態の構成化における指導者の動感経験の役割に関する発生運動学的考察（方,スポーツ運動学）

体操競技における片足立ち2回ターンの指導における例証分析

*吉本 忠弘[1] (1. 甲南大学)

---

13:45 ~ 13:59

[競技スポーツ-C-26] 跳躍運動の助走におけるリズム化身体知のコツ発生に関する発生運動学的一考察（スポーツ運動学）

*森井 大樹[1] (1. 日本女子体育大学)

---

14:00 ~ 14:14

[競技スポーツ-C-27] 戦前の日本における陸上競技の体力・技術トレーニングに関する一考察（史,人,方）

雑誌「陸上競技」（1928年創刊）を史料として

*大林 太朗[1] (1. 筑波大学体育系)

---

14:15 ~ 14:29

[競技スポーツ-C-28] 男子体操競技ゆかの〈前転脚前挙支持経過閉脚倒立〉の運動構造に関する一考察（方）

*神門 大輔[1] (1. 高知大学)

テーマ別研究発表 | 競技スポーツ研究部会：【課題C】ハイパフォーマンススポーツ（トップレベルの競技スポーツ）におけるトレーニングをいかに効果的に行うか

13:30 ~ 14:29 | RY107 良心館１階ＲＹ１０７番教室

## 競技スポーツ研究部会【課題C】口頭発表⑧

座長：加藤 えみか（京都産業大学）

13:30 ~ 13:44

[競技スポーツ-C-29] 後方かかえ込み宙返りにおける視線移動パターンと跳躍の高さの関係（心）

*佐藤 佑介[1] (1. 日本大学)

---

13:45 ~ 13:59

[競技スポーツ-C-30] 芸術系スポーツ競技者の認知機能（方）

*天野 勝弘[1]、小林 咲里亜[1,2]、滝沢 宏人[3]、栗原 俊之[4] (1. 環太平洋大学スポーツ科学センター、2. 帝京科学大学、3. 愛知大学、4. 国士舘大学)

---

14:00 ~ 14:14

[競技スポーツ-C-31] 情動想起が上肢筋における皮質脊髄路興奮性に及ぼす影響（生,心）

*益城 優芽[1]、金子 直嗣[1]、加藤 辰弥[2,3]、山﨑 大輝[1]、中澤 公孝[1] (1. 東京大学大学院総合文化研究科、2. ソニーコンピュータサイエンス研究所　、3. 日本学術振興会特別研究員 (PD))

---

14:15 ~ 14:29

[競技スポーツ-C-32] 投動作の運動イメージが上肢筋における皮質脊髄路興奮性に与える影響（生）

*山﨑 大輝[1]、金子 直嗣[1]、益城 優芽[1]、中澤 公孝[1] (1. 東京大学大学院総合文化研究科)

テーマ別研究発表 | 学校保健体育研究部会：【課題C】体育・スポーツ健康科学は学校保健体育の進展にいかに貢献できるか

13:30 ~ 14:29 | RY202 良心館２階ＲＹ２０２番教室

## 学校保健体育研究部会【課題C】口頭発表⑤

座長：柏木 悠（専修大学）

13:30 ~ 13:44

[学校保健体育-C-17] 器械運動の指導に求められる「定位感身体知の観察力」に関する発生運動学的考察（方）

*佐藤 晋也[1] (1. 東京女子体育大学)

---

13:45 ~ 13:59

[学校保健体育-C-18] 器械運動領域で取り扱われる技や動きに対する認識に関する研究（教,方）

側方倒立回転についての素朴概念の実態

*髙橋 徹[1]、広野 健[2] (1. 岡山大学、2. 岡山大学大学院)

---

14:00 ~ 14:14

[学校保健体育-C-19] 身体知の発揮による自己の動きの認識の向上と運動習熟との関係（教）

*鈴木 健一[1,2]、鈴木 聡[3] (1. 東京学芸大学連合学校教育学研究科、2. 板橋区立高島第三小学校、3. 東京学芸大学)

---

14:15 ~ 14:29

[学校保健体育-C-20] 小学生における開脚跳び動作の熟達度の移行ルートの検討（教,測,発）

*佐野 孝[1]、長野 崇[2]、上田 恵子[3]、國土 将平[1] (1. 中京大学、2. 大阪国際大学、3. 畿央大学)

テーマ別研究発表 | 学校保健体育研究部会：【課題C】体育・スポーツ健康科学は学校保健体育の進展にいかに貢献できるか

13:30 ~ 14:29 | RY206 良心館２階ＲＹ２０６番教室

## 学校保健体育研究部会【課題C】口頭発表⑥

座長：小椋 優作（中部学院大学短期大学部）

13:30 ~ 13:44

[学校保健体育-C-21] 教員養成大学における体つくり運動の学びについて（教）

*佐藤 節子[1] (1. 宮城教育大学)

---

13:45 ~ 13:59

[学校保健体育-C-22] 体つくり運動領域における「動きを持続する能力を高めるための運動」に関する研究（教）

授業実践からみた「走・縄・エアロビクス」の運動強度・運動特性

*松下 幸帆[1]、山本 聖也[1]、小林 博隆[2] (1. 大阪体育大学大学院スポーツ科学研究科、2. 大阪体育大学)

---

14:00 ~ 14:14

[学校保健体育-C-23] ACPにおける運動遊びの種目別定量的評価（測）

身体活動量と個人差を包括的に捉えて

*塚本 将太[1]、大坪 健太[2]、冨士本 有希[1]、竹内 花[1]、春日 晃章[3] (1. 岐阜大学大学院、2. 岐阜協立大学、3. 岐阜大学)

---

14:15 ~ 14:29

[学校保健体育-C-24] Grit特性の高低と運動・勉強に対する自信との関連（測）

中学生を対象として

*冨士本 有希[1]、塚本 将太[1]、竹内 花[1]、春日 晃章[2] (1. 岐阜大学大学院、2. 岐阜大学)

テーマ別研究発表 | 健康福祉研究部会：【課題C】運動不足（不活動）に伴う心身機能の低下をいかに予防するか

13:30 ~ 14:29 | RY301 良心館３階ＲＹ３０１番教室

## 健康福祉研究部会【課題C】口頭発表①

座長：山田 孝禎（福井大学）

13:30 ~ 13:44

[健康福祉-C-01] 健康調査からみえる青年期の現状と課題（教）

生活習慣調査・骨密度測定・血中ヘモグロビン値測定から

*高橋 和子[1] (1. 静岡産業大学)

---

13:45 ~ 13:59

[健康福祉-C-02] インクルーシブ体育における通常学級在籍児童と特別支援学級在籍児童の運動強度比較（発）

*熊谷 慎太郎[1]、春日 晃章[2] (1. 兵庫教育大学大学院、2. 岐阜大学)

---

14:00 ~ 14:14

[健康福祉-C-03] 幼児における腸内細菌叢と運動習慣・体力との関連（測,発）

*小栗 和雄[1] (1. 岐阜聖徳学園大学)

---

14:15 ~ 14:29

[健康福祉-C-04] 子どもの良好な生体リズムのための必要受光時間の検討（発）

日常生活環境下の受光とメラトニン分泌パタンとの関連を基に

*湊谷 勇次[1]、城所 哲宏[2]、鹿野 晶子[2]、野井 真吾[2] (1. 日本体育大学　大学院、2. 日本体育大学)

テーマ別研究発表 | 健康福祉研究部会：【課題C】運動不足（不活動）に伴う心身機能の低下をいかに予防するか

13:30 ~ 14:14 | RY302 良心館３階ＲＹ３０２番教室

## 健康福祉研究部会【課題C】口頭発表②

座長：小泉 佳右（千葉大学）

13:30 ~ 13:44

[健康福祉-C-05] 高齢者における継続的自転車利用と要介護化・死亡リスクとの縦断的関連（測）

二時点調査に基づく長期追跡研究

*角田 憲治[1]、永田 康喜[2]、神藤 隆志[3]、北濃 成樹[4]、大藏 倫博[2] (1. 山口県立大学、2. 筑波大学、3. 大阪教育大学、4. 明治安田厚生事業団)

---

13:45 ~ 13:59

[健康福祉-C-06] 高齢者における筋力低下に関連する遺伝子多型の探索（生）

*齋藤 未花[1]、膳法 浩史[2]、本間 洋樹[1]、アルメイダ ケトリーン[1]、出口 実[1]、上妻 歩夢[1]、岡本 孝信[1]、中里 浩一[1]、菊池 直樹[1] (1. 日本体育大学、2. 東京聖栄大学)

---

14:00 ~ 14:14

[健康福祉-C-07] インソール装着歩行は高齢者の転倒予防支援に貢献するのか？（介,方,機器開発,発明）

歩容と足底圧変化の事例

*山内 賢[1]、市河 勉[2]、荻田 亮[3]、吉田 弘法[4]、長谷川 弘道[1] (1. 慶應義塾大学　体育研究所、2. 松山東雲短期大学、3. 大阪公立大学、4. 足利大学)

テーマ別研究発表 | スポーツ文化研究部会：【課題C】多様なスポーツ文化の保存・流通・促進をいかに刷新していくか

13:30 ~ 14:29 | RY303 良心館３階ＲＹ３０３番教室

## スポーツ文化研究部会【課題C】口頭発表①

座長：久保田 浩史（東京学芸大学）

13:30 ~ 13:44

[スポーツ文化-C-01] 秩父・西多摩地域における民俗芸能の持続可能なかかわりの拡大の可能性（人）

歌舞伎の式三番・番立との関係が推察される三番叟を手がかりとして

*安倍 希美[1] (1. 北里大学)

---

13:45 ~ 13:59

[スポーツ文化-C-02] 日本における走高跳の踏切技術論の変遷に関する一考察（史,方）

*杉浦 澄美[1]、大林 太朗[1]、木越 清信[1] (1. 筑波大学体育系)

---

14:00 ~ 14:14

[スポーツ文化-C-03] 子どもたちへの還元を目指したカラリパヤットの実践研究（人）

*高橋 京子[1] (1. フェリス女学院大学)

---

14:15 ~ 14:29

[スポーツ文化-C-04] 三浦ヒロの国民保健体操（初代ラジオ体操第１）への関与（史,教）

音声資料（レコード）に着目して

*苫米地 里香[1]、崎田 嘉寛[2] (1. 北海道大学大学院、2. 北海道大学)

テーマ別研究発表 | スポーツ文化研究部会：【課題C】多様なスポーツ文化の保存・流通・促進をいかに刷新していくか

13:30 ~ 14:29 | RY304 良心館３階ＲＹ３０４番教室

## スポーツ文化研究部会【課題C】口頭発表②

座長：尾川 翔大（岐阜薬科大学）

13:30 ~ 13:44

[スポーツ文化-C-05] プロスポーツ観戦の満足度を高めるデジタルサイネージの活用法とは？（経）

国内プロバスケットボールチームの良好事例に着目して

*郭 威[1]、田中 琢也[1]、渡部 宙[1]、山田 泰行[1] (1. 順天堂大学)

---

13:45 ~ 13:59

[スポーツ文化-C-06] ユース選手を対象としたスポーツ・インテグリティ教材の開発と評価（教）

道徳教育における基礎理論の応用

*安永 太地[1]、藤井 基貴[2] (1. 愛知教育大学大学院・静岡大学大学院、2. 静岡大学)

---

14:00 ~ 14:14

[スポーツ文化-C-07] 東京2020大会後の学校におけるオリンピック・パラリンピック教育の実態と”Post Games Legacy”の検討（教）

*宮崎 明世[1] (1. 筑波大学体育系)

---

14:15 ~ 14:29

[スポーツ文化-C-08] スポーツ観戦者による野次の言語行為論的考察（哲）

*髙桑 啓樹[1] (1. 筑波大学大学院)

テーマ別研究発表 | 生涯スポーツ研究部会：【課題C】人生100年時代に向けていかに人々のスポーツ権を保障するか

13:30 ~ 14:14 | RY305 良心館３階ＲＹ３０５番教室
## 生涯スポーツ研究部会【課題C】口頭発表②

座長：赤澤 暢彦（早稲田大学）

13:30 ~ 13:44
[生涯スポーツ-C-04] 高齢者の運動習慣を形成する運動実施歴パターンの分析（社）
統計資料の二次分析を通じて
*下窪 拓也[1] (1. 順天堂大学)

---

13:45 ~ 13:59
[生涯スポーツ-C-05] 成人のスポーツクラブへの所属に関連する要因（経,社,心）
クラブライフスキルに着目して
*奥田 直希[1]、林田 敏裕[2]、清水 紀宏[2] (1. 高松大学、2. 筑波大学)

---

14:00 ~ 14:14
[生涯スポーツ-C-06] 『笑うスポーツ』3年目のチャレンジ（社）
学生とお笑い芸人の協働で目指すもの
*橋本 剛幸[1] (1. 近畿大学)

テーマ別研究発表 | 生涯スポーツ研究部会：【課題C】人生100年時代に向けていかに人々のスポーツ権を保障するか

13:30 ~ 14:14 | RY306 良心館３階ＲＹ３０６番教室
## 生涯スポーツ研究部会【課題C】口頭発表③

座長：水上 博司（日本大学）

13:45 ~ 13:59
[生涯スポーツ-C-08] STEP VARIATION METHOD (SVM): A CORRECTIVE APPROACH ACCURATING FOOT PLACEMENT（方,バ,Kinematics）
*Kadam Prof. Govind[1]、SINGH MANDEEP[1] (1. National Association of Physical Education & Sports Sciences)

---

14:00 ~ 14:14
[生涯スポーツ-C-09] 身心一体科学に基づく体軸制御調律運動（生）
人生100年時代の国民の運動習慣形成・維持を支える理論と実践
*跡見 順子[1]、藤田 恵理[2] (1. 帝京大学総合研究機構、2. 東京女子大学)

各種会議・ミーティング | 専門領域別：測定評価

12:20 ~ 13:20 | RY413 良心館４階ＲＹ４１３番教室
## 測定評価／理事会

各種会議・ミーティング

12:20 ~ 13:20 | RY401 良心館４階ＲＹ４０１番教室
## 地域協力学会連絡会議

ランチョンセミナー

12:20 ~ 13:20 | RY201 良心館２階ＲＹ２０１番教室
## ランチョンセミナー④／特定非営利活動法人日本トレーニング指導者協会

[ランチョン4-1] トレーニングの実践現場におけるエビデンスを活用・応用したトレーニング指導
*佐野村 学[1]、山内 武[2] (1. 帝京大学准教授、JATI理事、2. 大阪学院大学教授、JATI監事)

ランチョンセミナー

12:20 ~ 13:20 | RY204 良心館２階ＲＹ２０４番教室

## ランチョンセミナー⑤／独立行政法人日本スポーツ振興センター ハイパフォーマンススポーツセンター

司会：久木留 毅（独立行政法人日本スポーツ振興センター ハイパフォーマンススポーツセンター）

[ランチョン5-1] HPSCが推進するアスリートのためのトータルコンディショニング

*清水 和弘[1]、中村 真理子[1]、山下 大地[1] (1. 独立行政法人日本スポーツ振興センター ハイパフォーマンススポーツセンター)

本部企画シンポジウム

2023年8月31日(木) 17:00 ~ 19:00 | 寒梅館ホール 寒梅館１Ｆ・地下１階ハーディーホール

## 本部企画シンポジウム２／これからのユース・スポーツを考える―運動部活動の地域移行をめぐって―

コーディネーター：水上 博司（日本大学）
指定討論者：清水 紀宏（筑波大学）

日本のユース世代（中学生・高校生）のスポーツ環境は根本から見直す変革期を迎えている。2022（令和4）年6月、スポーツ庁は「運動部活動の地域移行に関する検討会議提言について」を発表し、休日の活動から段階的に地域活動へ移行するという改革の方向性を示した。少子化による運動部への参加人数の減少、教師の業務負担の増大、学校と地域の協働の推進が表向きの改革理由とされる。しかしながら近年では、特に学校運動部は「ブラック企業」「ブラックバイト」「ブラックボランティア」の語りに連なって「ブラック部活」なる言葉でその負の側面が象徴的に描き出されてきた。勝利至上主義、行き過ぎた指導、体罰や暴力、教師のアンペイドワーク（無償労働）、過熱するスカウティングや越境入学などユース世代のスポーツライフスタイルにそぐわない「過剰さ」の数々が、ブラックなる語りで表されてきたのである。しかしながら、ここに潜む問題は、むしろ運動部活動をめぐる負の側面を、そもそもブラックだと感知しようとせず、長年にわたって見て見ぬふりをしてきた日本スポーツ界の肥大化、聖域化したインナーサークル（ムラ社会）にこそあるのではないか。

翻って学術研究コミュニティには、このことに対する自省は必要ないのだろうか。20年以上前、私は、本学会で学校運動部の実績とその因果を明らかにする研究成果を報告した発表者に対して、浅慮の知識でありながら過熱するスポーツ推薦制度の背後にある隠された内部構造に研究が切り込むべきではないかという質問をしたことがある。だが、その発表セッションが終わった際、会場にいた学会員から「タブーな部分なので研究は避けた方がよい」といった助言を受けたことがある。運動部活動の内部構造にまとわりつく聖域化した対象、見えても見えないふりをし、研究課題にしてはならないタブーなる既視感はなかったか。そこには、この問題が学会における研究者の存立構造や利害状況にもかかわる、まさに知識社会学的な課題であったことをも自省させられる構造が存在しているように思われる。

このような学術分野におけるある意味での「怠慢」性が、前述した問題の喫緊性を生じさせた背景にあるのではないかという反省も含め、私たちは今、ユース世代のスポーツ環境問題の何が見えていなければならないのか、さらに、ユース世代の子どもたちの目線の先には何が見えているのか、そして運動部活動の地域移行の関係者には、同様に何が見えているのか、そのことを見据えた展望について語り、議論しなければならないときであると考える。遅きに失した感は否めないが、これまで私たちが見てきた、また経験してきた運動部活動、また見ようとしなかった運動部活動の既視感を曝け出すことによって、私たち研究者がステークホルダーとともにここで一度ゼロベースまでリセットし、これからのより良いユース世代のスポーツ環境を考える延長線上に運動部の地域移行をめぐる課題を議論する必要があるのではなかろうか。本学会には、これからのユース世代のスポーツ環境に対して、科学的エビデンスを提示できるだけの十分な研究への将来資源が備わっているはずである。本企画シンポジウムでは、これからのユース世代のスポーツ環境を考えるために学会内外において共有すべき政策の方向性と研究知見を確認し、各専門領域を横断できるユース・スポーツのこれからを考える研究課題とそこから導かれる政策課題を共有するとともに、その解決の方向性について議論したい。

### [本部企画-S2-1] 運動部活動の地域連携・地域移行と地域スポーツ環境の整備について

*中平 公士[1] (1. スポーツ庁スポーツ戦略官)

### [本部企画-S2-2] 地域移行の失敗の歴史

1970年代の社会体育化と2000年前後の総合型クラブ連携を振り返る

*中澤 篤史[1] (1. 早稲田大学)

### [本部企画-S2-3] 大学やスポーツ組織が果たす役割

*山口 香[1] (1. 筑波大学)

### [本部企画-S2-4] 地域から見た課題と具体的な解決策

*松田 雅彦[1] (1. 大阪教育大学附属高等学校平野校舎)

本部企画シンポジウム

# 本部企画シンポジウム２／これからのユース・スポーツを考える―運動部活動の地域移行をめぐって―

コーディネーター：水上 博司（日本大学）
指定討論者：清水 紀宏（筑波大学）
2023年8月31日(木) 17:00 ～ 19:00 寒梅館ホール (寒梅館１Ｆ・地下１階ハーディーホール)

日本のユース世代（中学生・高校生）のスポーツ環境は根本から見直す変革期を迎えている。2022（令和4）年6月、スポーツ庁は「運動部活動の地域移行に関する検討会議提言について」を発表し、休日の活動から段階的に地域活動へ移行するという改革の方向性を示した。少子化による運動部への参加人数の減少、教師の業務負担の増大、学校と地域の協働の推進が表向きの改革理由とされる。しかしながら近年では、特に学校運動部は「ブラック企業」「ブラックバイト」「ブラックボランティア」の語りに連なって「ブラック部活」なる言葉でその負の側面が象徴的に描き出されてきた。勝利至上主義、行き過ぎた指導、体罰や暴力、教師のアンペイドワーク（無償労働）、過熱するスカウティングや越境入学などユース世代のスポーツライフスタイルにそぐわない「過剰さ」の数々が、ブラックなる語りで表されてきたのである。しかしながら、ここに潜む問題は、むしろ運動部活動をめぐる負の側面を、そもそもブラックだと感知しようとせず、長年にわたって見て見ぬふりをしてきた日本スポーツ界の肥大化、聖域化したインナーサークル（ムラ社会）にこそあるのではないか。

翻って学術研究コミュニティには、このことに対する自省は必要ないのだろうか。20年以上前、私は、本学会で学校運動部の実績とその因果を明らかにする研究成果を報告した発表者に対して、浅慮の知識でありながら過熱するスポーツ推薦制度の背後にある隠された内部構造に研究が切り込むべきではないかという質問をしたことがある。だが、その発表セッションが終わった際、会場にいた学会員から「タブーな部分なので研究は避けた方がよい」といった助言を受けたことがある。運動部活動の内部構造にまとわりつく聖域化した対象、見えても見えないふりをし、研究課題にしてはならないタブーなる既視感はなかったか。そこには、この問題が学会における研究者の存立構造や利害状況にもかかわる、まさに知識社会学的な課題であったことをも自省させられる構造が存在しているように思われる。

このような学術分野におけるある意味での「怠慢」性が、前述した問題の喫緊性を生じさせた背景にあるのではないかという反省も含め、私たちは今、ユース世代のスポーツ環境問題の何が見えていなければならないのか、さらに、ユース世代の子どもたちの目線の先には何が見えているのか、そして運動部活動の地域移行の関係者には、同様に何が見えているのか、そのことを見据えた展望について語り、議論しなければならないときであると考える。遅きに失した感は否めないが、これまで私たちが見てきた、また経験してきた運動部活動、また見ようとしなかった運動部活動の既視感を曝け出すことによって、私たち研究者がステークホルダーとともにここで一度ゼロベースまでリセットし、これからのより良いユース世代のスポーツ環境を考える延長線上に運動部の地域移行をめぐる課題を議論する必要があるのではなかろうか。本学会には、これからのユース世代のスポーツ環境に対して、科学的エビデンスを提示できるだけの十分な研究への将来資源が備わっているはずである。本企画シンポジウムでは、これからのユース世代のスポーツ環境を考えるために学会内外において共有すべき政策の方向性と研究知見を確認し、各専門領域を横断できるユース・スポーツのこれからを考える研究課題とそこから導かれる政策課題を共有するとともに、その解決の方向性について議論したい。

# [本部企画-S2-1]運動部活動の地域連携・地域移行と地域スポーツ環境の整備について

*中平 公士[1] (1. スポーツ庁スポーツ戦略官)
中平公士（スポーツ庁　スポーツ戦略官）

※登壇者が橋田裕氏から中平公士氏へ変更となりました。

橋田裕（スポーツ庁　地域スポーツ課）

＜演者略歴＞

©一般社団法人 日本体育・スポーツ・健康学会

平成12年、文部省（当時）に入省。教育委員会、文化財、国立大学法人等の担当を経て、平成21年から秋田県教育委員会の保健体育課長、義務教育課長として勤務。平成24年から文部科学省にて教育課程、大学入試等の担当後、東京オリンピック・パラリンピック、教育再生実行会議、幼児教育の担当を経て、令和４年４月より現職。

運動部活動は、少子化の進展により、従前と同様の学校単位での体制での運営は困難になっている。また、必ずしも専門性や意思に関わらず教師が顧問を務める指導体制の継続は、学校の働き方改革が進む中、より困難となっている。このため、少子化の中でも、将来にわたり生徒がスポーツに継続して親しむ機会を確保し、多様で豊かな活動を実現する必要がある。
スポーツ庁では、有識者会議の提言を踏まえ、新たに策定した「学校部活動及び新たな地域クラブ活動の在り方等に関する総合的なガイドライン」（令和４年12月）において、令和５年度からの３年間を「改革推進期間」として、休日の部活動の地域連携・地域移行に取り組みつつ、地域の実情に応じて可能な限り早期の実現を目指すこととしている。
また、令和４年度第２次補正予算では、地方公共団体の移行体制の構築に必要な経費として19億円、令和５年度予算では、地域移行に向けた実証事業や部活動指導員の配置等に必要な経費として28億円を計上している。
日本体育・スポーツ・健康学会の皆様には、こうした動向を踏まえ、運動部活動の地域連携・地域移行と地域スポーツ環境整備に向け、専門的・科学的な観点からご知見を賜りたい。

©一般社団法人 日本体育・スポーツ・健康学会

本部企画シンポジウム

# 本部企画シンポジウム２／これからのユース・スポーツを考える―運動部活動の地域移行をめぐって―

コーディネーター：水上 博司（日本大学）
指定討論者：清水 紀宏（筑波大学）
2023年8月31日(木) 17:00 〜 19:00 寒梅館ホール (寒梅館１Ｆ・地下１階ハーディーホール)

日本のユース世代（中学生・高校生）のスポーツ環境は根本から見直す変革期を迎えている。2022（令和4）年6月、スポーツ庁は「運動部活動の地域移行に関する検討会議提言について」を発表し、休日の活動から段階的に地域活動へ移行するという改革の方向性を示した。少子化による運動部への参加人数の減少、教師の業務負担の増大、学校と地域の協働の推進が表向きの改革理由とされる。しかしながら近年では、特に学校運動部は「ブラック企業」「ブラックバイト」「ブラックボランティア」の語りに連なって「ブラック部活」なる言葉でその負の側面が象徴的に描き出されてきた。勝利至上主義、行き過ぎた指導、体罰や暴力、教師のアンペイドワーク（無償労働）、過熱するスカウティングや越境入学などユース世代のスポーツライフスタイルにそぐわない「過剰さ」の数々が、ブラックなる語りで表されてきたのである。しかしながら、ここに潜む問題は、むしろ運動部活動をめぐる負の側面を、そもそもブラックだと感知しようとせず、長年にわたって見て見ぬふりをしてきた日本スポーツ界の肥大化、聖域化したインナーサークル（ムラ社会）にこそあるのではないか。

翻って学術研究コミュニティには、このことに対する自省は必要ないのだろうか。20年以上前、私は、本学会で学校運動部の実績とその因果を明らかにする研究成果を報告した発表者に対して、浅慮の知識でありながら過熱するスポーツ推薦制度の背後にある隠された内部構造に研究が切り込むべきではないかという質問をしたことがある。だが、その発表セッションが終わった際、会場にいた学会員から「タブーな部分なので研究は避けた方がよい」といった助言を受けたことがある。運動部活動の内部構造にまとわりつく聖域化した対象、見えても見えないふりをし、研究課題にしてはならないタブーなる既視感はなかったか。そこには、この問題が学会における研究者の存立構造や利害状況にもかかわる、まさに知識社会学的な課題であったことをも自省させられる構造が存在しているように思われる。

このような学術分野におけるある意味での「怠慢」性が、前述した問題の喫緊性を生じさせた背景にあるのではないかという反省も含め、私たちは今、ユース世代のスポーツ環境問題の何が見えていなければならないのか、さらに、ユース世代の子どもたちの目線の先には何が見えているのか、そして運動部活動の地域移行の関係者には、同様に何が見えているのか、そのことを見据えた展望について語り、議論しなければならないときであると考える。遅きに失した感は否めないが、これまで私たちが見てきた、また経験してきた運動部活動、また見ようとしなかった運動部活動の既視感を曝け出すことによって、私たち研究者がステークホルダーとともにここで一度ゼロベースまでリセットし、これからのより良いユース世代のスポーツ環境を考える延長線上に運動部の地域移行をめぐる課題を議論する必要があるのではなかろうか。本学会には、これからのユース世代のスポーツ環境に対して、科学的エビデンスを提示できるだけの十分な研究への将来資源が備わっているはずである。本企画シンポジウムでは、これからのユース世代のスポーツ環境を考えるために学会内外において共有すべき政策の方向性と研究知見を確認し、各専門領域を横断できるユース・スポーツのこれからを考える研究課題とそこから導かれる政策課題を共有するとともに、その解決の方向性について議論したい。

# [本部企画-S2-2]地域移行の失敗の歴史

1970年代の社会体育化と2000年前後の総合型クラブ連携を振り返る

*中澤 篤史[1] (1. 早稲田大学)

＜演者略歴＞

専門はスポーツ社会学。1979年大阪生まれ。東京大学教育学部卒。博士（教育学、東京大学）。一橋大学講師・准教授を経て、現在早稲田大学スポーツ科学学術院教授。主著は『運動部活動の戦後と現在』（青弓社、2014）。論文「中学校体育連盟の形成過程（1947-1967）」（『体育学研究』66巻所収）で2022年度学会賞受賞。

©一般社団法人 日本体育・スポーツ・健康学会

発表者は運動部活動のあり方や問題を社会学・歴史学の方法論を用いて研究してきた。その立場から本シンポジウムに貢献するため、本発表では、過去の失敗の歴史を振り返ることで現在の地域移行政策の成否を考える。

矢継ぎ早に出された地域移行政策の是非は慎重に問われるべきだが、それとは別に、そもそもこの政策は上手く行くのか。実際のところ、部活動を学校から地域へ移行できるのか。

発表者が地域移行政策の成否に疑問を差し挟む理由は、過去に2度、地域移行は失敗してきたからである。1度目は1970年代であり、膨れあがってきた教師の負担問題を背景に「社会体育化」というフレーズで運動部活動の地域移行が謳われ、模索され、結局は失敗した。2度目は2000年前後であり、スポーツ振興基本計画の策定とその後の実践において、総合型地域スポーツクラブとの連携が謳われ、模索され、結局はやはり失敗した。

1970年代の社会体育化と2000年前後の総合型クラブ連携は、どのような経緯を辿り、なぜ失敗したのか。当時の資料や議論、発表者が集めた調査データを用いて経緯を振り返り、失敗の理由を探ることで、現在の地域移行政策の可能性や課題に対する示唆を得たい。

©一般社団法人 日本体育・スポーツ・健康学会

本部企画シンポジウム

# 本部企画シンポジウム２／これからのユース・スポーツを考える―運動部活動の地域移行をめぐって―

コーディネーター：水上 博司（日本大学）
指定討論者：清水 紀宏（筑波大学）
2023年8月31日(木) 17:00 ～ 19:00 寒梅館ホール (寒梅館１Ｆ・地下１階ハーディーホール)

日本のユース世代（中学生・高校生）のスポーツ環境は根本から見直す変革期を迎えている。2022（令和4）年6月、スポーツ庁は「運動部活動の地域移行に関する検討会議提言について」を発表し、休日の活動から段階的に地域活動へ移行するという改革の方向性を示した。少子化による運動部への参加人数の減少、教師の業務負担の増大、学校と地域の協働の推進が表向きの改革理由とされる。しかしながら近年では、特に学校運動部は「ブラック企業」「ブラックバイト」「ブラックボランティア」の語りに連なって「ブラック部活」なる言葉でその負の側面が象徴的に描き出されてきた。勝利至上主義、行き過ぎた指導、体罰や暴力、教師のアンペイドワーク（無償労働）、過熱するスカウティングや越境入学などユース世代のスポーツライフスタイルにそぐわない「過剰さ」の数々が、ブラックなる語りで表されてきたのである。しかしながら、ここに潜む問題は、むしろ運動部活動をめぐる負の側面を、そもそもブラックだと感知しようとせず、長年にわたって見て見ぬふりをしてきた日本スポーツ界の肥大化、聖域化したインナーサークル（ムラ社会）にこそあるのではないか。

翻って学術研究コミュニティには、このことに対する自省は必要ないのだろうか。20年以上前、私は、本学会で学校運動部の実績とその因果を明らかにする研究成果を報告した発表者に対して、浅慮の知識でありながら過熱するスポーツ推薦制度の背後にある隠された内部構造に研究が切り込むべきではないかという質問をしたことがある。だが、その発表セッションが終わった際、会場にいた学会員から「タブーな部分なので研究は避けた方がよい」といった助言を受けたことがある。運動部活動の内部構造にまとわりつく聖域化した対象、見えても見えないふりをし、研究課題にしてはならないタブーなる既視感はなかったか。そこには、この問題が学会における研究者の存立構造や利害状況にもかかわる、まさに知識社会学的な課題であったことをも自省させられる構造が存在しているように思われる。

このような学術分野におけるある意味での「怠慢」性が、前述した問題の喫緊性を生じさせた背景にあるのではないかという反省も含め、私たちは今、ユース世代のスポーツ環境問題の何が見えていなければならないのか、さらに、ユース世代の子どもたちの目線の先には何が見えているのか、そして運動部活動の地域移行の関係者には、同様に何が見えているのか、そのことを見据えた展望について語り、議論しなければならないときであると考える。遅きに失した感は否めないが、これまで私たちが見てきた、また経験してきた運動部活動、また見ようとしなかった運動部活動の既視感を曝け出すことによって、私たち研究者がステークホルダーとともにここで一度ゼロベースまでリセットし、これからのより良いユース世代のスポーツ環境を考える延長線上に運動部の地域移行をめぐる課題を議論する必要があるのではなかろうか。本学会には、これからのユース世代のスポーツ環境に対して、科学的エビデンスを提示できるだけの十分な研究への将来資源が備わっているはずである。本企画シンポジウムでは、これからのユース世代のスポーツ環境を考えるために学会内外において共有すべき政策の方向性と研究知見を確認し、各専門領域を横断できるユース・スポーツのこれからを考える研究課題とそこから導かれる政策課題を共有するとともに、その解決の方向性について議論したい。

# [本部企画-S2-3]大学やスポーツ組織が果たす役割

*山口 香[1] (1. 筑波大学)

＜演者略歴＞

筑波大学体育系教授。社会人を対象にした大学院においてスポーツマネジメント領域を担当している。具体的にはトップアスリートの発掘・育成・強化システムや女性アスリートの課題などについてが研究課題である。

少子化や中学校、高等学校教員の多忙化が深刻化している背景などから、国は運動部活動の地域以降を段階的に進めていくことを決めた。現在、それぞれの地域では、地域の特性を考慮しながら実行への可能性を模索している。ここでは主に、地域移行に伴って必要となる人材の確保について検討したい。体育系の学部等を有していな

©一般社団法人 日本体育・スポーツ・健康学会

い大学であっても高い競技レベルで活動する運動部を有しているところは多い。また、競技団体は指導者として活動できる人間が登録（登録していなくても潜在的に存在し、発掘できる可能性がある）している。生徒を指導するにあたっては専門的な競技技術のみならず、安全への配慮や技術レベルに応じた適切な指導法などの知識を有していることが必要になる。各地域が大学やスポーツ組織と連携、協働し、人材発掘、養成を実施していくことが望まれる。また、女性活用のあり方も模索していく必要があるだろう。学生時代等に競技経験があるものの、出産、育児によってスポーツから離れてしまった女性は少なくない。地域移行の課題の一つである人材の確保について様々な可能性を論じてみたい。

©一般社団法人 日本体育・スポーツ・健康学会

本部企画シンポジウム

# 本部企画シンポジウム２／これからのユース・スポーツを考える―運動部活動の地域移行をめぐって―

コーディネーター：水上 博司（日本大学）
指定討論者：清水 紀宏（筑波大学）
2023年8月31日(木) 17:00 ～ 19:00 寒梅館ホール (寒梅館１Ｆ・地下１階ハーディーホール)

日本のユース世代（中学生・高校生）のスポーツ環境は根本から見直す変革期を迎えている。2022（令和4）年6月、スポーツ庁は「運動部活動の地域移行に関する検討会議提言について」を発表し、休日の活動から段階的に地域活動へ移行するという改革の方向性を示した。少子化による運動部への参加人数の減少、教師の業務負担の増大、学校と地域の協働の推進が表向きの改革理由とされる。しかしながら近年では、特に学校運動部は「ブラック企業」「ブラックバイト」「ブラックボランティア」の語りに連なって「ブラック部活」なる言葉でその負の側面が象徴的に描き出されてきた。勝利至上主義、行き過ぎた指導、体罰や暴力、教師のアンペイドワーク（無償労働）、過熱するスカウティングや越境入学などユース世代のスポーツライフスタイルにそぐわない「過剰さ」の数々が、ブラックなる語りで表されてきたのである。しかしながら、ここに潜む問題は、むしろ運動部活動をめぐる負の側面を、そもそもブラックだと感知しようとせず、長年にわたって見て見ぬふりをしてきた日本スポーツ界の肥大化、聖域化したインナーサークル（ムラ社会）にこそあるのではないか。

翻って学術研究コミュニティには、このことに対する自省は必要ないのだろうか。20年以上前、私は、本学会で学校運動部の実績とその因果を明らかにする研究成果を報告した発表者に対して、浅慮の知識でありながら過熱するスポーツ推薦制度の背後にある隠された内部構造に研究が切り込むべきではないかという質問をしたことがある。だが、その発表セッションが終わった際、会場にいた学会員から「タブーな部分なので研究は避けた方がよい」といった助言を受けたことがある。運動部活動の内部構造にまとわりつく聖域化した対象、見えても見えないふりをし、研究課題にしてはならないタブーなる既視感はなかったか。そこには、この問題が学会における研究者の存立構造や利害状況にもかかわる、まさに知識社会学的な課題であったことをも自省させられる構造が存在しているように思われる。

このような学術分野におけるある意味での「怠慢」性が、前述した問題の喫緊性を生じさせた背景にあるのではないかという反省も含め、私たちは今、ユース世代のスポーツ環境問題の何が見えていなければならないのか、さらに、ユース世代の子どもたちの目線の先には何が見えているのか、そして運動部活動の地域移行の関係者には、同様に何が見えているのか、そのことを見据えた展望について語り、議論しなければならないときであると考える。遅きに失した感は否めないが、これまで私たちが見てきた、また経験してきた運動部活動、また見ようとしなかった運動部活動の既視感を曝け出すことによって、私たち研究者がステークホルダーとともにここで一度ゼロベースまでリセットし、これからのより良いユース世代のスポーツ環境を考える延長線上に運動部の地域移行をめぐる課題を議論する必要があるのではなかろうか。本学会には、これからのユース世代のスポーツ環境に対して、科学的エビデンスを提示できるだけの十分な研究への将来資源が備わっているはずである。本企画シンポジウムでは、これからのユース世代のスポーツ環境を考えるために学会内外において共有すべき政策の方向性と研究知見を確認し、各専門領域を横断できるユース・スポーツのこれからを考える研究課題とそこから導かれる政策課題を共有するとともに、その解決の方向性について議論したい。

# [本部企画-S2-4]地域から見た課題と具体的な解決策

*松田 雅彦[1] (1. 大阪教育大学附属高等学校平野校舎)

＜演者略歴＞
大阪教育大学附属高等学校平野校舎　保健体育科　教諭
スクール・コミュニティクラブひらの倶楽部　会長
NPO法人しまもとバンブークラブ　理事

地域・学校から見た「運動部活動の地域移行」の課題として以下が考えられる。
・子供たちのスポーツライフの矮小化

©一般社団法人 日本体育・スポーツ・健康学会

すべての部活動を地域で請け負うことができるのか。休日だけでなく、平日の移行も視野に入れた仕組み作りが必要である。
・運動部活動の質的改革がどこまでできるのか
　複数の活動ができる環境やチャンピオンシップスポーツとマス〈大衆〉スポーツの融合など、運動部活動を質的に改革することが地域移行の前提である。
・ゴールイメージのばらつき（地域移行の評価軸の不在）
「運動部活動の地域移行」を単なる部活動のアウトソーシングをとらえるのか、学校や地域改革のきっかけとしてとらえるのかで、新しい仕組みのミッションやビジョンが違ってくる。単なるアウトソーシングであれば、部活動が塾化することとなり活動に参加できない生徒が出てくる可能性がある。

これらの課題は、学校か地域かという二項対立的視点から生まれている。それゆえ、それらを解決するには、学校と地域を分断しない仕組みの構築が必要である。当日は、これらの課題とともに、学校内部に受け皿団体を設立した本校の取組(スクール・コミュニティクラブひらの倶楽部）について紹介する。

©一般社団法人 日本体育・スポーツ・健康学会

テーマ別シンポジウム | 競技スポーツ研究部会：【課題B】競技スポーツにおけるコーチ養成をいかに効果的に行うか

2023年8月31日(木) 10:10 ~ 12:10 | RYB1 良心館地下１階ＲＹＢ１番教室

## 競技スポーツ研究部会【課題B】テーマ別シンポジウム／ジュニア（育成年代）競技スポーツのコーチ養成

コーディネーター：小谷 究（流通経済大学）

本横断領域部会における解決すべき上位の課題のひとつが「競技スポーツにおけるコーチ養成をいかに行うか」である。日本では、子どもたちの豊かなスポーツ活動を整備するため、運動部活動の地域連携や地域スポーツクラブ活動連携がすすめられている。その一方、ヒューマン・ライツ・ウォッチの報告では、日本の子どもがスポーツのなかで、暴力等の虐待を経験することが多く、その結果、スポーツが痛みや恐怖、苦痛をもたらす経験となっていることが指摘されている。このように、日本のジュニア（育成年代）競技は、コーチによるプレーヤーへの暴力等の虐待を含む、様々な課題を抱えたまま、組織的な移行期をむかえているといえる。もちろん、組織的な移行自体が課題解決の一方策ではあるものの、それだけでは子どもたちの豊かなスポーツ活動の実現には繋がらないことは明白である。そこで、本シンポジウムでは「ジュニア（育成年代）競技スポーツのコーチ養成」をテーマとして設定し、コーチ養成のシステム、指導法、コーチのキャリアパスの視点からジュニア（育成年代）競技スポーツのコーチ養成にまつわる課題を洗い出し、今後のコーチ養成について議論する。

[競技スポーツ-SB-1] 日本サッカー協会の指導者養成システム

*西川 誠太[1] (1. 公益財団法人 日本サッカー協会)

---

[競技スポーツ-SB-2] 小学生年代を指導するコーチのあり方

*中山 紗織[1] (1. 筑波大学)

---

[競技スポーツ-SB-3] ジュニア（育成年代）競技スポーツのコーチ養成
キャリアパスの視点から

*北村 麻衣[1] (1. 学習院大学)

テーマ別シンポジウム | 競技スポーツ研究部会 | 【課題B】競技スポーツにおけるコーチ養成をいかに効果的に行うか

# 競技スポーツ研究部会【課題 B】テーマ別シンポジウム／ジュニア（育成年代）競技スポーツのコーチ養成

コーディネーター：小谷 究（流通経済大学）

2023年8月31日(木) 10:10 ～ 12:10 RYB1 (良心館地下１階ＲＹＢ１番教室)

本横断領域部会における解決すべき上位の課題のひとつが「競技スポーツにおけるコーチ養成をいかに行うか」である。日本では、子どもたちの豊かなスポーツ活動を整備するため、運動部活動の地域連携や地域スポーツクラブ活動連携がすすめられている。その一方、ヒューマン・ライツ・ウォッチの報告では、日本の子どもがスポーツのなかで、暴力等の虐待を経験することが多く、その結果、スポーツが痛みや恐怖、苦痛をもたらす経験となっていることが指摘されている。このように、日本のジュニア（育成年代）競技は、コーチによるプレーヤーへの暴力等の虐待を含む、様々な課題を抱えたまま、組織的な移行期をむかえているといえる。もちろん、組織的な移行自体が課題解決の一方策ではあるものの、それだけでは子どもたちの豊かなスポーツ活動の実現には繋がらないことは明白である。そこで、本シンポジウムでは「ジュニア（育成年代）競技スポーツのコーチ養成」をテーマとして設定し、コーチ養成のシステム、指導法、コーチのキャリアパスの視点からジュニア（育成年代）競技スポーツのコーチ養成にまつわる課題を洗い出し、今後のコーチ養成について議論する。

## [競技スポーツ-SB-1]日本サッカー協会の指導者養成システム

*西川 誠太[1] (1. 公益財団法人 日本サッカー協会)

＜演者略歴＞

2022-現在　公益財団法人日本サッカー協会　指導者養成ダイレクター

2021　同上　ユース育成サブダイレクター

2017-2021　同上　JFAコーチ　関東地域担当

本シンポジウムでは「ジュニア（育成年代）競技スポーツのコーチ養成」のなかでも、「コーチ養成システム」について公益財団法人日本サッカー協会（以下、 JFA）の事例を紹介する。 JFAは「サッカーを通じて豊かなスポーツ文化を創造し、人々の心身の健全な発達と社会の発展に貢献する」という理念のもと、代表強化・ユース育成・指導者養成・普及の“四位一体”を掲げている。指導者養成は、指導者養成講習会・チューター制度・リフレッシュ研修会の３つを柱に事業を展開している。指導者養成講習会は、子どもを対象とした D級ライセンスからプロ選手を対象にした S級ライセンスまでのコアとなるライセンスに加え、指導者の多様な学びのニーズに対応すべく、ゴールキーパーやフィジカルなどポジションや分野に特化したライセンスも提供している。育成年代に特化したライセンスも2007年から始めており、今年これらを更にブラッシュアップしたところである。これら JFAの指導者養成システムの現状と今後について紹介し、これからの日本全体のジュニア（育成年代）競技スポーツのコーチ養成のありかたについて議論したい。

©一般社団法人 日本体育・スポーツ・健康学会

テーマ別シンポジウム | 競技スポーツ研究部会 | 【課題B】競技スポーツにおけるコーチ養成をいかに効果的に行うか

# 競技スポーツ研究部会【課題 B】テーマ別シンポジウム／ジュニア（育成年代）競技スポーツのコーチ養成

コーディネーター：小谷 究（流通経済大学）

2023年8月31日(木) 10:10 ～ 12:10 RYB1 (良心館地下１階ＲＹＢ１番教室)

本横断領域部会における解決すべき上位の課題のひとつが「競技スポーツにおけるコーチ養成をいかに行うか」である。日本では、子どもたちの豊かなスポーツ活動を整備するため、運動部活動の地域連携や地域スポーツクラブ活動連携がすすめられている。その一方、ヒューマン・ライツ・ウォッチの報告では、日本の子どもがスポーツのなかで、暴力等の虐待を経験することが多く、その結果、スポーツが痛みや恐怖、苦痛をもたらす経験となっていることが指摘されている。このように、日本のジュニア（育成年代）競技は、コーチによるプレーヤーへの暴力等の虐待を含む、様々な課題を抱えたまま、組織的な移行期をむかえているといえる。もちろん、組織的な移行自体が課題解決の一方策ではあるものの、それだけでは子どもたちの豊かなスポーツ活動の実現には繋がらないことは明白である。そこで、本シンポジウムでは「ジュニア（育成年代）競技スポーツのコーチ養成」をテーマとして設定し、コーチ養成のシステム、指導法、コーチのキャリアパスの視点からジュニア（育成年代）競技スポーツのコーチ養成にまつわる課題を洗い出し、今後のコーチ養成について議論する。

## [競技スポーツ-SB-2]小学生年代を指導するコーチのあり方

*中山 紗織[1] (1. 筑波大学)

＜演者略歴＞

筑波大学体育系助教（博士・コーチング学）。専門はハンドボール、小学生年代の子どもに対するコーチング、指導者育成。大学院在学時には、ドイツ・ライプツィヒ大学スポーツ科学部へ留学し、U10チームでコーチング活動を行った。現在は教育・研究活動に加えて、小学生チームでコーチング活動を行っている。

小学生スポーツを取り巻く課題として、全国小学生大会の在り方や公式戦の１試合あたりにおける個人の出場時間数の偏り、暴力やハラスメントなどの不適切な指導、早期専門化によるバーンアウトなどが挙げられている。また、国内外のさまざまな競技において、小学生時期に競技を始めた場合、将来オリンピックやプロ選手として活動する確率は低いことが報告されている。

これらの諸問題の解決を目指して、すでに国内においてさまざまな取り組みが行われている。例えば、サッカーでは2011年に8人制が導入され、バスケットボールでは2015年にマンツーマン防御が義務化、柔道では2022年に全国小学生大会・団体戦が廃止されている。これらの取り組みの背景、すなわち多くの子どもにとって将来スポーツが彼らの人生を彩るものになるようなコーチング活動を実現させるためには、大人のスポーツ活動のコピーや分解による簡易化ではなく、子どもには子どもに適したものがあるということを前提に取り組む必要がある。本発表では、ジュニア期の初期段階としての小学生年代に焦点を当てて、具体的なコーチングのあり方、トレーニングの方法および内容について考えていく。

©一般社団法人 日本体育・スポーツ・健康学会

テーマ別シンポジウム | 競技スポーツ研究部会 | 【課題B】競技スポーツにおけるコーチ養成をいかに効果的に行うか

# 競技スポーツ研究部会【課題 B】テーマ別シンポジウム／ジュニア（育成年代）競技スポーツのコーチ養成

コーディネーター：小谷 究（流通経済大学）

2023年8月31日(木) 10:10 ～ 12:10 RYB1 (良心館地下１階ＲＹＢ１番教室)

本横断領域部会における解決すべき上位の課題のひとつが「競技スポーツにおけるコーチ養成をいかに行うか」である。日本では、子どもたちの豊かなスポーツ活動を整備するため、運動部活動の地域連携や地域スポーツクラブ活動連携がすすめられている。その一方、ヒューマン・ライツ・ウォッチの報告では、日本の子どもがスポーツのなかで、暴力等の虐待を経験することが多く、その結果、スポーツが痛みや恐怖、苦痛をもたらす経験となっていることが指摘されている。このように、日本のジュニア（育成年代）競技は、コーチによるプレーヤーへの暴力等の虐待を含む、様々な課題を抱えたまま、組織的な移行期をむかえているといえる。もちろん、組織的な移行自体が課題解決の一方策ではあるものの、それだけでは子どもたちの豊かなスポーツ活動の実現には繋がらないことは明白である。そこで、本シンポジウムでは「ジュニア（育成年代）競技スポーツのコーチ養成」をテーマとして設定し、コーチ養成のシステム、指導法、コーチのキャリアパスの視点からジュニア（育成年代）競技スポーツのコーチ養成にまつわる課題を洗い出し、今後のコーチ養成について議論する。

## [競技スポーツ-SB-3]ジュニア（育成年代）競技スポーツのコーチ養成

キャリアパスの視点から

*北村 麻衣[1] (1. 学習院大学)

＜演者略歴＞

学習院大学スポーツ・健康科学センター准教授．筑波大学と鹿屋体育大学による3年制博士課程「大学体育スポーツ高度化共同専攻」に在籍中．日本バスケットボール協会において，指導者養成委員会ワーキンググループに所属し，コーチデベロッパーとしても活動している．

バスケットボール女子日本リーグ（通称 WJBL）には現在200名程度の選手が所属している．この選手たちは高校卒業後，大学に進学するか， WJBLに入団するかの進路を選択する．7～8年前までは高校卒業後にすぐ WJBLに進む選手の方が圧倒的に多かったものの，2年前には大学卒業後に WJBLに入団した選手が半数を超え，進路選択の幅が広がってきている．

また，引退後のセカンドキャリアについても，大学院に通い直す選手やコーチを志す選手，学生時代にできなかった留学経験をする選手など，辿る径路が多様化してきている．さらには，現役中に起業する選手や，選手とコーチのどちらも行うといったデュアルキャリアを歩む選手も現れ始めている．こうしたことから，女子バスケットボール界では，「自分らしい生き方を実現していく過程」であるキャリア発達への注目度が高まっている．

本報告では，女子バスケットボール選手が実際に辿ってきた進路・キャリア選択過程について，いくつかの事例を示しながら，選手のキャリア発達をサポートするために，ジュニア（育成年代）選手のコーチには何が必要であるのかを議論したい．

©一般社団法人 日本体育・スポーツ・健康学会

テーマ別シンポジウム | 学校保健体育研究部会：【課題B】保健体育授業をいかに良質なものにするか

2023年8月31日(木) 10:10 ~ 12:10 | RY203 良心館２階ＲＹ２０３番教室

## 学校保健体育研究部会【課題B】テーマ別シンポジウム／より良質な保健体育授業の具体像を考える　その３―子どもたちの「豊かなスポーツライフ」の実現に向けて、教師が身に付けるべき資質・能力とは―

コーディネーター：澤江 幸則（筑波大学）、原 祐一（岡山大学）

子どもたちの豊かなスポーツライフを支えるために求められる良質な保健体育授業とは何かを検討してきた過去2回のシンポジウムを踏まえて、今回は、それを実現へと導く教師が身に付けるべき資質・能力について議論することにした。

　具体的には、既存のスポーツや知識を伝えるだけではなく、さまざまな社会情勢に応じて対応できる力、つまり運動やスポーツ、健康な生活を「創る」力や、いろいろな人の力と協調する「つながる」力が求められるという前提のもと、ご自身の教師経験と若手育成の実務経験から中村氏（京都市立下京中学校）、教員養成課程に関わる三田部氏（筑波大学）から、教員をめざす学生の課題を踏まえ、特に運動やスポーツを「創る」力を育成するうえでの取り組みについて、学校体育現場への豊富な助言経験をもつ宮口氏（石川県立大学）から、スポーツ科学という学際的な知見や人材が体育授業とどう「つながる」ことができるかについて話題提供していただくことにした。

　これらの話題をもとに、子どもたちの豊かなスポーツライフを支える教師の資質とは何かを、教師教育という観点から議論してみたい。

### [学校保健体育-SB-1] 学校内外をつなげる取り組みの現状と教師に期待することがら

*中村 利之[1] (1. 京都市立下京中学校)

### [学校保健体育-SB-2] スポーツを創る力を育てられる教師

*三田部 勇[1] (1. 筑波大学)

### [学校保健体育-SB-3] 現代における魅力的な体育授業とは

オルタナティブな授業の提案

*宮口 和義[1] (1. 石川県立大学)

テーマ別シンポジウム | 学校保健体育研究部会 | 【課題B】保健体育授業をいかに良質なものにするか

# 学校保健体育研究部会【課題 B】テーマ別シンポジウム／より良質な保健体育授業の具体像を考える　その３ー子どもたちの「豊かなスポーツライフ」の実現に向けて、教師が身に付けるべき資質・能力とはー

コーディネーター：澤江 幸則（筑波大学）、原 祐一（岡山大学）

2023年8月31日(木) 10:10 ～ 12:10  RY203 (良心館２階ＲＹ２０３番教室)

子どもたちの豊かなスポーツライフを支えるために求められる良質な保健体育授業とは何かを検討してきた過去2回のシンポジウムを踏まえて、今回は、それを実現へと導く教師が身に付けるべき資質・能力について議論することにした。

　具体的には、既存のスポーツや知識を伝えるだけではなく、さまざまな社会情勢に応じて対応できる力、つまり運動やスポーツ、健康な生活を「創る」力や、いろいろな人の力と協調する「つながる」力が求められるという前提のもと、ご自身の教師経験と若手育成の実務経験から中村氏（京都市立下京中学校）、教員養成課程に関わる三田部氏（筑波大学）から、教員をめざす学生の課題を踏まえ、特に運動やスポーツを「創る」力を育成するうえでの取り組みについて、学校体育現場への豊富な助言経験をもつ宮口氏（石川県立大学）から、スポーツ科学という学際的な知見や人材が体育授業とどう「つながる」ことができるかについて話題提供していただくことにした。

　これらの話題をもとに、子どもたちの豊かなスポーツライフを支える教師の資質とは何かを、教師教育という観点から議論してみたい。

# [学校保健体育-SB-1]学校内外をつなげる取り組みの現状と教師に期待することがら

*中村 利之[1] (1. 京都市立下京中学校)

＜演者略歴＞

京都市立中学校保健体育科教員。2013年より京都府・京都市中学校体育連盟常任理事。2022年より京都府・京都市中学校体育連盟柔道専門部委員長。

学校体育・保健体育では、子どもたちの豊かなスポーツライフに向けた取り組みを進めることが求められているが、子どもたちに伝えるべき、子どもたちが身につけるべきものとして、何が必要なのだろうか。これからの学校体育・保健体育のあり方についていくつかの事例を交えて考えたことについて述べる。特に、現在の学校現場では、ミドルリーダー世代の教員の不足といった現状のなかで、若手教員の育成が喫緊の課題とされている。そのなか、これまでの「先輩の背中を見て学ぶ」といったスタイルから、「先輩教員と一緒に学ぶ」というスタイルで実践のスタイルが移り変わっている現状がある。こうした現状のなかで、子どもたちにとって意味のある実践を実現するためには、教師と学校外が豊かにつながっていくことが求められる。その点を含めて、学校内外をつなぐ取り組みの現状と教師に求められる力について考えてみたことを述べる。このような取り組みを、良質な保健体育の授業につなげ、子どもたちの豊かなスポーツライフを実現していきたい。

©一般社団法人 日本体育・スポーツ・健康学会

テーマ別シンポジウム | 学校保健体育研究部会 | 【課題B】保健体育授業をいかに良質なものにするか

# 学校保健体育研究部会【課題 B】テーマ別シンポジウム／より良質な保健体育授業の具体像を考える　その３ー子どもたちの「豊かなスポーツライフ」の実現に向けて、教師が身に付けるべき資質・能力とはー

コーディネーター：澤江 幸則（筑波大学）、原 祐一（岡山大学）

2023年8月31日(木) 10:10 〜 12:10  RY203 (良心館２階ＲＹ２０３番教室)

子どもたちの豊かなスポーツライフを支えるために求められる良質な保健体育授業とは何かを検討してきた過去2回のシンポジウムを踏まえて、今回は、それを実現へと導く教師が身に付けるべき資質・能力について議論することにした。

　具体的には、既存のスポーツや知識を伝えるだけではなく、さまざまな社会情勢に応じて対応できる力、つまり運動やスポーツ、健康な生活を「創る」力や、いろいろな人の力と協調する「つながる」力が求められるという前提のもと、ご自身の教師経験と若手育成の実務経験から中村氏（京都市立下京中学校）、教員養成課程に関わる三田部氏（筑波大学）から、教員をめざす学生の課題を踏まえ、特に運動やスポーツを「創る」力を育成するうえでの取り組みについて、学校体育現場への豊富な助言経験をもつ宮口氏（石川県立大学）から、スポーツ科学という学際的な知見や人材が体育授業とどう「つながる」ことができるかについて話題提供していただくことにした。

　これらの話題をもとに、子どもたちの豊かなスポーツライフを支える教師の資質とは何かを、教師教育という観点から議論してみたい。

## [学校保健体育-SB-2]スポーツを創る力を育てられる教師

*三田部 勇[1] (1. 筑波大学)

＜演者略歴＞

1989年より、茨城県公立小学校及び中学校に22年間勤務。2011年より茨城県教育庁保健体育課指導主事として2年間教育行政に携わり、2013年より現職。日本体育科教育学会常任理事、小学校体育（運動領域）指導の手引（スポーツ庁）作成協力者。

予測困難な時代を生きる子どもたちが豊かなスポーツライフを実現するためには、柔軟な考えを持ち、その場や多様な集団に合わせて、スポーツを「創る」力が求められる。演者は現在、教員養成に携わり、保健体育科の指導法において模擬授業を実施している。その過程において、学生の一つの大きな特徴として挙げられるのが、自身の受けてきた授業と部活動での運動経験による、練習を積み重ねて試合に向かうような授業観である。また既成の公式ルールや固定観念にとらわれ、柔軟に運動教材やルールを工夫するといった考え方が出来ない面も見られる。しかし、実際の学校現場においては、運動の技能やスポーツへの興味関心に大きな差が生じている子どもはもちろんのこと、障害のある子どもや外国籍の子ども等が所属する多様な集団に対しての指導に直面することになる。そういった場で、子どもたちの実態に合わせて取り上げる教材や手立てを変えていく、子どもに工夫するポイントを提示して運動の行い方を考えさせるといった、柔軟な対応力が資質能力として必要であると考える。それを身に付けるためには、教科指導の専門性のみならず、自己の視野を広げる多様な経験が必要であり、本シンポジウムではその事例をもとに考えを述べていく。

©一般社団法人 日本体育・スポーツ・健康学会

テーマ別シンポジウム | 学校保健体育研究部会 | 【課題B】保健体育授業をいかに良質なものにするか

# 学校保健体育研究部会【課題 B】テーマ別シンポジウム／より良質な保健体育授業の具体像を考える　その３ー子どもたちの「豊かなスポーツライフ」の実現に向けて、教師が身に付けるべき資質・能力とはー

コーディネーター：澤江 幸則（筑波大学）、原 祐一（岡山大学）

2023年8月31日(木) 10:10 ～ 12:10  RY203 (良心館２階ＲＹ２０３番教室)

子どもたちの豊かなスポーツライフを支えるために求められる良質な保健体育授業とは何かを検討してきた過去2回のシンポジウムを踏まえて、今回は、それを実現へと導く教師が身に付けるべき資質・能力について議論することにした。

　具体的には、既存のスポーツや知識を伝えるだけではなく、さまざまな社会情勢に応じて対応できる力、つまり運動やスポーツ、健康な生活を「創る」力や、いろいろな人の力と協調する「つながる」力が求められるという前提のもと、ご自身の教師経験と若手育成の実務経験から中村氏（京都市立下京中学校）、教員養成課程に関わる三田部氏（筑波大学）から、教員をめざす学生の課題を踏まえ、特に運動やスポーツを「創る」力を育成するうえでの取り組みについて、学校体育現場への豊富な助言経験をもつ宮口氏（石川県立大学）から、スポーツ科学という学際的な知見や人材が体育授業とどう「つながる」ことができるかについて話題提供していただくことにした。

　これらの話題をもとに、子どもたちの豊かなスポーツライフを支える教師の資質とは何かを、教師教育という観点から議論してみたい。

# [学校保健体育-SB-3]現代における魅力的な体育授業とは

オルタナティブな授業の提案

*宮口 和義[1] (1. 石川県立大学)

＜演者略歴＞

日本体育測定評価学会副会長、日本教育医学会常任理事、いしかわっ子体力向上アクションプラン検討委員、いしかわ科学トレ専門グループ委員、小立野ジュニアアスレチッククラブ代表。最近では、子ども達の運動不足を解消するためYouTubeを活用し、豊富な指導経験に基づく独自の体育教材動画（ラダー運動、なわとび運動）を配信している。

ここ数年で教育現場は大きく変わってきた。新型コロナによる子どもたちの体力低下も問題ですが、グローバル化や人工知能・ AIなどの技術革新が急速に進み、子どもたちが自ら考え行動する「生きる力」を育むことが求められるようになってきた。しかし、実際の現場では旧態依然とした授業が展開されているケースも少なくないように思われる。子どもたちの知的好奇心をくすぐるワクワクするような体育授業が展開されているであろうか。

　最近、オルタナティブ〇〇という用語を耳にするようになった。「型にはまらない」「既存のものに取ってかわる新しいもの」という意味らしいが、これからの体育授業もオルタナティブな要素をどんどん取り入れていくべきではないだろうか。先達の知恵が詰まった新学習指導要領を参考にするのは当然であるが、一歩踏み出し、最新のスポーツサイエンスを取り入れた、より革新的でまさにオルタナティブな授業づくりが必要ではないだろうか。また、部活動の地域移行が進む中、身近にスペシャリストがいるなら、そのつながりをもつことも大いに有効であろう。本シンポジウムでは、地元で取り組んできた事例を挙げながら、今後の体育授業のあり方について提案したいと考えている。

©一般社団法人 日本体育・スポーツ・健康学会

テーマ別シンポジウム | 健康福祉研究部会：【課題B】認知機能の維持・改善に運動・スポーツはいかに貢献するか

2023年8月31日(木) 10:10 ~ 12:10 | RY301 良心館３階ＲＹ３０１番教室

## 健康福祉研究部会【課題B】テーマ別シンポジウム／認知と運動の支援―テクノロジーの活用―

コーディネーター：辻 大士（筑波大学）、木伏 紅緒（神戸大学）

我が国の科学技術政策として「Society 5.0」が提唱され、IoT、ロボット、AIなどの最先端のテクノロジーをあらゆる産業や社会生活に取り入れ、多様なニーズにきめ細やかに対応したモノやサービスの提供が目指されている。これは「認知と運動の支援」というテーマに対しても親和性が高いと考えられ、体育・スポーツ・健康に携わる研究者がどのように貢献しうるのかを考える機会として、本シンポジウムが企画された。根本氏には、AIを用いた認知症早期スクリーニング技術についてご紹介いただく。安田氏には、没入型VRによる半側空間無視患者に対する評価・介入システムについてご紹介いただく。樋口氏には、VRを用いた運動学習の支援についてご紹介いただく。

### [健康福祉-SB-1] AIを用いた認知症早期スクリーニング

日常生活動作解析から

*根本 みゆき[1] (1. 筑波大学)

### [健康福祉-SB-2] 没入型バーチャルリアリティによる半側空間無視に対するリハビリテーション支援機器の開発

*安田 和弘[1,2] (1. 東京保健医療専門職大学、2. 早稲田大学)

### [健康福祉-SB-3] バーチャルリアリティを用いた運動学習の支援

*樋口 貴広[1] (1. 東京都立大学)

テーマ別シンポジウム | 健康福祉研究部会 | 【課題B】認知機能の維持・改善に運動・スポーツはいかに貢献するか

# 健康福祉研究部会【課題 B】テーマ別シンポジウム／認知と運動の支援ーテクノロジーの活用ー

コーディネーター：辻 大士（筑波大学）、木伏 紅緒（神戸大学）

2023年8月31日(木) 10:10 〜 12:10  RY301 (良心館３階ＲＹ３０１番教室)

我が国の科学技術政策として「Society 5.0」が提唱され、IoT、ロボット、AIなどの最先端のテクノロジーをあらゆる産業や社会生活に取り入れ、多様なニーズにきめ細やかに対応したモノやサービスの提供が目指されている。これは「認知と運動の支援」というテーマに対しても親和性が高いと考えられ、体育・スポーツ・健康に携わる研究者がどのように貢献しうるのかを考える機会として、本シンポジウムが企画された。根本氏には、AIを用いた認知症早期スクリーニング技術についてご紹介いただく。安田氏には、没入型VRによる半側空間無視患者に対する評価・介入システムについてご紹介いただく。樋口氏には、VRを用いた運動学習の支援についてご紹介いただく。

## [健康福祉-SB-1]AIを用いた認知症早期スクリーニング

日常生活動作解析から

*根本 みゆき[1] (1. 筑波大学)

＜演者略歴＞

2013年 筑波大学大学院人間総合科学研究科スポーツ医学専攻修了、博士（スポーツ医学）。日本学術振興会特別研究員（筑波大学）、筑波大学附属病院 病院講師を経て、2021年より現職。本学会では「介護予防･健康づくり」専門領域に所属。

認知症の早期発見・早期介入方法の確立は喫緊の課題であり、その方策が様々に検討されている。筆者らは現在、 AIを用いて、日常生活動作から認知症早期発見のためのスクリーニング手法の研究開発に取り組んでいる。具体的には、歩行の速度、リズム等の歩行動作の特徴、言いよどみの頻度や発話速度といった言語・音声的特徴、描画の速度や筆圧といった描画動作の特徴から、認知機能低下の程度を評価することが期待されている。認知症の診断やスクリーニングは、体液や分子イメージング等のバイオマーカー検査が侵襲的あるいは高額であることや、認知機能検査に対する心理的負担等の課題があり、筆者らの手段は非侵襲的で実行しやすいツールの一つとして近年注目されている。本シンポジウムでは、筆者らの研究成果および、認知症早期発見後のサポート・介入について実際の取り組みを紹介し、認知症早期スクリーニング技術を活用した先進的な認知症対策について議論したい。

©一般社団法人 日本体育・スポーツ・健康学会

テーマ別シンポジウム | 健康福祉研究部会 | 【課題B】認知機能の維持・改善に運動・スポーツはいかに貢献するか

# 健康福祉研究部会【課題 B】テーマ別シンポジウム／認知と運動の支援ーテクノロジーの活用ー

コーディネーター：辻 大士（筑波大学）、木伏 紅緒（神戸大学）

2023年8月31日(木) 10:10 ～ 12:10 RY301 (良心館３階ＲＹ３０１番教室)

我が国の科学技術政策として「Society 5.0」が提唱され、IoT、ロボット、AIなどの最先端のテクノロジーをあらゆる産業や社会生活に取り入れ、多様なニーズにきめ細やかに対応したモノやサービスの提供が目指されている。これは「認知と運動の支援」というテーマに対しても親和性が高いと考えられ、体育・スポーツ・健康に携わる研究者がどのように貢献しうるのかを考える機会として、本シンポジウムが企画された。根本氏には、AIを用いた認知症早期スクリーニング技術についてご紹介いただく。安田氏には、没入型VRによる半側空間無視患者に対する評価・介入システムについてご紹介いただく。樋口氏には、VRを用いた運動学習の支援についてご紹介いただく。

# [健康福祉-SB-2]没入型バーチャルリアリティによる半側空間無視に対するリハビリテーション支援機器の開発

*安田 和弘[1,2] (1. 東京保健医療専門職大学、2. 早稲田大学)

＜演者略歴＞

神経リハビリテーション・リハビリテーション工学。首都大学東京大学院人間健康科学研究科修了、博士（学術）。最先端・次世代研究開発支援プログラム研究員（PD）、早稲田大学グローバルロボットアカデミア研究所研究助手、早稲田大学理工学術院総合研究所研究院講師・同研究院客員准教授を経て、２０２１年より現職。厚労省障害者自立支援機器等開発評価委員、厚労省自立支援機器イノベーション人材育成事業評価委員等 。

脳血管障害後に生じる半側空間無視（ USN）とは、大脳半球病巣と反対側の視空間領域に存在する刺激を発見し、反応することができなくなる高次脳機能障害である。われわれは、バーチャルリアリティ（ VR）技術を用いて、 USN患者における無視領域を３次元的にマッピング化する技術を開発してきた。本システムの特徴は、無視症状が乖離するとされる近位（身体近傍空間）・遠位（身体外空間）の双方において、３次元的に無視領域を視覚化・定量化できることである。また、左 USN患者は注意が非無視側に引き寄せられ、頸部や視線が常に非無視側を向く傾向が強い。この症状は Magnetic attraction（ MA）として知られており、発症初期の USN患者における特徴的な症状である。この問題に対するあらたな介入手法として、非無視側からの注意の「解放」と無視側への注意の「移動」を同時に誘導するための可動スリットシステムを併せて開発した。本シンポジウムでは、われわれが実用化した没入型 VRを用いた USNに対する3次元的評価および介入システムについて、患者に対する使用例と併せて紹介したい。

©一般社団法人 日本体育・スポーツ・健康学会

テーマ別シンポジウム | 健康福祉研究部会 | 【課題B】認知機能の維持・改善に運動・スポーツはいかに貢献するか

# 健康福祉研究部会【課題 B】テーマ別シンポジウム／認知と運動の支援ーテクノロジーの活用ー

コーディネーター：辻 大士（筑波大学）、木伏 紅緒（神戸大学）

2023年8月31日(木) 10:10 〜 12:10  RY301 (良心館３階ＲＹ３０１番教室)

我が国の科学技術政策として「Society 5.0」が提唱され、IoT、ロボット、AIなどの最先端のテクノロジーをあらゆる産業や社会生活に取り入れ、多様なニーズにきめ細やかに対応したモノやサービスの提供が目指されている。これは「認知と運動の支援」というテーマに対しても親和性が高いと考えられ、体育・スポーツ・健康に携わる研究者がどのように貢献しうるのかを考える機会として、本シンポジウムが企画された。根本氏には、AIを用いた認知症早期スクリーニング技術についてご紹介いただく。安田氏には、没入型VRによる半側空間無視患者に対する評価・介入システムについてご紹介いただく。樋口氏には、VRを用いた運動学習の支援についてご紹介いただく。

## [健康福祉-SB-3]バーチャルリアリティを用いた運動学習の支援

*樋口 貴広[1] (1. 東京都立大学)

＜演者略歴＞

専門は実験心理学。東北大学文学研究科修了、博士（文学）。日本学術振興会特別研究員（PD）、ウォータールー大学（カナダ）客員研究員、首都大学東京人間健康科学研究科助教、同准教授を経て、２０１５年より現職（2020年4月に大学名称が東京都立大学に変更）。本学会専門領域（体育心理）理事。

バーチャリリアリティ（ VR）を運動学習の現場で活用することには、様々な期待がある。例えばドレッドミルを用いた単調な歩行リハビリに対して、連動して動く風景を VRで提示することにより、飽きずにトレーニングを継続できたり、環境に応じて歩行を調整する能力を高めたりする効果が期待される。しかし、いくら VR環境のリアリティ（没入感）が大きくても、奥行き知覚の違いや映像呈示の時間遅れなど、 VR環境は実環境とは異なる側面がある。演者は現在、 VRを運動学習の支援に生かすことを目的とした研究課題として、「高齢者を対象とした衝突回避能力の向上」ならびに「スポーツ動作が苦手な、いわゆる不器用な子（発達性協調運動症児）を念頭に置いた協調能力の向上」という２つの課題に取り組んでいる。本シンポジウムでは、この２つの研究課題で用いているシステムや現状の成果を紹介する。そのうえで、バーチャルリアリティを用いた運動学習の支援について、現状の考えを述べる。

©一般社団法人 日本体育・スポーツ・健康学会

テーマ別シンポジウム | スポーツ文化研究部会：【課題B】人々の生活に根ざした多様なスポーツ文化をいかに醸成していくか

2023年8月31日(木) 10:10 ~ 12:10 | RY303 良心館３階ＲＹ３０３番教室

## スポーツ文化研究部会【課題B】テーマ別シンポジウム／「多様性」を実践するとは―その理想と難しさの狭間で―

コーディネーター：周東 和好（上越教育大学）、山口 理恵子（城西大学）

本部会では、「人びとの生活に根ざした多様なスポーツ文化をいかに醸成してゆくか」を上位課題として、1年目は体育学に潜む暴力性に焦点をあて、既存の学問のパラダイムや制度設計に存する課題を省察し、2年目はパラスポーツの実践を手がかりにしつつ、スポーツにおける／をとおした「多様性と調和」がいかにして可能になるのかについて議論した。集大成となる今年度は、「多様性」を実践することの理念と困難さについて議論し，多様なスポーツ文化を醸成するための課題や指針を提示・共有することを目的としている。特にシンポジウムでは、社会運動や学校文化、行政の現場における「多様性」の実践によってもたらされる変化を確認するとともに、その実践の具体的な課題を明らかにすることで、既存の価値や行動への問い直しの機会につながることを期待している。

[スポーツ文化-SB-1] LGBTQ＋の活動から見る多様性の実践とは

*杉山 文野[1] (1. 株式会社ニューキャンバス)

---

[スポーツ文化-SB-2] 市民ランニングによる多様性の実践

*山西 哲郎[1] (1. 群馬大学名誉教授)

---

[スポーツ文化-SB-3] 体育授業において男女が共に学ぶこと

*近藤 智靖[1] (1. 日本体育大学)

テーマ別シンポジウム | スポーツ文化研究部会 | 【課題B】人々の生活に根ざした多様なスポーツ文化をいかに醸成していくか

# スポーツ文化研究部会【課題 B】テーマ別シンポジウム／「多様性」を実践するとはーその理想と難しさの狭間でー

コーディネーター：周東 和好（上越教育大学）、山口 理恵子（城西大学）
2023年8月31日(木) 10:10 ～ 12:10  RY303 (良心館３階ＲＹ３０３番教室)
本部会では、「人びとの生活に根ざした多様なスポーツ文化をいかに醸成してゆくか」を上位課題として、1年目は体育学に潜む暴力性に焦点をあて、既存の学問のパラダイムや制度設計に存する課題を省察し、2年目はパラスポーツの実践を手がかりにしつつ、スポーツにおける／をとおした「多様性と調和」がいかにして可能になるのかについて議論した。集大成となる今年度は、「多様性」を実践することの理念と困難さについて議論し，多様なスポーツ文化を醸成するための課題や指針を提示・共有することを目的としている。特にシンポジウムでは、社会運動や学校文化、行政の現場における「多様性」の実践によってもたらされる変化を確認するとともに、その実践の具体的な課題を明らかにすることで、既存の価値や行動への問い直しの機会につながることを期待している。

## [スポーツ文化-SB-1]LGBTQ＋の活動から見る多様性の実践とは

*杉山 文野[1] (1. 株式会社ニューキャンバス)
＜演者略歴＞
1981年東京都生まれ。フェンシング元女子日本代表。
NP法人東京レインボープライド共同代表理事を務めながら、全国各地でLGBTQに関する啓発活動を行う。2021年よりJOC並びに日本フェンシング協会の理事も兼務。著書に「元女子高生、パパになる」（文藝春秋）など。

「多様性が大事」と言葉で言うのは簡単であるが、多様な人々の多様な意見は多様すぎてまとまらない。また「マイノリティの意見を大切に」と言いながら多数決で決めるわけにもいかず、多様性社会推進における意思決定は非常に困難である。そのような中で、性的少数者の権利獲得のための人権啓発イベントであり、多様性の祭典である「東京レインボープライド」はこの10年で急成長を遂げた。新宿二丁目の LGBTQ＋タウンでお店お営むママや全国各地の LGBTQ＋当事者から、一部上場企業、各国大使館や国会議員などを幅広く巻き込み、2012年に5000人だった参加者は2023年には24万人を超えアジア最大級となり、 LGBTQ＋の認知拡大に大きく貢献している。本シンポジウムでは、多様な立場や意見を取り入れながらひとつのイベントに集約する過程において、どのような課題と向き合い実践してきたかを紹介する。また、 NPO法人東京レインボープライドがコンソーシアムメンバーを務める「プライドハウス東京」プロジェクトにも触れることで、 LGBTQ＋とスポーツが直面する課題を共有し、社会×スポーツ×多様性の議論を深めたい。

©一般社団法人 日本体育・スポーツ・健康学会

テーマ別シンポジウム | スポーツ文化研究部会 | 【課題B】人々の生活に根ざした多様なスポーツ文化をいかに醸成していくか

# スポーツ文化研究部会【課題 B】テーマ別シンポジウム／「多様性」を実践するとはーその理想と難しさの狭間でー

コーディネーター：周東 和好（上越教育大学）、山口 理恵子（城西大学）

2023年8月31日(木) 10:10 ～ 12:10  RY303 (良心館３階ＲＹ３０３番教室)

本部会では、「人びとの生活に根ざした多様なスポーツ文化をいかに醸成してゆくか」を上位課題として、1年目は体育学に潜む暴力性に焦点をあて、既存の学問のパラダイムや制度設計に存する課題を省察し、2年目はパラスポーツの実践を手がかりにしつつ、スポーツにおける／をとおした「多様性と調和」がいかにして可能になるのかについて議論した。集大成となる今年度は、「多様性」を実践することの理念と困難さについて議論し，多様なスポーツ文化を醸成するための課題や指針を提示・共有することを目的としている。特にシンポジウムでは、社会運動や学校文化、行政の現場における「多様性」の実践によってもたらされる変化を確認するとともに、その実践の具体的な課題を明らかにすることで、既存の価値や行動への問い直しの機会につながることを期待している。

## [スポーツ文化-SB-2]市民ランニングによる多様性の実践

*山西 哲郎[1] (1. 群馬大学名誉教授)

＜演者略歴＞

昭和43年3月　東京教育大学大学院　体育学研究科　修士課程修了

昭和43年4月　東京教育大学　体育学部　助手

平成５年４月　群馬大学　教育学部　教授

平成11年　日本体育学会　会長

1970年代の市民スポーツ、特に、ランニングは中高年の市民によって生活化され生涯スポーツの主たる種目になって今日まで至っている。それは前回の本シンポジウムの「身体・組織・支援の観点から」と合わせて検討すれば十分に理解できる。

市民によるランニングの普及は、欧米を中心に運動不足対策として科学的に有酸素運動としてのジョギングが認められたからである。そこで、障害者にもラン・ウオークが適した運動として実践され、特別支援学校の生徒にとっても身体的にも心理的にも同様である。

75年にホノルルマラソンは心臓病のリハビリで回復した患者のための大会を年令は11歳以上、42.195㎞を制限タイムは問わない条件で始めた。そこで、学校生活のなかで健康と楽しみつくりを日常化して、その目標として高等部の修学旅行としてこの大会に参加することとした。各生徒に伴走者をつけ、走と歩の組み合わせを繰り返す技術を身につけ、全員がゴールを目指すことにある。それには、長時間わたって継続する心身の困難を、走る楽しさをもって、参加者と共有できる感性を持てるように努めた。

障害が社会的不利にならないようにする、それには能力不足の改善と社会的条件を改善することを前提にして、従来、創り上げてきたランニング文化を全うできるのである。

©一般社団法人 日本体育・スポーツ・健康学会

テーマ別シンポジウム | スポーツ文化研究部会 | 【課題B】人々の生活に根ざした多様なスポーツ文化をいかに醸成していくか

# スポーツ文化研究部会【課題 B】テーマ別シンポジウム／「多様性」を実践するとはーその理想と難しさの狭間でー

コーディネーター：周東 和好（上越教育大学）、山口 理恵子（城西大学）

2023年8月31日(木) 10:10 ～ 12:10 RY303 (良心館３階ＲＹ３０３番教室)

本部会では、「人びとの生活に根ざした多様なスポーツ文化をいかに醸成してゆくか」を上位課題として、1年目は体育学に潜む暴力性に焦点をあて、既存の学問のパラダイムや制度設計に存する課題を省察し、2年目はパラスポーツの実践を手がかりにしつつ、スポーツにおける／をとおした「多様性と調和」がいかにして可能になるのかについて議論した。集大成となる今年度は、「多様性」を実践することの理念と困難さについて議論し，多様なスポーツ文化を醸成するための課題や指針を提示・共有することを目的としている。特にシンポジウムでは、社会運動や学校文化、行政の現場における「多様性」の実践によってもたらされる変化を確認するとともに、その実践の具体的な課題を明らかにすることで、既存の価値や行動への問い直しの機会につながることを期待している。

# [スポーツ文化-SB-3]体育授業において男女が共に学ぶこと

*近藤 智靖[1] (1. 日本体育大学)

＜演者略歴＞

日本体育大学児童スポーツ教育学部教授。日本スポーツ教育学会理事長。（公財）日本学校体育研究連合会理事。筑波大学大学院人間総合科学研究科体育科学専攻博士課程修了 博士（体育科学）。白鴎大学を経て現職。専門は体育科教育学、スポーツ教育学。

現行の中学校学習指導要領解説保健体育編では、「体力や技能の程度及び性別の違い等にかかわらず、仲間とともに学ぶ体験は、生涯にわたる豊かなスポーツライフの実現に向けた重要な学習の機会であることから、原則として男女共習で学習を行うことが求められる」（文部科学省，2018）といった記載があり、男女が同じ場で共に学ぶことを強く推奨している。こうした施策の背景には、共生社会の実現やジェンダーの問題等の現代的な課題がある。しかし、長年、学校現場で男女別習を展開してきた保健体育教師たちの間には、この施策に対する賛否が見られており、批判的な声も少なくない。男女が共に学ぶことについては、その意義を理解しつつも、体力や運動能力の差異、、安全性、動機づけ等の生徒の資質・能力の視点から批判的な見解を持つ教師も多い。また、生徒の男女比率や教師側の指導の不慣れ等の組織・運営上の視点、さらには、教師自身が男女共習の授業経験を生徒としてしてきたかなど、教師の経験の視点もあり、様々な議論が展開されている。

　こうした論議を踏まえ、今回のシンポジウムでは、以下の三つの話題に触れたいと考えている。

一つ目は、学びの保証の視点である。男女が共に学ぶことを想定した場合、男女を別習とするのか共習とするのか、といった組織の問題のみならず、生徒にとってどのような学びをもたらすか、個々の生徒の学びはどう保証されるものか、という視点からも議論が必要であると考える。その際、包摂性（ Inclusion）、公正性(Equity)という視点も踏まえて検討をしていく。二つ目は、我が国の体育授業におけるジェンダー問題について OECDが発行した報告書の内容について触れる。三つ目は、可能であれば所属先大学の授業の取り組みについて触れる。

©一般社団法人 日本体育・スポーツ・健康学会

テーマ別シンポジウム | 生涯スポーツ研究部会：【課題B】生涯スポーツは・人・地域社会・産業といかに関連するか

2023年8月31日(木) 10:10 ~ 12:10 | RY305 良心館３階ＲＹ３０５番教室

## 生涯スポーツ研究部会【課題B】テーマ別シンポジウム／社会の成熟と生き方、そしてWell-Being―産業・健康・文化―

コーディネーター：林 洋輔（大阪教育大学）

新型コロナウイルスの蔓延および解決策の模索において、私たちは「ウエル・ビーイング Well-Being」を鍵語として討議を重ねた。スポーツ産業の興隆と人々がよく生きることの実質としての Well-Being の両立は、いかにして可能か。また体育ならびにスポーツにおける Well-Being の実現を企図して子どもたちの福祉に焦点化した議論は、いかなる稔りを私たちにもたらしたのか。こうした問いをめぐる討議の成果として、最終年度の本シンポジウムにて次の三つの問いを興す。

　第一に、体育学はスポーツをはじめ身体活動を伴った「健康で文化的な生活」の実質をどう捉えるのか。第二に、いわば「動けるからだ」としての人間の身体はどのような軌跡を辿って育ち、栄え、また衰えるのか。そして第三に、「からだ」が育ち行くために欠かし得ぬ産業活動とそれを支える科学研究は、福祉ある生活としての Well-Being にどのような恩恵を供するのか。

　体育学の研究成果により人はどのような暮らしを営み、またいかなる科学に支えられつつ人はその生涯を送るのか。本シンポジウムが講演そして共同討議を通じて目指すのは、体育学の研究成果に裏付けられた Well-Being の実質解明、言うなら「体育とスポーツある善き生き方」の描き出しである。

[生涯スポーツ-SB-1] 「ポスト・スポーツ」のパースペクティヴから見る“ヒューマニティ（人間性）”とWell-Being

*山本 敦久[1] (1. 成城大学)

---

[生涯スポーツ-SB-2] 地域高齢者を対象とした小規模トレーニング施設「十坪ジム」事業の発想、展開、隆盛、衰退の経緯

*小林 寛道[1] (1. 静岡産業大学)

---

[生涯スポーツ-SB-3] バーチャルスポーツは体育・Taiikuになりうるか

*萩原 悟一[1] (1. 九州産業大学)

テーマ別シンポジウム | 生涯スポーツ研究部会 | 【課題B】生涯スポーツは・人・地域社会・産業といかに関連するか

# 生涯スポーツ研究部会【課題 B】テーマ別シンポジウム／社会の成熟と生き方、そして Well-Being一産業・健康・文化一

コーディネーター：林 洋輔（大阪教育大学）

2023年8月31日(木) 10:10 ～ 12:10 RY305 (良心館３階ＲＹ３０５番教室)

新型コロナウイルスの蔓延および解決策の模索において、私たちは「ウエル・ビーイング Well-Being」を鍵語として討議を重ねた。スポーツ産業の興隆と人々がよく生きることの実質としての Well-Being の両立は、いかにして可能か。また体育ならびにスポーツにおける Well-Being の実現を企図して子どもたちの福祉に焦点化した議論は、いかなる稔りを私たちにもたらしたのか。こうした問いをめぐる討議の成果として、最終年度の本シンポジウムにて次の三つの問いを興す。

第一に、体育学はスポーツをはじめ身体活動を伴った「健康で文化的な生活」の実質をどう捉えるのか。第二に、いわば「動けるからだ」としての人間の身体はどのような軌跡を辿って育ち、栄え、また衰えるのか。そして第三に、「からだ」が育ち行くために欠かし得ぬ産業活動とそれを支える科学研究は、福祉ある生活としての Well-Being にどのような恩恵を供するのか。

体育学の研究成果により人はどのような暮らしを営み、またいかなる科学に支えられつつ人はその生涯を送るのか。本シンポジウムが講演そして共同討議を通じて目指すのは、体育学の研究成果に裏付けられた Well-Being の実質解明、言うなら「体育とスポーツある善き生き方」の描き出しである。

# [生涯スポーツ-SB-1]「ポスト・スポーツ」のパースペクティヴから見る“ヒューマニティ（人間性）”と Well-Being

*山本 敦久[1] (1. 成城大学)

＜演者略歴＞

上智大学文学部保健体育研究室を経て、2012年より成城大学に勤務。専門は、スポーツ社会学、カルチュラル・スタディーズ学会。2022年よりカルチュラル・スタディーズ学会幹事・大会実行委員長。

近年、スポーツは二つの局面において近代の規範的な「人間」のあり方に対して鋭い問いを提起している。この問いに与えられた概念を「ポスト・スポーツ」と呼びたい。近年、多くのアスリートたちが、 BLM（ブラック・ライヴズ・マター）運動や＃ MeToo、フェミニズム運動の世界的なうねりを引き起こす重要な存在となっている。彼ら／彼女らの動きは、西洋白人男性中心主義やジェンダーの二元性、ヘテロセクシュアリティ、そして健常さの規範を理想的な身体としながらグローバルに君臨してきた近代スポーツへの厳しい異議申し立てと言えるだろう。 SNSのような新しいメディア環境に繋がったアスリートたちが、既存の社会における支配的な社会関係を組み替える「ソーシャルなアスリート」として登場している。また、近代スポーツは自然／文化の二元論を維持しながら「人間中心主義」を謳ってきた。しかしポスト・スポーツの時代において、アスリートたちは新しいテクノロジー（機械、非人間）を部分とする身体を形成している。スポーツの身体は、もはや「生身」とその文化的加工・規律訓練を意味するのではなく、機械（モノ、テクノロジー）や情報（データ）や自然環境を組み込んでいる。このような身体のリアセンブリーは、近代の理想的な人間性を越えて、多様な差異を多様なままに接続／非接続する。この視座からスポーツや体育が生み出す“ Well-Being”について考えていきたい。

©一般社団法人 日本体育・スポーツ・健康学会

テーマ別シンポジウム | 生涯スポーツ研究部会 | 【課題B】生涯スポーツは・人・地域社会・産業といかに関連するか

# 生涯スポーツ研究部会【課題 B】テーマ別シンポジウム／社会の成熟と生き方、そして Well-Being一産業・健康・文化一

コーディネーター：林 洋輔（大阪教育大学）

2023年8月31日(木) 10:10 ～ 12:10 RY305 (良心館３階ＲＹ３０５番教室)

新型コロナウイルスの蔓延および解決策の模索において、私たちは「ウエル・ビーイング Well-Being」を鍵語として討議を重ねた。スポーツ産業の興隆と人々がよく生きることの実質としての Well-Being の両立は、いかにして可能か。また体育ならびにスポーツにおける Well-Being の実現を企図して子どもたちの福祉に焦点化した議論は、いかなる稔りを私たちにもたらしたのか。こうした問いをめぐる討議の成果として、最終年度の本シンポジウムにて次の三つの問いを興す。

第一に、体育学はスポーツをはじめ身体活動を伴った「健康で文化的な生活」の実質をどう捉えるのか。第二に、いわば「動けるからだ」としての人間の身体はどのような軌跡を辿って育ち、栄え、また衰えるのか。そして第三に、「からだ」が育ち行くために欠かし得ぬ産業活動とそれを支える科学研究は、福祉ある生活としての Well-Being にどのような恩恵を供するのか。

体育学の研究成果により人はどのような暮らしを営み、またいかなる科学に支えられつつ人はその生涯を送るのか。本シンポジウムが講演そして共同討議を通じて目指すのは、体育学の研究成果に裏付けられた Well-Being の実質解明、言うなら「体育とスポーツある善き生き方」の描き出しである。

# [生涯スポーツ-SB-2]地域高齢者を対象とした小規模トレーニング施設「十坪ジム」事業の発想、展開、隆盛、衰退の経緯

*小林 寛道[1] (1. 静岡産業大学)

＜演者略歴＞

1970年東京大学大学院教育学研究科修了（教育学博士）、’70～名古屋大学、 ‘86～04東京大学大学院総合文化研究科教授、’04～14東京大学特任教授　日本大学特任教授、静岡産業大学客員教授、2023年現在　静岡産業大学特別教授　スポーツ医科学センター長

世界一流スポーツ選手の走技術の基礎原理を体験的に習得する「足が速くなるマシン」（スプリントトレーニングマシン）を１９９５年に開発した。このマシンに含まれる要素を発展させ「船漕ぎマシン」「車軸移動式パワーバイク」など２０種類の「おもりの負荷を用いないトレーニングマシン」を開発し「認知動作型トレーニングマシン」と名付けた。筋肉痛が起きにくい、力を抜いて動作する、体幹深部筋を無理なく強化する、脳の活性化をもたらす、歩行動作や走動が改善する、などのことから、地域高齢者を主対象とする小規模トレーニングジム（十坪ジム）を徒歩１０～３０分圏内に多数つくり、地域の活性化を促すとともに高齢社会の健康増進事業を2004年から展開した。 NPO法人を立ち上げ、指導者は地域の中高齢者を養成し、最高齢指導者は91歳であった。最盛期には、柏市内に10店舗、会員数1650名となったが、コロナ禍により、現在は会員数500名。事業承継により、柏市内に5店舗、 NPOは解散した。理想とした理念、発展と隆興、衰退、課題などを18年間の事業経営の経緯を踏まえて発表する。現在の会員の平均年齢は７０歳代後半、８０歳代は多数。

©一般社団法人 日本体育・スポーツ・健康学会

テーマ別シンポジウム | 生涯スポーツ研究部会 | 【課題B】生涯スポーツは・人・地域社会・産業といかに関連するか

# 生涯スポーツ研究部会【課題 B】テーマ別シンポジウム／社会の成熟と生き方、そして Well-Being一産業・健康・文化一

コーディネーター：林 洋輔（大阪教育大学）

2023年8月31日(木) 10:10 ～ 12:10 RY305 (良心館３階ＲＹ３０５番教室)

新型コロナウイルスの蔓延および解決策の模索において、私たちは「ウエル・ビーイング Well-Being」を鍵語として討議を重ねた。スポーツ産業の興隆と人々がよく生きることの実質としての Well-Being の両立は、いかにして可能か。また体育ならびにスポーツにおける Well-Being の実現を企図して子どもたちの福祉に焦点化した議論は、いかなる稔りを私たちにもたらしたのか。こうした問いをめぐる討議の成果として、最終年度の本シンポジウムにて次の三つの問いを興す。

第一に、体育学はスポーツをはじめ身体活動を伴った「健康で文化的な生活」の実質をどう捉えるのか。第二に、いわば「動けるからだ」としての人間の身体はどのような軌跡を辿って育ち、栄え、また衰えるのか。そして第三に、「からだ」が育ち行くために欠かし得ぬ産業活動とそれを支える科学研究は、福祉ある生活としての Well-Being にどのような恩恵を供するのか。

体育学の研究成果により人はどのような暮らしを営み、またいかなる科学に支えられつつ人はその生涯を送るのか。本シンポジウムが講演そして共同討議を通じて目指すのは、体育学の研究成果に裏付けられた Well-Being の実質解明、言うなら「体育とスポーツある善き生き方」の描き出しである。

# [生涯スポーツ-SB-3]バーチャルスポーツは体育・ Taiikuになりうるか

*萩原 悟一[1] (1. 九州産業大学)

＜演者略歴＞

米国アーカンソー州立大学大学院修了（M.S. Sports Administration）、九州工業大学大学院生命体工学研究科脳情報専攻短縮修了（博士（学術））。国立大学法人鹿屋体育大学大学院准教授を経て現職。専門はスポーツマネジメント。その他、株式会社リトルソフトウェアCAOを務めるほか、スポーツ庁長官賞などの受賞歴。

「 Taiikuとは人間の幸福における身体的ならびに社会的基盤づくりに貢献する身体運動の総称（林，2020）」であるならば、バーチャルスポーツは体育・ Taiikuになりうるか。体育・スポーツ科学分野では、バーチャルスポーツの効果を懐疑的に見ている者が多いのが現状ではないだろうか。バーチャルスポーツの研究を進める際に世界的に研究のキーワードとなっているのがエクサーゲームである。エクサーゲームは、フィットネス、教育、健康の分野で新たな世界のトレンドとなっているバーチャルスポーツの一種だとされている。エクサーゲームは、一般的に体の動きを必要とするデジタルゲームと認識され、アクティブなゲーム体験が身体運動の一形態としてとらえられている。エクサーゲームが普及してきたことで、その有用性が体育・スポーツ科学分野でも主張されるようになってきている。例えば、 American College of Sports Medicineでは、エクサーゲームが「子供や青少年の身体活動と健康を促進する“フィットネスの未来”」と紹介されている（ Benzing &Schmidt, 2018）。

©一般社団法人 日本体育・スポーツ・健康学会

テーマ別シンポジウム | 競技スポーツ研究部会：【課題C】ハイパフォーマンススポーツ（トップレベルの競技スポーツ）におけるトレーニングをいかに効果的に行うか

2023年8月31日(木) 14:40 ~ 16:40 | RYB1 良心館地下１階ＲＹＢ１番教室

## 競技スポーツ研究部会【課題C】テーマ別シンポジウム／ユース年代アスリートの育成システムとハイパフォーマンススポーツ

コーディネーター：越田 専太郎（了徳寺大学）、東浦 拓郎（亜細亜大学）

我が国で益々進む若者層人口の減少を鑑みると、ハイパフォーマンスアスリート育成のための長期的なトレーニングシステムの構築は、今後さらに発展が求められる研究分野といえる。アスリートを長期に渡って育成するプロセスでは、人間が辿る一連の発育発達の過程を理解した上で、各段階に応じたトレーニングがプログラミングされ、適切に実施される必要がある。さらにユース年代アスリートでは、発育発達段階の個人差に対応し、スポーツ外傷・障害や燃えつき症候群のリスクを最小限にしながら、潜在能力を最大に引き出すためのシステム実装が望まれる。

そこで、本シンポジウムでは、キッズ・ユース年代の育成に関わる研究者/実践者3名を招き、ユース年代アスリートの最適なトレーニングシステムとハイパフォーマンススポーツについて議論する。本シンポジウムを通して、発育発達段階に応じたトレーニングプログラムの原理・原則および現在のハイパフォーマンスアスリート育成システムの問題点を参加者と共有する。また、我が国の社会構造や文化的背景、各スポーツ競技の現状を考慮した具体的かつ現実的な長期育成システム構築および実装に向けて、研究者および実践者が取り組むべき課題を整理したい。

### [競技スポーツ-SC-1] 原理原則にもとづくユース年代のフィジカル・トレーニング

*広瀬 統一[1] (1. 早稲田大学スポーツ科学学術院)

### [競技スポーツ-SC-2] いわきFCアカデミーにおける育成システム

*小俣 よしのぶ[1,2] (1. ㈱いわきスポーツクラブ、2. 筑波大学スポーツ環境デザインR&Dプロジェクト室)

### [競技スポーツ-SC-3] 日本の競技柔道におけるユース年代の育成フレームワーク

*石井 孝法[1] (1. 了徳寺大学)

テーマ別シンポジウム | 競技スポーツ研究部会 | 【課題C】ハイパフォーマンススポーツ（トップレベルの競技スポーツ）におけるトレーニングをいかに効果的に行うか

# 競技スポーツ研究部会【課題 C】テーマ別シンポジウム／ユース年代アスリートの育成システムとハイパフォーマンススポーツ

コーディネーター：越田 専太郎（了徳寺大学）、東浦 拓郎（亜細亜大学）

2023年8月31日(木) 14:40 ～ 16:40  RYB1 (良心館地下１階ＲＹＢ１番教室)

我が国で益々進む若者層人口の減少を鑑みると、ハイパフォーマンスアスリート育成のための長期的なトレーニングシステムの構築は、今後さらに発展が求められる研究分野といえる。アスリートを長期に渡って育成するプロセスでは、人間が辿る一連の発育発達の過程を理解した上で、各段階に応じたトレーニングがプログラミングされ、適切に実施される必要がある。さらにユース年代アスリートでは、発育発達段階の個人差に対応し、スポーツ外傷・障害や燃えつき症候群のリスクを最小限にしながら、潜在能力を最大に引き出すためのシステム実装が望まれる。

　そこで、本シンポジウムでは、キッズ・ユース年代の育成に関わる研究者/実践者3名を招き、ユース年代アスリートの最適なトレーニングシステムとハイパフォーマンススポーツについて議論する。本シンポジウムを通して、発育発達段階に応じたトレーニングプログラムの原理・原則および現在のハイパフォーマンスアスリート育成システムの問題点を参加者と共有する。また、我が国の社会構造や文化的背景、各スポーツ競技の現状を考慮した具体的かつ現実的な長期育成システム構築および実装に向けて、研究者および実践者が取り組むべき課題を整理したい。

# [競技スポーツ-SC-1]原理原則にもとづくユース年代のフィジカル・トレーニング

*広瀬 統一[1] (1. 早稲田大学スポーツ科学学術院)

＜演者略歴＞

2006-現在　早稲田大学スポーツ科学学術院

2008-2021　サッカー女子日本代表フィジカルコーチ

1997-2006　東京ヴェルディユースアカデミーフィジカルコーチ

フィジカル・トレーニングは Rouxの法則に依拠したトレーニングの原理・原則や、運動制御と運動学習の原則的な考え方にもとづき計画および実践される。特に成長期には身体内環境の変化に加えて、生物学的な成長段階によって運動刺激に対する生理的応答の差異も見られる。「個別性の原則」の観点からも、これらの事象を踏まえたうえでフィジカル・トレーニングを計画し、実践することが望ましい。また、指導者（大人）が子ども達の運動能力を評価する際には、生物学的成熟度の差異が各種運動能力に影響することも念頭におく必要がある。

©一般社団法人 日本体育・スポーツ・健康学会

テーマ別シンポジウム | 競技スポーツ研究部会 | 【課題C】ハイパフォーマンススポーツ（トップレベルの競技スポーツ）におけるトレーニングをいかに効果的に行うか

# 競技スポーツ研究部会【課題 C】テーマ別シンポジウム／ユース年代アスリートの育成システムとハイパフォーマンススポーツ

コーディネーター：越田 専太郎（了徳寺大学）、東浦 拓郎（亜細亜大学）
2023年8月31日(木) 14:40 ～ 16:40  RYB1 (良心館地下１階ＲＹＢ１番教室)
我が国で益々進む若者層人口の減少を鑑みると、ハイパフォーマンスアスリート育成のための長期的なトレーニングシステムの構築は、今後さらに発展が求められる研究分野といえる。アスリートを長期に渡って育成するプロセスでは、人間が辿る一連の発育発達の過程を理解した上で、各段階に応じたトレーニングがプログラミングされ、適切に実施される必要がある。さらにユース年代アスリートでは、発育発達段階の個人差に対応し、スポーツ外傷・障害や燃えつき症候群のリスクを最小限にしながら、潜在能力を最大に引き出すためのシステム実装が望まれる。
　そこで、本シンポジウムでは、キッズ・ユース年代の育成に関わる研究者/実践者3名を招き、ユース年代アスリートの最適なトレーニングシステムとハイパフォーマンススポーツについて議論する。本シンポジウムを通して、発育発達段階に応じたトレーニングプログラムの原理・原則および現在のハイパフォーマンスアスリート育成システムの問題点を参加者と共有する。また、我が国の社会構造や文化的背景、各スポーツ競技の現状を考慮した具体的かつ現実的な長期育成システム構築および実装に向けて、研究者および実践者が取り組むべき課題を整理したい。

# [競技スポーツ-SC-2]いわき FCアカデミーにおける育成システム

*小俣 よしのぶ[1,2] (1. ㈱いわきスポーツクラブ、2. 筑波大学スポーツ環境デザインR&Dプロジェクト室)
＜演者略歴＞
筑波大学大学院体育研究科修了（野球コーチング論研究室）体育学修士
フィジカルトレーニング指導職を経て現在に至る。
東独の一般トレーニング学など東欧の強化育成理論を中心に研究と実践を行っている。

Jリーグは今年で30年目を迎えた。設立目的のひとつに日本サッカーの国際競技力向上があり、その施策の一環としてリーグ所属全クラブに育成組織保有を義務付けた。プロスポーツリーグによるタレント発掘育成は当時においては画期的で、その後、他競技の強化育成方策にも影響を及ぼしたと言っても過言ではない。
しかし、30年を経てJクラブを取り巻く社会環境が変化し、強化育成も方向転換の必要性に迫られる状況にある。例えば、人口減少と少子化によるタレントプール減少、地域間格差や地方経済の低迷がクラブ経営に影響を及ぼし強化育成への投資に波及している。これらのマクロ社会要因は、特に地方に本拠地を置くクラブにとって強化育成の阻害要因となっている。
　㈱いわきスポーツクラブが運営するいわき FC(現 J2)は、2007年に育成組織を開設した。歴史の浅いクラブ(2022年 J3昇格)、いわき市の社会問題、加えて東日本大震災の影響もあり、他のクラブとは異なるマクロ要因の中での仕組み作りが求められた。本発表では、いわきスポーツクラブが進める地域社会の実情に則した育成の仕組み作りを事例に基づき、さらに参考とした先行研究を交え紹介する。

©一般社団法人 日本体育・スポーツ・健康学会

テーマ別シンポジウム | 競技スポーツ研究部会 | 【課題C】ハイパフォーマンススポーツ（トップレベルの競技スポーツ）におけるトレーニングをいかに効果的に行うか

# 競技スポーツ研究部会【課題 C】テーマ別シンポジウム／ユース年代アスリートの育成システムとハイパフォーマンススポーツ

コーディネーター：越田 専太郎（了徳寺大学）、東浦 拓郎（亜細亜大学）

2023年8月31日(木) 14:40 ～ 16:40  RYB1 (良心館地下１階ＲＹＢ１番教室)

我が国で益々進む若者層人口の減少を鑑みると、ハイパフォーマンスアスリート育成のための長期的なトレーニングシステムの構築は、今後さらに発展が求められる研究分野といえる。アスリートを長期に渡って育成するプロセスでは、人間が辿る一連の発育発達の過程を理解した上で、各段階に応じたトレーニングがプログラミングされ、適切に実施される必要がある。さらにユース年代アスリートでは、発育発達段階の個人差に対応し、スポーツ外傷・障害や燃えつき症候群のリスクを最小限にしながら、潜在能力を最大に引き出すためのシステム実装が望まれる。

　そこで、本シンポジウムでは、キッズ・ユース年代の育成に関わる研究者/実践者3名を招き、ユース年代アスリートの最適なトレーニングシステムとハイパフォーマンススポーツについて議論する。本シンポジウムを通して、発育発達段階に応じたトレーニングプログラムの原理・原則および現在のハイパフォーマンスアスリート育成システムの問題点を参加者と共有する。また、我が国の社会構造や文化的背景、各スポーツ競技の現状を考慮した具体的かつ現実的な長期育成システム構築および実装に向けて、研究者および実践者が取り組むべき課題を整理したい。

# [競技スポーツ-SC-3]日本の競技柔道におけるユース年代の育成フレームワーク

*石井 孝法[1] (1. 了徳寺大学)

＜演者略歴＞

了徳寺大学教授。NPOスポーツコーチングアカデミア代表理事。

全日本柔道連盟科学研究部として2005年から柔道ナショナルチームをサポートしている。

専門は、コーチング、バイオメカニクス、情報分析．元JOC専任情報科学スタッフ、元全日本空手道連盟サポートゼネラルマネージャー。

日本の国際競技力の変化は、オリンピックや世界選手権大会のメダル数の変遷から大まかに読み取ることができる。柔道競技においては、男女で国際競技力の変化が大きく異なる。オリンピック競技大会に採用された1964年以降、競技柔道の国際普及が急激に進み。世界の国際競技力の水準も非常に高くなってきた。これに合わせて、選手養成制度、タレント発掘・育成システムが形になってきたソ連やドイツが台頭してきたことで、男子は1970年代後半から1980年代にかけて「日本が勝って当たり前」ではなくなり、2000年代が最も厳しい状況であった。女子は、世界選手権大会が始まった1980年以降でみると、1980年代が最も厳しく、2010年代が最も成果をあげており、国際競技力を向上させてきていることがわかる。スポーツ科学やテクノロジーの発展で、国際的に競技の内容は専門化・精緻化され、競技水準の高度化が進んでいるが、日本柔道は2013年以降「世界一」であり続けている。それはなぜか。ここに、ユース年代の育成が強く関係していると考えている。

マクロの視点での調査・研究が少なく、私見が含まれるが、日本におけるハイパフォーマンスアスリート育成の視点そのものの問題点をあげて対話したい。

©一般社団法人 日本体育・スポーツ・健康学会

テーマ別シンポジウム | 学校保健体育研究部会：【課題C】体育・スポーツ健康科学は学校保健体育の進展にいかに貢献できるか

2023年8月31日(木) 14:40 ~ 16:40 | RY202 良心館２階ＲＹ２０２番教室

## 学校保健体育研究部会【課題C】テーマ別シンポジウム／科学的エビデンスからみた保健体育のカリキュラムと学習指導ーこれからの保健体育が目指す教育と研究のかたちー

コーディネーター：柏木 悠（専修大学）
指定討論者：末永 祐介（熊本大学）

本シンポジウムでは，初年度に「学習指導要領の内容と保健体育授業の実状との乖離」，2年目には「次世代学習指導要領作成に向け必要なエビデンスとは（多角的領域からのエビデンスの確認）」，をテーマに検討を進めてきた．特に昨年のシンポジウムでは，新しい意味での「身体」を柱とした子どもたちをめぐる教育活動の必要性が示唆された．その上で3年目は，多角的領域のエビデンスを踏まえたうえでの「これからの保健体育が目指す教育と研究のかたち」をテーマとして, まとめとなるシンポジウムを開催する．
　本シンポジウムでは，これからの保健体育の教育活動として，これまでの概念に捉われない新しいカタチについて議論を進めたい．

[学校保健体育-SC-1] アクティブ チャイルド プログラム（ACP）を用いた体育実践とその効果
準備運動の見直しで楽しさと基礎運動能力の向上を目指す

*春日 晃章[1] (1. 岐阜大学)

---

[学校保健体育-SC-2] 長距離走授業に「楽しさ」を埋め込む可能性と限界

*木島 章文[1] (1. 山梨大学)

---

[学校保健体育-SC-3] 生成系の人工知能時代における「身体」の再価値化と保健体育の大改革

*松田 恵示[1,2] (1. 立教大学、2. 東京学芸大学)

テーマ別シンポジウム | 学校保健体育研究部会 | 【課題C】体育・スポーツ健康科学は学校保健体育の進展にいかに貢献できるか

# 学校保健体育研究部会【課題 C】テーマ別シンポジウム／科学的エビデンスからみた保健体育のカリキュラムと学習指導ーこれからの保健体育が目指す教育と研究のかたちー

コーディネーター：柏木 悠（専修大学）
指定討論者：末永 祐介（熊本大学）
2023年8月31日(木) 14:40 ～ 16:40 RY202 (良心館２階ＲＹ２０２番教室)
本シンポジウムでは，初年度に「学習指導要領の内容と保健体育授業の実状との乖離」，2年目には「次世代学習指導要領作成に向け必要なエビデンスとは（多角的領域からのエビデンスの確認）」，をテーマに検討を進めてきた．特に昨年のシンポジウムでは，新しい意味での「身体」を柱とした子どもたちをめぐる教育活動の必要性が示唆された．その上で3年目は，多角的領域のエビデンスを踏まえたうえでの「これからの保健体育が目指す教育と研究のかたち」をテーマとして, まとめとなるシンポジウムを開催する．
本シンポジウムでは，これからの保健体育の教育活動として，これまでの概念に捉われない新しいカタチについて議論を進めたい．

# [学校保健体育-SC-1]アクティブ チャイルド プログラム（ ACP）を用いた体育実践とその効果

準備運動の見直しで楽しさと基礎運動能力の向上を目指す
*春日 晃章[1] (1. 岐阜大学)
＜演者略歴＞
金沢大学大学院教育学研究科修了後，岐阜聖徳学園大学短期大学部を経て，2007年より岐阜大学教育学部に勤務．博士（医学）．専門は発育発達学，測定評価学．学校法人春日学園の理事長も務め，4つの幼稚園・保育園の経営とJSPO-ACPを用いた保育や学校体育で使える運動プログラムの開発や普及，検証にも携わっている．

我が国の子どもの体力や運動能力は年々低下傾向を示し，コロナ禍においてさらに大きく低下するとともに，二極化傾向も示され，運動・スポーツへの興味なし群も増加している．社会状況の変化により放課後の身体活動が困難な現在において，体育実技の時間が唯一，皆が身体活動に従事できる時間と言っても過言ではない．しかし，楽しさを感じさせ，一定の身体活動量を確保するような体育が行われているのか，本当に生涯スポーツに繋がる体育なのか疑問である．もちろん，指導要領に沿って授業展開することが求められるため，教師の自由度も少ない．そこで，授業始めの準備運動に注目してみた．全国的に体育授業の準備運動としてランニング，徒手体操，単元に関わる動きなどがこれまで主流に実施されている．この部分の取り組みに JSPO-ACPを参考にした運動遊び要素や基礎運動能力向上要素を盛り込んだプログラムを用いながら体育を実践し，その効果を多角的に検証している．
　本シンポジウムでは，これまでの取り組みや効果検証の結果を示しながら，今の時代に合った体育授業のあり方について，また，今後の指導要領のあり方について論究したい．

©一般社団法人 日本体育・スポーツ・健康学会

テーマ別シンポジウム | 学校保健体育研究部会 | 【課題C】体育・スポーツ健康科学は学校保健体育の進展にいかに貢献できるか

# 学校保健体育研究部会【課題 C】テーマ別シンポジウム／科学的エビデンスからみた保健体育のカリキュラムと学習指導ーこれからの保健体育が目指す教育と研究のかたちー

コーディネーター：柏木 悠（専修大学）
指定討論者：末永 祐介（熊本大学）
2023年8月31日(木) 14:40 ～ 16:40 RY202 (良心館２階ＲＹ２０２番教室)
本シンポジウムでは，初年度に「学習指導要領の内容と保健体育授業の実状との乖離」，2年目には「次世代学習指導要領作成に向け必要なエビデンスとは（多角的領域からのエビデンスの確認）」，をテーマに検討を進めてきた．特に昨年のシンポジウムでは，新しい意味での「身体」を柱とした子どもたちをめぐる教育活動の必要性が示唆された．その上で3年目は，多角的領域のエビデンスを踏まえたうえでの「これからの保健体育が目指す教育と研究のかたち」をテーマとして, まとめとなるシンポジウムを開催する．
本シンポジウムでは，これからの保健体育の教育活動として，これまでの概念に捉われない新しいカタチについて議論を進めたい．

## [学校保健体育-SC-2]長距離走授業に「楽しさ」を埋め込む可能性と限界

*木島 章文[1] (1. 山梨大学)
＜演者略歴＞
筑波大学体育科学研究科を単位取得満期退学し，大阪体育大学・福山平成大学を経て，2011年より山梨大学教育学部に勤務．博士（体育科学）．所属する専門領域は体育心理学で主な研究興味は対人協応科学．最近の業績例はhttps://www.nature.com/articles/s41598-022-16703-4．左投げ・左打ち．

３年目を迎える応用部会の取り組みをまとめ，部会員が実際に取り組んだ研究・教育活動を示したい．その行程は以下の通りである．1）初年度のシンポジウムに提示された長距離走の授業の問題を取り上げ，そこに「主体的・対話的な深い学び」を誘発する機能を埋め込んだ授業例を示す．2）運動心理学の伝統的理論であるスキーマ理論に基づいてその教育効果を検証した結果を示す．3）同シンポジウムにて示される「楽しさを感じさせ，一定の身体活動量を確保するような体育（春日）」，「身体を柱とした教育活動を支えるスコープ（松田）」に内包される「楽しさ」を，授業に埋め込める可能性と限界を提案する．
　こうした活動の一例を示しながら，今後の教育・研究方針：本部会が掲げる「実践のエビデンス」の紡ぎ方に具体性をもたせることを目的として発表を行う．

©一般社団法人 日本体育・スポーツ・健康学会

テーマ別シンポジウム | 学校保健体育研究部会 | 【課題C】体育・スポーツ健康科学は学校保健体育の進展にいかに貢献できるか

# 学校保健体育研究部会【課題 C】テーマ別シンポジウム／科学的エビデンスからみた保健体育のカリキュラムと学習指導ーこれからの保健体育が目指す教育と研究のかたちー

コーディネーター：柏木 悠（専修大学）
指定討論者：末永 祐介（熊本大学）
2023年8月31日(木) 14:40 ～ 16:40 RY202 (良心館２階ＲＹ２０２番教室)

本シンポジウムでは，初年度に「学習指導要領の内容と保健体育授業の実状との乖離」，2年目には「次世代学習指導要領作成に向け必要なエビデンスとは（多角的領域からのエビデンスの確認）」，をテーマに検討を進めてきた．特に昨年のシンポジウムでは，新しい意味での「身体」を柱とした子どもたちをめぐる教育活動の必要性が示唆された．その上で3年目は，多角的領域のエビデンスを踏まえたうえでの「これからの保健体育が目指す教育と研究のかたち」をテーマとして, まとめとなるシンポジウムを開催する．
本シンポジウムでは，これからの保健体育の教育活動として，これまでの概念に捉われない新しいカタチについて議論を進めたい．

# [学校保健体育-SC-3]生成系の人工知能時代における「身体」の再価値化と保健体育の大改革

*松田 恵示[1,2] (1. 立教大学、2. 東京学芸大学)

＜演者略歴＞
現在，立教大学特任教授，東京学芸大学理事・副学長，日本OECD共同研究日本側代表者，東京都教育ビジョン第5次検討委員会委員．教育再生実行会議委員，中央教育審議会臨時委員などを歴任し，教育全体の政策策定に関わりつつ，体育，スポーツ，遊びについての実践と社会学的・文化論的研究も並行して行っている．

多角的領域のエビデンスを踏まえたこれまで2年間のシンポジウムは，生成系の人工知能が社会変革の引き金になろうとしている極めて変化の激しい現代社会において，新しい意味での「身体」を柱とした子どもたちをめぐる教育活動の必要性と実践レベルでの評価の問題が大きいことが示唆されている．

そこで，シンポジウムでの成果をもとに，これからの保健体育を「身体を楽しむこと」「身体を護り育てること」「身体を知り活用すること」の3つのスコープを設ける領域横断的な教育活動として，学会サイドから新しく再構築することを提案してみたい．また，現場，研究，政策が三位一体となって実践を作り出す営みへと保健体育を改革するとともに，それを支えその実践のエビデンスを支える研究(学会活動)の新しいカタチをシンポジウムで検討してみたい．

©一般社団法人 日本体育・スポーツ・健康学会

テーマ別シンポジウム | 健康福祉研究部会：【課題C】運動不足（不活動）に伴う心身機能の低下をいかに予防するか

2023年8月31日(木) 14:40 ~ 16:40 | RY301 良心館３階ＲＹ３０１番教室

## 健康福祉研究部会【課題C】テーマ別シンポジウム／基礎研究と実践（指導、支援）の橋渡しで心身機能の低下を予防する

コーディネーター：菅谷 美沙都（上武大学）、田中 愛（東京学芸大学）
指定討論者：大槻 毅（流通経済大学スポーツ健康科学部）

過去2年間のシンポジウムでは、研究者・教育者・職能団体の立場から、コロナ禍における健康づくりの現状と課題について講演と議論が行われた。特に昨年度は、貧富、孤立など、運動不足（不活動）には多様な誘因が存在し、個人や地域の実情を踏まえたリスク評価と支援が必要であることが指摘された。しかし、実践の場で個々の実情を正確に把握し、エビデンスに基づいて適切に支援することは容易でない。そのうえ、コロナ禍で急速に普及したオンライン・ツールは実情把握・支援の有効な選択肢となった一方で、オンラインならではの難しさも併せ持っており、「エビデンス」と「支援」の関係をより複雑にした。そのため、基礎研究と実践をつなぐ「橋渡し研究」の重要性は、ますます高まっていると言ってよい。そこで本年度は基礎研究、実践研究、両者をつなぐ橋渡し研究に携わる先生方に登壇を依頼した。研究と実践の両輪を回すエンジンとなることを目指し、基礎研究で検証された運動プログラムや用いられる運動効果の評価法などを実践で活かす方法、実践の場で必要とされる基礎研究などについて議論したい。

### [健康福祉-SC-1] 実践から見る橋渡しの景色

障害のある人を対象にした実践からの気づき

*岩沼 聡一朗[1] (1. 帝京科学大学教育人間科学部)

---

### [健康福祉-SC-2] 橋渡し研究に使えるチェックリスト“PAIREM”

*重松 良祐[1] (1. 中京大学スポーツ科学部)

---

### [健康福祉-SC-3] 健康づくりエビデンスの社会実装にある崖と壁

*高岡 敦史[1] (1. 岡山大学学術研究院教育学域)

テーマ別シンポジウム | 健康福祉研究部会 | 【課題C】運動不足（不活動）に伴う心身機能の低下をいかに予防するか

# 健康福祉研究部会【課題 C】テーマ別シンポジウム／基礎研究と実践（指導、支援）の橋渡しで心身機能の低下を予防する

コーディネーター：菅谷 美沙都（上武大学）、田中 愛（東京学芸大学）
指定討論者：大槻 毅（流通経済大学スポーツ健康科学部）
2023年8月31日(木) 14:40 ～ 16:40 RY301 (良心館３階ＲＹ３０１番教室)
過去2年間のシンポジウムでは、研究者・教育者・職能団体の立場から、コロナ禍における健康づくりの現状と課題について講演と議論が行われた。特に昨年度は、貧富、孤立など、運動不足（不活動）には多様な誘因が存在し、個人や地域の実情を踏まえたリスク評価と支援が必要であることが指摘された。しかし、実践の場で個々の実情を正確に把握し、エビデンスに基づいて適切に支援することは容易でない。そのうえ、コロナ禍で急速に普及したオンライン・ツールは実情把握・支援の有効な選択肢となった一方で、オンラインならではの難しさも併せ持っており、「エビデンス」と「支援」の関係をより複雑にした。そのため、基礎研究と実践をつなぐ「橋渡し研究」の重要性は、ますます高まっていると言ってよい。そこで本年度は基礎研究、実践研究、両者をつなぐ橋渡し研究に携わる先生方に登壇を依頼した。研究と実践の両輪を回すエンジンとなることを目指し、基礎研究で検証された運動プログラムや用いられる運動効果の評価法などを実践で活かす方法、実践の場で必要とされる基礎研究などについて議論したい。

## [健康福祉-SC-1]実践から見る橋渡しの景色

障害のある人を対象にした実践からの気づき
*岩沼 聡一朗[1] (1. 帝京科学大学教育人間科学部)
＜演者略歴＞
学歴：弘前大学、早稲田大学大学院（修士、博士）
職歴：日本学術振興会、早稲田大学、帝京科学大学（現在）

日常的な運動不足は、障害のある人において、二次的な問題として心身機能の低下をもたらすことが懸念される。障害のある人の日常的な運動・スポーツの実施率は、障害種別によって異なるものの、一般的な人と比べると格段に低い。運動・スポーツへの参加に何らかの困難さがある場合、既存のやり方にこだわらず、「ルールや用具、身体活動の方法を個人の状況に応じて作り変えていく」アダプテッド的視点に立つことで、実践を可能にする。この視点は、研究成果を実践に応用する場合にも有効な視点なのではないだろうか。
　発表者は知的障害のある人たちへスポーツ活動の場を提供するスペシャルオリンピックスにて長年活動してきた。知的障害のある人たちは、運動不足に加え、肥満や早期老化などの健康問題を抱える人が少なくない。近年、スペシャルオリンピックスでは、知的障害のある人と知的障害のない人が共に活動をするユニファイドスポーツに取り組んでいる。そのようなスペシャルオリンピックスでの実践の中で発表者が得た気づきを紹介し、研究と実践の橋渡しについて考えてみたい。

©一般社団法人 日本体育・スポーツ・健康学会

テーマ別シンポジウム | 健康福祉研究部会 | 【課題C】運動不足（不活動）に伴う心身機能の低下をいかに予防するか

# 健康福祉研究部会【課題 C】テーマ別シンポジウム／基礎研究と実践（指導、支援）の橋渡しで心身機能の低下を予防する

コーディネーター：菅谷 美沙都（上武大学）、田中 愛（東京学芸大学）
指定討論者：大槻 毅（流通経済大学スポーツ健康科学部）
2023年8月31日(木) 14:40 ～ 16:40 RY301 (良心館３階ＲＹ３０１番教室)
過去2年間のシンポジウムでは、研究者・教育者・職能団体の立場から、コロナ禍における健康づくりの現状と課題について講演と議論が行われた。特に昨年度は、貧富、孤立など、運動不足（不活動）には多様な誘因が存在し、個人や地域の実情を踏まえたリスク評価と支援が必要であることが指摘された。しかし、実践の場で個々の実情を正確に把握し、エビデンスに基づいて適切に支援することは容易でない。そのうえ、コロナ禍で急速に普及したオンライン・ツールは実情把握・支援の有効な選択肢となった一方で、オンラインならではの難しさも併せ持っており、「エビデンス」と「支援」の関係をより複雑にした。そのため、基礎研究と実践をつなぐ「橋渡し研究」の重要性は、ますます高まっていると言ってよい。そこで本年度は基礎研究、実践研究、両者をつなぐ橋渡し研究に携わる先生方に登壇を依頼した。研究と実践の両輪を回すエンジンとなることを目指し、基礎研究で検証された運動プログラムや用いられる運動効果の評価法などを実践で活かす方法、実践の場で必要とされる基礎研究などについて議論したい。

# [健康福祉-SC-2]橋渡し研究に使えるチェックリスト“ PAIREM”

*重松 良祐[1] (1. 中京大学スポーツ科学部)
＜演者略歴＞
学歴：大阪教育大学、大阪教育大学大学院（修士）、筑波大学大学院（修士、博士）
職歴：筑波大学体育科学系、長寿科学振興財団、三重大学、中京大学（現在）

実験室レベルの研究知見を社会に還元しようとしても、うまくいかないことが多い。その理由は、手法が実験と社会還元とではまったく異なるためである。本発表では社会還元の手法を紹介し、実験室と社会を結ぶ橋渡しの参考にしてもらうことを目的とする。

社会還元の手法は海外を中心に多く考案されており、その代表格は Glasgowらが1999年に発表した RE-AIM（リエイム）という枠組みであろう。筆者は RE-AIMを参考にして、本邦の保健事業の実情に合わせた PAIREM（ペアレム）を作成した（重松ら: 運動疫学研究, 2016）。 PAIREMは６局面からなっている。すなわち、ターゲット集団や健康目標を事前に計画し（ Plan）、他組織と協働して（ Adoption）、還元内容を周知する（ Implementation）。その結果として、ターゲット集団に届けられたか（ Reach）、効果はあったか（ Efficacy/ Effectiveness）、継続できているか（ Maintenance）を確認する。局面名は漠然としているが、具体的なチェック項目がそれぞれ設定されている。この PAIREMがあると、社会還元プロセスを事前に計画できるだけでなく、進捗状況を確認できるので途中で修正できるというメリットがある。

発表では筆者が長年普及させているスクエアステップという運動プログラムの社会還元を PAIREMで評価する例も紹介する。

©一般社団法人 日本体育・スポーツ・健康学会

テーマ別シンポジウム | 健康福祉研究部会 | 【課題C】運動不足（不活動）に伴う心身機能の低下をいかに予防するか

# 健康福祉研究部会【課題 C】テーマ別シンポジウム／基礎研究と実践（指導、支援）の橋渡しで心身機能の低下を予防する

コーディネーター：菅谷 美沙都（上武大学）、田中 愛（東京学芸大学）
指定討論者：大槻 毅（流通経済大学スポーツ健康科学部）
2023年8月31日(木) 14:40 ～ 16:40 RY301 (良心館３階ＲＹ３０１番教室)
過去2年間のシンポジウムでは、研究者・教育者・職能団体の立場から、コロナ禍における健康づくりの現状と課題について講演と議論が行われた。特に昨年度は、貧富、孤立など、運動不足（不活動）には多様な誘因が存在し、個人や地域の実情を踏まえたリスク評価と支援が必要であることが指摘された。しかし、実践の場で個々の実情を正確に把握し、エビデンスに基づいて適切に支援することは容易でない。そのうえ、コロナ禍で急速に普及したオンライン・ツールは実情把握・支援の有効な選択肢となった一方で、オンラインならではの難しさも併せ持っており、「エビデンス」と「支援」の関係をより複雑にした。そのため、基礎研究と実践をつなぐ「橋渡し研究」の重要性は、ますます高まっていると言ってよい。そこで本年度は基礎研究、実践研究、両者をつなぐ橋渡し研究に携わる先生方に登壇を依頼した。研究と実践の両輪を回すエンジンとなることを目指し、基礎研究で検証された運動プログラムや用いられる運動効果の評価法などを実践で活かす方法、実践の場で必要とされる基礎研究などについて議論したい。

# [健康福祉-SC-3]健康づくりエビデンスの社会実装にある崖と壁

*高岡 敦史[1] (1. 岡山大学学術研究院教育学域)
＜演者略歴＞
学歴：筑波大学，筑波大学大学院（博士）
職歴：岡山大学（現在）

実社会で健康づくりを進める上で必要なエビデンスは科学者によって蓄積されているし、その活用が必要不可欠なことも分かっている。しかし、「誰が」「どのように」エビデンスを活用すればいいのか、はあまり議論されない。そこには、健康問題が公ー私の間でゆらいでいるという背景があるのではないだろうか。

健康問題は社会保障費の増大との関連で語れば公的問題だが、最終的に個人の身体と生に還元される問題だと捉えれば、自己責任であり個人が負うべき問題とも言える。公ー私の間でゆらぐ健康問題には、エビデンスの社会実装を阻む崖と壁があるようにみえる。崖は、財政の限界、市場原理主義の定常化に伴う健康格差、健康観の多様化に伴う健康づくりのコモディティ化である。壁は、健康づくりの自己責任化、格差を是正する健康づくりサービスのビジネス化の難しさ、 EBPMの不成立である。

公-私の間で論点整理が難しい健康問題だが、「わたしたちの健康は、誰が・どのように維持・増進するのか？」と問うてみたい。健康づくりに関するエビデンスの効果的な活用法は、この問いに対する回答によって決まるはずである。

©一般社団法人 日本体育・スポーツ・健康学会

テーマ別シンポジウム | スポーツ文化研究部会：【課題C】多様なスポーツ文化の保存・流通・促進をいかに刷新していくか

2023年8月31日(木) 14:40 ~ 16:40 | RY303 良心館３階ＲＹ３０３番教室

## スポーツ文化研究部会【課題C】テーマ別シンポジウム／スポーツ文化の浸透戦略（3）ー関わりの拡張に向けてー

コーディネーター：深澤 浩洋（筑波大学）、朝倉 雅史（筑波大学）

本シンポジウムは「多様なスポーツ文化の保存・流通・促進をいかに刷新していくか」という課題認識のもと企画された3年計画の最終年に当たるものである。２年目のシンポジウムでは、スポーツを含んだ身体文化を対象にその伝承・継承の実相に迫った。そして、人と人とが直接に関わり合うことがスポーツ文化の継承にとって意義あることを確認し、そうした関わりを広げていくことが課題として認識された。こうしたことを受け、本シンポジウムでは、スポーツの普及という捉え方を相対化し、単にスポーツを享受したり消費したりする人々を増やすことよりも、共同生産していく人々の広がりや繋がり、関わりをいかに生み出していくかに照準する。その上で、スポーツ文化を担う人々（道場や市民参加の組織など）の関わりを促進していくための課題や可能性を探ってゆきたい。各シンポジストには、入会者が増加している好事例では何がうまく働いているのか、子どものスポーツ・身体文化の参加を阻む壁としてどのような課題があるのか、スポーツサービスの提供とは異なる共同生産を促すアプローチとはいかなるものか、についてそれぞれ語っていただく予定である。

### [スポーツ文化-SC-1] 子どもたちのスポーツ参加を阻む壁

子どもの運動・スポーツの現状と課題

*武長 理栄[1] (1. 笹川スポーツ財団)

### [スポーツ文化-SC-2] 子どもの身体文化への参加をいかに促すか

朝飛道場の取り組み

*朝飛 大[1] (1. 朝飛道場)

### [スポーツ文化-SC-3] 多様な個を包摂する組織化と制度化によるスポーツ文化の浸透に向けた理論的検討

*笠野 英弘[1] (1. 山梨学院大学)

テーマ別シンポジウム | スポーツ文化研究部会 | 【課題C】多様なスポーツ文化の保存・流通・促進をいかに刷新していくか

# スポーツ文化研究部会【課題 C】テーマ別シンポジウム／スポーツ文化の浸透戦略（3）ー関わりの拡張に向けてー

コーディネーター：深澤 浩洋（筑波大学）、朝倉 雅史（筑波大学）

2023年8月31日(木) 14:40 ～ 16:40  RY303 (良心館３階ＲＹ３０３番教室)

本シンポジウムは「多様なスポーツ文化の保存・流通・促進をいかに刷新していくか」という課題認識のもと企画された3年計画の最終年に当たるものである。２年目のシンポジウムでは、スポーツを含んだ身体文化を対象にその伝承・継承の実相に迫った。そして、人と人とが直接に関わり合うことがスポーツ文化の継承にとって意義あることを確認し、そうした関わりを広げていくことが課題として認識された。こうしたことを受け、本シンポジウムでは、スポーツの普及という捉え方を相対化し、単にスポーツを享受したり消費したりする人々を増やすことよりも、共同生産していく人々の広がりや繋がり、関わりをいかに生み出していくかに照準する。その上で、スポーツ文化を担う人々（道場や市民参加の組織など）の関わりを促進していくための課題や可能性を探ってゆきたい。各シンポジストには、入会者が増加している好事例では何がうまく働いているのか、子どものスポーツ・身体文化の参加を阻む壁としてどのような課題があるのか、スポーツサービスの提供とは異なる共同生産を促すアプローチとはいかなるものか、についてそれぞれ語っていただく予定である。

## [スポーツ文化-SC-1]子どもたちのスポーツ参加を阻む壁

子どもの運動・スポーツの現状と課題

*武長 理栄[1] (1. 笹川スポーツ財団)

＜演者略歴＞

2011年より笹川スポーツ財団にて幼児から高齢者までを対象とする全国調査「スポーツライフに関する調査」を担当し、運動・スポーツ実施率やスポーツクラブ、ボランティア、観戦などに関するデータを収集。他にもスポーツ少年団指導者の意識や育成母集団、障がいのある子どもの少年団活動に関する調査にも携わる。

笹川スポーツ財団「子ども・青少年のスポーツライフ・データ」より、わが国の12～21歳のスポーツを「する・みる・ささえる」の観点から構造化すると、2019年ではこれらすべてを享受している群は7.2%であった。一方「しない・みない・ささえない」群は17.3%存在し、推計では202万人にのぼる。

　スポーツ基本計画では、第2期より中長期的なスポーツ政策の基本方針として、全ての人々が「する・みる・ささえる」という様々な立場でスポーツに関わることを目指し、その施策の一つとしてスポーツ参画人口の拡大が示された。しかし、このようなスポーツとの関わりを持たない青少年は増加傾向にあり、今後スポーツとの接点を作っていくための施策が求められる。

自由な遊びの機会が少ない現代では、子どもは運動・スポーツを行うためにはクラブに加入しなければならず、家庭の経済的な状況や保護者の意識などによってスポーツができる子ども・できない子どもが生じている。また、子どもの組織スポーツの課題として生涯スポーツと競技スポーツの分断が挙げられる。子どもの運動・スポーツの現状と課題について示すとともに、今後必要な取り組みについて検討したい。

©一般社団法人 日本体育・スポーツ・健康学会

テーマ別シンポジウム | スポーツ文化研究部会 | 【課題C】多様なスポーツ文化の保存・流通・促進をいかに刷新していくか

# スポーツ文化研究部会【課題 C】テーマ別シンポジウム／スポーツ文化の浸透戦略（3）ー関わりの拡張に向けてー

コーディネーター：深澤 浩洋（筑波大学）、朝倉 雅史（筑波大学）

2023年8月31日(木) 14:40 ～ 16:40 RY303 (良心館３階ＲＹ３０３番教室)

本シンポジウムは「多様なスポーツ文化の保存・流通・促進をいかに刷新していくか」という課題認識のもと企画された3年計画の最終年に当たるものである。２年目のシンポジウムでは、スポーツを含んだ身体文化を対象にその伝承・継承の実相に迫った。そして、人と人とが直接に関わり合うことがスポーツ文化の継承にとって意義あることを確認し、そうした関わりを広げていくことが課題として認識された。こうしたことを受け、本シンポジウムでは、スポーツの普及という捉え方を相対化し、単にスポーツを享受したり消費したりする人々を増やすことよりも、共同生産していく人々の広がりや繋がり、関わりをいかに生み出していくかに照準する。その上で、スポーツ文化を担う人々（道場や市民参加の組織など）の関わりを促進していくための課題や可能性を探ってゆきたい。各シンポジストには、入会者が増加している好事例では何がうまく働いているのか、子どものスポーツ・身体文化の参加を阻む壁としてどのような課題があるのか、スポーツサービスの提供とは異なる共同生産を促すアプローチとはいかなるものか、についてそれぞれ語っていただく予定である。

# [スポーツ文化-SC-2]子どもの身体文化への参加をいかに促すか

朝飛道場の取り組み

*朝飛 大[1] (1. 朝飛道場)

＜演者略歴＞

朝飛道場館長、慶應義塾大学柔道部師範。選手としては1983年の正力杯全日本学生柔道体重別選手権大会（86kg級）や1985年のユニバーシアード神戸大会団体戦で優勝し、指導者としては1986年に朝飛道場の三代目館長を引き継ぎ現在に至る。

朝飛道場は、幼児～小学生～中学生の各カテゴリーを合わせて200名ほどの入門者を抱えている。館長自身が最も柔道を楽しみ、文武両道の精神で社会に貢献できる人、世界に通用する選手、そして柔道に恩返しできる指導者を育てることをモットーに日々稽古をしている。

本シンポジウムでは、次のような点に関して本道場の取り組みを紹介する予定である。本道場の運営において心がけているのはどのようなことか。その方針の下で具体的に子どもたちにどのようなことを実践したり、言葉がけを行っていたりするのか。そうした日々の稽古を通して、彼らが道場にどういった楽しみを見出し、何を求めているのか。柔道以外に楽しみを見出している可能性があるのか。子どもたち同士や指導者との関係はどのようなものか。また、入門を勧めた保護者らがどのようなことを我が子に期待し、彼らの様子から保護者がどのようなことを感じられ、満足されているのか。このような点から本道場で入門者が増えている理由の一端をご紹介できれば幸いである。

©一般社団法人 日本体育・スポーツ・健康学会

テーマ別シンポジウム | スポーツ文化研究部会 | 【課題C】多様なスポーツ文化の保存・流通・促進をいかに刷新していくか

# スポーツ文化研究部会【課題 C】テーマ別シンポジウム／スポーツ文化の浸透戦略（3）ー関わりの拡張に向けてー

コーディネーター：深澤 浩洋（筑波大学）、朝倉 雅史（筑波大学）

2023年8月31日(木) 14:40 ～ 16:40 RY303 (良心館３階ＲＹ３０３番教室)

本シンポジウムは「多様なスポーツ文化の保存・流通・促進をいかに刷新していくか」という課題認識のもと企画された3年計画の最終年に当たるものである。２年目のシンポジウムでは、スポーツを含んだ身体文化を対象にその伝承・継承の実相に迫った。そして、人と人とが直接に関わり合うことがスポーツ文化の継承にとって意義あることを確認し、そうした関わりを広げていくことが課題として認識された。こうしたことを受け、本シンポジウムでは、スポーツの普及という捉え方を相対化し、単にスポーツを享受したり消費したりする人々を増やすことよりも、共同生産していく人々の広がりや繋がり、関わりをいかに生み出していくかに照準する。その上で、スポーツ文化を担う人々（道場や市民参加の組織など）の関わりを促進していくための課題や可能性を探ってゆきたい。各シンポジストには、入会者が増加している好事例では何がうまく働いているのか、子どものスポーツ・身体文化の参加を阻む壁としてどのような課題があるのか、スポーツサービスの提供とは異なる共同生産を促すアプローチとはいかなるものか、についてそれぞれ語っていただく予定である。

# [スポーツ文化-SC-3]多様な個を包摂する組織化と制度化によるスポーツ文化の浸透に向けた理論的検討

*笠野 英弘[1] (1. 山梨学院大学)

＜演者略歴＞

山梨学院大学スポーツ科学部教授。博士（体育科学）。株式会社セリエ、日本スポーツ振興センター、筑波大学体育系特任助教、山梨学院大学スポーツ科学部准教授を経て2023年から現職。同大学カレッジスポーツセンター副センター長兼務。専門はスポーツ社会学。主にサッカーを中心としてドイツや日本のスポーツ組織を研究。

本発表では、本企画の1年目で指摘された「スポーツ文化は保存できない」という視点から、スポーツ文化の構成要素は社会や時代によって変化するものであることを前提として、本企画の2年目に指摘された「スポーツ実践における身体から身体への（「心」を含めた）伝承・継承」といった極めて個人的かつローカルな場での伝承・継承を、その個別性かつ多様性を維持しながら、いかに広げていくことができるのかを、制度や組織との関係から考えてみたい。発表者は、多様なスポーツ愛好者の組織化についてドイツや日本のサッカーを主な事例として研究をしている。その中で、ガース＆ミルズ（1970）が示した『性格と社会構造』の理論を中心にして、制度論、組織論、社会化論等も援用しながら、多様なスポーツ愛好者を包摂する制度をスポーツ組織が主体となって生成していく必要性を指摘してきた。これらの議論や理論は、極めて個人的なもの（性格）と組織や制度との関係を把捉する視点を有していることから、先に示したような個別具体のスポーツ文化の伝承・継承をいかに組織や制度として広げていくことができるのかという点に関して、有用な示唆をもたらすものだと考えている。

©一般社団法人 日本体育・スポーツ・健康学会

テーマ別シンポジウム | 生涯スポーツ研究部会：【課題C】人生100年時代に向けていかに人々のスポーツ権を保障するか

2023年8月31日(木) 14:40 ~ 16:40 | RY305 良心館３階ＲＹ３０５番教室

## 生涯スポーツ研究部会【課題C】テーマ別シンポジウム／国民のスポーツ権を保障するための施策立案に向けて―施策立案者との共進化のために研究者ができること―

コーディネーター：香村 恵介（名城大学）、上野 耕平（香川大学）

本部会では、「人生100年時代に向けていかに人々のスポーツ権を保障するか」を解決すべき上位課題として、3年計画でシンポジウムを計画してきた。1・2年目には、子ども、青年、女性、障がい者、アスリートなど、様々な対象集団における運動・スポーツ参加の現状と課題について議論した。このような調査・研究によって得られた知見や情報を活用して、効果的かつ適切な施策につなげていくためには、施策立案者や実施者、研究者などが、互いの専門知識や経験を活かして協力する（共進する）ことが重要となる。そこで、3年目となる今年度は、施策立案者と研究者が共進し、より適切で実用的な施策を設計するために、研究者はどのようなことができるかについて議論する。シンポジストからは、「研究者」、「施策立案者・実施者」のそれぞれの立場から、具体的なプロジェクトをどのように進めているのか、その成果や課題についてご紹介いただくとともに、海外の事例についてもご説明いただく。そして、会場を交えたディスカッションを通して、本シンポジウムのテーマである「施策立案者との共進化のために研究者ができること」について議論を深めることを目指す。

[生涯スポーツ-SC-1] 【スポーツ参加の促進要因の探索と支援政策の評価研究－国・自治体・個人レベルの重層的アプローチ】の構想

*辻 大士[1] (1. 筑波大学)

---

[生涯スポーツ-SC-2] スポーツ政策における「エビデンスに基づく政策立案」の実践と課題
英国の事例

*金子 史弥[1] (1. 立命館大学)

---

[生涯スポーツ-SC-3] 部活動改革における共進について

*本多 良樹[1] (1. 名古屋市教育委員会)

テーマ別シンポジウム | 生涯スポーツ研究部会 | 【課題C】人生100年時代に向けていかに人々のスポーツ権を保障するか

# 生涯スポーツ研究部会【課題 C】テーマ別シンポジウム／国民のスポーツ権を保障するための施策立案に向けて―施策立案者との共進化のために研究者ができること―

コーディネーター：香村 恵介（名城大学）、上野 耕平（香川大学）

2023年8月31日(木) 14:40 ～ 16:40  RY305 (良心館３階ＲＹ３０５番教室)

本部会では、「人生100年時代に向けていかに人々のスポーツ権を保障するか」を解決すべき上位課題として、3年計画でシンポジウムを計画してきた。1・2年目には、子ども、青年、女性、障がい者、アスリートなど、様々な対象集団における運動・スポーツ参加の現状と課題について議論した。このような調査・研究によって得られた知見や情報を活用して、効果的かつ適切な施策につなげていくためには、施策立案者や実施者、研究者などが、互いの専門知識や経験を活かして協力する（共進する）ことが重要となる。そこで、3年目となる今年度は、施策立案者と研究者が共進し、より適切で実用的な施策を設計するために、研究者はどのようなことができるかについて議論する。シンポジストからは、「研究者」、「施策立案者・実施者」のそれぞれの立場から、具体的なプロジェクトをどのように進めているのか、その成果や課題についてご紹介いただくとともに、海外の事例についてもご説明いただく。そして、会場を交えたディスカッションを通して、本シンポジウムのテーマである「施策立案者との共進化のために研究者ができること」について議論を深めることを目指す。

# [生涯スポーツ-SC-1]【スポーツ参加の促進要因の探索と支援政策の評価研究ー国・自治体・個人レベルの重層的アプローチ】の構想

*辻 大士[1] (1. 筑波大学)

＜演者略歴＞

博士（体育科学）　筑波大学大学院体育科学専攻を修了後、ユヴァスキュラ大学ジェロントロジーリサーチセンターポスドク研究員、千葉大学予防医学センター特任助教を経て現職。主に高齢者を対象とした運動・スポーツ疫学、公衆衛生学を専門とする。本学会では「測定評価」「介護予防･健康づくり」専門領域に所属。

令和4年10月に開始した、社会技術研究開発センター（ RISTEX）「科学技術イノベーション政策のための科学 研究開発プログラム」の第4期研究開発プロジェクト『【共進化枠】スポーツ参加の促進要因の探索と支援政策の評価研究 ー 国・自治体・個人レベルの重層的アプローチ』（研究代表者: 近藤克則・千葉大学）について、プロジェクトの概要や構想を紹介する。本プロジェクトの目的は「 A. スポーツ施設整備推進政策の妥当性の検証」、「 B. スポーツ参加促進要因の探索」、「 C. デジタル技術を活用した身体活動の促進」の3つである。 Aについては公園・スタジアム等の施設に着目し、スポーツ促進効果や介護費・医療費等との関連を検証することで、国レベルのスポーツ施設整備推進政策のブラッシュアップを狙う。 Bについては自治体レベルでスポーツ振興関連要因の「見える化」を行い、 Good Practiceを抽出し要因分析を行うことで、市町村のスポーツ振興政策の底上げを目指す。 Cについては、スマートフォンアプリを活用することで個人の行動変容を促し、身体活動量の増加を狙う。得られる知見を基に、客観的な根拠に基づくスポーツ政策形成・評価検証の基盤づくりを目指す。

©一般社団法人 日本体育・スポーツ・健康学会

テーマ別シンポジウム | 生涯スポーツ研究部会 | 【課題C】人生100年時代に向けていかに人々のスポーツ権を保障するか

# 生涯スポーツ研究部会【課題 C】テーマ別シンポジウム／国民のスポーツ権を保障するための施策立案に向けて―施策立案者との共進化のために研究者ができること―

コーディネーター：香村 恵介（名城大学）、上野 耕平（香川大学）

2023年8月31日(木) 14:40 ～ 16:40  RY305 (良心館３階ＲＹ３０５番教室)

本部会では、「人生100年時代に向けていかに人々のスポーツ権を保障するか」を解決すべき上位課題として、3年計画でシンポジウムを計画してきた。1・2年目には、子ども、青年、女性、障がい者、アスリートなど、様々な対象集団における運動・スポーツ参加の現状と課題について議論した。このような調査・研究によって得られた知見や情報を活用して、効果的かつ適切な施策につなげていくためには、施策立案者や実施者、研究者などが、互いの専門知識や経験を活かして協力する（共進する）ことが重要となる。そこで、3年目となる今年度は、施策立案者と研究者が共進し、より適切で実用的な施策を設計するために、研究者はどのようなことができるかについて議論する。シンポジストからは、「研究者」、「施策立案者・実施者」のそれぞれの立場から、具体的なプロジェクトをどのように進めているのか、その成果や課題についてご紹介いただくとともに、海外の事例についてもご説明いただく。そして、会場を交えたディスカッションを通して、本シンポジウムのテーマである「施策立案者との共進化のために研究者ができること」について議論を深めることを目指す。

# [生涯スポーツ-SC-2]スポーツ政策における「エビデンスに基づく政策立案」の実践と課題

英国の事例

*金子 史弥[1] (1. 立命館大学)

＜演者略歴＞

博士（社会学）　一橋大学大学院社会学研究科博士後期課程を修了後、筑波大学体育系（TIAS）助教を経て現職。専門はスポーツ社会学、スポーツ政策論。主な研究テーマは、1）戦後の英国におけるスポーツ政策と社会統合、2）ロンドン2012大会を対象としたオリンピック・パラリンピックの＜レガシー＞に関する研究。

近年、日本では「エビデンスに基づく政策立案（ Evidence-Based Policy Making: EBPM）」が政策領域や国・地方自治体のレベルを問わず、推進されている。スポーツ政策の領域においても2020年6月に出された日本学術会議による提言『科学的エビデンスを主体としたスポーツの在り方』に代表されるように、 EBPMをより積極的に活用していこうという動きがみられる。本発表の対象である英国は、 EBPMの活用において「先進国」であると言われている。英国では、1997年に誕生したブレア労働党政権が政府の「現代化」を掲げる中で、 EBPMという考え方が積極的に導入されていった。スポーツ政策もその例外ではなく、英国のスポーツ担当省である文化・メディア・スポーツ省や関連する政府系機関、競技団体、および各自治体で、 EBPMに基づく政策運営が目指されてきた。また、その展開においては、政策形成・評価のためのフレームワークづくりやエビデンスの提供などの形で研究者が貢献してきた。本発表では、2000年代以降の英国における EBPMに基づくスポーツ政策の展開について概説しながら、その中で研究者が果たしてきた役割や研究者によって指摘されている課題について考察する。

©一般社団法人 日本体育・スポーツ・健康学会

テーマ別シンポジウム | 生涯スポーツ研究部会 | 【課題C】人生100年時代に向けていかに人々のスポーツ権を保障するか

# 生涯スポーツ研究部会【課題 C】テーマ別シンポジウム／国民のスポーツ権を保障するための施策立案に向けて―施策立案者との共進化のために研究者ができること―

コーディネーター：香村 恵介（名城大学）、上野 耕平（香川大学）

2023年8月31日(木) 14:40 ～ 16:40  RY305 (良心館３階ＲＹ３０５番教室)

本部会では、「人生100年時代に向けていかに人々のスポーツ権を保障するか」を解決すべき上位課題として、3年計画でシンポジウムを計画してきた。1・2年目には、子ども、青年、女性、障がい者、アスリートなど、様々な対象集団における運動・スポーツ参加の現状と課題について議論した。このような調査・研究によって得られた知見や情報を活用して、効果的かつ適切な施策につなげていくためには、施策立案者や実施者、研究者などが、互いの専門知識や経験を活かして協力する（共進する）ことが重要となる。そこで、3年目となる今年度は、施策立案者と研究者が共進し、より適切で実用的な施策を設計するために、研究者はどのようなことができるかについて議論する。シンポジストからは、「研究者」、「施策立案者・実施者」のそれぞれの立場から、具体的なプロジェクトをどのように進めているのか、その成果や課題についてご紹介いただくとともに、海外の事例についてもご説明いただく。そして、会場を交えたディスカッションを通して、本シンポジウムのテーマである「施策立案者との共進化のために研究者ができること」について議論を深めることを目指す。

## [生涯スポーツ-SC-3]部活動改革における共進について

*本多 良樹[1] (1. 名古屋市教育委員会)

＜演者略歴＞

名古屋市役所入庁後、生涯学習施設運営、教職員管理等の担当を経て、現職。地域や大学、民間事業者等と連携しながら、市立小学校部活動の民間委託化の制度設計・事業実施や、中学校部活動改革に携わっている。

現代の行政機関はその役割が大きくなるにつれ、裁量権が拡大してきており、首長や議会の政策を効率的に実現させる機能だけでなく、市民等の利害関係も踏まえた施策立案を自ら行うことが求められるようになってきている。しかし、同時に、行政機関は中立性に基づく組織であるため、いわゆる「政治判断」による利害調整は行うことができず、客観的なデータや理論に基づく施策立案や制度設計により、様々な視点・意見・利害を持つ市民の理解を得ていく必要がある。ここに、行政として研究者との共進に取組むべき理由があると考えている。

本発表では、名古屋市が実施している小学校部活動の民間委託化について、その立案から実践に渡り、研究者の方に関わっていただいた経験などをもとに、多様な価値観を持った市民の合意形成のための客観的・科学的なエビデンス活用等、行政の施策立案・実践における研究者との共進の事例について紹介する。

©一般社団法人 日本体育・スポーツ・健康学会

テーマ別研究発表 | 競技スポーツ研究部会：【課題B】競技スポーツにおけるコーチ養成をいかに効果的に行うか

2023年8月31日(木) 9:00 ~ 9:59 | RYB1 良心館地下１階ＲＹＢ１番教室

## 競技スポーツ研究部会【課題B】口頭発表①

座長：高橋 義雄（筑波大学）

9:00 ~ 9:14

[競技スポーツ-B-01] スポーツ指導者がパーソナルコーチングを学ぶ意義および受ける意義（教, 方）

*青柳 健隆[1] (1. 関東学院大学)

---

9:15 ~ 9:29

[競技スポーツ-B-02] 運動部活動への参加の在り方と学校生活スキルとの関連（方）

高校野球部員を対象として

*中嶋 清之[1]、尾縣 貢[2]、島本 好平[1] (1. 法政大学、2. 筑波大学)

---

9:30 ~ 9:44

[競技スポーツ-B-03] 小学校低学年のサッカーにおける団子状態の形成契機（方）

*寺田 進志[1] (1. 大阪国際大学)

---

9:45 ~ 9:59

[競技スポーツ-B-04] 中学生年代の中・長距離種目の競技者におけるテーパリング期間の走行距離の減少率の差異がパフォーマンスおよび生理学的・心理学的指標に及ぼす影響（生）

*小畠 翼[1]、林 容市[1,2] (1. 法政大学大学院スポーツ健康学研究科、2. 法政大学文学部心理学科)

テーマ別研究発表 | 競技スポーツ研究部会 | 【課題B】競技スポーツにおけるコーチ養成をいかに効果的に行うか

# 競技スポーツ研究部会【課題 B】口頭発表①

座長：高橋 義雄（筑波大学）
2023年8月31日(木) 09:00 ～ 09:59  RYB1 (良心館地下１階ＲＹＢ１番教室)

09:00 ～ 09:14

## [競技スポーツ-B-01]スポーツ指導者がパーソナルコーチングを学ぶ意義および受ける意義（教,方）

*青柳 健隆[1] (1. 関東学院大学)

昨年の第72回大会では、パーソナルコーチング（受け手の目標達成に向け、対話によって気づきや学び、自発的な行動を引き出す関わり）のアスリートへの作用を報告した。そこでは、競技面だけでなく人生全体への作用があったことや、リーダーとしての側面（チームマネジメント）にも影響があったことが示された。しかし、スポーツ現場における重要な登場人物として、指導者の存在を忘れてはならない。本発表では、指導者がパーソナルコーチングを学んだり受けたりすることにはどのような意義があるのかを主題とする。

スポーツ指導者を対象にパーソナルコーチングを教授または実践した経験のあるパーソナルコーチ6名に対して、オンラインで1対1の半構造化インタビューを実施した。インタビューでは、指導者がパーソナルコーチングを学んだり受けたりすることの意義について質問した。

調査の結果、目標設定やプランニングといった指導者自身の自己理解や思考の整理に関わる側面と、選手の話を聞く姿勢や伝え方の改善など、選手とのコミュニケーションに関わる側面への好影響が示唆された。また、それらによって選手との信頼関係が強化されることや、選手のモチベーションおよびパフォーマンスが向上することなども認識されていた。分析の詳細および考察は発表にて行う。

©一般社団法人 日本体育・スポーツ・健康学会

テーマ別研究発表 | 競技スポーツ研究部会 | 【課題B】競技スポーツにおけるコーチ養成をいかに効果的に行うか

# 競技スポーツ研究部会【課題 B】口頭発表①

座長：高橋 義雄（筑波大学）
2023年8月31日(木) 09:00 ～ 09:59 RYB1 (良心館地下１階ＲＹＢ１番教室)

09:15 ～ 09:29

## [競技スポーツ-B-02]運動部活動への参加の在り方と学校生活スキルとの関連（方）

高校野球部員を対象として

*中嶋 清之[1]、尾縣 貢[2]、島本 好平[1] (1. 法政大学、2. 筑波大学)

学校心理学では、学校生活における問題を未然に防ぐ予防的アプローチとして、すべての生徒を対象とした援助サービスである一次的援助サービス、問題の早期発見・早期介入を目指す二次的援助サービス、個別に学習計画を立て援助チームを組み対応していく三次的援助サービスという三段階の心理教育的援助サービスという考え方を提唱している。一次的援助サービスの一つとして、学校生活スキルとそのトレーニングがある。学校生活スキルは、児童生徒が学校生活を効果的に送るために必要となる具体的な行動のことであり、ライフスキル（WHO，1997）の概念が基本的性質として取り入れられている。また、学校生活スキルを児童生徒に教育する活動を、学校生活スキルトレーニングと呼び、いくつかのプログラムが開発・実践されている。
関連して、運動部活動の経験は、生徒の心・技・体の成長をもたらし、学校生活スキルにも影響を与える可能性がある。本研究の目的は、運動部活動への参加の在り方と学校生活スキルとの関係を検証することである。その結果をもとにして、運動部活動への参加が学校生活スキル獲得にどう貢献していけるのかを検討し、心理教育的援助サービスの一環として、学校生活スキルトレーニングに運動部活動を援用した事例を開発するための基礎資料とする。
対象となった高校野球部員1,160名を学年、出場機会、公式戦勝数によってそれぞれ群分けし、各群の学校生活スキルの各下位尺度得点を比較した。検証の結果、学年群、公式戦勝数群において有意差が見られた。学年群においては、進路決定スキルで、3年生は、1年生及び2年生よりも高い得点を示した。公式戦勝数群においては、進路決定スキル、集団活動スキルで、「6勝以上」及び「3－5勝」はそれぞれ「0－2勝」よりも高い得点を示した。また、自己学習スキルで、「3－5勝」は「0－2勝」よりも高い得点を示した。

©一般社団法人 日本体育・スポーツ・健康学会

テーマ別研究発表 | 競技スポーツ研究部会 | 【課題B】競技スポーツにおけるコーチ養成をいかに効果的に行うか

# 競技スポーツ研究部会【課題 B】口頭発表①

座長：高橋 義雄（筑波大学）
2023年8月31日(木) 09:00 ～ 09:59 RYB1 (良心館地下１階ＲＹＢ１番教室)

09:30 ～ 09:44

## [競技スポーツ-B-03]小学校低学年のサッカーにおける団子状態の形成契機（方）

*寺田 進志[1] (1. 大阪国際大学)

サッカーのゲーム位相は瀧井（1988；1990， p.80；1995；2003）によってまとめられている。このゲーム位相の第一位相は密集とされている。プレーヤーがボールに集まってしまい、団子のような外形が捉えられることから、第一位相は団子状態とも呼ばれる。そして、このような状態で試合が展開されるサッカーは通俗的には団子サッカーと呼ばれる。
指導者の間では、団子サッカーの良し悪しは二分される。そのような中、「なぜ、団子状態が形成されるのか」に関する学術的議論は見受けられない。この素朴な問いは「いつ、どのように団子状態から脱却させるか」の問いに繋がり、延いてはプレーヤーの競技力向上やサッカー指導に関係する。
　団子状態が形成されてしまうことを、（とりわけ、子どもや初心者のサッカーでは）「そういうもの」と受け入れることや無自覚のうちに瀧井のゲーム位相論を受け入れることを、一旦、「括弧入れ」することで、新たな知見を得ることができると考えられる。
　そこで本研究では、スポーツ運動学（金子，2009）の立場から小学校低学年のサッカーを分析することによって、団子状態の形成契機を明らかにすることを目的とする。
　分析の結果、以下の四つの契機を明らかにすることができた。
1）ボールを奪う意識
2）競技力（達成力）のレベル
3）指導者の指導
4）ゲームのオーガナイズ
　小学生低学年のサッカー指導において、指導者がどのような目標像を形成するかは、子どもたちの競技力に大きな影響を与える。団子サッカーの良し悪しではなく、指導者は目の前の子どもたちは「どこを目指しているのか」、あるいは「どこまで目指せるのか」といったことを熟考し、目標像を形成して指導することが重要であると考えられる。本研究で得られた知見が現場に生かされることを願う。

©一般社団法人 日本体育・スポーツ・健康学会

# 競技スポーツ研究部会【課題 B】口頭発表①

座長：高橋 義雄（筑波大学）

2023年8月31日(木) 09:00 ～ 09:59  RYB1 (良心館地下１階ＲＹＢ１番教室)

09:45 ～ 09:59

## [競技スポーツ-B-04]中学生年代の中・長距離種目の競技者におけるテーパリング期間の走行距離の減少率の差異がパフォーマンスおよび生理学的・心理学的指標に及ぼす影響（生）

*小畠 翼[1]、林 容市[1,2] (1. 法政大学大学院スポーツ健康学研究科、2. 法政大学文学部心理学科)

一般成人を対象にしたテーパリングにおいては、その期間中に走行距離を41～60%減少させることでパフォーマンスの向上に有益であると報告されている。しかし、中学生年代においても同様の走行距離の減少が有益であるかどうかは不明瞭である。そこで、中学生年代の中・長距離種目の競技者を対象に、疲労軽減とディトレーニング効果抑制の両面に着目し、テーパリング期間における適正な走行距離の減少率について検討した。
男子中学生12名（13.5 ± 0.5歳、3000 m走の自己最高記録: 10分25秒39 ± 48秒76）を対象に、通常から走行距離を21%減少（微減テーパリング）または41%減少（低減テーパリング）させる各7日間の2種類のテーパリングを実施させ、テーパリング前後に3000 m走（ TT）を行わせた。テーパリング開始時、テーパリング中間日、テーパリング最終日、テーパリング後の TT実施日における心拍変動、 POMS2の疲労尺度得点を測定した。これらの各データに対して整列ランク変換を行い、時間（ TTは2水準、心拍変動と疲労尺度得点は4水準）および条件（2水準）を固定効果、対象者の IDを変量効果とする混合効果モデルの二要因分散分析を用いて分析を行った。
テーパリングの違いおよびテーパリング前後の TTに有意な主効果、交互作用は認められなかった。他方、疲労尺度の得点においては時間要因に有意な主効果が認められ、テーパリング開始時と TT実施日の値に有意な差異が認められた。また、条件要因においても有意な主効果が認められ、微減テーパリングと比較して低減テーパリングにおいて有意に低値を示した。
本研究の結果、微減または低減テーパリングともにディトレーニング効果を抑制しうるが、心理的な疲労感の低減については低減テーパリングの方が効果的である可能性が示唆された。

©一般社団法人 日本体育・スポーツ・健康学会

テーマ別研究発表 | 競技スポーツ研究部会：【課題B】競技スポーツにおけるコーチ養成をいかに効果的に行うか

2023年8月31日(木) 9:00 ~ 9:44 | RYB2 良心館地下１階ＲＹＢ２番教室

## 競技スポーツ研究部会【課題B】口頭発表②

座長：広瀬 統一（早稲田大学）

9:00 ~ 9:14

### [競技スポーツ-B-05] 女性アスリートの三主徴（FAT）背景要因の実態調査（測,方）

*権野 めぐみ[1]、寅嶋 静香[2,1]、野村 照夫[1]、来田 宣幸[1] (1. 京都工芸繊維大学、2. 奈良教育大学)

---

9:15 ~ 9:29

### [競技スポーツ-B-06] 新体操における表現力を高めるためのトレーニングの提案（方）

創作ダンスの指導法を活用して

*栫 ちか子[1] (1. 鹿屋体育大学)

---

9:30 ~ 9:44

### [競技スポーツ-B-07] 日本の女子バスケットボール選手におけるワンハンドシュートの使用実態調査（生）

各カテゴリのスリーポイントシュートに着目して

*吉川 公明[1]、三島 隆章[2] (1. 大阪体育大学大学院、2. 大阪体育大学大学院スポーツ科学研究科)

テーマ別研究発表 | 競技スポーツ研究部会 | 【課題B】競技スポーツにおけるコーチ養成をいかに効果的に行うか

# 競技スポーツ研究部会【課題 B】口頭発表②

座長：広瀬 統一（早稲田大学）
2023年8月31日(木) 09:00 ～ 09:44 RYB2 (良心館地下１階ＲＹＢ２番教室)

09:00 ～ 09:14

## [競技スポーツ-B-05]女性アスリートの三主徴（ FAT）背景要因の実態調査（測,方）

*権野 めぐみ[1]、寅嶋 静香[2,1]、野村 照夫[1]、来田 宣幸[1] (1. 京都工芸繊維大学、2. 奈良教育大学)

近年、女性アスリートの三主徴（ FAT）問題について様々な明示がなされてきた。しかし、女性アスリートがFATに至る背景要因について議論される場は少ない。そこで、本研究では、 FATの背景を探り、実態を明らかにすることを目的とした。

対象は体重制限及び月経困難を同時に経験したことがあるスポーツ専攻女子大学生2名とした。調査は質問式面接法を用いた。質問内容は、（1） FATに陥った背景、（2）体重制限をした際の競技成績、（3）月経が復活した時期、（4）指導者からのネガティブな要素を含む声掛けの有無、など8項目とした。分析では、3名の専門家による関連要因文言の抽出を行った。

（1） FATに陥った背景として、指導者から厳しい体重制限を強いられた経験を有していた。また、食事制限が影響を及ぼした可能性が高い「貧血や無月経」が発生していた。（2）体重制限をした際の競技成績は、それまでの成績と比較して低下していた。（3）部活動引退後に月経が復活した。（4）競技成績が下がった際などに指導者からのネガティブな声掛けや指導があった。

以上（1）～（4）の結果から、指導者の威圧的発言や、 FATに対する認識の不足から、選手が不健康な状態へと入らざるを得ない状況が確認された。さらに、2名ともに FATに関しての知識情報の獲得が不足しており、無月経状態を安易に捉えてしまったことが伺えた。

以上より、選手は、外部圧力から自身を追い込む→極度の食事制限→ FATへの流入へ、といった負のスパイラルへと押し込まれた可能性が推察された。また、指導者および選手ともに FATの認識不足であったことから、FAT及びそこに纏わる健康教育の獲得が課題であると示唆された。さらに、どのスポーツ指導者も、成長段階に合わせたトレーニング方法、減量方法などを学ぶことが重要であると考えられた。

©一般社団法人 日本体育・スポーツ・健康学会

テーマ別研究発表 | 競技スポーツ研究部会 | 【課題B】競技スポーツにおけるコーチ養成をいかに効果的に行うか

# 競技スポーツ研究部会【課題 B】口頭発表②

座長：広瀬 統一（早稲田大学）
2023年8月31日(木) 09:00 ～ 09:44 RYB2 (良心館地下１階ＲＹＢ２番教室)

09:15 ～ 09:29

## [競技スポーツ-B-06]新体操における表現力を高めるためのトレーニングの提案（方）

創作ダンスの指導法を活用して
*栫 ちか子[1] (1. 鹿屋体育大学)

新体操は、身体難度を伴いながらも、手具操作を必要とすることに特徴があるスポーツで、音楽と動きの調和等を含む芸術的側面も採点に影響する競技である。しかしながら、近年の新体操は、過度な柔軟性や高度な手具操作技術が急速に発展し、技術偏重の傾向が加速した。一方で、新体操の本質ともいえる動きの美しさや芸術的な身体表現力が軽視されてきた。以上のような課題を踏まえ、改訂された新ルールでは、芸術の Aスコアが Eスコアから独立し、芸術性を重視した競技への転換が図られた。新ルールでは、身体や顔の表現、ダイナミックな変化、音楽にふさわしい動き、動きのつなぎやリズム等、多様な観点から芸術性が採点される。したがって、新ルールに対応した表現力を高めるトレーニングの開発は急務であった。 そこで、多様なテーマから表したいイメージを捉えて動きを創り出す「創作ダンス」の指導手法を参考として、新体操選手に必要な表現力を高めるトレーニングを開発し、その効果を検証することを目的とした。 対象は、新体操の講習会に参加した9～17歳の新体操選手93名である。約2時間半にわたり、表現力を高めることを目的としたトレーニングを指導し、その前後で新体操の表現に関する自己評価についての質問紙調査を実施した。トレーニングの内容は、様々な動きやポーズを選手自身から創出させるための練習、動きのつなぎをスムーズに実施するための練習、手具を持っていない方の手の表現、表情の付け方、曲調にあわせた表現、作品創作技法等であった。その結果、指導後のアンケートにおいて、音楽やリズムに合わせた演技、音楽のイメージにふさわしい動き・表情、技と技のつなぎ、動きの変化等の自己評価が、全ての項目で指導前と比較して明らかに高まった。したがって、本研究で示した創作ダンスの指導法を活用したトレーニングは、新体操選手の表現力を高めるための一助となった可能性が示唆された。

©一般社団法人 日本体育・スポーツ・健康学会

## 競技スポーツ研究部会【課題 B】口頭発表②

座長：広瀬 統一（早稲田大学）

2023年8月31日(木) 09:00 ～ 09:44 RYB2 (良心館地下１階ＲＹＢ２番教室)

09:30 ～ 09:44

# [競技スポーツ-B-07]日本の女子バスケットボール選手におけるワンハンドシュートの使用実態調査（生）

各カテゴリのスリーポイントシュートに着目して

*吉川 公明[1]、三島 隆章[2] (1. 大阪体育大学大学院、2. 大阪体育大学大学院スポーツ科学研究科)

2002年に日本バスケットボール協会は「最終的にワンハンドのシュートが可能になることが理想」として、ワンハンドシュートの習得を推奨した。しかしながら2002年以降、ワンハンドシュートの習得等に関する報告はなく、特に女子選手のスリーポイントシュート（3P）におけるワンハンドシュートの使用状況は明らかにされていない。

日本の女子バスケットボール選手の3Pに着目し、各カテゴリにおけるワンハンドシュート（ OHS）と、ボースハンドシュート（ BHS）の使用実態を明らかにすることを目的とした。

2022年度の中学、高校、大学および Wリーグの各カテゴリの全国大会のベスト８の試合映像を用いて、3Pにおける OHSと BHSの使用人数、シュート本数およびシュート成功率を調べた。その後、カテゴリとシュートフォームを要因とした二元配置分散分析を行い、交互作用および主効果の有無を検討した。

3Pのシュート本数および使用人数において有意な主効果が認められ（$p$ <0.05）、全てのカテゴリで OHSと比べ、 BHSの方が有意な高値を示した（$p$ <0.05）。シュート成功率では中学のみ有意な主効果が認められ、OHSと比べ BHSの方が有意な高値を示した（$p$ <0.05）。

2002年に日本バスケットボール協会が提唱して以降、女子バスケットボール選手の３ Pにおいて、 OHSの使用率が著しく向上したとはいえず、指導者は長期的な視点で OHSの技術指導を行うことが必要であるといえる。OHSの利点であるシュートへの速さやセットポジションでの高さなどを BHSに取り入れ、 OHSへの移行に向けた新たなシュート指導の構築が重要になるものと考えられる。

©一般社団法人 日本体育・スポーツ・健康学会

テーマ別研究発表 | 競技スポーツ研究部会：【課題C】ハイパフォーマンススポーツ（トップレベルの競技スポーツ）におけるトレーニングをいかに効果的に行うか

2023年8月31日(木) 9:00 ~ 9:59 | RY103 良心館１階ＲＹ１０３番教室

## 競技スポーツ研究部会【課題C】口頭発表⑤

座長：吉村 真美（豊田工業大学）

9:00 ~ 9:14

[競技スポーツ-C-17] 陸上競技女子跳躍競技者の準備期と試合期におけるSSC遂行能力の変化（測,方）

*中川 未加子[1]、吉田 孝久[1] (1. 日本女子体育大学)

9:15 ~ 9:29

[競技スポーツ-C-18] Velocity Loss Cut off(VLC)法を用いたレジスタンスエクササイズにおける負荷および休息時間の違いが各セットの挙上速度に及ぼす影響（生）

*内野 公平[1]、菊池 さやか[1]、齋藤 未花[1]、望月 佑季奈[1]、本間 洋樹[1]、菊池 直樹[1] (1. 日本体育大学)

9:30 ~ 9:44

[競技スポーツ-C-19] *ACTN3*遺伝R577X多型と伸張性運動後の血清クレアチンキナーゼ活性との関連性の検討（生）

*出口 実[1]、本間 洋樹[1]、齋藤 未花[1]、上妻 歩夢[1]、鴻崎 香里奈[1]、越智 英輔[2]、岡本 孝信[1]、中里 浩一[1]、菊池 直樹[1] (1. 日本体育大学、2. 法政大学)

9:45 ~ 9:59

[競技スポーツ-C-20] 等尺性筋力トレーニングが力発揮中の筋硬度へ与える影響（生,バ,スポーツ医学）

*井上 美佳[1]、窪田 敦之[1]、山下 由夏[1]、鈴木 良雄[2]、髙澤 祐治[1] (1. 順天堂大学スポーツ医学研究室、2. 順天堂大学スポーツ健康科学研究科)

テーマ別研究発表 | 競技スポーツ研究部会 | 【課題C】ハイパフォーマンススポーツ（トップレベルの競技スポーツ）におけるトレーニングをいかに効果的に行うか

## 競技スポーツ研究部会【課題 C】口頭発表⑤

座長：吉村 真美（豊田工業大学）

2023年8月31日(木) 09:00 ～ 09:59 RY103 (良心館１階ＲＹ１０３番教室)

09:00 ～ 09:14

# [競技スポーツ-C-17]陸上競技女子跳躍競技者の準備期と試合期におけるSSC遂行能力の変化（測,方）

*中川 未加子[1]、吉田 孝久[1] (1. 日本女子体育大学)

【背景】陸上競技における跳躍種目の踏切動作は、約0.1~0.2秒と極めて短時間内に大きな力を発揮している。このような特性から優れたパフォーマンス発揮のための重要な体力因子として、伸長ー短縮サイクル(stretch shortening cycle)運動の遂行能力が挙げられる。この SSC遂行能力は接地時間と跳躍高から求められるリバウンドジャンプ指数（ RJ-index）によって評価できる。試合期にむけたトレーニングにより、競技者の SSC遂行能力は高められていくと考えられる。そこで、本研究は RJ-indexを用いて準備期と試合期の SSC遂行能力を把握することで、トレーニング計画の振り返りを行い、試合期後半へむけたトレーニング計画への指標を得ようとするものである。【方法】対象は陸上競技跳躍種目を専門とする女子競技者17名（走高跳：6名、走幅跳：6名、三段跳：2名、棒高跳：3名）。準備期（1月）と試合期（5月）に測定を実施した。試技は十分なウォーミングアップを行った後に、マットスイッチ上で腕の振り込み動作を用いた５回連続ジャンプを行わせた。試技が失敗した場合は再度測定を行い、最も RJ-indexが高い跳躍を分析対象とした。分析項目は跳躍高、接地時間、 RJ-indexとし、準備期（1月）と試合期(5月)の結果を比較した。差の分析には対応のある t 検定を用いて、危険率5%未満を有意水準とした。【結果】準備期の跳躍高は37.88±5.35㎝、接地時間は0.16±0.02sec、 RJ-indexは2.39±0.49であった。試合期中の跳躍高は41.41±4.15㎝、接地時間は0.15±0.01sec、 RJ-indexは2.81±0.37であった。いずれも準備期より試合期の方が高い値を示した。接地時間において、有意な差が認められた（ $p<0.05$）。

©一般社団法人 日本体育・スポーツ・健康学会

テーマ別研究発表 | 競技スポーツ研究部会 | 【課題C】ハイパフォーマンススポーツ（トップレベルの競技スポーツ）におけるトレーニングをいかに効果的に行うか

## 競技スポーツ研究部会【課題 C】口頭発表⑤

座長：吉村 真美（豊田工業大学）

2023年8月31日(木) 09:00 ～ 09:59 RY103 (良心館１階ＲＹ１０３番教室)

09:15 ～ 09:29

# [競技スポーツ-C-18]Velocity Loss Cut off(VLC)法を用いたレジスタンスエクササイズにおける負荷および休息時間の違いが各セットの挙上速度に及ぼす影響（生）

*内野 公平[1]、菊池 さやか[1]、齋藤 未花[1]、望月 佑季奈[1]、本間 洋樹[1]、菊池 直樹[1] (1. 日本体育大学)

【背景】 Velocity Loss Cut off(VLC)法は、挙上速度の低下に基づきセット中の回数を規定する方法である。特にパワー向上を目的とした場合、速度閾値10%(VLC10)が有効であることが近年のレビューによって明らかにされている(Weakley et al 2020)。一方、 VLC法ではセット内の初速からの低下を基準に回数を設定しているが、各セットの挙上速度は負荷や休息時間により大きく異なることが問題となる。 【目的】本研究の目的は、 VLC法を用いたレジスタンスエクササイズにおける負荷および休息時間の違いが各セットの挙上速度に及ぼす影響を検討することである。 【方法】対象者は成人5名(男性4名、女性1名)とし、クロスオーバーデザインで行った。 エクササイズはスミスマシンを用いたパラレルスクワットとして、最大挙上重量(1RM)を測定後、85%1RMセット間休息3分または5分(85%3分、85%5分)、70%1RMセット間休息3分または5分(70%3分、70%5分)で4セット行った。各セットは速度が10% 低下した時点で終了とし(VLC10)、エクササイズ中の平均速度(MV)を測定した。 【結果】1セット目の最大速度(PV)は85%1RM：0.53±0.04m/s、70%1RM：0.63±0.05m/sであった。しかし、4セット目の PVは1セット目より70%3分：-4.8%、70%5分：-3.4%、85%3分：-8.0%、85%5分：-7.6%減少した。また、1セット目における PVから VLC10の速度閾値を下回った反復回数は、全体の回数に対して、70%3分：43%、70%5分：30%、85%3分：45%、85%5分：46%であった。 【結論】70%1RMより85%1RMで最大速度の減少が大きかった。また、70%1RMでは、3分に対し5分の休息時間でより速い速度を維持した。

©一般社団法人 日本体育・スポーツ・健康学会

テーマ別研究発表 | 競技スポーツ研究部会 | 【課題C】ハイパフォーマンススポーツ（トップレベルの競技スポーツ）におけるトレーニングをいかに効果的に行うか

## 競技スポーツ研究部会【課題 C】口頭発表⑤

座長：吉村 真美（豊田工業大学）
2023年8月31日(木) 09:00 ～ 09:59  RY103 (良心館１階ＲＹ１０３番教室)

09:30 ～ 09:44

# [競技スポーツ-C-19]*ACTN3*遺伝 R577X多型と伸張性運動後の血清クレアチンキナーゼ活性との関連性の検討（生）

*出口 実[1]、本間 洋樹[1]、齋藤 未花[1]、上妻 歩夢[1]、鴻崎 香里奈[1]、越智 英輔[2]、岡本 孝信[1]、中里 浩一[1]、菊池 直樹[1]
(1. 日本体育大学、2. 法政大学)

[背景] *ACTN3*遺伝子 R577X多型における XX型は、α-アクチニン3を生成できないことから、運動時の筋細胞の構造的強度に関与し、筋損傷時の血清クレアチンキナーゼ(以下, CK)活性にも影響を与える可能性がある。しかしながら、いずれの研究も対象者が少なく、一致した見解は得られていない。[目的] 95名の若年男女を対象として*ACTN3*遺伝子 R577X多型と伸張性運動後の CK活性の変化との関連性ついて検討する。[方法] 健常な成人男女95名(男性50名、女性45名、22.2±2.3歳)を対象とし、肘関節屈筋群における最大伸張性運動を6回5セット負荷した。 CK活性を運動の直前、直後、1、2、3および5日後に評価した。運動直前に対する運動直後の MVCを共変量とする二元配置共分散分析（ ANCOVA）により、血清 CK活性の経時変化を RR型と RX型(以下, R allele)および XX型で比較した。[結果] 伸張性運動後の CK活性の経時変化において、遺伝子多型で有意な交互作用が確認された(p = 0.029)。 XX型は R alleleと比較して3日後および5日後の CK活性が有意に高かった(3日後: 5333 ± 10128 U/L vs. 2726 ± 5260 U/L, 5日後: 6342 ± 8448 U/L vs. 4271 ± 6014 U/L)。男性では、遺伝子多型で有意な交互作用が確認され(p = 0.022)、 XX型は R alleleと比較して5日後の CK活性が有意に高かった(8821 ± 9702 U/L vs. 3930 ± 5843 U/L)。しかしながら、女性においては遺伝子多型で有意な交互作用は認められなかった。[結論] *ACTN3*遺伝子 R577X多型は伸張性運動後の CK活性との関連することが示唆された。さらに、男性でその傾向はより顕著であった。

©一般社団法人 日本体育・スポーツ・健康学会

テーマ別研究発表 | 競技スポーツ研究部会 | 【課題C】ハイパフォーマンススポーツ（トップレベルの競技スポーツ）におけるトレーニングをいかに効果的に行うか

# 競技スポーツ研究部会【課題 C】口頭発表⑤

座長：吉村 真美（豊田工業大学）

2023年8月31日(木) 09:00 ～ 09:59 RY103 (良心館１階ＲＹ１０３番教室)

09:45 ～ 09:59

## [競技スポーツ-C-20]等尺性筋力トレーニングが力発揮中の筋硬度へ与える影響（生,バ,スポーツ医学）

*井上 美佳[1]、窪田 敦之[1]、山下 由夏[1]、鈴木 良雄[2]、髙澤 祐治[1] (1. 順天堂大学スポーツ医学研究室、2. 順天堂大学スポーツ健康科学研究科)

【背景】力発揮をする際、筋は収縮し硬くなる。このような力発揮中の筋の硬さ(筋硬度)はスポーツパフォーマンスや外傷障害と関連することが示されている。そのため、アスリートの外傷障害予防やパフォーマンス向上の上で力発揮中の筋硬度に着目したアプローチが求められると考えられるが、レジスタンストレーニングによって力発揮中の筋硬度がどのように変化するのかは不明である。【目的】6週間の等尺性筋力トレーニングが、力発揮中の筋硬度へ与える影響を明らかにする。【方法】対象は上肢の運動習慣のない健常成人男性7名(20.1±1.1歳)とし、6週間の等尺性肘関節屈曲トレーニング開始前と3週後、6週後に筋硬度(Strain Ratio; SR)と最大筋力、筋厚を測定し、固有筋力(筋力/筋厚)も評価した。 SRは25・50・75%1RM相当の重量を肘関節90度屈曲位で保持させた際に strain elastographyで測定した。 SRは数値が低いほど筋硬度が低いことを示す。【結果】筋力はトレーニング3週後(66.1±11.7Nm)と比較して6週後(73.0±11.8Nm)に高値を示し、 SRは25%1RMと50%１ RMにおいて3週後(25%: 3.6±1.1; 50%: 3.6±1.1)と比較して6週後(25%: 1.7±1.0; 50%: 1.0±0.6)に低値を示した(p<0.05)。また、3週後において25%1RMの SRと固有筋力の増加率に正の相関がみられた(r=0.94)。【結論】6週間の等尺性筋力トレーニングによって、低強度もしくは中強度の力発揮中の筋硬度が増加することが示された。またトレーニング3週後において、明らかな筋硬度変化はみられなかったものの、低強度の力発揮中の筋硬度変化には固有筋力の増加が関与する可能性が示された。

©一般社団法人 日本体育・スポーツ・健康学会

テーマ別研究発表 | 競技スポーツ研究部会：【課題C】ハイパフォーマンススポーツ（トップレベルの競技スポーツ）におけるトレーニングをいかに効果的に行うか

2023年8月31日(木) 9:00 ~ 9:59 | RY107 良心館１階ＲＹ１０７番教室

## 競技スポーツ研究部会【課題C】口頭発表⑥

座長：高松 靖（びわこ成蹊スポーツ大学）

9:00 ~ 9:14

[競技スポーツ-C-21] 平均台における技の体系化に関する発生運動学的研究（方）

*仲宗根 森敦[1] (1. 東京学芸大学)

---

9:15 ~ 9:29

[競技スポーツ-C-22] 体操競技における戦術的トレーニングの意味に関する発生運動学的分析（方）

*松山 尚道[1] (1. 天理大学)

---

9:30 ~ 9:44

[競技スポーツ-C-23] 体操競技における〈変形車輪〉に関する発生運動学的考察（方）

*廣田 修平[1] (1. 北翔大学)

---

9:45 ~ 9:59

[競技スポーツ-C-24] 体操競技におけるつり輪の〈水平支持〉に関する発生運動学的一考察（方）

*松本 裕也[1]、廣田 修平[2] (1. 株式会社アイシンク、2. 北翔大学)

テーマ別研究発表 | 競技スポーツ研究部会 | 【課題C】ハイパフォーマンススポーツ（トップレベルの競技スポーツ）におけるトレーニングをいかに効果的に行うか

# 競技スポーツ研究部会【課題 C】口頭発表⑥

座長：高松 靖（びわこ成蹊スポーツ大学）

2023年8月31日(木) 09:00 ～ 09:59  RY107 (良心館１階ＲＹ１０７番教室)

09:00 ～ 09:14

## [競技スポーツ-C-21]平均台における技の体系化に関する発生運動学的研究（方）

*仲宗根 森敦[1] (1. 東京学芸大学)

体操競技では、選手やコーチの努力によってこれまで多くの技が試合で発表され採点規則に記載されてきた。2022年版女子採点規則においては、平均台だけで500以上の技が記載されているが、平均台の技の体系においては、1974年に出版された『体操競技のコーチング』以降、未整備のままである。体操競技における技の体系化の基礎を築いた金子は、技の構造を運動形態的構成要素と運動技術的構成要素の二つの視点から分析し、歴史的な技術変化や技の収斂性に対応できるように技の形態的課題性の表記を行い、技の体系として整理し、合理的なトレーニングや採点規則の整備に貢献した。しかし、1974年以降、例えば〈後転とび正面支持臥〉、〈側方宙返り〉といった技は、平均台の技の体系において他の技とどのような関係にあるのか厳密に確認されておらず、計画的なトレーニングに支障をきたすおそれや、今後の体操競技における採点の客観性も保証され得ない可能性も出てくる。本研究では、体操競技の技を明確に定義し、体系上の位置づけを考える上で、金子の作り上げた術語体系を基に表記論的縁取り分析によって、現時点における平均台の技の体系化を行うことである。本研究は、1970年代以降に発生した〈後転とび正面支持臥〉といった技を新たに体系化し整理した。技の体型を整理する本研究の成果は体操競技のコーチング理論基礎付けに貢献することが可能となる。

©一般社団法人 日本体育・スポーツ・健康学会

テーマ別研究発表 | 競技スポーツ研究部会 | 【課題C】ハイパフォーマンススポーツ（トップレベルの競技スポーツ）におけるトレーニングをいかに効果的に行うか

## 競技スポーツ研究部会【課題 C】口頭発表⑥

座長：高松 靖（びわこ成蹊スポーツ大学）

2023年8月31日(木) 09:00 ～ 09:59 RY107 (良心館１階ＲＹ１０７番教室)

09:15 ～ 09:29

# [競技スポーツ-C-22]体操競技における戦術的トレーニングの意味に関する発生運動学的分析（方）

*松山 尚道[1] (1. 天理大学)

体操競技に関する研究について、体力的要素を取り上げたものや技術的要素を取り上げたものは多く存在するが、戦術的要素に着目したものは決して多くはないだろう。発生運動学的立場から研究がされている場合でも、実施者のコツに着目した、いわゆる技術的な研究が圧倒的に多いといえる。体操競技は一般的にクローズドスキルと呼ばれる運動が中心になるため、対人競技や集団球技のように敵や味方といった他者との関係性が運動学習の主題に上がる事は確かに少ない。

一方で、実際の練習現場で指導者として関わっていると、勝負を意識した時に（ここでは出来る限り高得点を獲得しようと意図する時の意）、かなり戦術的要素を考えなければならない場面に気づくことが出来る。競技特性上、圧倒的な身体能力（体力的要素）と卓越した身体技術（技術的要素）を持ち得ていれば、戦術的要素はあまり重要視されない傾向があると考えることができる。しかし、正確かつ確実に実施できる演技内容では目指すべき得点に至らない場合に、やや安定感に欠ける技を実施する必要に迫られることがある。また、本番特有の緊張感の中で思い通りに身体を制御しきれないかもしれないという現実的な問題を考えると、少しでもリスクを減らして失敗や減点を抑え、最低限の得点を確保するというという戦術的要素の重要性が顕在化するといえるだろう。

本研究では、筆者の指導現場の例証の中から、出来る限り大きな失敗のリスクを減らし、減点を最小限に抑えることを目指した取り組みを紹介し、その意味やトレーニング上での位置づけについて検討する。もちろん、競技の性質としての完璧かつ美的にも優れた実施を目指すという点については否定するつもりはない。多くの選手が積極的に競技力向上を目指しつつ、その成果を競技会で発揮するにあたり、有用となる戦術的なトレーニング方法について明らかにしたい。

©一般社団法人 日本体育・スポーツ・健康学会

テーマ別研究発表 | 競技スポーツ研究部会 | 【課題C】ハイパフォーマンススポーツ（トップレベルの競技スポーツ）におけるトレーニングをいかに効果的に行うか

# 競技スポーツ研究部会【課題 C】口頭発表⑥

座長：高松 靖（びわこ成蹊スポーツ大学）

2023年8月31日(木) 09:00 ～ 09:59 RY107 (良心館１階ＲＹ１０７番教室)

09:30 ～ 09:44

## [競技スポーツ-C-23]体操競技における〈変形車輪〉に関する発生運動学的考察（方）

*廣田 修平[1] (1. 北翔大学)

脈々と進歩を続ける体操競技の発展は、選手・指導者の絶え間ない技術開発に支えられてきたといっても過言ではない。高度化した現在の体操競技においても、新しい技が国内外の競技会で発表されることは珍しくない。特に近年、男子体操競技の鉄棒種目では新しい技の開発がめざましく、その度に採点規則における難度表の最高難度が書き換えられている。2023年現在の男子体操競技最高難度は、日本の宮地秀享選手が2017年カナダで開催されたモントリオール世界選手権大会で成功させた鉄棒における＜ミヤチ＞の I難度である。上記のように、現在も技の高度化が進む鉄棒ではあるが、この種目を構成する基本技として＜後方車輪＞と＜前方車輪＞が存在している。鉄棒における＜後方車輪＞と＜前方車輪＞はどちらも2023年現在、採点規則上では最も難度価値の低いA難度技ではあるが、それぞれ様々な発展技につながる基本かつ重要な技の一つである。また、これら二つの＜後方車輪＞と＜前方車輪＞は演技中、他の技との組み合わせにおいて開始局面や終末局面が多様に変化することも多い。これ以降、本研究においてはこのような開始局面や終末局面が多様に変化する＜後方車輪＞や＜前方車輪＞を総じて＜変形車輪＞と表記する。

現在の鉄棒種目において、様々な場面でこの＜変形車輪＞が疑問の余地なく用いられているが、＜変形車輪＞の容認条件の枠組みが確認されないまま、ある技の＜変形車輪＞は容認され、別の技の＜変形車輪＞は容認されないという曖昧さが内包されている。

そこで本研究発表では体操競技の史的考察を通し、＜変形車輪＞が体操競技において容認される枠組みを確認し、現在の＜変形車輪＞が内包する問題点を発生運動学的立場から提示することで、体操競技のトレーニング現場に新たな問題意識を提起する。

©一般社団法人 日本体育・スポーツ・健康学会

テーマ別研究発表 | 競技スポーツ研究部会 | 【課題C】ハイパフォーマンススポーツ（トップレベルの競技スポーツ）におけるトレーニングをいかに効果的に行うか

# 競技スポーツ研究部会【課題 C】口頭発表⑥

座長：高松 靖（びわこ成蹊スポーツ大学）

2023年8月31日(木) 09:00 ～ 09:59 RY107 (良心館１階ＲＹ１０７番教室)

09:45 ～ 09:59

## [競技スポーツ-C-24]体操競技におけるつり輪の〈水平支持〉に関する発生運動学的一考察（方）

*松本 裕也[1]、廣田 修平[2] (1. 株式会社アイシンク、2. 北翔大学)

体操競技におけるつり輪の〈水平支持〉は2023年現在、採点規則において力静止技に属しており、開脚姿勢と閉脚姿勢で実施する場合の２種類の運動形態が存在する。また、近年では国内外問わず多くの選手が、競技会で単独技としての〈水平支持〉ではなく、振動技から〈水平支持〉を実施している。発表者が指導者として関わる大学生に対する体操競技指導現場においても、〈水平支持〉の習得を目指している選手もいるが、その中で発表者は、体操競技特有の「白樺の姿勢」で習得を目指している選手に少なからず遭遇してきた。〈水平支持〉は、両腕で身体を支え、身体を床面と水平になるよう姿勢を保持することになるが、発表者は、〈水平支持〉で身体を水平に保持する際、白樺の姿勢での実施は、習得過程において技術的困難性を伴い、習得を目指す学習者の理想像と実際の効果的な技術学習の間に差があると考えた。

本研究では体操競技の指導現場の実践事例をもとに〈水平支持〉における姿勢保持の技術を発生運動学的立場から考察し、〈水平支持〉における姿勢保持の動感や技術情報を提供することを目的とする。本研究に関連する先行研究として、金子（1974）は、水平姿勢保持の基本技術がバランスであることを述べ、バランスをとるための情報として「バランスをとるために肩を前に乗り出してゆけばよい」と述べている。発表者は、〈水平支持〉で肩を前に乗り出す際、白樺の姿勢では両腕に乗せる感覚が捉えづらく、この技の習得を目指す者にとって効果的な技の学習につながらないものと発表者は考えた。そこで、研究発表では、上記問題性を解消するために発表者が行った指導現場での実践指導と、行われた実践指導に対する発生運動学的考察を通して得られた技術情報を発表する。

©一般社団法人 日本体育・スポーツ・健康学会

テーマ別研究発表 | 生涯スポーツ研究部会：【課題C】人生100年時代に向けていかに人々のスポーツ権を保障するか

2023年8月31日(木) 9:00 ~ 9:44 | RY201 良心館２階ＲＹ２０１番教室

## 生涯スポーツ研究部会【課題C】口頭発表①

座長：中野 貴博（中京大学）

9:00 ~ 9:14

### [生涯スポーツ-C-01] 中学生サッカー選手におけるスポーツ専門化の実態について（測,発,生）

*永野 康治[1]、笹木 正悟[2] (1. 日本女子体育大学、2. 東海大学)

---

9:15 ~ 9:29

### [生涯スポーツ-C-02] 大学生における入学時の体力レベル別にみた精神的健康度の縦断的変化（体力学）

4年間（5時点）の追跡調査

*中原 雄一[1]、角田 憲治[2]、藤本 敏彦[3] (1. 福岡県立大学　人間社会学部、2. 山口県立大学　社会福祉学部、3. 東北大学　高度教養教育・学生支援機構)

---

9:30 ~ 9:44

### [生涯スポーツ-C-03] 男子高校生における運動部活動の早期離脱と学校生活ウェルビーイング、ストレス対処力の縦断的関連（介,方,発,心）

*神藤 隆志[1,2]、北濃 成樹[2]、永田 康喜[3]、中原 雄一[4]、具志堅 武[5]、鈴川 一宏[6]、永松 俊哉[7] (1. 大阪教育大学、2. 明治安田厚生事業団体力医学研究所、3. 筑波大学体育系、4. 福岡県立大学人間社会学部、5. 神奈川大学人間科学部、6. 日本体育大学体育学部、7. 山野美容芸術短期大学)

# 生涯スポーツ研究部会【課題 C】口頭発表①

座長：中野 貴博（中京大学）

2023年8月31日(木) 09:00 ～ 09:44  RY201 (良心館２階ＲＹ２０１番教室)

09:00 ～ 09:14

## [生涯スポーツ-C-01]中学生サッカー選手におけるスポーツ専門化の実態について（測,発,生）

*永野 康治[1]、笹木 正悟[2] (1. 日本女子体育大学、2. 東海大学)

【はじめに・目的】サッカーは習い事の増加など、幼少期から競技を開始する環境が整いつつある。一方で、競技の早期専門化がスポーツ障害の発生につながると報告されており、その影響が危惧されている。そこで、本邦の中学生サッカー選手におけるスポーツ専門化の実態を明らかにすることを本研究の目的とした。
【方法】中学2、3年生の男子サッカー選手を対象とし、保護者より専門化状況(サッカーの年間活動月数、サッカーの重視度、他のスポーツの実施状況)、週間活動日数、サッカー開始年齢、小学生4～6年時の専門化状況について、 Webを通じて各学年200名の計400名から回答を得た。回答結果よりスポーツ専門化度(0・1[低], 2[中], 3[高])を算出した。週間活動日数について、専門化度の群間比較を一元配置分散分析および多重比較検定を用いて行った。有意水準は0.05とした。
【結果】専門化度は高が53.8%、中が32.3%、低が14.0%であった。年間活動月数は12ヶ月が81.5%であった。サッカーの開始時期は平均8.3±2.8年、競技歴がサッカーのみであったのは29%、他競技を同時に継続しているのは26%であった。専門化度が高である群は中および低群より有意に週間活動日数が多かった(高: 4.6±1.2日, 中: 4.1±1.5日, 低: 3.8±1.7日)(いずれも $p<0.01$)。小学生4～6年時の専門化度は、高が40.3%、中が29.8%、低が14.5%であった
【考察】本邦の中学生サッカー選手のスポーツ専門化度は、欧米の中高生より高である割合が高く、早期専門化の傾向が認められた。また、小学生年代からもその傾向が認められた。障害予防のために運動量の調整や、他スポーツの機会を得るなどの方策が必要と考えられた。

©一般社団法人 日本体育・スポーツ・健康学会

# 生涯スポーツ研究部会【課題 C】口頭発表①

座長：中野 貴博（中京大学）

2023年8月31日(木) 09:00 ～ 09:44  RY201 (良心館２階ＲＹ２０１番教室)

09:15 ～ 09:29

## [生涯スポーツ-C-02]大学生における入学時の体力レベル別にみた精神的健康度の縦断的変化（体力学）

4年間（5時点）の追跡調査

*中原 雄一[1]、角田 憲治[2]、藤本 敏彦[3] (1. 福岡県立大学　人間社会学部、2. 山口県立大学　社会福祉学部、3. 東北大学　高度教養教育・学生支援機構)

【目的】大学生において、入学時の体力レベルの違いによって、卒業時までの精神的健康度に経年的な変化がみられるかどうかについて検討した。
【方法】2018年に入学した260名、ならびに2019年に入学した166名の計426名の大学生を対象に、入学直後に文部科学省の新体力テスト（12歳～19歳対象の全8種目）を実施し、1年入学直後、1年後期末、2年後期末、3年後期末、4年後期末の5時点で調査を実施し、精神的健康度の推移を追跡した。体力レベルは、新体力テストの総合評価基準表（ A～ Eの5段階評価）を用い、 A・ Bを高体力群、 Cを中体力群、 D・ Eを低体力群と定義した。精神的健康度として抑うつ尺度 CES-Dと気分尺度 POMS2の各指標を用いた。統計解析には、混合モデルによる二元配置反復分散分析を用い、性、入学年度、ならびに入学直後の同居有無、経済状況、身体活動量（ IPAQ-short）を調整した。
【結果】 CES-Dは群間の固定効果が有意であり、高・中体力群は、低体力群よりも5時点で一貫して得点が低く（良好）、4年間を通じで抑うつ度が低いことが示された。また、 POMS2においては、「緊張ー不安」において交互作用が認められ、3年次から4年次にかけて高・中体力群は得点が維持・低下（良好）傾向にあったが、低体力群では得点が上昇（悪化）した。
【結論】大学入学時の体力レベルの違いによって、 CES-Dと POMS2の「緊張ー不安」において異なる時間変化が認められ、高・中体力群は、低体力群に比して精神的健康度を良好に保っていることが示された。本対象者は、大学生活の半分以上をコロナ禍で過ごした学生であることから、困難な環境下にあっても、体力レベルが高いことは精神的健康を良好に保つ上で、一つの重要な保護因子となり得ることが示唆された。

©一般社団法人 日本体育・スポーツ・健康学会

# 生涯スポーツ研究部会【課題 C】口頭発表①

座長：中野 貴博（中京大学）

2023年8月31日(木) 09:00 ～ 09:44 RY201 (良心館２階ＲＹ２０１番教室)

09:30 ～ 09:44

## [生涯スポーツ-C-03]男子高校生における運動部活動の早期離脱と学校生活ウェルビーイング、ストレス対処力の縦断的関連（介,方,発,心）

*神藤 隆志[1,2]、北濃 成樹[2]、永田 康喜[3]、中原 雄一[4]、具志堅 武[5]、鈴川 一宏[6]、永松 俊哉[7] (1. 大阪教育大学、2. 明治安田厚生事業団体力医学研究所、3. 筑波大学体育系、4. 福岡県立大学人間社会学部、5. 神奈川大学人間科学部、6. 日本体育大学体育学部、7. 山野美容芸術短期大学)

青年期のスポーツ参加は、身体活動保持に貢献し、心身の発達への好影響が期待される。一方、スポーツ組織からの離脱は、その後の不健康状態と関連する可能性がある。しかし、離脱の影響は欧米諸国中心に研究されており、わが国の運動部活動対象の研究は不十分である。本研究は、男子高校生における運動部活動の早期離脱と学校生活ウェルビーイングやストレス対処力との縦断的関連を明らかにすることを目的とした。
福岡県の私立男子高校に通う1年生全員928名を対象とした。調査は、1～3年次（2017～2019年）の5月と3年次の10月の4時点で行った。3年次までの運動部活動への参加状況を調査し、非所属者299名、所属者213名、早期離脱経験者37名を分析対象とした。2年生の終わりまでの退部を早期離脱と定義した。学校生活ウェルビーイングは当該尺度における3下位因子（学校生活充実度、学業遂行度、進路選択順調度）、ストレス対処力は SOC3スケールの得点を用いた。分析には群×時間の二要因分散分析を用いた。
学校生活充実度と進路選択順調度で統計的に有意な交互作用が確認された。単純主効果の検定において、学校生活充実度では、3年次の5月、10月時点で、早期離脱経験者よりも所属者の方が有意に良好な値であった（各時点の両者の得点：36.6対37.8、35.9対38.1、33.2対39.0、36.4対39.7）。進路選択順調度では、3年次10月時点で、早期離脱経験者よりも所属者の方が有意に良好な値であった（24.8対24.8、24.2対24.3、26.1対27.5、26.5対28.8）。これらの項目において、非所属者と早期離脱経験者の間で有意な差は観察されなかった。
男子高校生の運動部活動からの早期離脱は、重要な発達課題である学校生活充実度や進路選択順調度に負の影響を及ぼす可能性があることが示唆された。

©一般社団法人 日本体育・スポーツ・健康学会

テーマ別研究発表 | 学校保健体育研究部会：【課題C】体育・スポーツ健康科学は学校保健体育の進展にいかに貢献できるか

2023年8月31日(木) 9:00 ~ 9:59 | RY202 良心館２階ＲＹ２０２番教室

## 学校保健体育研究部会【課題C】口頭発表③

座長：木島 章文（山梨大学）

9:00 ~ 9:14

### [学校保健体育-C-09] 中学生が思う中学校体育に対する嫌悪感特性（測）

体育授業に対する好嫌度との関連

*竹内 花[1]、塚本 将太[1]、冨士本 有希[1]、春日 晃章[2] (1. 岐阜大学大学院、2. 岐阜大学)

---

9:15 ~ 9:29

### [学校保健体育-C-10] 対話的な学びを引き出す協同学習の授業づくり（教）

器械運動における運動嗜好の高い生徒の分析をもとに

*小林 慶[1] (1. 千葉大学大学院)

---

9:30 ~ 9:44

### [学校保健体育-C-11] 小学校体育科における運動有能感が低い児童の学習観察と運動支援（教,発）

受容感を育む関わりを通して

*金子 泰子[1]、橋爪 和夫[2]、阿尾 昌樹[3]、勝島 貴士[4] (1. 富山国際大学、2. アール医療専門職大学、3. 射水市立大門小学校、4. 富山市立浜黒崎小学校)

---

9:45 ~ 9:59

### [学校保健体育-C-12] 小学生の社会情動的スキルと体力・運動能力との関係（教,発）

*山田 淳子[1]、松田 繁樹[1]、辻 延浩[1] (1. 滋賀大学)

# 学校保健体育研究部会【課題 C】口頭発表③

座長：木島 章文（山梨大学）

2023年8月31日(木) 09:00 ～ 09:59 RY202 (良心館２階ＲＹ２０２番教室)

09:00 ～ 09:14

## [学校保健体育-C-09]中学生が思う中学校体育に対する嫌悪感特性（測）

体育授業に対する好嫌度との関連

*竹内 花[1]、塚本 将太[1]、冨士本 有希[1]、春日 晃章[2] (1. 岐阜大学大学院、2. 岐阜大学)

本研究は、中学生を対象に、中学校体育に対する嫌悪感特性を明らかにし、性差および体育授業の好嫌度との関連を明らかにすることを目的とした。対象は G県の公立中学校に在籍する中学2年および3年生288名（男子149名、女子139名）であった。調査方法は、先行研究より体育嫌いの生起にかかわると考えられる諸要因を抽出し、5要因（運動意欲、自己の能力の低さ、比較・評価、指導者への不信感および授業に対する嫌悪感）77項目で構成される質問紙を用いて、調査を実施した。そして、中学校体育に対する嫌悪感に関する因子構造を検討するため、因子分析（斜交回転プロマックス法）を適用し、全因子得点を算出した。また、体育授業に対する嫌悪感特性の性差および体育授業の好嫌度による違いを検討するため、二要因分散分析（性×好嫌度）を適用した。因子分析の結果より、7因子（運動劣等感、教師の指導方略、スキル獲得能力、非難体験、運動環境、失敗への羞恥心および他者評価）が抽出された（累積寄与率：50.69%）。二要因分散分析の結果より、スキル獲得能力因子において性および体育授業の好嫌度に有意な交互作用が認められた。性別においては、運動劣等感、スキル獲得能力および他者評価の3因子に有意な主効果が認められ、女子は男子よりも自己の運動能力に対して否定的な感情を抱いていて、周りからの評価に対して特に嫌悪感を抱くことが示唆された。体育授業の好嫌度においては7因子中6因子に有意な主効果が認められた。失敗への羞恥心因子を除く6因子において体育授業への愛好的態度の低い者が高い得点を示したことから、愛好的態度が低い者は、授業場面での成功体験の少なさから運動劣等感を抱いたり、教師の指導に対して否定的感情を抱いたり、動きを体現する難しさによる課題の不達成に対して嫌悪感を抱いたりと、体育授業の様々な要因に対して嫌悪感を抱きやすいことが示唆された。

©一般社団法人 日本体育・スポーツ・健康学会

# 学校保健体育研究部会【課題 C】口頭発表③

座長：木島 章文（山梨大学）

2023年8月31日(木) 09:00 ～ 09:59  RY202 (良心館２階ＲＹ２０２番教室)

09:15 ～ 09:29

## [学校保健体育-C-10]対話的な学びを引き出す協同学習の授業づくり（教）

器械運動における運動嗜好の高い生徒の分析をもとに

*小林 慶[1] (1. 千葉大学大学院)

本研究では、運動やスポーツをすることが好きであり得意であるものの、体育に対してマイナス思考をもっている「運動嗜好の高い生徒」に焦点を当て、彼らが体育を好きになったり学びを得られたりする授業を検討することを目的とした。そのために、対話的な学びの視点から協同学習を採用し、器械運動の単元から検証した。 第1検証授業は、 A中学校第1学年38名のクラスを対象とした。質問調査を基に運動嗜好の高い傾向がみられた生徒2名を抽出し、対象生徒とした。単元は集団マット運動で、クラス全員に ICレコーダーを装着し、分析を行った。その結果、抽出生徒は、自分の考えや意見をもっているにも関わらず、双方向的なやりとりになっていなかった点や、周囲に気を遣い自分のやりたいことができないなど周囲の影響を受けていた点が示唆された。また、男女別の関わりが多かったことや女子が男子よりも話し合いに積極的だったことなど男女差があった点がみられた。これらを踏まえ、第2検証授業では、男女のペア学習や社会性の目標設定と自己評価を取り入れた協同学習を実施し、彼らがより仲間と共に学習成果を感じられる授業を検証する。

©一般社団法人 日本体育・スポーツ・健康学会

テーマ別研究発表 | 学校保健体育研究部会 | 【課題C】体育・スポーツ健康科学は学校保健体育の進展にいかに貢献できるか

## 学校保健体育研究部会【課題 C】口頭発表③

座長：木島 章文（山梨大学）
2023年8月31日(木) 09:00 ～ 09:59 RY202 (良心館２階ＲＹ２０２番教室)

09:30 ～ 09:44

# [学校保健体育-C-11]小学校体育科における運動有能感が低い児童の学習観察と運動支援（教,発）

受容感を育む関わりを通して

*金子 泰子[1]、橋爪 和夫[2]、阿尾 昌樹[3]、勝島 貴士[4] (1. 富山国際大学、2. アール医療専門職大学、3. 射水市立大門小学校、4. 富山市立浜黒崎小学校)

【目的】本研究は、小学校体育科において、教員や仲間からの言葉がけや関わりが児童の運動有能感、とりわけその中でも受容感、統制感を高めるという仮説を検証することである。
【方法】2023年2月～3月にかけて、富山県 T小学校に在籍する5年生42名を調査した。岡澤らによる運動有能感調査の合計点が学年の平均値以下で、集団の中でも特に低い値を示し、かつ、新体力テストの合計点が集団内の平均値に近い児童３名を抽出した。小学校教員を志望している大学生を９人、抽出した5年生の児童3人の正課体育学習支援者として学校長の許可を得て体育科の授業に参加させた。大学生は、抽出児童3名を中心に、体育授業中のクラス全員の児童に積極的に励ましや、取り組みや成長を認める言葉かけや関わりを行った。授業終了後に体育学習支援者から抽出児童3名との会話の記録を取り、内容を記録した。学習支援者が介入した授業はバスケットボールの授業で、合計8回であった。
【結果】授業介入後に実施した運動有能感調査の結果から、抽出児童3名のうち、2名の合計点が授業介入前よりも向上した。1名の児童については、合計点の向上は見られなかった。
【考察】抽出児童3名の観察と学習支援の記録から、運動有能感が低い傾向にある児童は、学習支援者の声かけや関わりの機会を増やすことで、運動有能感のうち、受容感・統制感を高めることに有効であることが示唆された。体力の向上や運動技能の向上につながる支援は困難であるが、周囲からの言葉かけや関わりにより、運動に対する自信をもつことができない児童の運動有能感を向上させるための支援の可能性が示唆された。

©一般社団法人 日本体育・スポーツ・健康学会

テーマ別研究発表 | 学校保健体育研究部会 | 【課題C】体育・スポーツ健康科学は学校保健体育の進展にいかに貢献できるか

# 学校保健体育研究部会【課題 C】口頭発表③

座長：木島 章文（山梨大学）
2023年8月31日(木) 09:00 ～ 09:59 RY202 (良心館２階ＲＹ２０２番教室)

09:45 ～ 09:59

## [学校保健体育-C-12]小学生の社会情動的スキルと体力・運動能力との関係（教,発）

*山田 淳子[1]、松田 繁樹[1]、辻 延浩[1] (1. 滋賀大学)

近年、日本の学校教育において児童期の社会情動的スキルの獲得や向上の重要性が認識されてきている。先行研究では、社会情動的スキルと同義として位置づけられている非認知能力は、幼児において体力・運動能力と密接な関係があると報告されている。しかし、児童を対象に社会情動的スキルに関連する要因を検討している研究は極めて少ない。そこで本研究は、小学生（3～6年生）における社会情動的スキルと体力・運動能力との関係を明らかにすることを目的とした。対象は、2022年に滋賀県の公立小学校に在籍していた3年生～6年生の児童788名（男子407名、女子381名）であった。体力・運動能力は、新体力テスト（文部省、2000）の8項目を測定した。社会情動的スキルは、「自尊心」、「思いやり」、「社交性」、「敬意」、「自己制御」、「目標への情熱」、「忍耐力」の7因子21項目から成り立つ小学生用・社会情動的スキル評価尺度（山田ほか、2023）を用いて、5件法での回答を得た。まず得られた社会情動的スキルの因子構造を検討するため、因子分析（プロマックス回転最尤法）を適用し、7因子の存在を確認した。次に、社会情動的スキル21項目の合計得点および各因子（3項目）得点と体力合計得点および各測定項目間の関係について、「年齢」の影響を考慮した偏相関係数を算出し検討した。結果、男子はいずれの学年においても社会情動的スキル合計得点と体力合計得点に有意な相関が認められた。また、女子は5、6年生において、社会情動的スキル合計得点と体力合計得点に有意な相関が認められた。特に6年生においては男女とも、すべての社会情動的スキルの各因子得点と体力合計得点に有意な相関が認められた。以上より、小学生の社会情動的スキルと体力・運動能力には関係があることが示唆された。特に男子および6年生において社会情動的スキルと体力・運動能力の関係が顕著にみられた。

©一般社団法人 日本体育・スポーツ・健康学会

テーマ別研究発表 | 学校保健体育研究部会：【課題B】保健体育授業をいかに良質なものにするか

2023年8月31日(木) 9:00 ~ 9:59 | RY203 良心館２階ＲＹ２０３番教室

## 学校保健体育研究部会【課題B】口頭発表⑤

座長：細越 淳二（国士館大学）

9:00 ~ 9:14

### [学校保健体育-B-17] 持久走単元におけるICT機器の利活用（教）

コミュニケーションの活性化をねらいとして

*村瀬 浩二[1]、梅澤 秋久[2] (1. 和歌山大学、2. 横浜国立大学)

---

9:15 ~ 9:29

### [学校保健体育-B-18] Ｎ－感覚的アプローチとスポーツ教育モデルのハイブリッドモデルの実践提案（教）

マット運動の授業を通して

*成家 篤史[1]、青木 憲吾[2] (1. 帝京大学、2. 白岡市立篠津小学校)

---

9:30 ~ 9:44

### [学校保健体育-B-19] これからの時代に求められる教師の指導性のあり方（教）

子どもの学習観に関わる質的分析を通して

*野田 勇紀[1] (1. 千葉大学大学院)

---

9:45 ~ 9:59

### [学校保健体育-B-20] 高等学校体育教師が生徒のニーズに応じた指導実践に至るまでのプロセス―質的分析をもとに―（教）

*小林 裕季[1]、齊藤 まゆみ[2] (1. 筑波大学大学院、2. 筑波大学)

テーマ別研究発表 | 学校保健体育研究部会 | 【課題B】保健体育授業をいかに良質なものにするか

# 学校保健体育研究部会【課題 B】口頭発表⑤

座長：細越 淳二（国士館大学）

2023年8月31日(木) 09:00 ～ 09:59 RY203 (良心館２階ＲＹ２０３番教室)

09:00 ～ 09:14

## [学校保健体育-B-17]持久走単元における ICT機器の利活用（教）

コミュニケーションの活性化をねらいとして

*村瀬 浩二[1]、梅澤 秋久[2] (1. 和歌山大学、2. 横浜国立大学)

これまで持久走単元は、体つくり運動や陸上運動のなかで、タイムやペースを目標として実践されてきた。しかし、このような実践は「つらい」、「きつい」といった印象を多く残してきた。運動の得意な児童・生徒、特に日常的に走っている者は、つらさを克服するトレーニングを経てきており、その耐性も高いであろう。一方で、そのようなトレーニングを経ていない者は、とてもきつく感じてしまい運動を苦手とするきっかけとなりえる。特に持久走は将来、最も手軽に参加できるジョギングにつながるものであり、それに対して強い嫌悪感を生み出すことが想定される。

本研究は心拍数計を用い、仲間がその心拍数をモニタリングすることで、心拍数をコントロールする声掛けを行う「マイペースランニング」を実践した。これによって、コミュニケーションが生み出され、持久走への態度を向上させることをねらいとした。本実践において、ほとんどの子どもたちの心拍数は200を越しており、主観的運動強度においても「かなりきつい」レベルに達していた。そのため、「抑えて」「もっとゆっくり」といった子ども同士のコミュニケーションが生み出された。本研究はその単元で得られた感想を分析し、子どもたちの持久走に対する態度の変化を明らかにする。

©一般社団法人 日本体育・スポーツ・健康学会

テーマ別研究発表 | 学校保健体育研究部会 | 【課題B】保健体育授業をいかに良質なものにするか

# 学校保健体育研究部会【課題 B】口頭発表⑤

座長：細越 淳二（国士館大学）
2023年8月31日(木) 09:00 ～ 09:59 RY203 (良心館２階ＲＹ２０３番教室)

09:15 ～ 09:29

## [学校保健体育-B-18]Nー感覚的アプローチとスポーツ教育モデルのハイブリッドモデルの実践提案（教）

マット運動の授業を通して

*成家 篤史[1]、青木 憲吾[2] (1. 帝京大学、2. 白岡市立篠津小学校)

本研究では Nー感覚的アプローチとスポーツ教育モデルのハイブリッドモデルによってマット運動を実践した。提案に際して、問題のある行動をとる子ども（タケシ・仮称）に着目した。タケシに対し、どのような指導を行い、どのように変化したのかということを検討することを通して、 Nー感覚的アプローチを子どもの人間教育に寄与させるにはどのような工夫が必要かということを考察した。
対象は小学6年生でスポーツ教育モデルの導入方法として、シンクロマット発表会（卒業祭）実施した。卒業祭とし、6年生最後の授業参観に保護者を招き、シンクロマットをはじめ、ソーラン節と組体操、跳び箱運動を組み合わせた演目を披露し、これまでの学習の成果と成長を保護者に見せることにした。
　授業を実践してみて、子どもたちが真剣に取り組み甲斐があるテーマ設定の重要性が挙げられる。スポーツ教育モデルの長期的な単元計画の中で、クライマックスに子どもたちが真剣になる必要感が生じるイベントを設定する必要があった。そのため、本実践では卒業祭と銘打って、保護者を招待し、これまでの学習の成果と成長を保護者に見せるという明確なテーマを設定した。そのことにより、子どもたちにとって目標が明確になり、子ども同士の助け合いや学び合いが促された。
　教師は子ども同士の関係性が健全であるために授業の導入でアウェアネストークを行い、授業の中盤で人間教育に関する振り返りを行い、子どもたちの関係性に配慮しながら授業を展開した。アウェアネストークは子どもに意識づけるためであったが、結局は教師自身の行動を律し、子どもへの働きかけにもブレが起きにくい作用があった。その意味でも、アウェアネストークは重要であり、話した内容を常に子どもたちの目に見えるところに掲示しておくことで効果が増すと考える。タケシの変化の詳細については当日発表する。

©一般社団法人 日本体育・スポーツ・健康学会

テーマ別研究発表 | 学校保健体育研究部会 | 【課題B】保健体育授業をいかに良質なものにするか

# 学校保健体育研究部会【課題 B】口頭発表⑤

座長：細越 淳二（国士館大学）
2023年8月31日(木) 09:00 ～ 09:59 RY203 (良心館２階ＲＹ２０３番教室)

09:30 ～ 09:44

## [学校保健体育-B-19]これからの時代に求められる教師の指導性のあり方（教）

子どもの学習観に関わる質的分析を通して

*野田 勇紀[1] (1. 千葉大学大学院)

本研究では、教師行動に対する生徒の要望を知った教師がどのような教師行動を起こすのか、教師の指導観や生徒の要望と照らし合わせながら分析を行い、これからの時代に求められる教師の指導性のあり方について検討を行うことを目的とした。

対象生徒は A県 A中学校の第２学年37名、対象教師は教職歴8年の A教諭であった。研究全体の流れとしては、①第一検証(質問紙調査による生徒全体の傾向把握→教師への伝達・教師行動分析)、②第二検証(抽出生徒三名へのインタビュー→教師への伝達・教師行動分析)と、量的分析から質的分析へと展開した。なお本学会（以下）では、①における結果と考察を述べる。

まず A教師の教師行動は、 A教師自身の指導観に基づくものであると同時に、生徒の求めにも対応するものであった。またこのことから A教師の指導観は、すでに生徒が求めているものと一致していたと考えられた。 ただ一方で、生徒の求めを具体的に知ることにより、彼らが望む教師行動に関する自身の認識を確信することができたとも語っていた。このことから、 A教師は生徒の求めを知ることによって、自身の指導観や生徒に関する考えを裏付け、より強固なものとし、その上で自身の指導観に基づいた教師行動を生起させていたと推察された。そしてこのことは教師の指導観が生徒の求めに対応するものであるからこそ、生徒を導いていく一方で、生徒に歩み寄り、共に寄り添いながら彼らの学びを創っていく教師の新たな指導性の一つであると考えられた。

©一般社団法人 日本体育・スポーツ・健康学会

テーマ別研究発表 | 学校保健体育研究部会 | 【課題B】保健体育授業をいかに良質なものにするか

# 学校保健体育研究部会【課題 B】口頭発表⑤

座長：細越 淳二（国士館大学）
2023年8月31日(木) 09:00 ～ 09:59 RY203 (良心館２階ＲＹ２０３番教室)

09:45 ～ 09:59

## [学校保健体育-B-20]高等学校体育教師が生徒のニーズに応じた指導実践に至るまでのプロセス ー質的分析をもとにー（教）

*小林 裕季[1]、齊藤 まゆみ[2] (1. 筑波大学大学院、2. 筑波大学)

2022年の文部科学省の調査によると、通常学級に在籍する知的発達に遅れはないものの、学習面または行動面で著しい困難を示す児童生徒は小中学校で8.8%、高等学校においては2.2%（文部科学省,2022）と支援が必要な児童生徒がどの校種でも存在することが明らかとなっている。こうした現状を踏まえた体育教師の指導状況に関する先行研究は小中学校段階においては散見されているものの、高等学校段階においては管見の限りない。高等学校における2.2%に該当する生徒の存在も含めて、体育授業において指導上の様々な困難があり、指導に困難を抱える高校体育教師が存在する可能性は否定できないと考える。一方で、その困難に対処し、指導の工夫を生み出す事例も見られる。このことから、困難を覚えた高校体育教師が、指導実践の工夫に至ることで困難を解消できる可能性がある。そこで、本研究の目的は、体育授業において困難を抱える高校体育教師が生徒のニーズに応じた指導実践の工夫に至るプロセスを明らかにすることである。 研究対象者は、「教員養成段階、教員免許更新講習会等での障害児体育（アダプテッドを含む）の経験」「教育困難校配属経験」「障害のある生徒への指導経験」の3項目の中から2項目以上に該当する高等学校保健体育科教師である。調査方法は、個別の半構造化面接法を用いて、「体育授業場面における教師の抱える困難感」「体育授業場面における指導実践」を調査項目とした個別インタビューを実施し、質的分析を行なった。結果として、体育の授業において教師が抱える困難感は学級集団における「運動技能の困難」「モチベーション（意欲）の困難」であることが示唆された。発表では分析を踏まえ、これらの困難感に対し教師が行った指導実践の工夫について報告する。

©一般社団法人 日本体育・スポーツ・健康学会

テーマ別研究発表 | 学校保健体育研究部会：【課題B】保健体育授業をいかに良質なものにするか

2023年8月31日(木) 9:00 ~ 9:59 | RY204 良心館２階ＲＹ２０４番教室

## 学校保健体育研究部会【課題B】口頭発表⑥

座長：伊佐野 龍司（日本大学）

9:00 ~ 9:14

### [学校保健体育-B-21] 教育実習事前指導における球技指導の時間配分を上達させる要因（体育科教育法）

５分間のマイクロティーチングの省察の記述から

*横井 みやび[1]、小磯 透[2]、國土 将平[2] (1. 中京大学大学院スポーツ科学研究科、2. 中京大学スポーツ科学部)

---

9:15 ~ 9:29

### [学校保健体育-B-22] 多様化する保健体育科教員志望学生に関する事例研究（教）

なぜ教師に「なる」「ならない」の選択をするのか

*濱本 想子[1]、中川 麻衣子[2]、前田 一篤[3]、川口 諒[4]、岩田 昌太郎[5] (1. 名桜大学、2. 川崎医療福祉大学、3. 広島文化学園大学、4. 長崎純心大学、5. 同志社大学)

---

9:30 ~ 9:44

### [学校保健体育-B-23] 模擬授業後の協議会における学生の発言の変容に関する研究（教）

他者との対話による協働的なリフレクションに着目して

*川口 諒[1] (1. 長崎純心大学)

---

9:45 ~ 9:59

### [学校保健体育-B-24] 高等学校スポーツ科第1学年におけるストレングストレーナーが行う授業の学習効果について（教）

*山口 裕士[1,2]、笠次 良爾[3] (1. 奈良教育大学教職大学院、2. 横浜市立横浜商業高校、3. 奈良教育大学)

テーマ別研究発表 | 学校保健体育研究部会 | 【課題B】保健体育授業をいかに良質なものにするか

# 学校保健体育研究部会【課題 B】口頭発表⑥

座長：伊佐野 龍司（日本大学）
2023年8月31日(木) 09:00 ～ 09:59 RY204 (良心館２階ＲＹ２０４番教室)

09:00 ～ 09:14

## [学校保健体育-B-21]教育実習事前指導における球技指導の時間配分を上達させる要因（体育科教育法）

５分間のマイクロティーチングの省察の記述から

*横井 みやび[1]、小磯 透[2]、國土 将平[2] (1. 中京大学大学院スポーツ科学研究科、2. 中京大学スポーツ科学部)

【目的】マイクロティーチング（以下 MT）は教育実践力の向上のための手法として活用されている。本研究では教員を目指す学生が教育実習までの実践的授業を通して指導力の向上の程度を明らかにする一環として、５分間の MTの実施後に行った省察における時間配分の記録から、球技指導における時間配分を上達させる要因を検討することを目的とする。【方法】2018～22年度の教職課程授業の1つである教育実習 Iの集中講義で、保健体育教員免許を取得予定であり、教育実習を控えた大学3・4年生436名を対象に、バレーボール、サッカー、ハンドボールの中から1種目を指定し、5分間の MTを実施した。講義後、省察として設問「 MTを行うとき、時間配分をうまくするために、どのようにすればよいと思いますか。」の自由記述内容について、テキストマイニング（ KH-Coder）を施した。抽出語（自動上位150語、強制37語、除外「時間」「時間配分」の２語）について共起ネットワークによりその関係を分析した。なお、2018-19年の学生（ Ⅰ群）は事前の学習で MTの経験があったが、2021-22年の学生（ Ⅱ群）は MT経験がないため、個々に解析した。【結果・考察】共起ネットワーク図の上位30位の出現語の Jaccard係数は0.125以上であった。両群とも準備段階・実践中に関わる語群が出現した。「時計」「生徒」に関する語群は Ⅰ - Ⅱ群とも出現したが、「指導案」「説明」に関係する18語の語群は Ⅰ群だけに出現し、「こまめ」「伝える」「ポイント」など、指導に直結する具体的な語が含まれていた。 Ⅰ群は本講義前に1回以上 MTを経験していたため、具体的な要因を挙げられていたと考えた。【結論】5分間の MTで学生は時間配分の要因として、準備段階と実践中の要因を挙げることができる。 MTの事前経験がある場合に観点がより具体的になる。

©一般社団法人 日本体育・スポーツ・健康学会

テーマ別研究発表 | 学校保健体育研究部会 | 【課題B】保健体育授業をいかに良質なものにするか

# 学校保健体育研究部会【課題 B】口頭発表⑥

座長：伊佐野 龍司（日本大学）

2023年8月31日(木) 09:00 ～ 09:59 RY204 (良心館２階ＲＹ２０４番教室)

09:15 ～ 09:29

## [学校保健体育-B-22]多様化する保健体育科教員志望学生に関する事例研究（教）

なぜ教師に「なる」「ならない」の選択をするのか

*濱本 想子[1]、中川 麻衣子[2]、前田 一篤[3]、川口 諒[4]、岩田 昌太郎[5] (1. 名桜大学、2. 川崎医療福祉大学、3. 広島文化学園大学、4. 長崎純心大学、5. 同志社大学)

近年、教員免許状取得者数や教員採用試験受験者数は減少し、教師のなり手不足が問題視されている。特に、教員志望学生の減少は少子化や学校現場のブラックなイメージ、就職状況の好転などが要因として挙げられる。教員養成を担う大学等の役割は、その減少に歯止めをかけるだけでなく、教師の質を高める上でも今後より重要視されるだろう。保健体育科に着目すると、2020年度に大学等で中学校教員の一種免許状を取得した学生は7,822名と全教科の中で最も多い（2番目は社会科の5,494名：総合教育政策局教育人材政策課，2022）。また、教員採用者数においては、主要5教科と同程度であるが倍率は最も高い。つまり、免許状を取得して教師に「なる」ー「なれない」、そして「ならない」人も多くいるのである。では、その進路決定の理由や経緯は如何なるものか。情報化や多様化が進む現代において、その内実は個々の学生で異なるだろう。より良い教師のなり手を増やす方策を考える上で、まずは教員免許状取得を目指す学生が有する多様な考えに着目する必要があろう。そこで本研究の目的は、保健体育科教職課程を有する複数の大学で、保健体育教師に「なる」「ならない」ことを決めている4年生（8名程度）を対象に、その選択の理由や経緯について、インタビュー調査を通して実態を深く探究することである。インタビューガイドは、予備調査を踏まえて作成した。インタビュー記録はテキストデータ化し、 NVivoを用いて分析を行う。予備調査の結果から、保健体育教師に「なる」学生は高校時代の経験から生じた使命感や運動への愛好などが理由であり、教職課程の学びを通してより強固となっていた。一方、「ならない」学生は、採用試験の難易度の高さなどが「なれない」理由の一つであったが、教職課程の学びそのものの価値を感じ履修を続けた。当日は、本調査の結果について詳細に発表する。

©一般社団法人 日本体育・スポーツ・健康学会

テーマ別研究発表 | 学校保健体育研究部会 | 【課題B】保健体育授業をいかに良質なものにするか

# 学校保健体育研究部会【課題 B】口頭発表⑥

座長：伊佐野 龍司（日本大学）

2023年8月31日(木) 09:00 ～ 09:59 RY204 (良心館２階ＲＹ２０４番教室)

09:30 ～ 09:44

## [学校保健体育-B-23]模擬授業後の協議会における学生の発言の変容に関する研究（教）

他者との対話による協働的なリフレクションに着目して

*川口 諒[1] (1. 長崎純心大学)

教員の質の向上と同時に教員養成課程の質保証が求められている。2017年に教職課程コアカリキュラムが公表され、教職課程で習得すべき資質能力が示された。その中で、教科指導力の育成を担っている各教科の指導法の科目において、到達目標として模擬授業の実施と振り返りを通して授業改善の視点を身につけることが設定された。わが国における体育教師教育の分野では、1990年代頃から模擬授業に関する研究が積極的に展開されており（藤田，2015），2000年代頃からは模擬授業における学生のリフレクションを対象とする研究が報告されてきた。

このような報告が蓄積されている一方で、模擬授業後の協議会で必ずしも十分に学生のリフレクションを促しえていないことが指摘されている（渡辺・岩瀬，2017）。渡辺・岩瀬（2017）は、従来の協議会を発展させる形で「対話型模擬授業検討会」を提案しており、従来型検討会は、「授業者役は教わる、学習者役は評価したり助言したりするという非対称な関係」であるのに対し、対話型検討会では、「それぞれの立場から感じたことや考えたことを出し合うフラットな関係」という点に発想の違いがあるとしている。 しかしながら、この発想に基づいて実施されている実践は教職大学院を対象としたものがほとんどである（渡辺，2019；奥村ほか，2020；中井・山本，2022）。大学院生は学部生よりも実践的な知識や教育実践の経験を有していると考えられ、また、現職教員も参加しているケースも多く、学生自身で協議会を運営したりファシリテートしたりすることが可能であると考えられる。

そこで本研究では、体育科の教科教育法で実施される模擬授業後の協議会を対象として、そこで生起する学生同士の対話の実態を明らかにすることを目的とする。特に、少人数のグループを形成して学生の対話を促すことによる効果について検討する。

©一般社団法人 日本体育・スポーツ・健康学会

テーマ別研究発表 | 学校保健体育研究部会 | 【課題B】保健体育授業をいかに良質なものにするか

# 学校保健体育研究部会【課題 B】口頭発表⑥

座長：伊佐野 龍司（日本大学）
2023年8月31日(木) 09:00 ～ 09:59 RY204 (良心館２階ＲＹ２０４番教室)

09:45 ～ 09:59

## [学校保健体育-B-24]高等学校スポーツ科第1学年におけるストレングストレーナーが行う授業の学習効果について（教）

*山口 裕士[1,2]、笠次 良爾[3] (1. 奈良教育大学教職大学院、2. 横浜市立横浜商業高校、3. 奈良教育大学)

これまでに高等学校のスポーツ科における研究は、中村（2020）、千代ら（2013）などによって行われているが、これらの研究では、高等学校のスポーツ科における授業の課題の一つとして、「専門家との連携」があげられてきた。従って、教員以外の専門家が常駐して、高等学校のスポーツ科に所属する生徒に対して、授業を行った場合の学習効果について検討することは重要である。 Y高等学校では、「スポーツマネジメント科」が設けられ、ストレングストレーナー（ NSCA-CSCS有資格者）が常駐し、「スポーツ科学」の授業を3年間のカリキュラムを組んで行っている。そこで、 Y高等学校での「スポーツ科学」の授業実践について事例的に取り上げ、その学習効果について検討することを本研究の目的とした。 Y高等学校スポーツマネジメント科に所属する第1学年の生徒39名（男子30名、女子９名）のうちアンケートに回答した38名を対象とした。対象は全員が運動部活動に所属もしくは、外部団体でスポーツを選手として行っていた。スポーツ科学の授業は、「講義」と「実技」の2時間連続の授業であり、1年生の2学期には計18時間の授業を行った。「講義」では、筋の収縮様式や各関節の機能解剖などの学習を行い、「実技」では、スクワットやベンチプレスなどの基本的なエクササイズのフォームの習得を行った。なお、授業はストレングストレーナーと教員とのティームティーチング方式で行った。 スポーツ科学の授業では、「スポーツを効果的・効率的にかつ安全に行うために学習に主体的に取り組むこと」が科目の目標及び到達目標として設定されている。そのため、生徒が、スポーツ科学１の授業を通して学んだことを自身の実践（競技）に結びつけることができているかという側面から効果検証を行った。方法は、2学期の終了時にアンケート調査を実施した。詳細の授業実践と結果と考察については当日発表する。

©一般社団法人 日本体育・スポーツ・健康学会

テーマ別研究発表 | 学校保健体育研究部会：【課題C】体育・スポーツ健康科学は学校保健体育の進展にいかに貢献できるか

2023年8月31日(木) 9:00 ~ 9:59 | RY206 良心館２階ＲＹ２０６番教室

## 学校保健体育研究部会【課題C】口頭発表④

座長：松田 恵示（立教大学）

9:15 ~ 9:29

[学校保健体育-C-14] 高等学校における体育実技授業の実態調査（教,方）

高等学校教員を対象としたアンケート調査から

*藤本 敏彦[1]、中原 雄一[2] (1. 東北大学高度教養教育・学生支援機構、2. 福岡県立大学)

---

9:30 ~ 9:44

[学校保健体育-C-15] 体育授業における認識学習が運動有能感に及ぼす影響（教）

小学校高学年の走り高跳びの実践

*小畑 治[1] (1. 天理大学)

---

9:45 ~ 9:59

[学校保健体育-C-16] 発達性協調運動障害特性のある子どもの運動主体感に関する研究（発）

身体活動における粗大運動測定ツールの開発

*鄭 賢雨[1]、澤江 幸則[1] (1. 筑波大学体育系)

# 学校保健体育研究部会【課題 C】口頭発表④

座長：松田 恵示（立教大学）

2023年8月31日(木) 09:00 ～ 09:59 RY206 (良心館２階ＲＹ２０６番教室)

09:15 ～ 09:29

## [学校保健体育-C-14]高等学校における体育実技授業の実態調査（教,方）

高等学校教員を対象としたアンケート調査から

*藤本 敏彦[1]、中原 雄一[2] (1. 東北大学高度教養教育・学生支援機構、2. 福岡県立大学)

高等学校（以下高校）における体育実技の意義や実施方法について、これまで評価はほとんど行われていない。我々は昨年の当学会大会において、大学生2,485名を対象に高校時代の体育実技についての調査結果を発表した。今回は同様内容のアンケート調査を当該大学生が卒業した高校525校と、その学校を除く全国から無作為に選んだ高校170校、計695校の体育教員を対象に実施した結果を報告する。 回答数[N1] は167校、回答率は24.0%であった。高校での体育実技の意義の理解とその必要性についての質問に対して、98.8%の高校教員が意義の理解の如何を問わず必要と考えていることが明らかとなった。この結果は大学生の回答とほぼ一致しており、教育条件・環境としては非常に良好な状態にある事を示している。また生徒の体育実技の意義の理解度について質問の質問では、「生徒は十分理解していた」が19.2%、「ある程度理解していたと思う」が77.2%、合計96.4%であった。一方、大学生の64.3%が「解していなかった」と回答しており、教員の思いが十分に通じていない可能性が示された。さらに教員の体育実技の指導法については「先生からの個人的アドバイスのみならず、生徒が教えあうなど、コミュニケーションが図れるような指導」が70.1%、「先生からの個人的アドバイスが中心の指導」が10.2%、「先生からの全体的アドバイスが中心の指導（個人的アドバイスはあまりない）」16.2%であり、積極的指導をしているとの回答が97.6%であった。この結果からすると、高校の体育実技では消極的な指導はほとんど無行われていない事になるが、大学生を対象とした調査結果では28.2%が体育実技において教員の積極的な指導を受けていない可能性が示されており、大きく異なるものであった。教員は体育実技を生徒の立場から考える事が授業改善の一助になると思われる。

©一般社団法人 日本体育・スポーツ・健康学会

テーマ別研究発表 | 学校保健体育研究部会 | 【課題C】体育・スポーツ健康科学は学校保健体育の進展にいかに貢献できるか

# 学校保健体育研究部会【課題 C】口頭発表④

座長：松田 恵示（立教大学）
2023年8月31日(木) 09:00 ～ 09:59 RY206 (良心館２階ＲＹ２０６番教室)

09:30 ～ 09:44

## [学校保健体育-C-15]体育授業における認識学習が運動有能感に及ぼす影響（教）

小学校高学年の走り高跳びの実践

*小畑 治[1] (1. 天理大学)

本研究は,体育授業の学習課題となる運動技術について,個人の感覚やイメージを言語化したものを共有し,その中から自分の意識しやすいものを選択して具体化させて取り組ませることによって,児童の運動有能感を高めることを目的に行った．対象は小学校6年生の「走り高跳び」であり,「助走」「踏み切り」「空中動作」の局面において意識する内容を具体化できるように単元を計画した．
実践の結果, 走り高跳びの記録はクラス全体平均で高まり,「身体的有能さの認知」「統制感」「受容感」「運動有能感合計」の得点は単元を通して高まった．要因としては,意識して取り組むことを具体化することによって自らの運動に期待や見通しが持てたこと,記録の更新だけでなく自らの動きの変容から上達を実感できたこと,動画による比較によってそれがより鮮明に認知できたことが考えられる．
「受容感」については交互作用に有意差がみられた．個人の感覚やイメージを言語化したものをお互いに尊重し，多様な表現を出し合えたことが，受容感の下位群にとってより鮮明に認知されたため，有意な得点の高まりに影響を及ぼしたと考えられる．
ただ本実践は,小規模学級での実践であったため,このような認識学習が運動有能感に及ぼす影響について異なる学級や学年においても検討を加え,継続的に実践的研究を進めていかなければならない．

©一般社団法人 日本体育・スポーツ・健康学会

# 学校保健体育研究部会【課題 C】口頭発表④

座長：松田 恵示（立教大学）

2023年8月31日(木) 09:00 ～ 09:59 RY206 (良心館２階ＲＹ２０６番教室)

09:45 ～ 09:59

## [学校保健体育-C-16]発達性協調運動障害特性のある子どもの運動主体感に関する研究（発）

身体活動における粗大運動測定ツールの開発

*鄭 賢雨[1]、澤江 幸則[1] (1. 筑波大学体育系)

神経学的障害や認知的問題がなくても、身体的器用さが年齢より劣っており、日常生活や学業に支障がある子どもを発達性協調運動障害(Developmental Coordination Disorder: 以下 DCD)と言う。 DCD的な特性を有する子ども(以降、 DCD児)の根本的な身体的不器用さは内的・外部の動きをあらかじめ予測して反応させるため、主観的な認識と関係がある。主観的な認識の変化に影響を及ぼす感覚のひとつに運動主体感がある。最近の DCD研究においては、微細運動を対象とした研究が殆どで、体育・運動・スポーツ場面において DCD児の最大の問題点である身体的な不器用さは微細運動ではなく粗大運動であることから、本研究では粗大運動における運動主体感測定ツール(以降、開発ツール)を、すでに妥当性が確認されている Agency attribution task (Keio Method微細運動測定ツール、以降、 Keio ツール)を外的基準にして開発することを目的とした。 成長期にある学童期に比べて複数回の測定結果が比較的安定すると考えられる成人期の学生20名を対象に、上記の２つのツールを実施させ得られたデータをもとに、ピアソン相関係数とウィルコクソンの符号順位検定を用いて分析した。 その結果、１つ目に、 Keio ツールと開発ツールとの間に高い相関係数(r=0.885 p=0.01)が認められた。２つ目に、開発ツールの1回目と2回目の間に高い相関係数（ r=0.942 p=0.01）が認められた。また、開発ツールは野球のスイングをベースに作って開発したため、野球経験の有無による違いを調べた。その結果、1回目は Z=-.613(p=.540)、2回目は Z=-1.264 (p=.206)となり、野球経験の有無は関係なかった。以上の結果から、本研究による開発ツールは粗大運動の運動主体感を分析するのに有用な測定ツールと考えた。

©一般社団法人 日本体育・スポーツ・健康学会

テーマ別研究発表 | 健康福祉研究部会：【課題B】認知機能の維持・改善に運動・スポーツはいかに貢献するか

2023年8月31日(木) 9:00 ~ 9:59 | RY301 良心館３階ＲＹ３０１番教室

## 健康福祉研究部会【課題B】口頭発表①

座長：樋口 貴広（東京都立大学）

9:00 ~ 9:14

[健康福祉-B-01] 近赤外分光法を用いたヒト運動抑制機能への軽運動の影響（生）

*赤塚 康介[1]、滿園 良一[2] (1. 久留米工業高等専門学校、2. 久留米大学)

9:15 ~ 9:29

[健康福祉-B-02] 障害物跨ぎ越し歩行においてハザードストライプの障害物は足部軌跡に影響を与えるか？（バ）

*三浦 有花[1] (1. 武庫川女子大学健康・スポーツ科学部)

9:30 ~ 9:44

[健康福祉-B-03] バーチャルリアリティを用いた身体協調性を向上させる方法の提案（介,心）

*須田 祐貴[1,2]、石井 利樹[1]、原薗 迪子[1]、福原 和伸[1]、樋口 貴広[1] (1. 東京都立大学人間健康科学研究科、2. 日本学術振興会特別研究員（DC2）)

9:45 ~ 9:59

[健康福祉-B-04] 非利き手による筆記作業が注意機能に及ぼす影響（介）

*多田 裕紀[1]、原 丈貴[2]、辻本 健彦[3] (1. 島根大学大学院人間社会科学研究科、2. 島根大学教育学部、3. 島根大学人間科学部)

テーマ別研究発表 | 健康福祉研究部会 | 【課題B】認知機能の維持・改善に運動・スポーツはいかに貢献するか

# 健康福祉研究部会【課題 B】口頭発表①

座長：樋口 貴広（東京都立大学）

2023年8月31日(木) 09:00 ～ 09:59 RY301 (良心館３階ＲＹ３０１番教室)

09:00 ～ 09:14

## [健康福祉-B-01]近赤外分光法を用いたヒト運動抑制機能への軽運動の影響（生）

*赤塚 康介[1]、滿園 良一[2] (1. 久留米工業高等専門学校、2. 久留米大学)

前頭葉の持つ運動抑制機能に対する運動強度の影響について近赤外スペクトロスコピー(Near-infrared spectroscopy: NIRS)を用いた実験を行った。運動抑制機能を測る方法として、 Go/No-go taskを用いた。Go/No-go taskは、2種類の刺激を被験者に無作為に与え、1つの刺激を Go刺激とし、その刺激が呈示された際には被験者が反応動作を実行し、もう一方の Nogo刺激が呈示された際には反応動作を実行しない、という課題である。被験者には、二つの実験(安静条件・運動条件)を行ってもらった。安静条件では、まず安静時 Go/No-go taskを行い、そのまま15分間座位のまま安静状態を保ってもらい、その後再び Go/No-go taskを行った。運動条件では、安静条件同様にまず Go/No-go taskを行った。その後、10分間の自転車運動を行ってもらい、その後再び Go/No-go taskを行った。このときの運動強度は、30%強度とした。この運動強度を決定する方法として、カルボーネン法を用いた。カルボーネン法は、最大心拍数と安静時心拍数を用いて運動強度を推定する方法である。実験の結果、10分間の自転車運動を行った運動条件では運動の前後で No-Go刺激に対する反応の増大が見られた。一方、運動を行わずにいた安静条件では安静の前後で Nogo刺激に対する反応に変化は見られなかった。先行研究より、ある程度の強度で行われる運動は、ヒトの運動抑制機能に影響を与えていることが分かっている。また、今回の実験では NIRSを右前頭前野を測定できる部位に設置している。右前頭前野は、ヒトの運動抑制機能の責任部位である。今回の実験により、軽強度の運動においてもヒトの運動抑制機能に影響を与えることが示唆された。

©一般社団法人 日本体育・スポーツ・健康学会

テーマ別研究発表 | 健康福祉研究部会 | 【課題B】認知機能の維持・改善に運動・スポーツはいかに貢献するか

# 健康福祉研究部会【課題 B】口頭発表①

座長：樋口 貴広（東京都立大学）
2023年8月31日(木) 09:00 ～ 09:59 RY301 (良心館３階ＲＹ３０１番教室)

09:15 ～ 09:29

## [健康福祉-B-02]障害物跨ぎ越し歩行においてハザードストライプの障害物は足部軌跡に影響を与えるか？（バ）

*三浦 有花[1] (1. 武庫川女子大学健康・スポーツ科学部)

黄色と黒のストライプ模様はハザードストライプとして知られており、工事現場や踏切等の様々な場面で注意傾向を促すサインに用いられている。このような性質を持つハザードストライプは我々の運動にも影響を与えている可能性が考えられるが明らかではない。そこで本研究では、ハザードストライプの障害物が跨ぎ越し動作に与える影響を明らかにすることを目的とした。 健常な若年成人13名を対象とし、対象者は運動靴を着用した状態で、歩行中に長方形（高さ15 cm; 幅60 cm; 奥行1.5 cm）で模様の異なる障害物を跨ぐ課題を実施した。障害物は斜め模様とし、黄色・黒（ YB条件）、黄色・白（ YW条件）、白・黒（ WB条件）、白（ W条件）の4条件とした。対象者が着用した運動靴のつま先に貼付した反射マーカーの座標データから、先行脚、後続脚それぞれにつま先から障害物までの鉛直方向の距離である vertical clearanceを算出した。 本実験の結果、先行脚、後続脚共に vertical clearanceはそれぞれの条件で有意な差は認められず、ハザードストライプは跨ぎ越し動作に影響しない可能性が示された（先行脚 YB条件: 149.74±31.87 mm; YW条件: 148.85±29.81 mm; WB条件: 147.87±30.67 mm; W条件: 149.17±30.54 mm; 後続脚 YB条件: 134.39±43.55 mm; YW条件: 134.44±48.64 mm; WB条件: 134.93±36.87 mm; W条件: 132.74±36.35 mm）。 障害物跨ぎ越し歩行において、跨ぐべき障害物がハザードストライプであっても、 vertical clearanceに影響を与えないことが示唆された。

©一般社団法人 日本体育・スポーツ・健康学会

テーマ別研究発表 | 健康福祉研究部会 | 【課題B】認知機能の維持・改善に運動・スポーツはいかに貢献するか

# 健康福祉研究部会【課題 B】口頭発表①

座長：樋口 貴広（東京都立大学）

2023年8月31日(木) 09:00 ～ 09:59 RY301 (良心館３階ＲＹ３０１番教室)

09:30 ～ 09:44

## [健康福祉-B-03]バーチャルリアリティを用いた身体協調性を向上させる方法の提案（介,心）

*須田 祐貴[1,2]、石井 利樹[1]、原薗 迪子[1]、福原 和伸[1]、樋口 貴広[1] (1. 東京都立大学人間健康科学研究科、2. 日本学術振興会特別研究員（DC2）)

高齢者の転倒の多くは，段差を跨ぐなどの障害物回避場面で起こる。この背景に，高齢者が状況に応じた歩行調整の苦手さが指摘されている。こうした環境変化の中で制御目的（段差に対して一定のマージンを作ってまたぐなど）を達成するためには，身体の多様な自由度（関節など）の協調性が必要である。身体協調性の定量化にはUncontrolled manifold解析が利用され，高齢者の身体協調性低下が示されている。高齢者が状況に応じて動きを調整できない理由には，動きが固定化されることも指摘されている。したがって，動きのバリエーションを増やすための調整経験によって，高齢者の身体協調性が改善できる可能性がある。本研究の目的は，バーチャルリアリティ（ VR）環境を用いて動作の調整を促すことが，身体協調性を向上させるかを検討することである。 VR環境であれば，転倒の危険がない状況で調整経験を積むことができる。本研究では，まずシステムの有効性を確認するために若齢者30名を対象にした。本研究で使用する VRシステムは，スクリーンに映像を映し出し，足踏みを行うことで歩行しているかのように映像が進む。プレ・ポストテストでは， VR環境下で高さが一定の段差を跨いだ。介入課題では， VR環境下で足踏み動作の途中で左右の段差高が変化する段差に対して空間マージンを最小に跨ぐことが求められた。衝突率，身体協調性（Δ Vz）を算出し，プレ・ポストテストの間で比較した。その結果，ポストテストにおいてΔ Vzが有意に増加した。この結果から，動きの調整経験によって身体協調性が向上することが分かった。しかしながら，衝突率の上昇も見られた。したがって， VR環境下で動作の調整を促す介入は，身体協調性を向上させるため有効である一方で，安全管理の面では改良が必要である可能性が示唆された。今後はシステムの改良とともに高齢者に対して検討を進めていく。

©一般社団法人 日本体育・スポーツ・健康学会

テーマ別研究発表 | 健康福祉研究部会 | 【課題B】認知機能の維持・改善に運動・スポーツはいかに貢献するか

# 健康福祉研究部会【課題 B】口頭発表①

座長：樋口 貴広（東京都立大学）

2023年8月31日(木) 09:00 ～ 09:59  RY301 (良心館３階ＲＹ３０１番教室)

09:45 ～ 09:59

## [健康福祉-B-04]非利き手による筆記作業が注意機能に及ぼす影響（介）

*多田 裕紀[1]、原 丈貴[2]、辻本 健彦[3] (1. 島根大学大学院人間社会科学研究科、2. 島根大学教育学部、3. 島根大学人間科学部)

【背景及び目的】先行研究において、利き手よりも非利き手による筆記作業の方が、より前頭部の血流量を増加させることが報告されているが、注意機能に及ぼす影響までは十分に検討されていない。本研究では、非利き手による筆記作業が注意機能に及ぼす影響を利き手と比較することで検討を行った。【方法】対象者は、健常な若年男女38名（男性22名、女性16名、年齢20.1±1.4歳、全員右利き手）である。実験は、利き手条件の日と非利き手条件の日を無作為に振り分け、計2日間実施した。注意機能の測定には、ストループテスト及び trail making test（ TMT）の partBを用いて行った。ストループテストは、 color naming（ CN）課題、 incongruent color naming（ ICN）課題の2つの課題とした。ストループテストと TMTは、連続で5回ずつ測定し、最高値と最低値を除く3回の平均値を算出した。筆記作業の内容は、利き手もしくは非利き手で、マス目が描かれたシートに鉛筆で5分間丁寧できれいな文字を書くこととした。文字は平仮名、片仮名、アルファベット等を中心に対象者の任意とした。筆記作業後、再び注意機能の測定を行った。【結果】 CN課題及び ICN課題のいずれも、測定時間は利き手条件と非利き手条件でともに有意に短縮した。 TMTの測定時間も、利き手条件と非利き手条件でともに有意に短縮した。ストループ干渉の大きさを示す ICN課題と CN課題の測定時間の差（干渉時間）は、利き手条件、非利き手条件ともに有意な差はみられなかった。また、利き手条件と非利き手条件との間で、筆記作業の前後における CN課題、 ICN課題、 TMTの測定時間の変化量に有意な差はみられなかった。【結論】利き手及び非利き手による筆記作業は、一時的に注意機能を改善させることが示唆された。

©一般社団法人 日本体育・スポーツ・健康学会

テーマ別研究発表 | 健康福祉研究部会：【課題B】認知機能の維持・改善に運動・スポーツはいかに貢献するか

2023年8月31日(木) 9:00 ~ 9:59 | RY302 良心館３階ＲＹ３０２番教室

## 健康福祉研究部会【課題B】口頭発表②

座長：根本 みゆき（筑波大学）

9:00 ~ 9:14

### [健康福祉-B-05] 等尺性ハンドグリップトレーニングが認知機能に及ぼす影響（生）

運動習慣のない地域在住中高齢者を対象として

*山形 高司[1] (1. 川崎医療福祉大学)

9:15 ~ 9:29

### [健康福祉-B-06] 高齢者における道路横断判断に対する知覚トレーニングの効果検証（測,心）

*佐藤 和之[1]、樋口 貴広[1] (1. 東京都立大学)

9:30 ~ 9:44

### [健康福祉-B-07] 生体電気インピーダンス（BIA）法で測定した細胞内外水分抵抗比率は高齢者の身体機能評価指標として有用か？（介）

*浅野 優次郎[1]、辻 大士[2]、大藏 倫博[2,3] (1. 筑波大学 人間総合科学研究科　体育科学プログラム　博士後期課程、2. 筑波大学　体育系、3. テーラーメイドQOLプログラム開発センター)

9:45 ~ 9:59

### [健康福祉-B-08] 足趾チョキ動作の定量的評価による足趾機能評価の可能性（測）

*安部 征哉[1,2]、権野 めぐみ[3]、野村 照夫[3]、来田 宣幸[3] (1. びわこリハビリテーション専門職大学、2. 京都工芸繊維大学大学院、3. 京都工芸繊維大学)

テーマ別研究発表 | 健康福祉研究部会 | 【課題B】認知機能の維持・改善に運動・スポーツはいかに貢献するか

# 健康福祉研究部会【課題 B】口頭発表②

座長：根本 みゆき（筑波大学）

2023年8月31日(木) 09:00 ～ 09:59 RY302 (良心館３階ＲＹ３０２番教室)

09:00 ～ 09:14

## [健康福祉-B-05]等尺性ハンドグリップトレーニングが認知機能に及ぼす影響（生）

運動習慣のない地域在住中高齢者を対象として

*山形 高司[1] (1. 川崎医療福祉大学)

【背景】近年、等尺性筋収縮を用いた筋力トレーニングによる降圧効果が示唆されている（ Yamagata et al. 2020）。血圧は認知機能と関連することが知られている（ Novak et al. 2010）。すなわち等尺性筋力トレーニングによる認知機能の改善が期待される。先行研究において一過性の等尺性ハンドグリップ運動による認知機能の向上が示唆されているが（ Washio et al. 2021）、トレーニングに伴う認知機能の変化に関する報告は知る限りにおいてみられない。そこで本研究の目的は、等尺性ハンドグリップトレーニングによる認知機能への影響について検討することとした。

【方法】対象者は運動習慣のない地域在住中高齢者14名とし、コントロール（ C）群6名とトレーニング（ T）群8名にランダムに割り当てた。トレーニングは等尺性筋収縮を用いた30%MVCによる2分間の等尺性ハンドグリップ運動とし、1分間の休息をはさんで左右交互に4セット実施した。トレーニング頻度は週3回、期間は8週間として、介入前後の安静時血圧および認知機能を測定した。認知機能の測定には、ストループテストを用いた。介入期間前後における測定値の変化量の群間比較には、 Mann-Whitney検定を用いた。有意水準は5%未満とした。

【結果】拡張期血圧は T群で C群に比して有意に低下した（平均値の群間差：-4.8 mmHg、$P = 0.047$）。ストループテストの測定値は、ストループ課題の反応時間およびストループ干渉率の変化に両群間で有意な差は認められなかったが、単純課題における反応時間は T群で C群に比して有意な短縮が認められた（平均値の群間差：-0.12 sec、$P = 0.043$）。

【結論】 運動習慣のない地域在住の中高齢者を対象とした8週間の等尺性ハンドグリップトレーニングは、降圧とともに情報処理速度を向上させる可能性が示唆された。

©一般社団法人 日本体育・スポーツ・健康学会

テーマ別研究発表 | 健康福祉研究部会 | 【課題B】認知機能の維持・改善に運動・スポーツはいかに貢献するか

# 健康福祉研究部会【課題 B】口頭発表②

座長：根本 みゆき（筑波大学）
2023年8月31日(木) 09:00 ～ 09:59 RY302 (良心館３階ＲＹ３０２番教室)

09:15 ～ 09:29

## [健康福祉-B-06]高齢者における道路横断判断に対する知覚トレーニングの効果検証（測,心）

*佐藤 和之[1]、樋口 貴広[1] (1. 東京都立大学)

【はじめに】高齢者の死亡事故の中には，道路横断時の判断ミスに起因するものは少なくない。判断ミスの1つに、車の接近速度を正確に認識していない問題がある。車の接近速度の認識ためには、接近に伴う網膜上の車のサイズの拡大率を正確に知覚する必要である。高齢者はこの拡大率の知覚感度が低下し、衝突予測能力が低下する可能性があることから、高齢者の道路横断判断の改善には、移動物体の拡大率の知覚を改善させる練習が効果的であると考えられる。そこで本研究では高齢者を対象に、接近物体の拡大率の知覚に特化した練習が、衝突予測能力および道路横断判断の改善に有効であるか検証した。【方法】65歳以上の地域在住高齢者18名（72.5±5.8歳）を、拡大率の知覚に特化した練習課題群（ ET群）とインターセプション課題群（ IT群）との２群にランダムに分類した。それぞれの課題の練習時間は１時間とした。練習効果の判定として、衝突予測パフォーマンス、接近物体の拡大率に対する感度、道路横断判断の正確性を評価した。練習前後の2地点の測定時期における各アウトカムが練習課題によって異なるかを線形混合モデルで分析した。【結果】衝突予測パフォーマンス、接近物体の拡大率に対する感度に関して、測定時期および練習課題の効果は有意ではなかった。道路横断判断の正確性に関して、練習課題と測定時期の有意な交互作用効果を認めた。 ET群では、練習前から練習後にかけて有意に道路横断判断の正確性が改善した。一方、 IT群で有意な変化はなかった。【考察】拡大率の知覚に特化した練習が道路横断判断の改善に有効である可能性が示唆されたが、移動物体に対する衝突予測能力および拡大率の感度改善の効果は十分ではないと考えられた。今後は知覚感度の改善を伴う道路横断判断の正確性が向上する練習システムの開発が必要である。

©一般社団法人 日本体育・スポーツ・健康学会

テーマ別研究発表 | 健康福祉研究部会 | 【課題B】認知機能の維持・改善に運動・スポーツはいかに貢献するか

# 健康福祉研究部会【課題 B】口頭発表②

座長：根本 みゆき（筑波大学）

2023年8月31日(木) 09:00 ～ 09:59  RY302 (良心館３階ＲＹ３０２番教室)

09:30 ～ 09:44

## [健康福祉-B-07]生体電気インピーダンス（ BIA）法で測定した細胞内外水分抵抗比率は高齢者の身体機能評価指標として有用か？（介）

*浅野 優次郎[1]、辻 大士[2]、大藏 倫博[2,3] (1. 筑波大学 人間総合科学研究科　体育科学プログラム　博士後期課程、2. 筑波大学　体育系、3. テーラーメイドQOLプログラム開発センター)

目的 BIAで測定した高齢者の全身、上肢、下肢細胞内外水分抵抗比率（以下、抵抗比率）と身体機能との関連を明らかにし、それらの関連はどの部位が強いのか、筋肉量と身体機能との関連より強いのかを検証する。
方法 2011から2020年に茨城県笠間市で実施したコホート研究に参加し、 BIA測定に欠損のない989名（重複なし）を分析対象者とした。抵抗比率はマルチ周波数体組成計（ MC980A、 TANITA）を用い、部位ごとに測定した抵抗値から算出した。身体機能は握力、開眼片足立位、5回椅子立ち上がり、 Timed up and go（ TUG）、5m通常歩行を測定した。重回帰分析を用い、従属変数に各身体機能項目、独立変数に全身、上肢、下肢の抵抗比率を個別に投入し、性、年齢、 BMI、独立変数と同じ部位の筋肉量を調整した。また、身体機能との間の相関係数を抵抗比率と筋肉量のそれぞれで算出し、 CORTESTI（ STATA）を用いて比較した。
結果 全身、下肢の抵抗比率と全ての身体機能、および上肢の抵抗比率と握力、開眼片足立位、5回椅子立ち上がりとの間に仮説に沿った有意な関連が見られた。また、5回椅子立ち上がり(r=-0.31)、5m通常歩行(r=-0.33)、TUG(r=-0.44)で下肢の抵抗比率が他の部位の抵抗比率および全ての部位の筋肉量に比べて有意に強く関連した。一方、握力は、全身の筋肉量が全ての部位の抵抗比率より関連が強かった。
考察 抵抗比率は筋肉の質的側面を反映しやすいため動的バランス能力や調整力等を含む機能的項目との関連が強い。一方、筋肉量は量的な側面（筋力発揮）との関連が強いと考えられる。
結論　下肢の抵抗比率は他の部位や筋肉量と比べて様々な身体機能との関連が強かった。抵抗比率は高齢者の身体機能を評価する上で、筋肉量より優れた側面がある可能性が示された。

©一般社団法人 日本体育・スポーツ・健康学会

# 健康福祉研究部会【課題 B】口頭発表②

座長：根本 みゆき（筑波大学）

2023年8月31日(木) 09:00 ～ 09:59 RY302 (良心館３階ＲＹ３０２番教室)

09:45 ～ 09:59

## [健康福祉-B-08]足趾チョキ動作の定量的評価による足趾機能評価の可能性（測）

*安部 征哉[1,2]、権野 めぐみ[3]、野村 照夫[3]、来田 宣幸[3] (1. びわこリハビリテーション専門職大学、2. 京都工芸繊維大学大学院、3. 京都工芸繊維大学)

＜緒言＞足趾の運動機能については手指の運動と比較して動作的な分析は不十分である。そこで本研究ではリハビリ場面で実施されているトレーニングおよび評価法を参考にして足趾の運動機能を定量的に評価する方法を考案しその条件間で比較することを目的とした。＜方法＞対象は健常な女性16名（16～17歳）とした。対象者は椅座位で足底を床に接地させた状態で足趾の上げ下ろしをおこなった。条件は（1）全足趾を最大背屈させる条件（パー条件）、（2）第2～5趾を最大背屈させ母趾を床に接地させる条件（母趾下チョキ条件）、（3）母趾を最大背屈させ第2～5趾を床に接地させる条件（母趾上チョキ条件）とした。また動作中は股関節と膝関節が90度になるように座り両膝間にボールを挟んだ。動作データの収集には三次元動作解析装置（ OptiTrack V120 DUO）を用い母趾および第2趾の末節骨遠位部と中足骨遠位部等に反射マーカーを貼付した。分析では足趾上の反射マーカーについて床に対して垂直方向への移動距離を求めた。＜結果・考察＞パー条件の移動距離は母趾で3.9 ± 0.6 cm、第2趾で4.4 ± 0.6 cmであった。パー条件に対するチョキ条件での移動距離は母趾下条件の第2趾で72.3 ± 11.4 %（3.1 ± 0.6 cm）、母趾上条件の母趾で81.7 ± 13.1%（3.2 ± 0.6 cm）であった。チョキ条件はパー条件と比較して移動距離が短く、長母趾伸筋や長趾伸筋の分離運動の難しさが反映していると考えられる。また、母趾下条件の母趾の移動距離は6.1 ± 4.3 %（0.2 ± 0.2 cm）、母趾上条件の第2趾では33.3 ± 25.4%（1.5 ± 1.2 cm）であった。以上のように、動かすべき足趾がどの程度動いているのか、動かしてはいけない足趾がどの程度動いているのかを定量的に評価することで、足趾チョキ動作は足趾の運動機能を定量化できる可能性が示された。

©一般社団法人 日本体育・スポーツ・健康学会

テーマ別研究発表 | スポーツ文化研究部会：【課題B】人々の生活に根ざした多様なスポーツ文化をいかに醸成していくか

2023年8月31日(木) 9:00 ~ 9:59 | RY303 良心館３階ＲＹ３０３番教室

## スポーツ文化研究部会【課題B】口頭発表①

座長：髙尾 尚平（日本福祉大学）

9:00 ~ 9:14

### [スポーツ文化-B-01] パーク or / and ストリート（哲,社）

相反するスケートボード文化の対立と共存

*市井 吉興[1] (1. 立命館大学)

---

9:15 ~ 9:29

### [スポーツ文化-B-02] 生活に埋め込まれた「異質な身体」の集合が生み出す多様性（人）

スペイン・カタルーニャの「人間の塔」を事例に

*岩瀬 裕子[1] (1. 東京都立大学)

---

9:30 ~ 9:44

### [スポーツ文化-B-03] バレーボール部の指導者による暴力に関する研究（哲）

競技特性に着目して

*福井 陽香[1] (1. 筑波大学大学院)

---

9:45 ~ 9:59

### [スポーツ文化-B-04] 対人暴力被害と失感情症（心）

*豊田 隼[1] (1. 山梨大学大学院医工農学総合教育部)

テーマ別研究発表 | スポーツ文化研究部会 | 【課題B】人々の生活に根ざした多様なスポーツ文化をいかに醸成していくか

# スポーツ文化研究部会【課題 B】口頭発表①

座長：髙尾 尚平（日本福祉大学）

2023年8月31日(木) 09:00 ～ 09:59  RY303 (良心館３階ＲＹ３０３番教室)

09:00 ～ 09:14

## [スポーツ文化-B-01]パーク or / and ストリート（哲,社）

相反するスケートボード文化の対立と共存

*市井 吉興[1] (1. 立命館大学)

2020東京オリンピックにおいて、スケートボードは華々しいデビューを飾り、開催国である日本人のオリンピックメダリストを多数輩出した。しかし、2020東京オリンピックの追加競技としてスケートボードの採用が決定したとき、スケートボードをオリンピックにふさわしいスポーツとして受け入れた人々は、どれほど存在したのであろうか。また、オリンピック閉幕後、スケートボードパークの建設が進む一方で、「スケートボード禁止」という警告を無視して、公園や路上で滑走するスケーターたちへの非難の声が、これまで以上にメディア等で扱われるようになった。このような非難はオリンピックに採用されたにもかかわらず「スポーツ」としての認知が進んでいないことを示すだけでなく、スケートボードをオリンピックに採用したことへの疑問や批判を再燃させている。なかでも、スケートボーダーが街中を滑走し、騒音や器物損壊といった問題を生じさせた場合、市民やスケートボード関係者は、スケートボーダーのマナー改善を訴えることが多い。同時に、街中/ストリートでのスケーティングではなく、決められた時間と場所でのスケーティング、つまり、スケートボードパークにおいて周囲への配慮に基づいたスケーティングが求められる。当然のことながら、このようなスケートボーダーへの批判や要望は重要であるが、スケートボーダーのマナー改善を訴えるのみでは、スケートボードが抱えている課題を解決するには「限界がある」と言わざるをえない。この限界をどのようにして乗り越えるのか、その方策の検討を試みる。

©一般社団法人 日本体育・スポーツ・健康学会

# スポーツ文化研究部会【課題 B】口頭発表①

座長：髙尾 尚平（日本福祉大学）

2023年8月31日(木) 09:00 ～ 09:59 RY303 (良心館３階ＲＹ３０３番教室)

09:15 ～ 09:29

## [スポーツ文化-B-02]生活に埋め込まれた「異質な身体」の集合が生み出す多様性（人）

スペイン・カタルーニャの「人間の塔」を事例に

*岩瀬 裕子[1] (1. 東京都立大学)

本発表の目的は、スペイン・カタルーニャ州の祭礼において230年以上の歴史をもつ「人間の塔」と呼ばれる民俗芸能を事例に、そこで見られる協働を基盤とした「異質な身体」の集合性という視点から、身体文化の継承組織における多様性に関する可能性と課題について報告するものである。 「人間の塔」は大勢の人が密着することで最下部の物質的強度をあげ、その中央で人が人の肩の上を上り下りすることで塔を造るものである。「人間の塔」の継承集団は、居住地域をほぼ同一にする老若男女によって組織され、1年のうち9～10か月のあいだ、週2～3回の練習を繰り返しながら週末などに開かれる年30～40回の祭りに参加する。継承集団を束ねる「カタルーニャ州の人間の塔のグループコーディネーター」には、養成中のグループを含めて103の組織が登録されており、人々は自由な時間をつかって塔造りを楽しんでいる。 現在、もっとも高い塔は10段で11メートルを超える。「人間の塔は文化か、スポーツか」を巡って歴史的に議論されてきたが、とりわけ強豪グループのあいだでは高さを求めた争いが続いてきた。それに伴い、落下を防ぐための技術の向上や安全講習会などの実施が見られ、2018年シーズンの塔の落下率は2.39％と減少してきたとされる。 新型コロナウィルスの蔓延に伴い、2020年シーズンは活動が休止されてきたが、2022年4月20日からはマスク着用なしで祭りも練習も全面的に再開されている。 本発表は、超高齢化が進む日本において、「無縁社会」と表現されるような社会関係の希薄化や異世代の人々との共生、加えて、学校体育や大学スポーツ等において身体の共同性が生み出す可能性と危うさを思考する上で興味深い事例研究であると考えている。本発表に至る研究活動は、日本体育・スポーツ・健康学会スポーツ人類学専門領域の2019年度研究活動助成金により支援を頂いたものである。

©一般社団法人 日本体育・スポーツ・健康学会

# スポーツ文化研究部会【課題 B】口頭発表①

座長：髙尾 尚平（日本福祉大学）

2023年8月31日(木) 09:00 ～ 09:59  RY303 (良心館３階ＲＹ３０３番教室)

09:30 ～ 09:44

## [スポーツ文化-B-03]バレーボール部の指導者による暴力に関する研究（哲）

競技特性に着目して

*福井 陽香[1] (1. 筑波大学大学院)

本発表の目的は、バレーボール部の指導者による暴力とバレーボールそのものの競技特性がどのように関係しているのかを明らかにすることである。本発表の背景には、例えば2014年の全国大学体育連合による調査報告書において、各競技の体罰経験率が示されており、その中でも特にバレーボール部の暴力の多さが指摘されていることが挙げられる。このような問題については、バレーボール部を含めた運動部活動の暴力を根絶するべきであるという主張がこれまでにも繰り返しなされてきた。そうであるにもかかわらず、2023年においても、バレーボール部の指導者による暴力は度々発生している。

　これまでの運動部活動における暴力に関する研究は、指導者による暴力の発生や循環などの理由を、様々な論点から検討してきた。しかし一方で、それらの先行研究は、対象を運動部活動と一括りにしてきたために、或る特定の競技において暴力が多く発生する理由については解明できていない。つまり、先行研究では、バレーボール部において暴力が多く発生する理由を明らかにできないということである。したがって、本発表では対象をバレーボール部に限定して、この理由を検討する。

バレーボール部における暴力が、なぜ他競技よりも多く発生するのかという問いの答えを導くためには、他競技との違いを検討しなければならない。そうすることによって、その違いが、暴力とどのように関係しているのかを明らかにすることができるであろう。そのため、本発表では、バレーボールだけが有する性質、すなわち競技特性に着目する。バレーボールの競技特性の一つとして、例えば「相手コートへの返球までに3回のヒットが許されている」ことが挙げられる。このような競技特性が、バレーボール部の指導者による暴力とどのような関係を有しているのかについて検討していく。

©一般社団法人 日本体育・スポーツ・健康学会

# スポーツ文化研究部会【課題 B】口頭発表①

座長：髙尾 尚平（日本福祉大学）

2023年8月31日(木) 09:00 ～ 09:59  RY303 (良心館３階ＲＹ３０３番教室)

09:45 ～ 09:59

## [スポーツ文化-B-04]対人暴力被害と失感情症（心）

*豊田 隼[1] (1. 山梨大学大学院医工農学総合教育部)

スポーツ指導場面での対人暴力被害者は様々な精神健康問題を呈する（ Parent et al., 2021）。他方、今日の定性的研究では、アスリートの被害経験に対する沈黙が広く見受けられ（ Kavanagh, 2014）、本邦でもアスリートが被害当時の気分や感情を詳細に語ることができない様相が示されており（伊藤・豊田, 2022）、これらは被害者が持つ内在特性の一つである可能性がある。こうした情動制御機能、反応の欠如は、児童虐待ではしばしば失感情症（ Sifneos, 1973）の側面から論じられるが（福井ほか, 2010）、スポーツの文脈では未検討なままである。そこで本研究は、対人暴力被害に由来する失感情症の形成とその特徴を検討することを目的とした。アイブリッジ株式会社提供の18歳から24歳の調査モニター1,000名から中高運動部所属経験者をスクリーニングし、319名（*M*=21.61, *SD*=2.25）を分析対象とした本調査を実施した。下位尺度の内的整合性は十分な値を示した。被害リスク要因を共変量とした階層的重回帰分析の結果、心理的暴力被害が感情の同定困難と伝達困難、外的志向の全ての失感情症傾向を予測していた。対人暴力被害と PTSD症状を交絡因子とした傾向スコア分析の結果、全ての失感情症傾向は男性よりも女性の方が高く、競技の早期専門化群よりも非早期専門化群の方が感情の同定困難と伝達困難は高いことが推定された。これらの結果は、心理的暴力被害が及ぼす影響に関する知見を拡張するものである。さらに、児童虐待の性差や女性アスリートのメンタルヘルスに関する知見（ e.g., Pascoe et al., 2022）にもあるように、被害経験を有し且つトラウマ症状を抱える女性は失感情症傾向が顕著である点、競技の早期専門化に関わらない、運動部の特異な文化性の関与を説明した点で、今後の被害者支援に資するものと考えられる。

©一般社団法人 日本体育・スポーツ・健康学会

テーマ別研究発表 | スポーツ文化研究部会：【課題B】人々の生活に根ざした多様なスポーツ文化をいかに醸成していくか

2023年8月31日(木) 9:00 ~ 9:59 | RY304 良心館３階ＲＹ３０４番教室

## スポーツ文化研究部会【課題B】口頭発表②

座長：加藤 えみか（京都産業大学）

9:00 ~ 9:14

### [スポーツ文化-B-05] 第1回神戸サッカーカーニバル（1967年3月19日）における福住女子サッカースポーツ少年団対神戸女学院中等部の試合に関する歴史的研究（史）

*秋元 忍[1]、寶學 淳郎[2]、榎本 雅之[3] (1. 神戸大学、2. 大阪成蹊大学、3. 滋賀大学)

---

9:15 ~ 9:29

### [スポーツ文化-B-06] 現代農山村における地域スポーツの予備的考察（社）

*菅原 大志[1] (1. 新潟医療福祉大学)

---

9:30 ~ 9:44

### [スポーツ文化-B-07] eスポーツのプレーは高齢者の実行機能に及ぼす運動効果を増強する（生）

*土橋 祥平[1]、髙橋 史穏[1]、松岡 弘樹[1]、船橋 大介[1]、吉武 誠司[1]、坂入 洋右[1]、岩井 優花[2]、鈴木 信広[2]、上村 祐一[2]、葉 章二[2]、山田 晋三[1]、高木 英樹[1]、松井 崇[1] (1. 筑波大学、2. 関彰商事株式会社)

---

9:45 ~ 9:59

### [スポーツ文化-B-08] eスポーツプレー時のチームワークを生み出すオキシトシンと心拍同調（心）

*髙木 祐多[1]、髙橋 史穏[1]、松岡 弘樹[1]、土橋 祥平[1]、船橋 大介[1]、吉武 誠司[1]、坂入 洋右[1]、三嶋 達典[2]、山田 晋三[1]、高木 英樹[1]、松井 崇[1] (1. 筑波大学、2. 茨城県)

テーマ別研究発表 | スポーツ文化研究部会 | 【課題B】人々の生活に根ざした多様なスポーツ文化をいかに醸成していくか

# スポーツ文化研究部会【課題 B】口頭発表②

座長：加藤 えみか（京都産業大学）
2023年8月31日(木) 09:00 ～ 09:59  RY304 (良心館３階ＲＹ３０４番教室)

09:00 ～ 09:14

## [スポーツ文化-B-05]第1回神戸サッカーカーニバル（1967年3月19日）における福住女子サッカースポーツ少年団対神戸女学院中等部の試合に関する歴史的研究（史）

*秋元 忍[1]、寶學 淳郎[2]、榎本 雅之[3] (1. 神戸大学、2. 大阪成蹊大学、3. 滋賀大学)

戦後日本における女性のサッカーの展開の一端を明らかにするため、本研究では、1967（昭和42）年3月19日に開催された、第１回神戸サッカーカーニバルにおける福住女子サッカースポーツ少年団対神戸女学院中等部の試合に着目し、試合開催の背景、試合の実態と影響について検討を行った。『サッカーの友　京都・大阪・兵庫サッカー友の会会報』（9号、1967年5月）ほか、この試合に関連する新聞・雑誌記事、書籍を発掘、収集し、主要史料とした。検討の結果、大学サッカーの経験を有する教員の存在（福住小、神戸女学院中）、指定校としてのサッカーの実践（福住小）、天然芝のグラウンド（神戸女学院中）など、福住小、神戸女学院中には、生徒による女性サッカークラブ設立の要望に対応し、その活動を支える基盤があったこと、両校の対戦の実現と、3名の女性審判の採用には、兵庫サッカー友の会の意向が反映されていたこと、女性のサッカー試合のために、グラウンドサイズの縮小や、ハンドに関する特別ルールが採用されたこと、この試合は、5,000人の観客の前で、女性のみで行われた初めての試合として関心を集め、試合後も福住小の選手が NHKの番組に出演するなど、メディア露出は増加したが、女性のサッカーの拡がりに及ぼした影響はまだ限定的であったと考えられること、などが明らかになった。

©一般社団法人 日本体育・スポーツ・健康学会

# スポーツ文化研究部会【課題 B】口頭発表②

座長：加藤 えみか（京都産業大学）

2023年8月31日(木) 09:00 ～ 09:59 RY304 (良心館３階ＲＹ３０４番教室)

09:15 ～ 09:29

## [スポーツ文化-B-06]現代農山村における地域スポーツの予備的考察（社）

*菅原 大志[1] (1. 新潟医療福祉大学)

近年、地域社会で行われるスポーツに対し地域活性化や健康増進、コミュニティ形成といった多様な価値が付与されるなか、「総合型地域スポーツクラブ」等の制度的整備が進められている。一方こうした制度の前提となる自立的な個人像に対し、とりわけ農山村における齟齬がかねてより報告されてきた(後藤，2008；中島，2003)。

一方、制度的変革を目指す「市民社会論」(佐伯，2014， p.43)の立場から、「地域住民の生活構造」(水上・黒須，2016， p.556)から地域スポーツを論じる研究は、現行のスポーツ政策の再構築につながる議論にはならないとして批判されている。

本報告は、今日のスポーツ政策における新自由主義的性格が指摘されている点(小林，2013)などから市民社会論的立場の重要性を認識しつつ、しかしこうした立場を強調することで見逃してしまう現実もあるのではないかという問題意識から端を発している。制度的な枠組みとは別に、自発的に地域のスポーツ活動を創出する営みが農山村を対象にした研究では言及されてきたし(今野，1992；松岡，1991；中田，1993など)、そうした営みは現在でも確認できるのである(村田，2020など)。

制度的整備が進むなかでこうした営みはなぜ行われるか。その論理を掬い上げることは、「自立しえない」農山村住民が市場合理的な「安上がりの統治」(石坂，2012，18)を回避する条件を明らかにすることにつながるのではないか。

本報告は、今日の農山村においてローカルな文脈の中で創出されるスポーツ活動の論理を明らかにするという課題に対し地域スポーツ研究を再構成するならば、いかなる分析枠組みが必要となるのかを提出することが目的である。

©一般社団法人 日本体育・スポーツ・健康学会

テーマ別研究発表 | スポーツ文化研究部会 | 【課題B】人々の生活に根ざした多様なスポーツ文化をいかに醸成していくか

# スポーツ文化研究部会【課題 B】口頭発表②

座長：加藤 えみか（京都産業大学）
2023年8月31日(木) 09:00 ～ 09:59 RY304 (良心館３階ＲＹ３０４番教室)

09:30 ～ 09:44

## [スポーツ文化-B-07]eスポーツのプレーは高齢者の実行機能に及ぼす運動効果を増強する（生）

*土橋 祥平[1]、髙橋 史穏[1]、松岡 弘樹[1]、船橋 大介[1]、吉武 誠司[1]、坂入 洋右[1]、岩井 優花[2]、鈴木 信広[2]、上村 祐一[2]、葉 章二[2]、山田 晋三[1]、高木 英樹[1]、松井 崇[1] (1. 筑波大学、2. 関彰商事株式会社)

孤独は運動不足や喫煙よりも大きな心身の健康リスクであり、豊かな少子高齢化を模索する我が国が解決すべき喫緊の課題である。1人で実施する身体運動は、高齢者の心身の健康増進に有効だが、孤独解消には直結しない。一方、他者との対戦を楽しむスポーツは孤独解消に寄与しうるものの、プレーに体力水準の壁がある。この壁を乗り越える一策として、ビデオゲームの対戦による電子スポーツ（ eスポーツ）が期待される。私どもは既に、 eスポーツの対面プレーが絆ホルモン・オキシトシン（ OT）を通じて若者の孤独解消に寄与する可能性を報告した（松井ら、2021）。本研究では、 eスポーツの対面プレーが孤独解消を通じて高齢者の認知機能に及ぼす習慣的な運動効果を強化すると想定し、これを検証した。

高齢者福祉施設に日常的に通う、うつ傾向のない高齢者31名（男性15名、女性16名、80.7 ± 8.6歳）を、運動（ E）群と運動＋ eスポーツ（ E＋ e）群に割り振った。両群ともに、施設が提供する運動プログラムを週1回以上、3ヶ月間実施した。運動の合間や終了後、 E群では会話や脳トレビデオの視聴を、 E＋ e群では対戦形式の太鼓型音楽ゲームやレーシングゲームを約20分間実施した。介入前と3ヶ月後に体力指標（体格、筋力、歩行機能、タッピング）、心理指標（気分、絆指標、実行機能、言語記憶）、生理指標（唾液 OT濃度）を評価した。

介入前後の体力指標や言語記憶能に群間の差は認められなかった。一方、実行機能を評価するストループ課題の成績は、 E群と比較して E+e群で向上し、心理的絆指標の高まりや OTレベルの上昇と関係することがマクネマー検定により確認された。

本研究により、 eスポーツの対面プレーが高齢者の実行機能に及ぼす習慣的な運動の効果を強化できることが初めて確認された。この強化は、 OTによる絆形成を通じた孤独解消によるものである可能性がある。

©一般社団法人 日本体育・スポーツ・健康学会

# スポーツ文化研究部会【課題 B】口頭発表②

座長：加藤 えみか（京都産業大学）

2023年8月31日(木) 09:00 ～ 09:59 RY304 (良心館３階ＲＹ３０４番教室)

09:45 ～ 09:59

## [スポーツ文化-B-08]eスポーツプレー時のチームワークを生み出すオキシトシンと心拍同調（心）

*髙木 祐多[1]、髙橋 史穏[1]、松岡 弘樹[1]、土橋 祥平[1]、船橋 大介[1]、吉武 誠司[1]、坂入 洋右[1]、三嶋 達典[2]、山田 晋三[1]、高木 英樹[1]、松井 崇[1] (1. 筑波大学、2. 茨城県)

スポーツを含む人間活動にチームワークは不可欠である。チームワークは、活動前の絆ホルモン・オキシトシン（ OT）レベルや、協働時の生理的同調により評価・強化されうるが、スポーツ時のそれらは身体運動を伴うことから評価しにくく、強化策も未発達な現状がある。この解決には、ビデオゲームの対戦による電子スポーツ（ eスポーツ）が有効かもしれない。本研究では、実際の eスポーツ大会におけるチームプレー時の心身応答から、チームワーク発揮の生理心理基盤に迫ることを目的とした。一人称シューティングの大学対校 eスポーツ大会を2日間に渡って対面開催し、4チームの男子大学生プレーヤー22名（1チーム5-6人、20.1±1.7歳）が総当たりで勝敗を競った。1試合は約2時間で、プレー中の会話や戦術のやりとりに特別な制限は設けなかった。ゲームスタッツ（ショット的中数、アシスト数、ラウンド毎ダメージ等）、心拍数、そのチーム内同調レベルを常時記録しながら、試合前、終了直後、終了30分後に唾液 OT濃度、心理的絆指標（ IOS、チームフロー尺度）、個人の気分（ TDMS）を測定し、勝敗間を比較した。ショット的中数などの個人技能には勝敗間の差がなかったが、チームワーク指標となるアシスト数とラウンド毎ダメージは勝利条件で高かった。このとき、 OTは勝利条件で試合前から終了30分後まで常に高値を示した。試合中の心拍数は、勝利条件で平均値、最高値、同調レベルともに高く、特にプレー外時間（ハーフタイムと終了後）に同調した。 IOS、チームフロー、 TDMS得点も勝利条件で高かった。 OTレベルは、心拍同調レベル、 IOS、アシスト数とそれぞれ正の相関を示した。本研究により、eスポーツプレー時のチームワークが OTによる心拍同調を通じて生み出される可能性が初めて確認された。 OTや心拍同調を標的としたチームトレーニングの開発が望まれる。

©一般社団法人 日本体育・スポーツ・健康学会

テーマ別研究発表 | 生涯スポーツ研究部会：【課題B】生涯スポーツは・人・地域社会・産業といかに関連するか

2023年8月31日(木) 9:00 ~ 9:44 | RY305 良心館３階ＲＹ３０５番教室

## 生涯スポーツ研究部会【課題B】口頭発表①

座長：川邊 保孝（東海大学）

9:00 ~ 9:14

### [生涯スポーツ-B-01] 乗馬を伴わない馬との触れ合い活動の有効性の検討（介）

人馬のウェルビーイングを効率的に推進するための手法の開発

*高見 京太[1]、佐野 竜平[1]、柏村 晋史[1]、深野 聡[2] (1. 法政大学、2. 日本障害者乗馬施設フューチャーバレー)

---

9:15 ~ 9:29

### [生涯スポーツ-B-02] 幼稚園・認定こども園で展開されるインクルーシブな幼児体育指導の現状と課題（ア,発）

専門指導者の意識とスキルに着目して

*大橋 祐介[1]、金子 勝司[2]、松島 剛史[3]、萩原 大河[4]、金山 千広[3] (1. 立命館大学大学院、2. 大阪体育大学、3. 立命館大学、4. 姫路市立水上小学校)

---

9:30 ~ 9:44

### [生涯スポーツ-B-03] ローカルのスキー・スノーボード大会が気分と脳波に及ぼす効果（教,経）

*角田 和代[1]、簗瀬 歩[1]、長瀬 和宏[2] (1. 朝日大学保健医療学部健康スポーツ科学科、2. 岐阜県スキー連盟)

テーマ別研究発表 | 生涯スポーツ研究部会 | 【課題B】生涯スポーツは・人・地域社会・産業といかに関連するか

# 生涯スポーツ研究部会【課題 B】口頭発表①

座長：川邊 保孝（東海大学）
2023年8月31日(木) 09:00 ～ 09:44  RY305 (良心館３階ＲＹ３０５番教室)

09:00 ～ 09:14

## [生涯スポーツ-B-01]乗馬を伴わない馬との触れ合い活動の有効性の検討（介）

人馬のウェルビーイングを効率的に推進するための手法の開発

*高見 京太[1]、佐野 竜平[1]、柏村 晋史[1]、深野 聡[2] (1. 法政大学、2. 日本障害者乗馬施設フューチャーバレー)

乗馬などの馬との触れ合い活動が、心や身体に良い影響を与えることは、いくつかの先行研究が確認しており、今後さらに広まることが期待されている。しかし、人を馬に乗せるには、馬に関する専門的な知識や技術が必要であるのに加え、活動を提供する側の馬と人の負担が大きいため気軽に実施できない。そこで本研究は、活動提供者側の負担が少ない、体験乗馬を伴わない触れ合い活動の有効性を検討することを目的とした。
対象としたのは、筆者らが開催した乗馬を伴わない馬との触れ合い活動(乗馬なし)と、体験乗馬を伴う馬との触れ合い活動(乗馬あり)の運営に携わった馬術部部員に、ライフコーダ EX（スズケン社製）を装着して活動強度と歩数を計測した。また、触れ合い活動への参加者に対しては、活動の開始前と終了後に、一般感情尺度(24問・4段階)を Google Formsによって回答させた。
結果は、乗馬なしは2022年7月に12人、9月に9人の参加を得て、のべ10人の運営によって行い、いずれも所要時間は60分であった。また、乗馬ありは2023年5月に9人の参加を得て、10人の運営によって行い、所要時間は125分であった。活動強度は、乗馬あり(1.6±0.3Mets)の方が、乗馬なし(1.4±0.1Mets)よりも有意に高かった。また、歩数は所要時間が長い、乗馬あり(3272.0±1227.9歩)の方が、乗馬なし(1038.0±163.8歩)よりも多かったが1時間あたりの歩数に換算しても、乗馬ありの方が有意に多かった。活動への参加者の一般感情尺度は、乗馬ありと乗馬なしともに、「肯定的感情」と「落ち着き」は有意に向上したが、「否定的感情」は、乗馬なしのみが有意に減少した。以上のことから、乗馬を伴わない馬との触れ合い活動は、乗馬を伴う活動よりも、それを提供する側の負担は小さいが、参加者の感情に与える良い影響は、概ね同様であった。

©一般社団法人 日本体育・スポーツ・健康学会

テーマ別研究発表 | 生涯スポーツ研究部会 | 【課題B】生涯スポーツは・人・地域社会・産業といかに関連するか

# 生涯スポーツ研究部会【課題 B】口頭発表①

座長：川邊 保孝（東海大学）
2023年8月31日(木) 09:00 ～ 09:44 RY305 (良心館３階ＲＹ３０５番教室)

09:15 ～ 09:29

## [生涯スポーツ-B-02]幼稚園・認定こども園で展開されるインクルーシブな幼児体育指導の現状と課題（ア,発）

専門指導者の意識とスキルに着目して

*大橋 祐介[1]、金子 勝司[2]、松島 剛史[3]、萩原 大河[4]、金山 千広[3] (1. 立命館大学大学院、2. 大阪体育大学、3. 立命館大学、4. 姫路市立水上小学校)

近年、小学校を対象に教師の指導能力の観点からインクルーシブ体育を検討した報告が増えている（萩原・木原 2021）。しかし、幼児教育と小学校教育の接続期が注目される中にあっては、児童期に比べて、幼児期におけるインクルーシブな幼児体育に関する報告が少ない。幼児期の運動指導については、半数以上の私立幼稚園が企業から派遣される専門指導者を活用しているとの報告がある（吉田ら2007；柳田 2008）。本研究では、幼稚園や認定こども園で幼児体育を専門に指導する派遣指導者のインクルーシブ体育に関する意識とスキルの観点から、現状と課題を明らかにすることを目的とした。幼児体育指導者の派遣会社5社に依頼し、各社に所属する指導者を対象に、インクルーシブ教育への態度を測定した「 SACIE-R」（ Forlinら2011）とインクルーシブ教育実践の自己効力感を測定した「 TEIP」（ Sharmaら 2012）を援用した29の質問項目からなる web調査を実施した。回答者119名の内、障害のある子どもを含む指導に携わった者は93.3%であった。一方、これまで障害児理解に関する学習を経験した者は57.1%であった。「 SACIE-R」の懸念、態度、感傷の3次元、及び「 TEIP」の行動制御、指導、協働の3次元はそれぞれ4つ～6つの質問項目を持った。合計29の質問項目にクラスター分析（ウォード法、平方ユーグリット距離）を施し、119名の指導者を3つのクラスターに分けた。次に、6次元毎に主成分分析を適応し、得られた第1主成分得点を用いて、3つのクラスターを比較した。「円滑対応型」（ n=15）、「困惑型」（ n=29)、「標準対応型」（ n=72）と解釈した。困惑型は、インクルーシブ教育に非積極的な姿勢を示す、懸念、感傷が高い（髙橋ら 2014）。回答者の25%は、インクルーシブな幼児体育指導に憂慮が高いことを示唆した。

©一般社団法人 日本体育・スポーツ・健康学会

テーマ別研究発表 | 生涯スポーツ研究部会 | 【課題B】生涯スポーツは・人・地域社会・産業といかに関連するか

# 生涯スポーツ研究部会【課題 B】口頭発表①

座長：川邊 保孝（東海大学）
2023年8月31日(木) 09:00 ～ 09:44 RY305 (良心館３階ＲＹ３０５番教室)

09:30 ～ 09:44

## [生涯スポーツ-B-03]ローカルのスキー・スノーボード大会が気分と脳波に及ぼす効果（教,経）

*角田 和代[1]、簗瀬 歩[1]、長瀬 和宏[2] (1. 朝日大学保健医療学部健康スポーツ科学科、2. 岐阜県スキー連盟)

本研究は、スキーやスノーボードのローカル大会が参加者の気分や脳波に及ぼす影響について検証し、地域の人々によって実施されているローカル大会が参加者に与える効果や価値を明らかにすることを目的とした。今回は、岐阜県スキー連盟が主催する、高山地域で実施されているスキー大会、並びに、ここ数年人気のスノーボード大会の参加者である成人男性を対象に、調査を実施した。調査は大会出場を通して以下のタイミングで３回実施された。大会出場前（受付時）、出場後（ゴール後）、平常時（終了後の帰宅前）。協力者の負担を軽減する為に、簡易的な脳波計（ BrainprolightFM-838）、気分状態変化（ POMS）の質問紙を用いた。上記計測に加えて、帰宅前の調査では半構造化インタビューを個別に実施した。

©一般社団法人 日本体育・スポーツ・健康学会

テーマ別研究発表 | 生涯スポーツ研究部会：【課題B】生涯スポーツは・人・地域社会・産業といかに関連するか

2023年8月31日(木) 9:00 ~ 9:29 | RY306 良心館３階ＲＹ３０６番教室

## 生涯スポーツ研究部会【課題B】口頭発表②

座長：成瀬 和弥（筑波大学）

9:00 ~ 9:14

### [生涯スポーツ-B-04] 市民マラソン大会のペースランナーについての研究（教）

第40回佐倉マラソンのペースランナーの実態から

*髙田 由基[1]、丸尾 祐矢[2]、竹澤 健介[3] (1. 愛知学泉大学、2. 東京女子体育大学、3. 摂南大学)

---

9:15 ~ 9:29

### [生涯スポーツ-B-05] Remedies of University Sports in India Perspective to Supply Maximum Players for International Competition（政）

*DR.SUDARSAN BISWAS

テーマ別研究発表 | 生涯スポーツ研究部会 | 【課題B】生涯スポーツは・人・地域社会・産業といかに関連するか

# 生涯スポーツ研究部会【課題 B】口頭発表②

座長：成瀬 和弥（筑波大学）

2023年8月31日(木) 09:00 ～ 09:29  RY306 (良心館３階ＲＹ３０６番教室)

09:00 ～ 09:14

## [生涯スポーツ-B-04]市民マラソン大会のペースランナーについての研究（教）

第40回佐倉マラソンのペースランナーの実態から

*髙田 由基[1]、丸尾 祐矢[2]、竹澤 健介[3] (1. 愛知学泉大学、2. 東京女子体育大学、3. 摂南大学)

マラソンでは、ランナーの目標記録達成をサポートするため、ペースランナーが置かれることがある（ペースメーカー、ペースセッターなどその名称は、大会や状況によって異なるが、本研究ではペースランナーとする）。ペースランナーは、好記録を生み出すため、先頭集団やトップランナーのために置かれることが多かったが、ランニング人口や大会参加者数の増大もあり、近年はサブ3(3時間切り)、サブ3.5(3時間半切り)、サブ4(4時間切り)などを目指す一般市民ランナーのためのペースメーカーが用意される大会が増えている。ランナーの目標記録達成をサポートするペースランナーの存在は、大会の売りの一つにもなっている。一方で、ペースランナーを務めるランナーは、設定タイムに対して余裕を持って走れる走力を前提に、一定ペースで走るペース感覚、コースや天候に応じた柔軟な走り方や状況判断能力、時にランナーを励まし鼓舞するなど多様な能力が求められる。そこで本研究は、ペースランナーを設定する大会や今後ペースランナーを務める方への指針を得ることを目的とし、2023年3月に開催された「第40回佐倉マラソン」のペースランナー（30名）を対象として、レース中の平均心拍数など運動強度の調査やアンケート調査を行った。その実態について報告する。

©一般社団法人 日本体育・スポーツ・健康学会

テーマ別研究発表 | 生涯スポーツ研究部会 | 【課題B】生涯スポーツは・人・地域社会・産業といかに関連するか

# 生涯スポーツ研究部会【課題 B】口頭発表②

座長：成瀬 和弥（筑波大学）
2023年8月31日(木) 09:00 ～ 09:29 RY306 (良心館３階ＲＹ３０６番教室)

09:15 ～ 09:29

## [生涯スポーツ-B-05]Remedies of University Sports in India Perspective to Supply Maximum Players for International Competition（政）

*DR.SUDARSAN BISWAS

**Introduction:** Sports, games, and physical fitness are crucial aspects of our civilization and education system. They provide a platform for individuals to evaluate themselves and develop intellectual and physical abilities. Required standard ***sports policies*** to promote higher level competitions.

**Purpose:** To organize National ***University games***, special coaching camp, advance training for highly talented budding athletes.To supply the maximum number of talented budding players for high performance. At Present: Poor Sports Policies. Unplanned AIU Calendar. Minimum financial resources. No data Bank for Professional personals. Organise very less World Inter University Competition. No advance financial support for tournament. Non-technical person more in the decisions making committee. Physical Education and Sports not yet ***mandatory*** in all educational level. Broad base principles are not maintaining.
**Recommendation:** Indian University teams required to participate more in high level competitions. Introduce State wise Inter University competition. Four AIU branch office at four megacities. Required good facilities for all sports personnel. Create data bank for Professional personals. Take allotment from FISU to organize any World Inter University Competition. Arrange Sports tour, camp. MoU required with various organisation.
**Conclusion:** Change the ***Vision*** of our University Sports for high level performance.
**Keywords:** Sports policies, University games, Mandatory, Vision.

©一般社団法人 日本体育・スポーツ・健康学会

テーマ別研究発表 | 競技スポーツ研究部会：【課題C】ハイパフォーマンススポーツ（トップレベルの競技スポーツ）におけるトレーニングをいかに効果的に行うか

2023年8月31日(木) 13:30 ~ 14:29 | RY103 良心館１階ＲＹ１０３番教室

## 競技スポーツ研究部会【課題C】口頭発表⑦

座長：小西 康仁（東海大学）

13:30 ~ 13:44

[競技スポーツ-C-25] 代行形態の構成化における指導者の動感経験の役割に関する発生運動学的考察（方,スポーツ運動学）

体操競技における片足立ち2回ターンの指導における例証分析

*吉本 忠弘[1] (1. 甲南大学)

---

13:45 ~ 13:59

[競技スポーツ-C-26] 跳躍運動の助走におけるリズム化身体知のコツ発生に関する発生運動学的一考察（スポーツ運動学）

*森井 大樹[1] (1. 日本女子体育大学)

---

14:00 ~ 14:14

[競技スポーツ-C-27] 戦前の日本における陸上競技の体力・技術トレーニングに関する一考察（史,人,方）

雑誌「陸上競技」（1928年創刊）を史料として

*大林 太朗[1] (1. 筑波大学体育系)

---

14:15 ~ 14:29

[競技スポーツ-C-28] 男子体操競技ゆかの〈前転脚前挙支持経過閉脚倒立〉の運動構造に関する一考察（方）

*神門 大輔[1] (1. 高知大学)

テーマ別研究発表 | 競技スポーツ研究部会 | 【課題C】ハイパフォーマンススポーツ（トップレベルの競技スポーツ）におけるトレーニングをいかに効果的に行うか

# 競技スポーツ研究部会【課題 C】口頭発表⑦

座長：小西 康仁（東海大学）

2023年8月31日(木) 13:30 ～ 14:29  RY103 (良心館１階ＲＹ１０３番教室)

13:30 ～ 13:44

## [競技スポーツ-C-25]代行形態の構成化における指導者の動感経験の役割に関する発生運動学的考察（方,スポーツ運動学）

体操競技における片足立ち2回ターンの指導における例証分析

*吉本 忠弘[1] (1. 甲南大学)

スポーツの指導場面において指導者は、学習者に対して「もっとこんな感じでやったら良いのではないか」と話しかけることがある。ここで述べられている「こんな感じで」というのは、指導者による観察・交信を経て収集された学習者の動感素材をもとに、当該学習者に適した動感志向形態を代行的に構成化することで示される。そのため、指導者個人が当該運動を行う際に抱くイメージを意味するのではない。特に、指導者が得意としていた運動の指導場面においては、指導者が無意識のうちに自身にとって心地よい仕方を強要してしまっていることがある。代行形態を構成化するということは、学習者の動感意識に寄り添って行われることが前提となる。しかしながら、学習者が目指すべき動感意識を呈示するにあたり、指導者の動感経験が一役買もある。

本研究では、動感指導場面において、指導者が代行形態を構成化と指導者の動感経験の関係性について、女子体操競技における片足立ち2回ターンの指導実践を例証として検討する。

©一般社団法人 日本体育・スポーツ・健康学会

テーマ別研究発表 | 競技スポーツ研究部会 | 【課題C】ハイパフォーマンススポーツ（トップレベルの競技スポーツ）におけるトレーニングをいかに効果的に行うか

## 競技スポーツ研究部会【課題 C】口頭発表⑦

座長：小西 康仁（東海大学）

2023年8月31日(木) 13:30 ～ 14:29 RY103 (良心館１階ＲＹ１０３番教室)

13:45 ～ 13:59

# [競技スポーツ-C-26]跳躍運動の助走におけるリズム化身体知のコツ発生に関する発生運動学的一考察（スポーツ運動学）

*森井 大樹[1] (1. 日本女子体育大学)

陸上競技の跳躍系種目における助走、長縄とびで入るときの間合いなど個人の運動の組み合わせ、ないし物体との運動をリズミカルに組み合わせる場合において「助走のリズムが合わなかった」や「縄のリズムに合わせて」など「リズム」という動感言語はスポーツ動作の指導においてしばしば用いられる。あるいはサッカーやバスケットボールなどの攻防において「リズムを崩され、突破されてしまった」など、他者とのリズムの関係が問題となる場合もある。このように「リズム」という動感言語を用いた運動現象は枚挙にいとまがなく、動きの習熟度を高めていく上で重要なカテゴリーの一つである。

「リズム」という現象はマイネル（1981）によれば「ある運動の力動的構造であり、すなわち、ひとつの運動の根底に横たわっている緊張と解緊の周期的交替」といわれ、「運動リズム」としてスポーツの運動経過を詳しく規定していくカテゴリーの一つとして分類されている。一方で、マイネルの運動学を批判的に継承し、現象学的運動学として発展させた金子（2005）によっては「リズム化能力」として体系化され「先読みや情況感などのカン身体知とも複雑に絡み合って」いることが指摘されている。すなわち、運動全体の流れを先読みすることや、相手ないし自分の動き、あるいは物体の動きの先読み、さらにリズミカルに動けるための身体操作のコツなどが複雑に絡み合って運動リズムが発生するものと考えられる。

本研究では体操競技の跳馬の助走リズムに焦点を当てる。助走リズムの修正指導において、その発生に関わったコツやカンの内実について明らかにし、スポーツ指導において重要なカテゴリーの一つとして位置付けられるリズムの指導に有益な情報を還元することを目的とする。発表では助走リズムの発生様相やその動感構造の中身について掘り下げて、そのコツやカンの絡み合い構造について詳しく解説していく。

©一般社団法人 日本体育・スポーツ・健康学会

テーマ別研究発表 | 競技スポーツ研究部会 | 【課題C】ハイパフォーマンススポーツ（トップレベルの競技スポーツ）におけるトレーニングをいかに効果的に行うか

## 競技スポーツ研究部会【課題 C】口頭発表⑦

座長：小西 康仁（東海大学）

2023年8月31日(木) 13:30 ～ 14:29  RY103 (良心館１階ＲＹ１０３番教室)

14:00 ～ 14:14

# [競技スポーツ-C-27]戦前の日本における陸上競技の体力・技術トレーニングに関する一考察（史,人,方）

雑誌「陸上競技」（1928年創刊）を史料として

*大林 太朗[1] (1. 筑波大学体育系)

本研究は、戦前の日本における陸上競技（ランニング系種目を中心に）の体力・技術トレーニングについて、雑誌「陸上競技」を主な手掛かりとして明らかにしようとするものである。全日本陸上競技連盟（現在の日本陸連）が発足された大正後期～昭和初期の時代に、当時のアスリートは何を根拠に、どのような鍛錬の日々を送っていたか。本報告では、誰が、どこでどのような記録を残したかという年表的な整理ではなく、むしろ年表には記載されてこなかった選手たちの鍛錬の日々に着目し、彼らが諸外国から何を学び、あるいは日本の地理的・自然的条件下でどのような理論と実践を生み出していたかを明らかにしたい。

手掛かりとなる史料は、雑誌「陸上競技」（陸上競技研究會編輯，一成社）である。1928（昭和3）年の創刊から1943（昭和18）年の廃刊：第16巻第11号に至るまで、国内外の陸上競技界におけるトピックスを扱い続けた専門誌である。創刊号の冒頭文では、その使命について「如何にして国民体育の徹底を期すべきか？如何にして吾等のスポーツを合理的に誘導すべきかに就きて考究すると共にその実現に努めんとする…陸上競技は最も普遍性に富み且つ個性尊重の上に独特の資質を有するが故に、将来益々世に重用せらるるであらうことを固く信ずる」と論じられている。

報告では、岡尾惠市名誉教授（立命館大学）および秩父宮記念スポーツ博物館・図書館の協力を得て収集された記事内容の分析結果を提示し、現在の日本におけるトレーニング科学の一つの系譜を辿ってみたい。

©一般社団法人 日本体育・スポーツ・健康学会

テーマ別研究発表 | 競技スポーツ研究部会 | 【課題C】ハイパフォーマンススポーツ（トップレベルの競技スポーツ）におけるトレーニングをいかに効果的に行うか

## 競技スポーツ研究部会【課題 C】口頭発表⑦

座長：小西 康仁（東海大学）

2023年8月31日(木) 13:30 ～ 14:29 RY103 (良心館１階ＲＹ１０３番教室)

14:15 ～ 14:29

# [競技スポーツ-C-28]男子体操競技ゆかの〈前転脚前挙支持経過閉脚倒立〉の運動構造に関する一考察（方）

*神門 大輔[1] (1. 高知大学)

体操競技における技は独自の運動構造が認められなければ類似した他の技との区別ができず、採点規則から消えてしまうことや類似した技と統合されることがある。本研究で扱う〈前転脚前挙支持経過閉脚倒立〉においても〈脚前挙支持から伸腕屈身力倒立〉と運動経過が類似している。〈前転〉から実施するとういう独自の動きを有しているが、〈脚前挙支持〉が含まれることや、腕と腕の間を足先が地面に触れないように通してから倒立位に持ち込むことなど類似している点も多い。

本研究では〈前転脚前挙支持経過閉脚倒立〉の運動構造を明らかにし、類似した技とは異なる独自性を示すことを目的とする。まず、〈前転脚前挙支持経過閉脚倒立〉やその類似した技がこれまでの採点規則においてどのような位置づけがなされていて、難度的価値がどのように変化してきたかを分析する。また、技の表記について考察し、〈前転脚前挙支持経過閉脚倒立〉の運動課題について明らかにしていく。

〈前転脚前挙支持経過閉脚倒立〉はこれまで採点規則が改訂される中で技の表記も変更されてきた。1968年版採点規則では〈前転瞬時脚前挙支持ー伸膝で両足を抜き伸腕屈身倒立〉となっており、〈伸腕屈身倒立〉すなわち〈伸肘倒立〉の要素が含まれていたことがわかる。〈伸肘倒立〉は1979年版採点規則以降、〈伸腕屈身力倒立〉と表記されるようになっていったが、〈前転脚前挙支持経過閉脚倒立〉は〈力〉という表記は使われていない。伸腕屈身で実施されることに変わりはないが、力を利用するのではなく、前転からの勢いを利用して倒立に持ち込む技であると考えられる。〈脚前挙支持〉の表記があるが、これは静止が求められるものではなく、経過の姿勢を示すものである。難度的価値の変化や他種目の類似技との関係など、より具体的な考察内容については当日会場にて発表する。

©一般社団法人 日本体育・スポーツ・健康学会

テーマ別研究発表 | 競技スポーツ研究部会：【課題C】ハイパフォーマンススポーツ（トップレベルの競技スポーツ）におけるトレーニングをいかに効果的に行うか

2023年8月31日(木) 13:30 ~ 14:29 | RY107 良心館１階ＲＹ１０７番教室

## 競技スポーツ研究部会【課題C】口頭発表⑧

座長：加藤 えみか（京都産業大学）

13:30 ~ 13:44

[競技スポーツ-C-29] 後方かかえ込み宙返りにおける視線移動パターンと跳躍の高さの関係（心）

*佐藤 佑介[1] (1. 日本大学)

---

13:45 ~ 13:59

[競技スポーツ-C-30] 芸術系スポーツ競技者の認知機能（方）

*天野 勝弘[1]、小林 咲里亜[1,2]、滝沢 宏人[3]、栗原 俊之[4] (1. 環太平洋大学スポーツ科学センター、2. 帝京科学大学、3. 愛知大学、4. 国士舘大学)

---

14:00 ~ 14:14

[競技スポーツ-C-31] 情動想起が上肢筋における皮質脊髄路興奮性に及ぼす影響（生,心）

*益城 優芽[1]、金子 直嗣[1]、加藤 辰弥[2,3]、山﨑 大輝[1]、中澤 公孝[1] (1. 東京大学大学院総合文化研究科、2. ソニーコンピュータサイエンス研究所　、3. 日本学術振興会特別研究員 (PD))

---

14:15 ~ 14:29

[競技スポーツ-C-32] 投動作の運動イメージが上肢筋における皮質脊髄路興奮性に与える影響（生）

*山﨑 大輝[1]、金子 直嗣[1]、益城 優芽[1]、中澤 公孝[1] (1. 東京大学大学院総合文化研究科)

テーマ別研究発表 | 競技スポーツ研究部会 | 【課題C】ハイパフォーマンススポーツ（トップレベルの競技スポーツ）におけるトレーニングをいかに効果的に行うか

# 競技スポーツ研究部会【課題 C】口頭発表⑧

座長：加藤 えみか（京都産業大学）

2023年8月31日(木) 13:30 ～ 14:29  RY107 (良心館１階ＲＹ１０７番教室)

13:30 ～ 13:44

## [競技スポーツ-C-29]後方かかえ込み宙返りにおける視線移動パターンと跳躍の高さの関係（心）

*佐藤 佑介[1] (1. 日本大学)

体操競技において後方かかえ込み宙返りは基本的な技であるといえよう。この運動を成功させるために、体操選手は空中において自身の位置や姿勢を適切に認識する必要がある。それを支えている感覚情報の1つが、視覚情報である。佐藤（2008）は、体操選手が後方かかえ込み宙返り中に視覚情報を利用していることを示す定量的なデータを取得した。それにより、体操選手は2種類の方法を用いてその情報を収集していることが明らかになった。1つは、踏切直後に固視を行うパターン（固視パターン）であり、もう1つはそれを行わないパターン（固視なしパターン）であった。次ぐ課題は、それらの視線移動パターンの違いが後方かかえ込み宙返り中の動作や姿勢に影響を与えるかどうかを検討することである。それを明らかにすることは、この運動中の合目的的な視線移動パターンの明示につながるであろう。本研究では、まずは後方かかえ込み宙返り中の2種類の視線移動パターンとこの運動中の跳躍の高さの関係を検討することを目的とした。実験参加者は、健常な男子大学体操選手であった。参加者は、体操競技で用いられる、ゆかで後方かかえ込み宙返りを行った。その際、体操選手はウェアラブルアイトラッカーを着用した。そのデータから、体操選手が踏切時に固視を行ったか否かが確認された。後方かかえ込み宙返りは、デジタルビデオカメラで撮影された。撮影された映像から、動作解析ソフトウェアにより重心が算出された。重心の垂直変位から跳躍の高さが求められた。実験の結果、後方かかえ込み宙返りにおける跳躍の高さは、固視パターンを行った場合の方が、固視なしパターンのものよりも高かった。固視なしパターンの場合、踏み切り直後に頭部を背屈させることが跳躍の高さの低下につながったと考えられる。今後、これらの視線移動パターンと動作や姿勢の関係をさらに検討する必要がある。

©一般社団法人 日本体育・スポーツ・健康学会

テーマ別研究発表 | 競技スポーツ研究部会 | 【課題C】ハイパフォーマンススポーツ（トップレベルの競技スポーツ）におけるトレーニングをいかに効果的に行うか

# 競技スポーツ研究部会【課題 C】口頭発表⑧

座長：加藤 えみか（京都産業大学）

2023年8月31日(木) 13:30 ～ 14:29  RY107 (良心館１階ＲＹ１０７番教室)

13:45 ～ 13:59

## [競技スポーツ-C-30]芸術系スポーツ競技者の認知機能（方）

*天野 勝弘[1]、小林 咲里亜[1,2]、滝沢 宏人[3]、栗原 俊之[4] (1. 環太平洋大学スポーツ科学センター、2. 帝京科学大学、3. 愛知大学、4. 国士舘大学)

芸術系スポーツ選手は、他のスポーツ選手や一般人よりも認知機能が高いと考えられる。そこで本研究では、芸術系スポーツ競技の選手と他のスポーツ競技の選手の認知機能を測定し、比較することを目的とした。 芸術系スポーツ競技として、ブレイクダンス（4名）、フィギュアスケート（11名）、アーティスティックスイミング（7名）、エアロビック（6名）、新体操（20名）の5競技を選抜し、比較としてその他のスポーツ競技、柔道（40名）、水泳（22名）、陸上（22名）、ハンドボール（26名）の4競技と一般学生も34名選抜し認知機能検査を行った。 認知機能検査項目は、ニューロトラッカー： NT、ストループ課題： ST、乱数課題： RN、4種類の暗算テスト（無音、歓声を聞きながら、途中中断して文章課題を行う、手紙の朗読を聞きながら）、ワードフリューエンシーテスト： WFであった。 NTに優れていたグループはブレイクダンス（1.41）、柔道（1.45）であった。劣っていたグループはエアロビック（1.07）、アートスイム（1.15）であった。ストループ課題では、フィギュア（75.6秒）、水泳（75.8秒）が優れ、アートスイム（83.9秒）、エアロビック（54.7秒）が劣っていた。乱数課題では、フィギュア（21.8個）、柔道（19.8個）、が優れ、エアロビック（15.8個）が劣っていた。 WFではフィギュア（13.2個）と一般学生（10.6個）が優れ、水泳（8.0個）が劣っていた。暗算テストでは、ほとんどのグループで、無音と手紙の朗読を聞きながらの課題で回答成績が悪く、歓声を聞きながらでは成績がよかった。最もよかったのは、前半と後半で分けて（途中文章問題あり）回答する条件であった。 NTはすべての項目と相関が認められたことから（ $P<0.001$）、 NTは総合的に認知機能を測る指標であると考えられた。

©一般社団法人 日本体育・スポーツ・健康学会

テーマ別研究発表 | 競技スポーツ研究部会 | 【課題C】ハイパフォーマンススポーツ（トップレベルの競技スポーツ）におけるトレーニングをいかに効果的に行うか

## 競技スポーツ研究部会【課題 C】口頭発表⑧

座長：加藤 えみか（京都産業大学）

2023年8月31日(木) 13:30 ～ 14:29 RY107 (良心館１階ＲＹ１０７番教室)

14:00 ～ 14:14

# [競技スポーツ-C-31]情動想起が上肢筋における皮質脊髄路興奮性に及ぼす影響（生,心）

*益城 優芽[1]、金子 直嗣[1]、加藤 辰弥[2,3]、山﨑 大輝[1]、中澤 公孝[1] (1. 東京大学大学院総合文化研究科、2. ソニーコンピュータサイエンス研究所　、3. 日本学術振興会特別研究員 (PD))

【背景】情動は脳の運動制御系に影響する。例えば、脳から筋への下行性経路である皮質脊髄路の興奮性（CSE）が情動介入によって変調することが知られている(Coombes et al., 2009, CABN)。しかし、情動が運動制御系に影響する神経機序の詳細、機能的意義、行動との関連性は不明である。本研究では、筋の機能的特性に応じて、 CSEに対する情動系変調の影響が異なるとの仮説を立て、これを検証することを目的とする。
【方法】健常者４名を対象とした。 CSEの指標として経頭蓋磁気刺激 (TMS) によって誘導される運動誘発電位 (MEP)を用いた。5種類の情動 (恐怖、悲しみ、怒り、喜び、ニュートラル）にまつわるエピソードを想起中に、一次運動野に対する TMSを12回行った（約1分間）。また、各情動想起課題中の上肢4筋における MEP振幅値を測定した。測定筋は、前腕2筋 (尺側手根屈筋、橈側手根伸筋)、手内筋2筋 (第一背側骨間筋、短母指外転筋)を対象とした。
【結果】ニュートラル条件における MEP振幅値を1として正規化した際の、各情動想起時における平均 MEP振幅値を評価した。恐怖、悲しみ、怒り、喜びの情動介入条件において、尺側手根屈筋における MEP振幅値の増大は、橈側手根屈筋手根伸筋よりも顕著であることが認められた。また、尺側手根屈筋では喜び条件、橈側手根伸筋と第一背側骨間筋では恐怖条件、短母指外転筋では悲しみと怒り条件において MEP振幅値の増大が最も大きく見られた。
【考察・結論】橈側手根伸筋と比べて、尺側手根屈筋において CSEの増大が顕著に見られ、情動によって影響を受けやすい筋が存在する可能性が示された。すなわち筋特異性の仮説を支持する結果となった。また、 CSEの変調は情動の種類によって異なることが示された。今後は被検者の数を増やし仮説検証を進める予定である。

©一般社団法人 日本体育・スポーツ・健康学会

テーマ別研究発表 | 競技スポーツ研究部会 | 【課題C】ハイパフォーマンススポーツ（トップレベルの競技スポーツ）におけるトレーニングをいかに効果的に行うか

## 競技スポーツ研究部会【課題 C】口頭発表⑧

座長：加藤 えみか（京都産業大学）
2023年8月31日(木) 13:30 ～ 14:29 RY107 (良心館１階ＲＹ１０７番教室)

14:15 ～ 14:29

# [競技スポーツ-C-32]投動作の運動イメージが上肢筋における皮質脊髄路興奮性に与える影響（生）

*山﨑 大輝[1]、金子 直嗣[1]、益城 優芽[1]、中澤 公孝[1] (1. 東京大学大学院総合文化研究科)

【緒言】
運動イメージとは、実際の動作は伴わずに、ある運動を脳内で再現させることを指す。先行研究により、運動イメージ中には実際に運動を実行しているときに似た神経活動が生じることが報告されている (Kaneko et al., 2021; Kasai et al., 1997)。しかしながら、これらの研究は歩行や単関節運動を対象としており、スポーツで実際に行われるような全身を用いた複合的な動作をイメージした際の神経活動を調べたものは少ない。本研究では、全身のダイナミックな運動である野球の投動作のイメージが、上肢筋の皮質脊髄路興奮性にどのような影響を与えるのかを調べることを目的とした。
【方法】
健常成人2名を対象とし、一次運動野橈側手根伸筋支配領域に経頭蓋磁気刺激 (TMS) を与え、運動誘発電位 (MEP) を誘発した。次の2条件で MEPを比較した。①閉眼で何もイメージしない安静条件、②閉眼し、利き腕でボールを前方に投げるイメージをするイメージ条件。各試行中の橈側手根屈筋 (FCR)、橈側手根伸筋 (ECR)、第一背側骨間筋 (FDI)、短母指外転筋 (APB) の MEPを記録した。 TMS の刺激強度は安静時運動閾値の120%とした。刺激回数は各条件で10回ずつ、合計20回であった。得られた MEPの最大振幅値から皮質脊髄路興奮性を評価した。
【結果・考察】
安静条件における FCR、 ECR、 FDI、 APBの MEP振幅はそれぞれ0.14±0.11mV、0.45±0.34mV、1.24±1.17mV、0.92±0.78mVであった。一方で、運動イメージ条件における MEP振幅はそれぞれ、0.38±0.08mV、0.49±0.41mV、1.93±1.22mV、1.49±1.19mVであった。これらの結果から、投動作の運動イメージは上肢筋の皮質脊髄路興奮性を増大させる可能性が示された。

©一般社団法人 日本体育・スポーツ・健康学会

テーマ別研究発表 | 学校保健体育研究部会：【課題C】体育・スポーツ健康科学は学校保健体育の進展にいかに貢献できるか

2023年8月31日(木) 13:30 ~ 14:29 | RY202 良心館２階ＲＹ２０２番教室

## 学校保健体育研究部会【課題C】口頭発表⑤

座長：柏木 悠（専修大学）

13:30 ~ 13:44

[学校保健体育-C-17] 器械運動の指導に求められる「定位感身体知の観察力」に関する発生運動学的考察（方）

*佐藤 晋也[1] (1. 東京女子体育大学)

---

13:45 ~ 13:59

[学校保健体育-C-18] 器械運動領域で取り扱われる技や動きに対する認識に関する研究（教,方）

側方倒立回転についての素朴概念の実態

*髙橋 徹[1]、広野 健[2] (1. 岡山大学、2. 岡山大学大学院)

---

14:00 ~ 14:14

[学校保健体育-C-19] 身体知の発揮による自己の動きの認識の向上と運動習熟との関係（教）

*鈴木 健一[1,2]、鈴木 聡[3] (1. 東京学芸大学連合学校教育学研究科、2. 板橋区立高島第三小学校、3. 東京学芸大学)

---

14:15 ~ 14:29

[学校保健体育-C-20] 小学生における開脚跳び動作の熟達度の移行ルートの検討（教,測,発）

*佐野 孝[1]、長野 崇[2]、上田 恵子[3]、國土 将平[1] (1. 中京大学、2. 大阪国際大学、3. 畿央大学)

テーマ別研究発表 | 学校保健体育研究部会 | 【課題C】体育・スポーツ健康科学は学校保健体育の進展にいかに貢献できるか

# 学校保健体育研究部会【課題 C】口頭発表⑤

座長：柏木 悠（専修大学）
2023年8月31日(木) 13:30 ～ 14:29 RY202 (良心館２階ＲＹ２０２番教室)

13:30 ～ 13:44

## [学校保健体育-C-17]器械運動の指導に求められる「定位感身体知の観察力」に関する発生運動学的考察（方）

*佐藤 晋也[1] (1. 東京女子体育大学)

教員養成課程を持つ体育系大学では、将来体育指導者を目指す学生に実技実習が課せられている。そこでは主に専門的実技能力の習得が目指されている。当然のことながら、将来生徒に教える可能性のある運動課題を自ら習得しておくことが、指導力の源泉となることは疑う余地はない。しかし、自らが動きを覚えたという経験は、それそのもので指導力の獲得であるとはいえず、それを教えるための術を知ることによって、はじめて実技指導力を獲得したといえる。つまり、教えるための身体知（促発身体知）の獲得が指導者養成の実技実習において最も重視されなければならない。

本研究はその教えるための身体知を構成する要素の一つとして、発生運動学における「定位感身体知」の観察に焦点をあて、将来体育指導者を目指す大学生が、どのようにその観察力を形成していくか、またその観察力はどのような創発身体知に基づいているかについて、現象学的運動学の立場からその構造を明らかにすることを目的としている。

なお本発表では、器械運動の実技実習で行われた観察力の査定に関する実験を対象として、他者の定位感身体知を読み取り、それを共感するために必要とされる基本技能と身体知について取り上げることとなる。

©一般社団法人 日本体育・スポーツ・健康学会

## 学校保健体育研究部会【課題 C】口頭発表⑤

座長：柏木 悠（専修大学）

2023年8月31日(木) 13:30 ～ 14:29 RY202 (良心館２階ＲＹ２０２番教室)

13:45 ～ 13:59

# [学校保健体育-C-18]器械運動領域で取り扱われる技や動きに対する認識に関する研究（教,方）

側方倒立回転についての素朴概念の実態

*髙橋 徹[1]、広野 健[2] (1. 岡山大学、2. 岡山大学大学院)

本研究の目的は、小学校・中学校・高等学校体育科の器械運動領域で取り扱われる技や動きに対する認識の実態を明らかにすることである。本発表ではその研究の一部として、「側方倒立回転」を取り上げた調査についての結果、および調査結果に基づく課題分析を報告する。学習者は学習を始める以前から身に付けている日常生活において経験的に獲得した知識を持っており、そのような知識は素朴概念や誤概念とも呼ばれている。教師にとって学習者が身に付けているそれらの概念を把握することは、授業構想や学習効果の促進という点から重要であり、時には学習者が身に付けている概念を破棄・修正することが求められる（小林，2018）。しかし、多くの人が大人になっても、ある領域の素朴概念を保持し続けることがあるという指摘もある（宮本，2017）。つまり、学習者だけでなく教師自身が間違った概念を身に付けている可能性もあり、その場合には教師側の誤った概念が学習者の学習の妨げになることも考えられる。器械運動領域の指導に関しては、他の領域と比べても特に苦手意識を持っている教員が多いことが報告されている（髙橋，2016；小島，2020；小島ほか，2021）。その要因としては、授業で取り扱う技や動きの正しい形を理解していない、あるいは正しい指導方法が分からない等の意見が見られる（水島，2006；小島ほか，2021）。しかし、器械運動領域の指導が困難であるという認識を多くの教員が持っている一方で、そこで取り扱われる技や動きに対して教員が正しい知識を有しているのか否かについては、その実態が十分に把握されているとは言い難い。このような問題意識のもと、本研究では「側方倒立回転」についての認識の実態を明らかにするべく、教職を志望する学生に対する調査を行った。調査から得たれたデータについては抄録提出時点で分析中であるため、詳細については発表時に報告する。

©一般社団法人 日本体育・スポーツ・健康学会

テーマ別研究発表 | 学校保健体育研究部会 | 【課題C】体育・スポーツ健康科学は学校保健体育の進展にいかに貢献できるか

# 学校保健体育研究部会【課題 C】口頭発表⑤

座長：柏木 悠（専修大学）
2023年8月31日(木) 13:30 ～ 14:29 RY202 (良心館２階ＲＹ２０２番教室)

14:00 ～ 14:14

## [学校保健体育-C-19]身体知の発揮による自己の動きの認識の向上と運動習熟との関係（教）

*鈴木 健一[1,2]、鈴木 聡[3] (1. 東京学芸大学連合学校教育学研究科、2. 板橋区立高島第三小学校、3. 東京学芸大学)

運動学習における知識に基づく認識において，岩田はその対象を①課題認識，②実態認識，③方法認識に分類した（岩田，1996）。また玉腰は，認識の位置づけと論議の過程を歴史的・思想的・方法的視点で検討し，体育授業における認識の形成過程の解明を今日的な課題として取り上げている（玉腰，2014）。

運動課題の認識においては，①目標像とする動きの把握，②課題を遂行する身体の動きを自分の身体として表象する動きの把握が求められる。それは，自己観察（ K.マイネル・金子，2008）能力の育成という視点から認識対象・方法の検討を必要とするといえるだろう。

小学校学習指導要領解説体育編には，「知識及び技能」の目標にある各種の運動の行い方の理解が「運動の基本的な動きや技能を身に付けることに効果的」であり，獲得した知識の活用による課題設定と解決が内容として示されている。ここに，知識の獲得とそれに基づいた動きの認識が体育科の見方・考え方を働かせた学習の充実に欠かせないことがうかがえる。

そこで本研究は，試行した学習者の実際の動きとそれに対する技術的知識に基づいた動きの認識に対して，金子(2006)の運動習熟の五位相を視点とし，身体知の獲得による動きの認識と運動技能の向上との関係に迫ることを目的とした。「マット運動」の検証授業を実施し，運動習熟位相ごとに，技術的知識の発揮・運動直後の動きの感じの記述内容と動きの習得度との関係を検討した。診断的・総括的授業評価得点ならびに学習後の技術的知識得点と運動能力得点は有意に向上したことから，本検証授業の妥当性が確かめられた。学習中の動きの認識調査結果から，高い習熟位相における身体知を発揮した動きの認識と運動能力の向上との関係が示唆された。

©一般社団法人 日本体育・スポーツ・健康学会

テーマ別研究発表 | 学校保健体育研究部会 | 【課題C】体育・スポーツ健康科学は学校保健体育の進展にいかに貢献できるか

## 学校保健体育研究部会【課題 C】口頭発表⑤

座長：柏木 悠（専修大学）
2023年8月31日(木) 13:30 ～ 14:29 RY202 (良心館２階ＲＹ２０２番教室)

14:15 ～ 14:29

# [学校保健体育-C-20]小学生における開脚跳び動作の熟達度の移行ルートの検討（教,測,発）

*佐野 孝[1]、長野 崇[2]、上田 恵子[3]、國土 将平[1] (1. 中京大学、2. 大阪国際大学、3. 畿央大学)

【目的】小学生の開脚跳び動作の5つの熟達度（佐野他、2019）の類似関係を確認し、熟達度の移行ルートを検討する。【方法】小学3-6年生488名の開脚跳び評価結果に潜在クラス分析を施し、熟達度を示す動作パターンの抽出と対象者の熟達度の分類を行った。次に、評価項目と熟達度を変数としたカテゴリカル主成分分析により動作能力を示す主成分を抽出し、各成分を軸とする散布図から熟達度の類似関係を確認した。また、主成分得点を用いたクラスター分析により各熟達度と近接する評価カテゴリ（動作）を特定した。さらに、散布図に対象者の分布を追加し、熟達度の移行ルートを総合的に検討した。【結果】潜在クラス分析で５パターン（失敗型、腕動作依存型、着地不安定型、安定試行型、切り返し出現型）が抽出された。カテゴリカル主成分分析は、失敗型を含める場合（着手までの項目を使用）と失敗型を除く場合（着地までの項目を使用）で行ったが、どちらも第１主成分に着手・着地動作能力、第２主成分に踏み切り動作能力が抽出された。散布図では、失敗型が他のパターンより着手動作能力が低い位置に布置された。失敗型を除くと、重心座標（第１主成分、第２主成分）で、着地不安定型（-0.6、0.4）と安定試行型（0.2、0.7）が近接し、腕動作依存型（-0.1、-1.4）は踏み切り動作能力が低く、切り返し出現型（3.1、0.9）は着手・着地動作能力が高く布置された。クラスター分析でも、腕動作依存型と切り返し出現型は、各々独立して近接のカテゴリとクラスターを形成したが、着地不安定型、安定試行型及び近接のカテゴリは同一のクラスターに分類された。上記の結果や散布図の対象者の分布を基に、失敗型から着手動作が向上し腕動作依存型へ、そこから踏み切り動作が向上し着地不安定型または安定試行型へ、着手動作が更に向上し切り返し出現型へ熟達度が移行するルートが設定された。

©一般社団法人 日本体育・スポーツ・健康学会

テーマ別研究発表 | 学校保健体育研究部会：【課題C】体育・スポーツ健康科学は学校保健体育の進展にいかに貢献できるか

2023年8月31日(木) 13:30 ~ 14:29 | RY206 良心館２階ＲＹ２０６番教室

## 学校保健体育研究部会【課題C】口頭発表⑥

座長：小椋 優作（中部学院大学短期大学部）

13:30 ~ 13:44

### [学校保健体育-C-21] 教員養成大学における体つくり運動の学びについて（教）

*佐藤 節子[1] (1. 宮城教育大学)

---

13:45 ~ 13:59

### [学校保健体育-C-22] 体つくり運動領域における「動きを持続する能力を高めるための運動」に関する研究（教）

授業実践からみた「走・縄・エアロビクス」の運動強度・運動特性

*松下 幸帆[1]、山本 聖也[1]、小林 博隆[2] (1. 大阪体育大学大学院スポーツ科学研究科、2. 大阪体育大学)

---

14:00 ~ 14:14

### [学校保健体育-C-23] ACPにおける運動遊びの種目別定量的評価（測）

身体活動量と個人差を包括的に捉えて

*塚本 将太[1]、大坪 健太[2]、冨士本 有希[1]、竹内 花[1]、春日 晃章[3] (1. 岐阜大学大学院、2. 岐阜協立大学、3. 岐阜大学)

---

14:15 ~ 14:29

### [学校保健体育-C-24] Grit特性の高低と運動・勉強に対する自信との関連（測）

中学生を対象として

*冨士本 有希[1]、塚本 将太[1]、竹内 花[1]、春日 晃章[2] (1. 岐阜大学大学院、2. 岐阜大学)

テーマ別研究発表 | 学校保健体育研究部会 | 【課題C】体育・スポーツ健康科学は学校保健体育の進展にいかに貢献できるか

# 学校保健体育研究部会【課題 C】口頭発表⑥

座長：小椋 優作（中部学院大学短期大学部）
2023年8月31日(木) 13:30 ～ 14:29 RY206 (良心館２階ＲＹ２０６番教室)

13:30 ～ 13:44

## [学校保健体育-C-21]教員養成大学における体つくり運動の学びについて（教）

*佐藤 節子[1] (1. 宮城教育大学)

本研究では、2017（平成29）年告示の文部科学省による小・中学校学習指導要領解説体育編において提示されている「体つくり運動」を、筆者が教員養成大学の授業において5年間実施した内容を振り返り、得られた知見を基に今後の展望について考察する。

学習指導要領に体つくり運動という名称が出現したのは，1998（平成10）年に改訂された小・中学校学習指導要領である。明治以来，教授要目・学習指導要領で使用してきた「体操」という用語が，これ以降消滅したのである。体つくり運動の内容構成は，10年ごとの改訂により名称が変わり，2017（平成29）年の改訂では，小学校低学年においては「からだほぐしの運動遊び」と「多様な動きをつくる運動遊び」，中学年においては「からだほぐしの運動」と「多様な動きをつくる運動」，高学年および中学校１，２年においては「からだほぐしの運動」と「からだの動きを高める運動」，中学校３年においては「からだほぐしの運動」と「実生活に生かす運動の計画」となった。これにより体力という名称が消滅したが，個々の体力テストの数値にとらわれることなく楽しみながら運動することで体力が高まるような内容が求められると考えられる。

筆者が教員養成大学の授業において実施した中で得られた知見は、次の3点が重要だということである。第1に、スモールステップで出来ることを増やして有能感を高めること、第2に、体との対話を通して、出来たことへの気付きを言語化させて運動をコントロールする能力を高めること、第3にコーディネーショントレーニングの要素を取り入れて、楽しみながら夢中になって取り組むことで，気が付かないうちに体力や運動能力を養うことである。

©一般社団法人 日本体育・スポーツ・健康学会

# 学校保健体育研究部会【課題 C】口頭発表⑥

座長：小椋 優作（中部学院大学短期大学部）

2023年8月31日(木) 13:30 ～ 14:29 RY206 (良心館２階ＲＹ２０６番教室)

13:45 ～ 13:59

## [学校保健体育-C-22]体つくり運動領域における「動きを持続する能力を高めるための運動」に関する研究（教）

授業実践からみた「走・縄・エアロビクス」の運動強度・運動特性

*松下 幸帆[1]、山本 聖也[1]、小林 博隆[2] (1. 大阪体育大学大学院スポーツ科学研究科、2. 大阪体育大学)

[目的]小・中学生の心肺機能低下を背景に、現学習指導要領解説（文部科学省.2017）では、体つくり運動の「動きを持続する能力を高めるための運動」の例示の運動方法として「走・縄・エアロビクス」が示されている。指導に際しては、「無理のない運動の強度と時間を選んで行うこと」とされ、先行研究では、例示された運動の運動強度に関する研究が報告されている。しかし、例示された運動の運動強度を比較した研究は見当たらない。そこで、本研究では、授業実践を通して、例示された運動の運動強度を明らかにし、個人の体力やねらいに応じた指導が充実することを目的とする。
[方法]大阪市立 H中学校第１学年２クラスの62名を対象に、授業実践を１クラスずつ行った。はじめの１時間目にオリエンテーション、２・３・４時間目に走、縄、エアロビクスの授業を１時間ずつ行った。運動教材は、「走：チャレンジペース走」「縄：８の字跳びⅠ（ BPM60）・８の字跳びⅡ（ BPM70）」「エアロビクス：ローインパクト・ハイインパクト」とした。測定項目は運動教材の METs、運動後心拍数、 RPEである。また、カルボーネン法を用いて運動強度（%）を算出した。加えて、運動教材の運動強度を比較するために一元配置分散分析及び多重比較検定を実施した。なお、有意水準は５%とした。
[結果]全測定項目において、チャレンジペース走が最も高い値となった。多重比較検定の結果、運動後心拍数及びRPEにおけるチャレンジペース走とその他４つの運動教材の間に有意差を認めた。 METsは各運動間に有意差を認めたが、８の字跳びⅠとⅡ、ローインパクトとハイインパクトの間には有意差を認めなかった。
[結論]運動教材の運動強度を明らかにすることにより、「動きを持続する能力を高めるための運動」を指導する際の一つの手立てとなり得ることが考えられた。当日はこの結果に関する詳細を報告する。

©一般社団法人 日本体育・スポーツ・健康学会

# 学校保健体育研究部会【課題 C】口頭発表⑥

座長：小椋 優作（中部学院大学短期大学部）

2023年8月31日(木) 13:30 ～ 14:29 RY206 (良心館２階ＲＹ２０６番教室)

14:00 ～ 14:14

## [学校保健体育-C-23]ACPにおける運動遊びの種目別定量的評価（測）

身体活動量と個人差を包括的に捉えて

*塚本 将太[1]、大坪 健太[2]、冨士本 有希[1]、竹内 花[1]、春日 晃章[3] (1. 岐阜大学大学院、2. 岐阜協立大学、3. 岐阜大学)

［目的］本研究は、日本スポーツ協会が開発し推し進めるアクティブ・チャイルド・プログラム（ ACP）の各運動遊びの身体活動量を定量的に評価することを目的とした。［方法］対象者は、 G県の G大学に在籍する大学生および大学院生50名（男子30名、女子20名）であった。測定項目は、運動強度、歩数および心拍数とした。運動強度の測定には、3軸加速度計 Active Style Pro HJA-750C（オムロンヘルスケア社製）を使用し、10秒毎のMETsを計測した。歩数・心拍数の計測には、腕時計型 Wristable GPS SF-850（ EPSON社製）を使用した。測定種目は、日本スポーツ協会が発行する ACPのガイドブックに掲載されている遊びを中心に18種目を選択した。運動遊びの身体活動量の比較をするため、一元配置分散分析を適用し、有意な主効果が認められた場合、多重比較検定を適用し検討した。また、運動遊びごとの身体活動量の個人差の大小を検討するため、各測定項目において変動係数を算出するとともに、 Levene検定を適用し、有意な主効果が認められた場合には、 Bonferroniの方法による二群間の等分散性の検定を適用した。［結果］分析の結果、全ての項目において有意な主効果が認められ、多重比較検定の結果、二人組で行う運動遊びである“あっちとんでぴょん”が他の16の運動遊びよりも有意に高い運動強度を示した。 Levene検定の結果、運動強度および歩数に有意な主効果が認められ、二群間の等分散性の検定の結果、“氷オニ”は他の全ての遊びよりも分散が有意に大きく、“ねことねずみ”は他の14の遊びよりも有意に小さかった。［結論］ ACPにおける運動遊びの活動量特性について、 個人差の大小を捉えることで、学校現場で運動遊びを実施する際、遊びのアレンジや組み合わせを考慮する上での重要な指標になり得ると考えられる。

©一般社団法人 日本体育・スポーツ・健康学会

# 学校保健体育研究部会【課題 C】口頭発表⑥

座長：小椋 優作（中部学院大学短期大学部）

2023年8月31日(木) 13:30 ～ 14:29 RY206 (良心館２階ＲＹ２０６番教室)

14:15 ～ 14:29

## [学校保健体育-C-24]Grit特性の高低と運動・勉強に対する自信との関連（測）

中学生を対象として

*冨士本 有希[1]、塚本 将太[1]、竹内 花[1]、春日 晃章[2] (1. 岐阜大学大学院、2. 岐阜大学)

本研究は、中学生の Grit特性と運動・勉強に対する自信の程度との関連を検討することを目的とした。 G県の公立中学校に所属する中学生457名（1学年：163名、2学年：137名、3学年：157名）を対象とし、質問紙調査を実施した。 Grit特性の評価として、西川ら（2015）が作成した8項目の質問項目から構成される日本語版 Short-Grit尺度を使用し、粘り強さの指標となる根気得点、一貫した関心の持続の指標となる一貫性得点を算出した。得られた根気得点および一貫性得点の平均値（ M）と標準偏差（ SD）から学年ごとに3群（下位群： X<M-1SD、中位群： M-1SD≦ X<M+1SD、上位群： M+1SD≦ X）に区分し、分析に用いた。運動・勉強に対する自信の程度については5段階（5：できる、4：ややできる、3：どちらでもない、2：ややできない、1：できない）で回答を得た。運動・勉強に対する自信の程度について回答を3段階（3：できる、2：どちらでもなかった、1：できない）に再区分した。 根気得点および一貫性得点の3群を従属変数、性、運動・勉強に対する自信の程度をそれぞれ独立変数とする二元配置分散分析を適用し、有意な主効果が認められた場合には多重比較検定を行った。なお、分析は学年毎で行った。 二元配置分散分析の結果、根気得点3群と運動との間では全ての学年、勉強との間では3学年のみで有意な主効果が認められた。また、一貫性得点3群と運動との間では3学年、勉強との間では1、3学年で有意な主効果が認められた。一方で、根気得点3群および一貫性得点3群と性との間に有意な主効果は認められなかった。 多重比較検定の結果、根気得点3群との間において、運動・勉強ができると回答した生徒において有意な差が見られた。また、一貫性得点3群との間において、運動ができ、勉強ができないと回答した生徒に有意な差が見られた。

©一般社団法人 日本体育・スポーツ・健康学会

テーマ別研究発表 | 健康福祉研究部会：【課題C】運動不足（不活動）に伴う心身機能の低下をいかに予防するか

2023年8月31日(木) 13:30 ~ 14:29 | RY301 良心館３階ＲＹ３０１番教室

## 健康福祉研究部会【課題C】口頭発表①

座長：山田 孝禎（福井大学）

13:30 ~ 13:44

### [健康福祉-C-01] 健康調査からみえる青年期の現状と課題（教）

生活習慣調査・骨密度測定・血中ヘモグロビン値測定から

*高橋 和子[1] (1. 静岡産業大学)

---

13:45 ~ 13:59

### [健康福祉-C-02] インクルーシブ体育における通常学級在籍児童と特別支援学級在籍児童の運動強度比較（発）

*熊谷 慎太郎[1]、春日 晃章[2] (1. 兵庫教育大学大学院、2. 岐阜大学)

---

14:00 ~ 14:14

### [健康福祉-C-03] 幼児における腸内細菌叢と運動習慣・体力との関連（測,発）

*小栗 和雄[1] (1. 岐阜聖徳学園大学)

---

14:15 ~ 14:29

### [健康福祉-C-04] 子どもの良好な生体リズムのための必要受光時間の検討（発）

日常生活環境下の受光とメラトニン分泌パタンとの関連を基に

*湊谷 勇次[1]、城所 哲宏[2]、鹿野 晶子[2]、野井 真吾[2] (1. 日本体育大学　大学院、2. 日本体育大学)

テーマ別研究発表 | 健康福祉研究部会 | 【課題C】運動不足（不活動）に伴う心身機能の低下をいかに予防するか

# 健康福祉研究部会【課題 C】口頭発表①

座長：山田 孝禎（福井大学）

2023年8月31日(木) 13:30 ～ 14:29  RY301 (良心館３階ＲＹ３０１番教室)

13:30 ～ 13:44

## [健康福祉-C-01]健康調査からみえる青年期の現状と課題（教）

生活習慣調査・骨密度測定・血中ヘモグロビン値測定から

*高橋 和子[1] (1. 静岡産業大学)

本研究は、コロナ禍の影響もあった2020年～2023年にかけて行った、青年期の健康調査の現状と課題を明らかにすることを目的とする。対象は大学教育における科目「からだ気づき」「体つくり運動」受講生240名？である。調査項目は、①生活習慣調査（睡眠・食事・運動・食事・考え方等）、②超音波骨密度測定装置による骨密度測定、③抹消血管モニタリング装置 ASTRMフィットによる非侵襲的方法での血中ヘモグロビン値測定である。健康調査を行うにあたり、日本の平均寿命や健康寿命の現状、検診の必要性や結果の解釈等を学習後、調査を実施した。測定後、健康に過ごすための留意点や悪い習慣を見直し行動変容に繋がるような学習をした。データの分析は IBM Statistics 19を使用し、統計処理を行った。結果については、大会時に発表する。

©一般社団法人 日本体育・スポーツ・健康学会

# 健康福祉研究部会【課題 C】口頭発表①

座長：山田 孝禎（福井大学）
2023年8月31日(木) 13:30 ～ 14:29 RY301 (良心館３階ＲＹ３０１番教室)

13:45 ～ 13:59

## [健康福祉-C-02]インクルーシブ体育における通常学級在籍児童と特別支援学級在籍児童の運動強度比較（発）

*熊谷 慎太郎[1]、春日 晃章[2] (1. 兵庫教育大学大学院、2. 岐阜大学)

[背景・目的]インクルーシブ体育は、障がいのある子とない子が同じ集団で活動することで、双方の人間的な成長が期待できるとされている。ただし、身体運動が主要な学習対象となる体育において、インクルーシブ体育中の身体活動について量的な側面から詳細な検証をした研究はほとんどない。そこで本研究は、インクルーシブ体育中の児童の運動強度を調査し、身体活動の量的な観点から見えてくる課題を検討することを目的とした。[方法]対象者は公立の小学校に通う1、３、４および６年生の児童計316名（通常学級児童302名、特別支援学級児童14名）であった。18回の授業（9学級でそれぞれ2回）で、活動量計を用いて運動強度を計測するとともに、デジタルビデオカメラで授業の様子を記録し、期間記録法によって授業場面を区分した。運動学習場面における平均METs、運動学習場面における中高強度身体活動時間の割合（以下、 MVPA%）を算出し、通常学級児童と特別支援学級児童の平均値の差を t検定により検討した。さらに、各授業で通常学級児童の MVPA%の平均値を下回った特別支援学級児童を対象に、運動領域による MVPA%の差について Mann-Whitney検定により検討した。 [結果・考察]通常学級児童と比較して運動学習場面中の特別支援学級児童の MVPA%は有意に小さかった。さらに、通常学級児童の MVPA%の平均値を下回った特別支援学級児童においては、体つくり運動領域と比較してボール運動領域（本研究ではバレーボール、ポートボール、 Tボール）で通常学級児童の MVPA%平均値からのマイナス値が有意に大きかった。以上より、特別支援学級児童においてはインクルーシブ体育に限らず学校生活の中で MVPA時間を確保することが求められること、特に MVPA時間が短い児童においては、体つくり運動領域で MVPA時間を確保できる可能性が高いことが示唆された。

©一般社団法人 日本体育・スポーツ・健康学会

テーマ別研究発表 | 健康福祉研究部会 | 【課題C】運動不足（不活動）に伴う心身機能の低下をいかに予防するか

# 健康福祉研究部会【課題 C】口頭発表①

座長：山田 孝禎（福井大学）

2023年8月31日(木) 13:30 ～ 14:29 RY301 (良心館３階ＲＹ３０１番教室)

14:00 ～ 14:14

## [健康福祉-C-03]幼児における腸内細菌叢と運動習慣・体力との関連（測,発）

*小栗 和雄[1] (1. 岐阜聖徳学園大学)

近年、腸内細菌叢の組成によって代謝産物が変化し、宿主のエネルギー供給や免疫機能に影響を与え、がんや肥満、アレルギー、皮膚疾患、婦人科疾患、自閉症などにつながることが明らかにされている。また、その組成は、食事・運動・睡眠などの生活習慣、ストレス、加齢などによって大きく変化し，かなりの個体差が生じる。ただし、日本人小児における腸内細菌叢と運動習慣や体力との関係は検討されていない。ただし、こうした先行研究は成人を対象に行われており、日本人小児における腸内細菌叢の特性は全く検討されておらず、その特性すら明らかとなっていない。そこで、本研究では、幼児を対象に次世代シーケンサーを用いて腸内細菌叢の組成を分析し、運動習慣や体力との関係を検討することを目的とした。 対象者は、3歳の幼児53名であった。身長と体重を測定し、性別・身長別の標準体重から肥満度を算出した。各対象者から糞便を採便容器にて収集し、細菌16S rRNAを標的とした定量的 RT-PCR法による次世代シーケンサーを用いたメタゲノム解析を株式会社サイキンソーに委託した。本研究では、保有菌の種類数、多様性指標、ファーミキューテス門・バクテロイデス門・アクチノバクテリア門・プロテオバクテリア門の比率、ビフィズス菌、乳酸産生菌、酪酸産生菌を検出した。また運動習慣のアンケート調査、25m走、立ち幅跳び、ソフトボール投げの体力測定を腸内細菌叢との関係を検討した。 分析の結果、幼児の菌の種類数が有意に少なく、多様性も低いことが認められた。腸内細菌の各項目と運動習慣、および体力との関係を検討した結果、保有菌の少なさや多様性の低い幼児と運動習慣の未熟に関連性が認められた。今後も小児の腸内細菌叢の組成に関連する因子を検討し、小児の健康の維持増進に寄与したい。

©一般社団法人 日本体育・スポーツ・健康学会

テーマ別研究発表 | 健康福祉研究部会 | 【課題C】運動不足（不活動）に伴う心身機能の低下をいかに予防するか

# 健康福祉研究部会【課題 C】口頭発表①

座長：山田 孝禎（福井大学）

2023年8月31日(木) 13:30 ～ 14:29  RY301 (良心館３階ＲＹ３０１番教室)

14:15 ～ 14:29

## [健康福祉-C-04]子どもの良好な生体リズムのための必要受光時間の検討（発）

日常生活環境下の受光とメラトニン分泌パタンとの関連を基に

*湊谷 勇次[1]、城所 哲宏[2]、鹿野 晶子[2]、野井 真吾[2] (1. 日本体育大学　大学院、2. 日本体育大学)

目的：日本では、子どもの睡眠状況の悪化が問題視されている。他方、日中の受光はメラトニンリズムの位相を前進させ、夜間のメラトニン分泌量も増加させることが報告されている。しかし、健康睡眠習慣のための具体的な必要受光時間は検討されていない。そこで本研究では、子どもの日常生活環境下における受光とメラトニン分泌パタンとの関連を検討し、良好な生体リズムのための必要受光時間を明らかにすることを目的とした。方法：対象は東京都内 A小学校の小学5年生91名であり、分析には欠損値がない56名分のデータを使用した。調査は2022年10月15～24日に実施された。調査項目は受光量、メラトニン分泌パタン、就床時刻、起床時刻、睡眠時間であった。受光量は携帯型照度計（オムロン社、2JCIE-BL01）を用いて起床直後から就床直前まで５分間ごとに測定した。メラトニン分泌パタンは Noi and Shikano（2011）に倣って水曜日の夜（21:30）とその翌朝（6:30）に唾液を採取して唾液メラトニン濃度を測定した。就床時刻、起床時刻は自作の健康記録シートを用いて対象者自身が記録し、睡眠時間も算出した。分析では夜のメラトニン濃度＞翌朝のメラトニン濃度の者を朝型、翌朝のメラトニン濃度＞夜のメラトニン濃度の者を夜型とした上で、独立変数に1日の屋外光（1,000lux）受光時間、従属変数にメラトニン分泌パタンの朝型、夜型を投入した ROC曲線を作製し、 Youden indexを用いてカットオフ値を同定した。結果：本研究の結果、メラトニン分泌パタンの朝型、夜型を判定するのに有効な屋外光受光時間のカットオフ値は113.3分間を示した（感度：0.300、特異度：0.054、AUC：0.533、95%CI=0.357-0.709）。付記：本研究は2022-26年度科研費（基盤 B）（研究代表者：野井真吾）の助成を受けて実施された。

©一般社団法人 日本体育・スポーツ・健康学会

テーマ別研究発表 | 健康福祉研究部会：【課題C】運動不足（不活動）に伴う心身機能の低下をいかに予防するか

2023年8月31日(木) 13:30 ~ 14:14 | RY302 良心館３階ＲＹ３０２番教室

## 健康福祉研究部会【課題C】口頭発表②

座長：小泉 佳右（千葉大学）

13:30 ~ 13:44

### [健康福祉-C-05] 高齢者における継続的自転車利用と要介護化・死亡リスクとの縦断的関連（測）

二時点調査に基づく長期追跡研究

*角田 憲治[1]、永田 康喜[2]、神藤 隆志[3]、北濃 成樹[4]、大藏 倫博[2] (1. 山口県立大学、2. 筑波大学、3. 大阪教育大学、4. 明治安田厚生事業団)

---

13:45 ~ 13:59

### [健康福祉-C-06] 高齢者における筋力低下に関連する遺伝子多型の探索（生）

*齋藤 未花[1]、膳法 浩史[2]、本間 洋樹[1]、アルメイダ ケトリーン[1]、出口 実[1]、上妻 歩夢[1]、岡本 孝信[1]、中里 浩一[1]、菊池 直樹[1] (1. 日本体育大学、2. 東京聖栄大学)

---

14:00 ~ 14:14

### [健康福祉-C-07] インソール装着歩行は高齢者の転倒予防支援に貢献するのか？（介,方,機器開発,発明）

歩容と足底圧変化の事例

*山内 賢[1]、市河 勉[2]、荻田 亮[3]、吉田 弘法[4]、長谷川 弘道[1] (1. 慶應義塾大学　体育研究所、2. 松山東雲短期大学、3. 大阪公立大学、4. 足利大学)

テーマ別研究発表 | 健康福祉研究部会 | 【課題C】運動不足（不活動）に伴う心身機能の低下をいかに予防するか

# 健康福祉研究部会【課題 C】口頭発表②

座長：小泉 佳右（千葉大学）

2023年8月31日(木) 13:30 ～ 14:14 RY302 (良心館３階ＲＹ３０２番教室)

13:30 ～ 13:44

## [健康福祉-C-05]高齢者における継続的自転車利用と要介護化・死亡リスクとの縦断的関連（測）

二時点調査に基づく長期追跡研究

*角田 憲治[1]、永田 康喜[2]、神藤 隆志[3]、北濃 成樹[4]、大藏 倫博[2] (1. 山口県立大学、2. 筑波大学、3. 大阪教育大学、4. 明治安田厚生事業団)

加齢に伴い、歩行や自転車による活動的移動が特異的に減少することが知られている。自転車は、歩行よりも広範囲の移動を可能とし、膝等の関節への負担も少ない。本邦は、高齢者であっても、そのほとんどが自転車の乗車技術を持っている希少な国であり、交通網が脆弱な中山間地域では、自転車は高齢者の生活を支える移動手段となっている。本研究では、中山間地域在住高齢者を対象に、二時点の郵送調査と、市データベースに基づく追跡調査により、自転車の継続的利用の重要性を要介護化および死亡リスクの低減という観点から検証する。茨城県笠間市における二時点の郵送調査（2013年と2017年）の両方で、自転車利用について回答が得られた3633名の高齢者を対象に、市データベースを用いて要介護1以上の認定と死亡の状況を2021年まで追跡した。 Cox回帰分析を用い、年齢、性、学歴、経済状況、同居有無、 BMI、各種既往、ストレス度、外出頻度、主移動手段としての車利用有無、中高強度活動量を調整した。欠損値は多重代入法により補完した。追跡の結果、二時点における継続的な自転車利用者は、一貫した未利用者に比べて、有意に低い要介護化リスク（ HR＝0.75, 95% CI＝0.58ー0.98）および死亡リスク（ HR＝0.57, 95% CI＝0.40ー0.81）を示した。一方、自転車利用の中止、開始については、リスク低減と有意な関連を認めなかった。また、補足として行った一時点（2013年）の自転車利用量（分／週）に基づく分析では、両アウトカムと有意な関連を認めなかった。高齢者における継続的な自転車利用は、要介護化および死亡のリスク低減と関連するが、利用中止や開始ではこのような関連は認められないことがわかった。また、一時的な利用状況の評価では、このような関連性は検出できないため、複数回にわたって行動を評価することの重要性が確認された。

©一般社団法人 日本体育・スポーツ・健康学会

# 健康福祉研究部会【課題 C】口頭発表②

座長：小泉 佳右（千葉大学）

2023年8月31日(木) 13:30 ～ 14:14 RY302 (良心館３階ＲＹ３０２番教室)

13:45 ～ 13:59

## [健康福祉-C-06]高齢者における筋力低下に関連する遺伝子多型の探索（生）

*齋藤 未花[1]、膳法 浩史[2]、本間 洋樹[1]、アルメイダ ケトリーン[1]、出口 実[1]、上妻 歩夢[1]、岡本 孝信[1]、中里 浩一[1]、菊池 直樹[1] (1. 日本体育大学、2. 東京聖栄大学)

背景: 加齢による筋力低下の遺伝率は22-35%であると報告されている。一方で関連する遺伝子多型については特定されていない。また、筋力低下に影響する遺伝要因は筋機能に関連する表現型に幅広く影響する可能性が考えられる。目的: 高齢者における筋力低下に関連する遺伝子多型をゲノムワイド関連解析(GWAS)を用いて探索することとした。方法: 対象者は60歳以上の高齢者85名(男性53名、女性32名)とし、ジャポニカアレイ v2(TOSHIBA社製)を用いてジェノタイピングを行った。2018年と2021年に高齢者の握力を測定し、3年間の変化率のGWASを行った。危険率は $p<5\times10^{-8}$、サジェスティブラインを $p<5\times10^{-5}$とした。結果: 対象者の握力は3年間で7.4±9.4%の低下が認められた。 GWASの結果、 $p<5\times10^{-8}$に達する遺伝子多型は0多型、 $p<5\times10^{-5}$に達する遺伝子多型は346個45領域同定された。そのうち、 $p=5.87\times10^{-6}$の有意確率で Tropomyosin3(TPM3)遺伝子 rs16835846多型が同定された。 TPM3は筋に発現するアクチン結合タンパク質であり、 TPM3遺伝子の変異は筋の疾患に影響することが報告されている。 TPM3遺伝子 rs16835846多型の GG型は TPM3遺伝子の発現が低く、握力の低下率は GG型-17.2±12%、 AG型-8.1±7.4%、 AA型-2.4±8.4%であった。性別および2018年の握力を考慮した場合においても遺伝子多型間で有意差が認められた($p=9.0\times10^{-6}$)。結論および今後の検討: 高齢者における筋力低下に関連する遺伝子多型は45領域同定され、そのうち筋の疾患に影響する遺伝子をコードする遺伝子多型が同定された。今後はこれらの遺伝子多型が筋機能に関連する他の表現型へ及ぼす影響についても検討していく。

©一般社団法人 日本体育・スポーツ・健康学会

# 健康福祉研究部会【課題 C】口頭発表②

座長：小泉 佳右（千葉大学）

2023年8月31日(木) 13:30 ～ 14:14 RY302 (良心館３階ＲＹ３０２番教室)

14:00 ～ 14:14

## [健康福祉-C-07]インソール装着歩行は高齢者の転倒予防支援に貢献するのか？（介,方,機器開発,発明）

歩容と足底圧変化の事例

*山内 賢[1]、市河 勉[2]、荻田 亮[3]、吉田 弘法[4]、長谷川 弘道[1] (1. 慶應義塾大学　体育研究所、2. 松山東雲短期大学、3. 大阪公立大学、4. 足利大学)

【緒言】近年の疫学研究において、歩行機能低下による転倒は、健康関連 QOL阻害や ADL低下、要介護因子増大等のトリガーとなる重要問題であり、易転倒素因および予防法の探究が切望される。本研究はインソール装着による歩容の調整戦略を考案するパイロット研究である。
【目的】インソール装着使途は、靴の機能性向上、足病変緩和の体験価値的報告や歩行能力改善等の解剖学的助言がある。従って歩行虚弱化予防や支援となる物理的かつ補助的調整戦略の処方を予見させる。本研究の目的は、インソール着用による歩容習練に如何なるトレーナビリティーが潜在するかの検証である。
【方法】研究実施前に目的、方法と分析実施の同意を得た被験者８名（73.6±6.4歳）は、ランプ目視の直立姿勢から発光認識直後に素早い反応で直線歩行を開始する（歩行企図）。その後７ｍ先で折り返す快適歩行を1試行する。計測項目は往路の歩行企図から初動３歩（一歩目を初歩）、復路の中間６歩（約2～6m区間）の歩幅、歩調、速度である。歩容はドローン映像から単眼計測法で算出する。インソール装着効果の分析内容は、① 未装着条件（日常履き慣れた靴）と装着で15分程度の繰り返し10ｍ障害物歩行介入後に脱着して未装着と同等条件にした歩容を t 検定で暴露、② 上述２条件実施前の立位足底圧を計測する。③ その他インソール体験の内省である。
【結果】初歩の歩幅（ $p<.05$）、および６歩平均の歩幅（ $p<.05$）、速度と歩調（ $p<.1$）に有意な増幅を認めた。足底圧の動態変化は左右差が縮小、前後に拡張、かつ各々で均等化した。装着後に「靴の密着と踵着床感覚が増す」の回答を得た。
【考察】インソール着用介入による変化は、歩行姿勢の特別な技術コーチング無しでも誘発する受動的現象であり、自発的に歩くだけの運動処方プログラムに装着を加える習練支援の有効性を示唆する結果と考えられる。

©一般社団法人 日本体育・スポーツ・健康学会

テーマ別研究発表 | スポーツ文化研究部会：【課題C】多様なスポーツ文化の保存・流通・促進をいかに刷新していくか

2023年8月31日(木) 13:30 ~ 14:29 | RY303 良心館３階ＲＹ３０３番教室

## スポーツ文化研究部会【課題C】口頭発表①

座長：久保田 浩史（東京学芸大学）

13:30 ~ 13:44

[スポーツ文化-C-01] 秩父・西多摩地域における民俗芸能の持続可能なかかわりの拡大の可能性（人）

歌舞伎の式三番・番立との関係が推察される三番叟を手がかりとして

*安倍 希美[1] (1. 北里大学)

---

13:45 ~ 13:59

[スポーツ文化-C-02] 日本における走高跳の踏切技術論の変遷に関する一考察（史,方）

*杉浦 澄美[1]、大林 太朗[1]、木越 清信[1] (1. 筑波大学体育系)

---

14:00 ~ 14:14

[スポーツ文化-C-03] 子どもたちへの還元を目指したカラリパヤットの実践研究（人）

*高橋 京子[1] (1. フェリス女学院大学)

---

14:15 ~ 14:29

[スポーツ文化-C-04] 三浦ヒロの国民保健体操（初代ラジオ体操第１）への関与（史,教）

音声資料（レコード）に着目して

*苫米地 里香[1]、崎田 嘉寛[2] (1. 北海道大学大学院、2. 北海道大学)

# スポーツ文化研究部会【課題 C】口頭発表①

座長：久保田 浩史（東京学芸大学）

2023年8月31日(木) 13:30 ～ 14:29  RY303 (良心館３階ＲＹ３０３番教室)

13:30 ～ 13:44

## [スポーツ文化-C-01]秩父・西多摩地域における民俗芸能の持続可能なかかわりの拡大の可能性（人）

歌舞伎の式三番・番立との関係が推察される三番叟を手がかりとして

*安倍 希美[1] (1. 北里大学)

1.はじめに　三番叟は、事の始まりには三番叟と言われ、芸能のみならず玩具・美術品等、多くの人に愛されてきた。歌舞伎の式三番は、江戸時代に江戸では太夫元らが元日や顔見世の初日に、それ以外の日は下立役という下級の役者が毎早朝に演じた。前者は江戸末期頃には廃れ、後者は明治中年頃迄、頭取が三番叟のもみの段のみを演じて制度を繋ぎ、それは地方でも演じられていた。本研究は今まで、小鹿野歌舞伎の三番叟は、江戸若しくは東京の中央の舞台で演じられていたもみの段のみの番立である事、番立には型と変化がある事、等を報告してきた。小鹿野町の属する秩父とそこに繋がる西多摩地域には多くの民俗芸能が存在するが、元来の人口流出・高齢化に加え感染症の問題は芸能団体に大きなダメージを齎した。今そこから再出発するに際し、歌舞伎の式三番と番立との関係が推測される三番叟を手掛かりとして新たな価値・意義を探り、継続可能なかかわりの拡張への可能性を考えたい。2.対象と方法　小鹿野歌舞伎の三番叟に関しては主に文献調査により、檜原村数馬馬鹿面囃子の三番叟と檜原村小沢の式三番については、2017-2019に収取していた各種資料等により新たな知見を探った。3.結果と考察　国立劇場で上演された番立には、音羽屋の坂東八重之助と尾上菊十郎が関与しており、小鹿野歌舞伎の祖である音羽屋坂東彦五郎と、音羽屋の坂東即ち坂東彦三郎との関係が示唆された。小沢の式三番の三番叟は暴れさんばで、上演時の会場の様子は、関根只誠が東都歌舞伎故実で、誠に勇ま敷、と記した中村座での式三番の上演風景を彷彿とさせた。数馬馬鹿面囃子の三番叟は、神奈川県の歌舞伎の師匠から教わったもので番立と思われたが、舞台上の移動は小鹿野歌舞伎の四角形ではなく、翁の大事に記された天地人を示す三角形と同様であった。これらの結果を持続可能な方法でかかわりを拡張させる一助にできればと思われた。

©一般社団法人 日本体育・スポーツ・健康学会

テーマ別研究発表 | スポーツ文化研究部会 | 【課題C】多様なスポーツ文化の保存・流通・促進をいかに刷新していくか

## スポーツ文化研究部会【課題 C】口頭発表①

座長：久保田 浩史（東京学芸大学）
2023年8月31日(木) 13:30 ～ 14:29 RY303 (良心館３階ＲＹ３０３番教室)

13:45 ～ 13:59

# [スポーツ文化-C-02]日本における走高跳の踏切技術論の変遷に関する一考察（史,方）

*杉浦 澄美[1]、大林 太朗[1]、木越 清信[1] (1. 筑波大学体育系)

近代陸上競技における走高跳では、その歴史的変遷の中で数多くの跳躍方法が生み出され、記録が更新されてきた。これまで、日本におけるその技術史研究では、明治期以降のはさみ跳び、イースタンカットオフ（正面跳）、ベリーロール、そして現在主流となっている背面跳が発表されるまでの跳躍方法とその技術の変遷が整理されている（三沢、1972；三澤、1991）。これらの研究では、各跳躍方法に顕著な違いが認められる技術、例えば、助走の方向やスピード、踏切での遊脚の振り上げ方や腕の使い方、空中でのバーのかわし方などに着目した分析や類型化が行われている。一方で、従来の研究では踏切局面における踏切脚の動作に着目したものはなく、また、その背景にある「より高く跳ぶ」ための理論がどのような議論を経て形成されてきたのかについても十分に検討されていない。

そこで本研究では、指導書や専門誌の記述を分析することで、日本における走高跳の踏切に関する技術論の変遷を明らかにすることを目的とした。はじめに手がかりとするのは、走高跳という題名がつけられた2冊の指導書、『走高跳』（大西、1977）と『走り高跳び』（阪本、1994）である。これらの指導書における踏切に関する技術論を軸に、他の雑誌記事等を補足しつつ、特に20世紀後半の日本における走高跳の踏切技術論の変遷について考察したい。

©一般社団法人 日本体育・スポーツ・健康学会

テーマ別研究発表 | スポーツ文化研究部会 | 【課題C】多様なスポーツ文化の保存・流通・促進をいかに刷新していくか

# スポーツ文化研究部会【課題 C】口頭発表①

座長：久保田 浩史（東京学芸大学）

2023年8月31日(木) 13:30 ～ 14:29 RY303 (良心館３階ＲＹ３０３番教室)

14:00 ～ 14:14

## [スポーツ文化-C-03]子どもたちへの還元を目指したカラリパヤットの実践研究（人）

*高橋 京子[1] (1. フェリス女学院大学)

発表者は、これまで民族スポーツである、南インドのマーシャルアーツ、カラリパヤットを日本の子どもたちへどのように還元できるのかについて検討を続けてきた。 コロナ禍やスクリーンタイムの時間の増加などを背景に、日本の子どもたちの体力低下が指摘されている。次世代を担う子どもたちの体力低下は、わが国においても喫緊の課題であるといえる。一方、発表者は長年にわたり、人類学的にカラリパヤットを研究してきたが、その研究成果を日本の子どもたちへ還元する方法を模索するようになった。そこで発表者は、民族スポーツであるカラリパヤットが、子どもたちの心身へどのように影響を与えられるのかというテーマで数回ワークショップを実施してきた。 これらを背景に、本研究は、幼児期（年中児、年長児）、児童期（小学2年生）、そして少年野球部（年長～小学3年生）の子どもたちへのワークショップを通じて得られた知見をまとめ、子どもたちの心身へどのような影響を与えられるのかについて、総括することを目的とする。対象の異なる子どもたちへのワークショップから、カラリパヤットの意義について考えてみたい。

©一般社団法人 日本体育・スポーツ・健康学会

テーマ別研究発表 | スポーツ文化研究部会 | 【課題C】多様なスポーツ文化の保存・流通・促進をいかに刷新していくか

# スポーツ文化研究部会【課題 C】口頭発表①

座長：久保田 浩史（東京学芸大学）
2023年8月31日(木) 13:30 ～ 14:29 RY303 (良心館３階ＲＹ３０３番教室)

14:15 ～ 14:29

## [スポーツ文化-C-04]三浦ヒロの国民保健体操（初代ラジオ体操第１）への関与（史,教）

音声資料（レコード）に着目して

*苫米地 里香[1]、崎田 嘉寛[2] (1. 北海道大学大学院、2. 北海道大学)

三浦ヒロ（1898-1992）は、戦前期に東京女高師教官（1926-35）、文検体操科試験委員（1927-34）、要目調査委員（1934-35）を歴任しており、在外研究（1923-26）の経験と女子体操科教員の養成とを踏まえて、ダンスを主要教材とした人間教育としての児童・女子体育実践を追求している。そのため、先行研究においては、彼女の教育思想やダンス観、指導理論と実践及びその背景に関する研究が蓄積されている。しかし、戦前期に学校・社会体育の中心であった体操に着目した三浦ヒロ研究は管見の限りない。 本研究は、三浦ヒロが国民保健体操（初代ラジオ体操第１）の創案とその普及にどのように関わったのかについて明らかにすることを目的とする。具体的には、（１）三浦が自著において国民保健体操にどのように言及しているのかを調査する。補足的に、先行研究者が収集した彼女の手紙も確認する。（２）国民保健体操の創案から初期普及時の資料を収集し、国民保健体操の先行研究を踏まえて考察する。 本研究の結果、（１）三浦の全著書と関連資料を確認した結果、国民保健体操への言及はごく僅かであり、唯一リズミカルである点を評価していることが確認できた。（２）まず、三浦が国民保健体操の考案委員となった理由は資料的には確定できなかったが、東京女高師所属であったためと推察された。次に、彼女が各運動の創案にどのように関与したかは不明であるが、在外研究の経験が生かされた可能性があると推定された。最後に、普及については、彼女は初期講習会等に参画していないが、宣伝用のレコードに音声で関与している。ただし、このレコードは550組しか作成されておらず、収集できたレコードの音声内容に基づけば、普及への貢献は限定的であったと判断できた。総じて、三浦ヒロは国民保健体操への創案と普及に関与したが、その影響は極めて限定的であったと考えられる。

©一般社団法人 日本体育・スポーツ・健康学会

テーマ別研究発表 | スポーツ文化研究部会：【課題C】多様なスポーツ文化の保存・流通・促進をいかに刷新していくか

2023年8月31日(木) 13:30 ~ 14:29 | RY304 良心館３階ＲＹ３０４番教室

## スポーツ文化研究部会【課題C】口頭発表②

座長：尾川 翔大（岐阜薬科大学）

13:30 ~ 13:44

### [スポーツ文化-C-05] プロスポーツ観戦の満足度を高めるデジタルサイネージの活用法とは？（経）

国内プロバスケットボールチームの良好事例に着目して

*郭 威[1]、田中 琢也[1]、渡部 宙[1]、山田 泰行[1] (1. 順天堂大学)

---

13:45 ~ 13:59

### [スポーツ文化-C-06] ユース選手を対象としたスポーツ・インテグリティ教材の開発と評価（教）

道徳教育における基礎理論の応用

*安永 太地[1]、藤井 基貴[2] (1. 愛知教育大学大学院・静岡大学大学院、2. 静岡大学)

---

14:00 ~ 14:14

### [スポーツ文化-C-07] 東京2020大会後の学校におけるオリンピック・パラリンピック教育の実態と”Post Games Legacy”の検討（教）

*宮崎 明世[1] (1. 筑波大学体育系)

---

14:15 ~ 14:29

### [スポーツ文化-C-08] スポーツ観戦者による野次の言語行為論的考察（哲）

*髙桑 啓樹[1] (1. 筑波大学大学院)

テーマ別研究発表 | スポーツ文化研究部会 | 【課題C】多様なスポーツ文化の保存・流通・促進をいかに刷新していくか

# スポーツ文化研究部会【課題 C】口頭発表②

座長：尾川 翔大（岐阜薬科大学）

2023年8月31日(木) 13:30 ～ 14:29 RY304 (良心館３階ＲＹ３０４番教室)

13:30 ～ 13:44

## [スポーツ文化-C-05]プロスポーツ観戦の満足度を高めるデジタルサイネージの活用法とは？（経）

国内プロバスケットボールチームの良好事例に着目して

*郭 威[1]、田中 琢也[1]、渡部 宙[1]、山田 泰行[1] (1. 順天堂大学)

プロスポーツ観戦に訪れた観客の満足度を高める上で、デジタルサイネージの最大活用を はかることは有意義である。スタジアムやアリーナに設置されたデジタルサイネージは、 選手紹介、スポンサー紹介、リプレイ、ルール説明などのコンテンツで試合を盛り上げる 重要な役割を果たしている。先行研究では、プロスポーツリーグにおけるデジタルサイネ ージの活用法として、会場案内、広告･宣伝、施設情報の提示、チケット販売、デジタル メニューボード、 VIP 案内の 6 点が報告されている。このようなデジタルサイネージ活用 の良好事例を収集し、その効果的な活用方法を検討することは、満足度の高いプロスポー ツイベントを実現する上で不可欠である。日本でも、観客の満足度を高めるために様々な 方法でデジタルサイネージが活用されているが、その有効性のエビデンスや、良好事例の 蓄積は乏しい。本研究では、日本のプロスポーツチームが開催するホームゲームを対象に、 デジタルサイネージがどのように活用されているかを明らかにすることを目的とした。調 査対象は、 B リーグの登録チームのうち、年間集客数がトップクラスである千葉ジェッツ のホームゲームとした。2023 年 4 月に開催されたホームゲーム全 6 試合を対象に、千葉 ジェッツと B リーグの撮影許可を得た上で、会場メインの大型モニターとコート内で生 じるイベントをビデオカメラで撮影した。映像分析を通して、プロスポーツ観戦の満足度 に関連する以下 3 点を明らかにした:①デジタルサイネージに提示されたコンテンツの 種類と提示時間の記述統計、②ファインプレイやファウルなどのイベントをデジタルサイ ネージに提示するまでの平均時間、③デジタルサイネージを切り替える頻度のアクティビ ティ。これらの知見は、集客力の高いプロスポーツイベントを再現する上で有益な資料となり得る。

©一般社団法人 日本体育・スポーツ・健康学会

# スポーツ文化研究部会【課題 C】口頭発表②

座長：尾川 翔大（岐阜薬科大学）

2023年8月31日(木) 13:30 ～ 14:29  RY304 (良心館３階ＲＹ３０４番教室)

13:45 ～ 13:59

## [スポーツ文化-C-06]ユース選手を対象としたスポーツ・インテグリティ教材の開発と評価（教）

道徳教育における基礎理論の応用

*安永 太地[1]、藤井 基貴[2] (1. 愛知教育大学大学院・静岡大学大学院、2. 静岡大学)

競技スポーツでは暴力，ハラスメントなど様々な問題が起きており，スポーツ・インテグリティの重要性が指摘されている。先行研究を概観すると，こうした競技スポーツでの倫理教育が重要視されているものの，教育実践や教材開発は不十分であると指摘されている。また，従来のスポーツ倫理教育では不正行為を抑制するための「やってはいけないこと」を示す予防倫理に編重している。インテグリティの語源は「完全性」「一貫性」であることからも，理想へと向けられた価値規範や体現すべきあり方を検討する必要がある。すなわち，「どんなスポーツ選手でありたいか」を問いかけ，理想や価値の実現を目指す志向倫理の視点からの教材開発を検討する必要がある。

　他方で，学校教育における道徳科の授業では，倫理的な問題について深く考える力を養うことを目的に，モラルジレンマ授業の実践が多く行われている。この授業では，複数の価値が互いに相容れないものとして対立する「価値葛藤」が重要なものとして位置づけられている。 そこで本研究では，多様な価値に触れる価値明確化ワークショップ「マインド・テン」ならびにモラルジレンマ授業の枠組みを援用したスポーツ倫理教材「レディ・ゴー」を開発し，実践・評価を行う。マインド・テンでは，スポーツと関連する深い価値や考え方を10種類抽出したカード教材であり，参加者は自分にとって大切だと思う価値や考え方に優先順位をつけ，その内容を他者と共有する。次に，レディ・ゴーでは，作成された葛藤する場面について学習者がどちらを選ぶかについて考え，議論する。こうしたワークを通して多様な価値に触れ，自分が「どんなスポーツ選手でありたいか」を深く考えることを目指している。本教材を用いて卓球ユース選手やサッカーユース選手向けに研修を行い，その評価を報告する。

©一般社団法人 日本体育・スポーツ・健康学会

テーマ別研究発表 | スポーツ文化研究部会 | 【課題C】多様なスポーツ文化の保存・流通・促進をいかに刷新していくか

# スポーツ文化研究部会【課題 C】口頭発表②

座長：尾川 翔大（岐阜薬科大学）

2023年8月31日(木) 13:30 ～ 14:29  RY304 (良心館３階ＲＹ３０４番教室)

14:00 ～ 14:14

## [スポーツ文化-C-07]東京2020大会後の学校におけるオリンピック・パラリンピック教育の実態と” Post Games Legacy”の検討（教）

*宮崎 明世[1] (1. 筑波大学体育系)

東京2020オリンピック・パラリンピックの開催に向けて、全国各地の学校でオリンピック・パラリンピック教育活動が行われた。大会に向けたオリ・パラ教育は、当初から大会後を見据えて、大会のレガシーとなるような教育活動とする方針であった。大会の終了に伴って、さまざまなプロジェクトや補助金、諸事業等が打ち切られる中、大会後に教育プログラムがどのくらい実践されているか、大会のレガシーとして何が残されたのか（ Post Time Legacy）を明らかにする必要がある。そこで本研究では、大会が終了した後の学校におけるオリ・パラ教育活動の実態を明らかにするとともに、大会のレガシーを検討することを目的とした。 本研究では、オリンピック・パラリンピック・ムーブメント全国展開事業（スポーツ庁）に参加した3つの地域の公立小・中・高等学校、特別支援学校を対象として、2022年9月から10月にオンライン調査を実施した。回答率は34.5%～62.0%であった。質問項目は、大会開催前までに教育プログラムを実施したか、大会後の2022年度に実施または実施する予定はあるか、実施した場合はその内容、実施しなかった場合はその理由、オリ・パラ教育を続けるために必要な支援等を尋ねた。また、大会の影響について、オリ・パラ教育を行った後の児童生徒の変化、大会後の学校の取り組みの変化、教員同士や地域との関わりの変化等についても尋ねた。 調査の結果、大会後の2022年度に教育プログラムを実施した学校は、55.2%～62.9%であった、その内、昨年度までに教育活動を行っていた学校の62.9%～84.7%が教育活動を継続しており、16.2%～18.1%の学校が大会後に新たに教育活動を行っていた。さらに，大会後の児童生徒の変化について、17.5%～31.3%が何らかの変化があったと回答した。

©一般社団法人 日本体育・スポーツ・健康学会

テーマ別研究発表 | スポーツ文化研究部会 | 【課題C】多様なスポーツ文化の保存・流通・促進をいかに刷新していくか

# スポーツ文化研究部会【課題 C】口頭発表②

座長：尾川 翔大（岐阜薬科大学）

2023年8月31日(木) 13:30 ～ 14:29  RY304 (良心館３階ＲＹ３０４番教室)

14:15 ～ 14:29

## [スポーツ文化-C-08]スポーツ観戦者による野次の言語行為論的考察（哲）

*髙桑 啓樹[1] (1. 筑波大学大学院)

本発表の目的は、野次がスポーツ観戦者にとって有する意味を示すことである。近年、多くのプロスポーツ団体がスポーツ観戦者による野次を排除しようとしている。その背景の1つには、主に家族連れの観戦者にとって「安心・安全な観戦環境」を確保するというプロスポーツ団体のねらいが挙げられる。しかし、その野次は、単に問題のある行為に過ぎないのだろうか。

スポーツ観戦者による野次の歴史を追っていくと、少なくとも明治時代には、例えば野球などにおいて野次が飛ばされていたことがわかる。明治時代にスポーツが日本へ輸入されてきたことを踏まえると、スポーツ観戦が日本で始まった当初から、野次は発生していたと言える。このことに鑑みると、スポーツを観ることと野次との間には、密接なかかわりがあると考えられる。

　スポーツ観戦者の野次に言及している研究は多くあるものの、そこでは、野次そのものの事象が十分に検討されてこなかった。さらに、それらの研究の対象は、関西地方に限定されていることが多いようである。しかし、関西地方以外においても野次が飛ばされている様子は確認できる。そのため、特定の地域に限られない観戦者の野次を、考察の対象に据える必要があると言える。

このような先行研究の課題を克服するために、本発表では、言語行為論の視点から、スポーツ観戦者による野次を検討していく。言語行為論では、言語を述べることが行為を遂行することであると考える。そうであるならば、スポーツ観戦者による野次も、行為を遂行することの1つであると言える。このように、野次を言語行為と見なすことにより、野次を飛ばすスポーツ観戦者に着目してそれを考察することができる。さらに、言語行為論の立場から野次を考察することは、特定の地域だけでなく、観戦者による野次の意味を、より広く捉えることを可能にすると考えられる。

©一般社団法人 日本体育・スポーツ・健康学会

テーマ別研究発表 | 生涯スポーツ研究部会：【課題C】人生100年時代に向けていかに人々のスポーツ権を保障するか

2023年8月31日(木) 13:30 ~ 14:14 | RY305 良心館３階ＲＹ３０５番教室

## 生涯スポーツ研究部会【課題C】口頭発表②

座長：赤澤 暢彦（早稲田大学）

13:30 ~ 13:44

[生涯スポーツ-C-04] 高齢者の運動習慣を形成する運動実施歴パターンの分析（社）

統計資料の二次分析を通じて

*下窪 拓也[1] (1. 順天堂大学)

---

13:45 ~ 13:59

[生涯スポーツ-C-05] 成人のスポーツクラブへの所属に関連する要因（経,社,心）

クラブライフスキルに着目して

*奥田 直希[1]、林田 敏裕[2]、清水 紀宏[2] (1. 高松大学、2. 筑波大学)

---

14:00 ~ 14:14

[生涯スポーツ-C-06] 『笑うスポーツ』3年目のチャレンジ（社）

学生とお笑い芸人の協働で目指すもの

*橋本 剛幸[1] (1. 近畿大学)

テーマ別研究発表 | 生涯スポーツ研究部会 | 【課題C】人生100年時代に向けていかに人々のスポーツ権を保障するか

# 生涯スポーツ研究部会【課題 C】口頭発表②

座長：赤澤 暢彦（早稲田大学）
2023年8月31日(木) 13:30 ～ 14:14  RY305 (良心館３階ＲＹ３０５番教室)

13:30 ～ 13:44

## [生涯スポーツ-C-04]高齢者の運動習慣を形成する運動実施歴パターンの分析（社）

統計資料の二次分析を通じて

*下窪 拓也[1] (1. 順天堂大学)

本研究の目的は、高齢者の運動習慣と過去の運動実施歴の関連を明らかにすることである。従来の研究では、過去の運動経験が運動習慣に影響を及ぼすことが報告されてきた。本研究では、高齢者の運動経験と運動習慣の関連に関するさらなる知見の提供を目的として、日本全国を対象とした社会調査データを用いて高齢者の運動習慣の形成に効果的な運動実施歴を探索する。調査データに映し出されるパターンと高齢者の運動習慣との関連を検討することで、実社会の現状に即した、より現実的な運動習慣促進策の構築に貢献することが期待される。分析では2021年に実施されたスポーツ実施状況等に関する世論調査の二次データを使用した。分析対象は、65歳以上でかつ欠損値のない2,066名（女性994名、男性1,072名）とした。本研究ではまず、小学生時代から50代までの各年代における運動・スポーツの実施頻度を用いた潜在クラス分析を行い、運動実施歴のパターンを識別した。その結果、一貫して高頻度で運動を実施してきた「常時高頻度群」、学生期は比較的高頻度であったものの、その後は運動の実施頻度が低下した「学生期高頻度群」、そして一貫して運動の頻度が低い「常時低頻度群」の３クラスに分類された。運動習慣との関連を分析したところ、「高頻度群」は「常時低頻度群」よりも適度な運動習慣を形成している確率が高い一方で、「学生期高頻度群」」は一貫しない結果が確認された。さらに、補足的な分析から、学生時代に運動頻度が高く卒業後に頻度が低下した群よりも、学生時代の頻度が低く卒業後に頻度が上昇した群のほうが、高齢後の運動習慣が形成される確率が高くなる可能性が示唆された。本報告では、最後に、高齢者の運動習慣形成のための施策と、本研究の限界について議論する。

©一般社団法人 日本体育・スポーツ・健康学会

# 生涯スポーツ研究部会【課題 C】口頭発表②

座長：赤澤 暢彦（早稲田大学）

2023年8月31日(木) 13:30 ～ 14:14  RY305 (良心館３階ＲＹ３０５番教室)

13:45 ～ 13:59

## [生涯スポーツ-C-05]成人のスポーツクラブへの所属に関連する要因（経,社,心）

クラブライフスキルに着目して

*奥田 直希[1]、林田 敏裕[2]、清水 紀宏[2] (1. 高松大学、2. 筑波大学)

スポーツクラブに所属し日々活動することは、スポーツの効用を最も享受できる運動生活であるとされている。しかしながら、我が国の成人のスポーツクラブ所属率は、長年にわたって20%に満たない値を推移しており、十分であるとは言い難い。

スポーツクラブへの所属に関連する要因は様々なものが指摘されているが、とりわけ、スポーツ生活経営論の立場からはスポーツ生活能力に着目する必要性が論及されてきた。しかしながら、スポーツ生活能力の構成要素やスポーツ生活との関連を実証的に検討した研究は、管見の限り存在しない。そのため、特定のスポーツライフを送るためにはどのようなスポーツ生活能力が必要になるのか、といったスポーツ生活能力に関わる基礎的な知見の導出が求められる。

これらを踏まえ、本研究はスポーツ生活能力とスポーツ生活の関連を実証的に解明することを目的とした。具体的には、成人のスポーツクラブへの所属に関連する要因として、クラブライフスキルを取り上げ、それらの関係を実証的に明らかにすることを研究課題として設定した。なお、クラブライフスキルとは、スポーツクラブに所属し活動する運動生活であるクラブライフを営むために必要となるスポーツ生活能力のことを指す。

クラブライフスキルについては、クラブライフの特性を考慮したうえで、ソーシャルスキル等に関する先行研究を参照し、「時間調整スキル」「人間関係スキル」などの下位スキルから構成される概念として設定した。

調査は2018年12月にインターネット調査会社を通じて実施され、1546名から回答を得た。その後、論理的に矛盾のある回答や努力の最小限化をした者を除外し、1261名を分析対象とした。

分析の結果、クラブライフスキルと成人のスポーツクラブへの所属との間に有意な関連が認められた。今後は本研究への批判的検討を加え、スポーツ生活能力に関する知見の更なる蓄積が求められる。

©一般社団法人 日本体育・スポーツ・健康学会

テーマ別研究発表 | 生涯スポーツ研究部会 | 【課題C】人生100年時代に向けていかに人々のスポーツ権を保障するか

# 生涯スポーツ研究部会【課題 C】口頭発表②

座長：赤澤 暢彦（早稲田大学）

2023年8月31日(木) 13:30 ～ 14:14  RY305 (良心館３階ＲＹ３０５番教室)

14:00 ～ 14:14

## [生涯スポーツ-C-06]『笑うスポーツ』3年目のチャレンジ（社）

学生とお笑い芸人の協働で目指すもの

*橋本 剛幸[1] (1. 近畿大学)

令和2年10月より、吉本興業株式会社との共同研究を開始し、『笑うスポーツ』の共同開発をスタートした。これは、スポーツをする楽しさを体験してもらう機会を提供するため、見ても楽しい、やったらもっと楽しいスポーツを創造し、その体験会を様々なところで開催し、スポーツに興味を持ってもらうための試みである。著者のゼミ学生と吉本興業所属芸人とが協働で、ニュースポーツを創造し、その体験会を企画し、スポーツの楽しさを伝えていくものである。これまでに27種目の『笑うスポーツ』を作成し（考案中のものも含む）、その体験会を企画してきたが、新型コロナ感染症の影響もあり、体験会については4回しか行えていない。しかしながら、4回の体験会を行うことで、運営した学生たちに意識の変化が生まれ、大きな成長を感じることができた。運営に携わった学生たちは、4回とも同じメンバーではない。年度を跨いでいるおり、ゼミ生の世代も変わっているため、その意思が引き継がれているかが継続のためには重要なことである。『笑うスポーツ』の創造という取り組みが、携わってきた学生たちの意識も変化させ、今後につながっていくことは重要である。また、『笑うスポーツ』の共同開発当初から携わっている吉本興業所属のお笑いコンビ「ミサイルマン」西代洋氏へのインタビュー調査で、「鬼ごっこ、ハンカチ落とし、かくれんぼ、だるまさんがころんだなどの昔からある遊びは『笑うスポーツ』の原点であり、凄く難しい挑戦だが、このような古の遊びに並べる後世に残る『笑うスポーツ』を作ることが一番の目標である。誰に教わったわけでもなく、何が面白いかと言われるとわからないが、それらの遊びはとても楽しかったし、思い出すといつも笑って遊んでいた。」と語っている。壮大な目標ではあるが、試行錯誤を重ねながら、一歩ずつ学生たちと芸人との協働によるプロジェクトを進めていきたい。

©一般社団法人 日本体育・スポーツ・健康学会

テーマ別研究発表 | 生涯スポーツ研究部会：【課題C】人生100年時代に向けていかに人々のスポーツ権を保障するか

2023年8月31日(木) 13:30 ~ 14:14 | RY306 良心館３階ＲＹ３０６番教室

**生涯スポーツ研究部会【課題C】口頭発表③**

座長：水上 博司（日本大学）

13:45 ~ 13:59

[生涯スポーツ-C-08] STEP VARIATION METHOD (SVM): A CORRECTIVE APPROACH ACCURATING FOOT PLACEMENT（方,バ,Kinematics）

*Kadam Prof. Govind[1]、SINGH MANDEEP[1] (1. National Association of Physical Education & Sports Sciences)

---

14:00 ~ 14:14

[生涯スポーツ-C-09] 身心一体科学に基づく体軸制御調律運動（生）

人生100年時代の国民の運動習慣形成・維持を支える理論と実践

*跡見 順子[1]、藤田 恵理[2] (1. 帝京大学総合研究機構、2. 東京女子大学)

## 生涯スポーツ研究部会【課題 C】口頭発表③

座長：水上 博司（日本大学）

2023年8月31日(木) 13:30 ～ 14:14 RY306 (良心館３階ＲＹ３０６番教室)

13:45 ～ 13:59

# [生涯スポーツ-C-08]STEP VARIATION METHOD (SVM): A CORRECTIVE APPROACH ACCURATING FOOT PLACEMENT（方,バ,Kinematics）

*Kadam Prof. Govind[1]、SINGH MANDEEP[1] (1. National Association of Physical Education &Sports Sciences)

ABSTRACT *Around 70% of the population is overpronate (Runnersneed, 2023), but the number with general functional pronation (GFP) is much higher. Incorrect stepping or contact of plantar surface of a foot on the ground disturbs the soft tissues thereof. When this becomes habitual or permanent, it leads to further deformity of lower extremities which in later stages get associated with middle and 20 upper body deformities involving knee joints, pelvic region and vertebrae. Eversion is the common deformed style of placing foot on ground which takes place in subtalar joint (i.e. the joint beneath tibiotalar joint of ankle). When plantar surface is angled laterally and medially, it is actually everting and inverting of the foot, respectively. Further, movement of the foot called supination and pronation are composed movements (i.e. three or more 25 combined movements) of the foot. Herein, supination involves subtalar inversion and pronation involves subtalar eversion. The Step variation Method (SVM) indicates the kinematical assessment of correct placement and positive effect s of the method. SVM involves the corrective attributes to stabilize the foot placement. Further Kinematic analysis says about the basic deformed shoes and foot wears thereof. Key Words: Pronation, Kinematic, Corretive, Assessment, Movement and Placement.*

©一般社団法人 日本体育・スポーツ・健康学会

テーマ別研究発表 | 生涯スポーツ研究部会 | 【課題C】人生100年時代に向けていかに人々のスポーツ権を保障するか

# 生涯スポーツ研究部会【課題 C】口頭発表③

座長：水上 博司（日本大学）

2023年8月31日(木) 13:30 ～ 14:14  RY306 (良心館３階ＲＹ３０６番教室)

14:00 ～ 14:14

## [生涯スポーツ-C-09]身心一体科学に基づく体軸制御調律運動（生）

人生100年時代の国民の運動習慣形成・維持を支える理論と実践

*跡見 順子[1]、藤田 恵理[2] (1. 帝京大学総合研究機構、2. 東京女子大学)

身心一体科学とは、本来一体設計で育った自分の身心でありながら、動作原理が分からず分離しがちな自分の身体と心を、多細胞生物の細胞の適応生存理論（①メカニカルストレス応答、②活動依存性）と、脊椎動物原型の臥位で自分で自分の身体に意識的に働きかける体軸制御調律運動の実践による自己の変化を言語化し、働きかけに応答できる自己を体感し発見し理解する科学である。人とはどのような存在か、どう生きればよいか。その答えを､地球上に創発した生命の適応応答の単位である多細胞動物の細胞の生存原理に求めて、立位を常態として生きる人への実践的対処法として解を提供する。細胞は人の目では見えない。先端的科学技術・顕微鏡のタイムラプス可視化で得た知見を教育に還元することは本書の目的の一つである。細胞も、人と同様に基盤（床）に自ら支点と重心を生み出し力学応答して生きている。その細胞の生存原理と、自分と細胞との間の「入れ子」関係を、身心の一体化に適用すると、①通常意識に上らない姿位（立位･座位･臥位など）の意味､②自分の身体と認知との関係、③自己の理解と出力依存性の意味の理解のための｢随意筋｣の存在、④身心への入力（触覚）・出力（体幹､及び末梢筋群との関係）連関、⑤身心連携の神経回路の構築（体幹調律運動も通常の学習プロセスと同じ原理）という観点を得る。細胞のメカニカルストレス応答戦略と立位及び臥位の制御戦略との関係を説明し、本人が納得するための立ち位置がある。1)健康は自分と細胞との協働で獲得できる、2)その細胞の基盤として自分の身体を位置づける、3)脊椎動物由来の体幹の不安定性と軸制御の正規化・意識による制御。発表では身心一体科学理論に基づく体軸調律運動の実践がもたらす身体スキルの変容についての人の研究成果も報告する。本理論は、生きている一人の人間が胆識を育む生命科学の新興により社会の再生を図ることに貢献する。

©一般社団法人 日本体育・スポーツ・健康学会

各種会議・ミーティング | 専門領域別：測定評価

2023年8月31日(木) 12:20 ~ 13:20 | RY413 良心館４階ＲＹ４１３番教室

**測定評価／理事会**

各種会議・ミーティング

2023年8月31日(木) 12:20 ~ 13:20 | RY401 良心館４階ＲＹ４０１番教室

**地域協力学会連絡会議**

ランチョンセミナー

2023年8月31日(木) 12:20 ~ 13:20 | RY201 良心館２階ＲＹ２０１番教室

**ランチョンセミナー④／特定非営利活動法人日本トレーニング指導者協会**

# [ランチョン4-1] トレーニングの実践現場におけるエビデンスを活用・応用したトレーニング指導

*佐野村 学[1]、山内 武[2] (1. 帝京大学准教授、JATI理事、2. 大阪学院大学教授、JATI監事)

ランチョンセミナー

## ランチョンセミナー④／特定非営利活動法人日本トレーニング指導者協会

2023年8月31日(木) 12:20 ～ 13:20 RY201 (良心館２階ＲＹ２０１番教室)

# [ランチョン4-1]トレーニングの実践現場におけるエビデンスを活用・応用したトレーニング指導

*佐野村 学[1]、山内 武[2] (1. 帝京大学准教授、JATI理事、2. 大阪学院大学教授、JATI監事)

●高齢者を対象とした筋力トレーニングが筋力や身体機能に及ぼす効果（佐野村学）

特に高齢者に見られるサルコペニアやロコモティブシンドロームは、筋力の低下などが原因で発症する疾患や症候群でありますが、これらは転倒や骨折のリスクを高めるほか、要支援・要介護の要因として捉えられています。今日において、高齢者に対する筋力トレーニングが筋力や身体機能などに及ぼす効果について多数報告されていますが、そのトレーニング内容と得られた効果などについて説明させていただきます。

●女性アスリートへの指導における留意点 -特に体重コントロールについて- （山内武）

女性アスリートにおいて、パフォーマンス向上をめざし体重コントロールを行い、体脂肪の少ない体型をめざす場合が多い。特に思春期にあたる高校生ではパフォーマンスを大きく飛躍させている場合も多い。こうしたアスリートは、思春期以降伸び悩んでしまう場合が非常に多く、身体に大きなダメージを受け、一生にわたる健康被害をもたらすこともある。こうしたマイナス面を少なくし、ハイパフォーマンスを獲得するためには、どのようなことに留意すべきであろうか？

©一般社団法人 日本体育・スポーツ・健康学会

ランチョンセミナー

2023年8月31日(木) 12:20 ~ 13:20 | RY204 良心館２階ＲＹ２０４番教室

**ランチョンセミナー⑤／独立行政法人日本スポーツ振興センター ハイパフォーマンススポーツセンター**

司会：久木留 毅（独立行政法人日本スポーツ振興センター ハイパフォーマンススポーツセンター）

共催社名：独立行政法人日本スポーツ振興センター ハイパフォーマンススポーツセンター

## [ランチョン5-1] HPSCが推進するアスリートのためのトータルコンディショニング

*清水 和弘[1]、中村 真理子[1]、山下 大地[1] (1. 独立行政法人日本スポーツ振興センター ハイパフォーマンススポーツセンター)

ランチョンセミナー

# ランチョンセミナー⑤／独立行政法人日本スポーツ振興センター ハイパフォーマンススポーツセンター

司会：久木留 毅（独立行政法人日本スポーツ振興センター ハイパフォーマンススポーツセンター）
2023年8月31日(木) 12:20 ～ 13:20  RY204 (良心館２階ＲＹ２０４番教室)
共催社名：独立行政法人日本スポーツ振興センター ハイパフォーマンススポーツセンター

## [ランチョン5-1]HPSCが推進するアスリートのためのトータルコンディショニング

*清水 和弘[1]、中村 真理子[1]、山下 大地[1] (1. 独立行政法人日本スポーツ振興センター ハイパフォーマンススポーツセンター)

ハイパフォーマンススポーツセンター（HPSC）は、大塚製薬株式会社と共同で研究プロジェクト（TCRP）を2016 年より実施し、コンディショニングに関する科学的知見および東京 2020 大会における支援を踏まえ、アスリートが備えるべきセルフコンディショニングの知識や方法をガイドラインとしてまとめた（今夏発刊）。その中で HPSC は、これまでの「コンディショニング」を一歩進めた「トータルコンディショニング」の考えを推奨している。これは、アスリートの課題解決のために各エクスパートが協力・協調してチームを組み、包括的な活動を行うことを意味する。トータルコンディショニングの成功には、関連諸分野の知識・技術を理解し、エクスパートチームをマネジメントできるジェネラリストの存在が不可欠である。そして、アスリート自身がコンディショニングの知識・技術を備え実践できることが非常に重要である。さらに、ハイパフォーマンス領域におけるトータルコンディショニングは、ライフパフォーマンス領域への応用・展開で国民の健康保持・増進に寄与できる可能性がある。本セミナーでは、このような HPSC による新たな考えについて紹介する。

©一般社団法人 日本体育・スポーツ・健康学会